
アーランドの冒険者

クー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーランドの冒険者

【Nコード】

N6493V

【作者名】

クー

【あらすじ】

気がつくと、アーランド郊外の森にいた平凡な高校2年生の白藤明音が主人公の非大冒険物語。

この作品はトトリのアトリエのオリ主もの二次創作SSとなっています。

※番外編は別作品枠に移しました

相棒は白玉団子

気が付いたら森にいる、そんな体験をだれでも一度はしたことがあるだろう。

……したことがないって？

馬鹿なことを、俺みたいな凡人が経験することはだれでも一回はやってるはずさ。

そう、今現在俺は森にいるわけだ……。

「さて、どうしようか」

自分で言うのもなんだが、俺はそこまでアウトドアではないんだよ。

筋トレは好きだけど、走るのとかだるいからってとりあえず美術部に入るような男だ。

でも、小学生のころはボーイスカウトやってて自然のことはそこそこ分かってるんだよ。

つまり何が言いたいかというのだな。

「死ぬかもしれん」

俺の今の武装は、パジャマと寝巻きとジャージだ。

つまりは、ジャージオンリー。他には何もナッシング。
自然界では準備を怠ったものから脱落していくのさ。

まあでも考えてもはじまらないよな、起きたら森なんて俺にとって
は初めての経験だ。

「作戦はひたすら歩け、GO&GOだ」

目標は森を抜けることです！

.....

みんな聞いてくれ、これは夢もしくは異世界だった。

「ぷにっ、ぷにっ」

俺は今、木陰に隠れているんだが、なんか白い、ぷにぷに鳴いてる
生き物がいるんですよ。

一言で言うなら雪見大福だ。

今俺の脳内には三つの選択肢があるのだよ。

1、逃げる 2、戦う 3、食してみせよう

俺のお勧めは1なんだが、俺の脳内にいる三百人のファンが3を勧めてくるんだ。

……今まで俺を応援してきたファンは裏切れないしな。

それにどうせ、あんなスライムっぽい的一般ピーポの俺でも行けるはずさ！

というわけで！レッツチャレンジ！スリー！

「死ねえ！」

俺は木陰から飛び出してやつ目がけて蹴りを放とうとした。

「ぶにっ！」

「ぐぼあ！？」

何をされたかよくわからなかったが、おそらく体当たりだろう。つか、やつにはそれ以外できるはずがない。

「スライム風情が！」

再び俺はやつに向かつて蹴りを放った。

「ぶににっ！」

特に打撃音もせず、奴は吹っ飛んでいった。

「ぶにー！」

と思いきや、奴は一直線に俺の腕めがけて跳ねくる。

「いてえー！」

ガジガジと俺の腕をかんでくる、大福野郎。

「雪見大福に食されてたまるかよ！ 俺にはファン（脳内）の期待があるんだよ！」

腕をブンブン振り回して引きはがしてからからのキックを放つ。
だが、また体当たりの応酬を受ける……

……………どれだけ続けていただろうか、今の俺と大福はそう。

「お前なかなかやるじゃないか」

「ぷにに（お前もな）」

そう、まるで土手で喧嘩したあとの不良のような状況だった。

「一緒に来るか？」

「ぷに（ああ、ついていくさ）」

奴の言葉？ いや、まったくわからんよ。あくまでただの妄想です。

いやでも、ついてくるッぽいんだよねこれが。

「これが、種族を超えた友情ってやつか……」

「ぷに？」

「よし 白玉よさっそく俺を人のいるところまで案内してくれ」

「ぷに」

了承したっぽい。つかぷには俺の言葉がわかるのかよ。

言わなくてもわかると思うが白玉はこのぷにぷにしたやつの名前だ。
命名俺、由来？ 言わせんな恥ずかしい。

「言い忘れてたが、俺の名前は白藤明音だ。よろしくなぷに」

「ぶに！」

まだまだわからないことばかりだ
とりあえず、今は俺の前をひよこひよこ跳ねてるこいつについてい
くしかないさ。

だけどさ……友達ができたのはいいいことだろう？

「なあ白玉。さっきの俺のモノログ、最高にカッコよかったと思うんだがどうだろうか？」

「ふに？」

相棒は白玉団子（後書き）

後悔も反省もしてません。

とりあえずはやりたいようにやってみます。

手間でなければ誤字脱字など、報告お願いします。

海を渡ってきたらしいです

ぷにの案内から一日程度して、やっと街に辿り着いたわけだが……

「なあ、ぷに。俺の設定どうしようか？」

街を見たところ文明は現代ほど発展してないみたいだから、戸籍とかはないだろうけど。

「ぷに。実は俺さ異世界から来たんだ」

「ぷに？」

多分、『ばかじゃねえの』とか『頭大丈夫？』とかそんなこと言っ
てんだろうな。

「そんな反応が来るからこそ俺は考えていた！名付けて！」

「ぷに！」

「海を渡ってきました作戦！」

俺は日本出身だしそこまでの嘘でもない。

つか、正直なことを言う俺の新世界ライフが間違いなく終了する。

俺はこれでいいとしてだ。

「ぷに、お前どうするよ？」

この世界でのモンスターの扱いがいまいちわからず、街に入れているのか判断に困る。

「ぷにに！」

ぷにが跳ねあがって俺の頭に乗ってきた。

「ふむ、まあ駄目だったら、それはそれでいいか」

さすがに。問答無用で襲われたりはしないだろう。

「んじゃ、入ってみるとするか」

「ぷに」

………

街の雰囲気は、結構いい感じだ。なんというか、都会みたいに急いでる感じがしないというか。

一言で言うなら、のどかってかんじだ。

……正直言って、俺のジャージかなり浮いてる。

まあ、とりあえず聞き込みをしてみるか。日本語が通じればいいな……。

「あのー、すいません、ちょっと聞きたいんですけど……」

「ここは、アーランドの街です」

！ ……俺の聞きたいことを的確に答えてきただと。

「あつ、これは親切にどうも、もう一ついいですか？」

「ここはアーランドの街です」

「あ、いやそうじゃなくて」

「ここはアーランドの街です」

「……どうも」

俺は、そそくさと立ち去った。

「……ぷに、彼を怒ってはいけないぞ、彼はあれが仕事なんだ」

「ぷに？」

ファンタジーの世界に彼のような人はよくいるのだろうさ。

……あの後も、聞き込みを続けた結果、今俺は冒険者ギルドとかいう所に来ている。

なんでも、冒険者とかいう職業は、だれでもすぐになれるらしい。

詳しいことは、手続き担当に聞けばいいそうだ。

「この町の人みんな親切だな。やたらみんな目そらしたり、上向いてたけど」

「ぶに」

「どうしてだろうな？」

「ぶに」

とりあえず、入ってみるか。俺は扉を開いて、中に入った。

……広い。それ以外に感想が出てこない。

見渡してみると、そこそこの数の冒険者？の方々がいる。

あと正面にはおそらく責任者とみられ……責任者だよな？

やたらちっこい気がするんだが……っていうか、あの人俺のこと睨んでね！？

「ちょっと！ その黒ずくめ！ こっち来なさい！」

やべえ、なんかすごい怒ってるんだけど彼女、何故に？

「えと、なんでしょうか？」

俺は、早足で彼女のもとに向かった。

「あんた、冒険者かしら？」

近寄ってみるとこの子やっぱ小さいな、睨みがあんま怖くないわ。

「？　ちょっと、聞いてんの？」

「あ、ああ聞いている。俺はここに冒険者資格貰いに来ただけだ」

「そう……。とりあえず、私がなんで怒ってるかはわかってるわよね」

「いや、まったく」

あつ、こめかみに青筋がたつとる。

「あ・ん・た・の！　頭の！　上のやつよ！」

「うえ！　　」　「ふに！」

変な声でちまった。そうか、ぷにの奴はアウトだったか。

「あんたのせいで、さっきからこっちに抗議がきっぱなしよ！」

「あー、いや悪かった。モンスターはアウトだったか」

「当り前でしょ！　　ったく常識でしょうに」

ため息をつきながら言われちまった。

「いや、じつはこの国に来るの初めてでさ。よくわかってなかったんだよ」

「いや、普通にわかりなさいよ。　　どれだけ辺境から来たのよ！」

ここで機嫌を損ねてはまずい！　ここで使うぜ必殺の策を！

「ひ、東の方から、そう海を渡ってきたんだから仕方ないだろ！」

「海を……？」

「そうそう、途中で船が壊れてさ、この大陸に流れてきたんだよ」

「何か胡散臭いけど……まあでもそれならその妙なカッコにも納得がいくわよね」

そういや、私ジャージでしたね。

とりあえず納得してもらえたようだけど、こんなちびっ子に嘘をつくのは心が痛むな。

まあ……気づいたら森にいましたなんて言えるわけないしな。

「だからって、モンスターを連れまわしていいわけじゃないわよ」

「はい、もちろんわかってますさ」

「わかってくれたならいいわ、冒険者免許がほしかったのよね」

「？ あ、うん、そうだけど」

「それじゃ、はいこれ」

彼女はカウンターの上に何かを置いた。

「あんたの冒険者免許よ。 ありがたく受け取りなさい」

「えっ！ いいんすか」

まだ、面接すら受けてないんだが。

「ええ、免許自体は簡単にあげれるもののよ。

それに、東から来て船が壊れたってことはあのフラウシュトラウトを相手にしたってことでしょ」

……！ やばい、設定にほころびが出た！ フラウシュトラウトってなんだよ！ なんて、一転して笑顔になってんだよ！

「う、あー、えっと……」

「？ 違うのかしら？」

マズイ！ ここで、ノーなんて言ったら免許渡してもらえないんじゃない？ ……。

「いや！ はい、あれでしょ！ あのでっかいモンスター！」

船を壊せる十長い名前Ⅱボスモンスターの方程式です。
冷や汗が止まりません……。

「多分そうね。考えてみれば名前でも分かる訳ないわよね」

その手があったー！ そうだよ、俺は遠くの海から来たことにして
んだから、分からなくて当然じゃねえかよ！
くそ！ 目の前の笑顔が憎らしい！

「ははははは」

精神的な疲れから、乾いた笑いしか出てこねえよ

「やられたみたいだけど、無事な当たり運はいいのかしらね」

「はい、ソーデスネ」

「名前と言ったら、まだ名乗ってなかったわね。私の名前はクーデ
リア・フォン・フォリエルバッハよ」

その名前の話で痛い目にあったところですよ。

しかし、貴族っぽい感じの名前だな。確かにお嬢様っぽい感じはす
るけど……言動を除いてだが。

「俺は、白藤明音だ。どうぞよろしく」

「シラフジ・アカネ？ 変わった名前ね」

「ああ、姓が白藤で名前が明音なんだよ」

「へえ、名前が後に来てるのね。まあ、よろしくしておくれ」

「ぷに、ぷに！」

「ん？ ああ、こいつの名前はぷにだ。一緒によろしくしておいてくれ」

「……よろしくはしておくけど、街には入らないようにしておきなさいね」

「ぷに」

「うむ。自己紹介も終わったところで、クーちゃんに冒険者の仕事について聞きたいんだが」

つか、ほとんど何するかわかんないのに免許貰っちゃったよ。

あれ？　なんかまたこめかみに青筋が……

「クー……ちゃん？」

「そうそう、クーデリアだからクーちゃん。いいだろう？」

「ところで、あんた何歳かしら」

……なんか、声震えてね？　なんか俺、冷汗かいてるんだが。

「17ですけど」

「そう……」

「……………」

沈黙が痛すぎる……。

「あの……「21」……え？」

「私の年齢よ、21歳よ」

「マジで！　こんなちっちゃいのに！」

あ……やべ、声に出ちゃった。

おまけに、今何かが切れるような音がしたような気がするわ。

「いいかしら、一度しか言わないからよく聞きなさい」

何か息吸って、溜めてるわ……怖いです。

「私のはあんたよりも年上で！　その呼び方をするのは私の親友だけなのよ！」

「う、ごめんなさいー！」

脱兎のごとく、早足に俺は去って行った。

.....

「ぶに、やっぱ人は外見で判断しちゃいけないのかね」

「ぶに」

俺はとぼとぼと来た道に戻っていた。

「でもあれを外見で判断するなは無理だと思うんだよ」

「ぶにに」

「つい、逃げちゃったけど。ちゃんと謝らないとまずいよな」

「ぶに！」

どうやらぶににも同意らしい。

「とりあえず、時間潰してほとぼりが冷めたところで戻るか」

「ぶに」

とりあえずは時間をつぶせそうな所でも探すかね。

「んじゃ、冒険者としての初仕事はアーランドの街の探索とするか」

「ぷにー！」

……そういやぷにの事どうしようかな。

神の料理人（前書き）

一言で言うならイクセル回

神の料理人

アーランドを探索すること数時間程度して、やっと良さそうな店を一つ見つけた。

「コーヒー一杯無料か、サンライズ食堂……ここなら時間潰せそうだな」

ちなみに、ぷには外に置いてきました。

「コーヒー一杯で粘る迷惑な客を演じてやるぜ」

俺は目の前を扉を開けて店に入った。

「いらっしやい」

店に入るとカウンターの内側にいるイケメンさんに迎えられた。大分若く見えるけど、コックさんみたいだ。

テーブルが埋まつてる辺りなかなか人気があるみたいだな。つか、俺カウンター席に座らないといけないじゃんか……。

カウンターの前でコーヒー一杯で粘るとか俺の精神値がやばいわ。

「とりあえず、コーヒーお願いします」

とりあえずですよ、とりあえず。

「はい、どうぞ」

ちょうど、淹れたとこだったようですぐに出てきた。

「あんた、変わった格好してんな」

カウンター席名物、会話が登場しやがったよ。

「あー、そうですかね？」

「俺の知り合いも大分変わった格好してるけど、あんたもなかなか変わってるから気になちまってさ。別に悪い意味じゃないぜ」

逆によくあるとか言われたら、この世界の文明レベルを考え直すな
きやいけなくなるな。

「結構遠いところから来てますからね」

「へえ、どっから来たんだ？」

うっ、またあの設定を使わなければならないのか……。
数分前の悪夢がよみがえりそうだ。

「海の方こうから船で来たんデスヨ」

緊張しすぎて語尾あがっちゃった……。

「海を渡って！すごいな！なあなあ、海の方こうってなにか珍しい
食材とかあったりするのかな？」

このイケメン超元気。笑顔がまぶしすぎるだろ。

「いや、あの、まだ何がこっちで普通とかわからないんで……」

「言われてみりゃそうか、よし！今日はオレのおごりだ！何でも頼んでくれ」

「マジで！」

「どうせ金持っていないんだろ。その代り、今度そっちの料理について聞かせてくれよ」

「そんなんでよければいくらでも！」

このイケメンは心までイケメンすぎるだろ。とりあえず拝んでおう。

「あなたは、神です」

「なんだ、そんなに腹減ってたのかよ？」

「丸一日と半日何にも食ってませんでした」

「そうか、そんじゃ好きなもん頼んでくれていいからな」

「本当にありがとうございます」

………

あの後、適当にオススメのものを頼んだんだが、マジで全部うまかった。

「ごちそうさまでした。イクセル様」

「いや、様はやめてくれよ」

食べてる間に名前を聞いて、敬意をこめて様付けにしているのだがど

うも不評のようだ。

「このお礼はいつかしますんで」

「ああ、時間が空いたときでいいから、いろいろ聞かせてくれよ」

「はい！失礼します」

「おう、またな！」

俺は扉を開けて外に出ていった。

「いや、しかし本当にいい人だったなイクセルさん」

俺の異世界好感度ランキングをぶっちぎりの一位になったぞ。

んで、この後俺に対する好感度がぶっちぎりで低いであろうクーデリアさんのところに行かなければならない。

「憂鬱だ……」

受付嬢は人見知り

といううわけで、ギルドについたわけですが……。

「まだ怒ってるよな、たぶん」

暗い気分で俺は扉を開けて中に入った。

クーデリアさんはさっきと同じようにカウンターの中にいたので、そこに向かった。

入口から向こうまでの距離がやたらと長く感じてしまうぜ。近づいていくと、気がついたようだ。

「やっと戻ってきたわね。このボンクラ」

ボンクラって……。まあ、んなこと言われても仕方ないけど。

「えっと、さっきはすいませんでした」

こういう時はな、早めに謝るのが吉なのさ。

「そのことならもう怒ってないわよ。まあ、次に同じことしたら……
…わかってるわよね」

「も、もちろんです！」

顔が笑ってるのに、目が全然笑ってないんだがこの人。

「とりあえず、はいこれ」

クーデリアさんは俺に冒険者免許を渡してきた。
そういうやさっきは、結局もってかなかったんだっけか。

「あ、どうも」

「ところで、あんた冒険者の仕事について説明はいるかしら」

むっ、チュートリアルか……。

「初回プレイなんで聞いておきます」

「は？」

「ちゃんと聞いておかないと後で困りますからね」

「え、ええ。そうね。」

困ってるクーデリアさんになんかグツとくるわ。

反省？ちゃんとしてますよ？

「冒険者の仕事にはいくつか種類があるのよ。簡単に言うとなんか探索と討伐と依頼ね」

「手っ取り早く金が手に入るものから教えてくれ！」

「現金な奴ね……。報酬金があるのは依頼だけよ。他は実績として残るだけね」

「実績？」

「そう、言い忘れてたけどその免許は期限が3年間だけだから」

「まあ、三年もあれば普通の仕事も探せるだろうから、そこんこはどうでもいいですよ」

最低限の生命維持費が今の俺には最重要ってだけで、ずっとやる必要はないさ。

「あらそうなの、一応話しておくけど実績を残してランクアップしていけば免許を延長できるのよ」

「んじゃ、今の俺に必要なのは依頼だけってことすか」

「そういうことになるけど、ランクが上がるほど行ける場所も増えてできる依頼も多くなるから一応覚えときなさい」

「オーケー」

「本題の依頼についてだけどあんたにできるのは討伐と調達依頼ぐらいでしょうね」

「なめるでない」

「他にあるのは調合よ、悪いけどあんたにできるとは思えないわ」「調合？」

「たとえば薬師なら薬を料理が作れるなら料理を作って納品したり、錬金術士ならなんでもできるわね」

錬金術！ 俺の厨二心を刺激する単語だな。後で暇があれば聞いてみるかな。

「つまり技能がいる依頼ってことですか？」

「そういうこと。話を戻すけど討伐は名の通りモンスターを討伐する依頼で、調達は外からいろいろと採ってくる依頼ね」

「とりあえず、一番早く安全に終わる依頼はなんでしょうか？」

もし怪我なんてしようものなら、金がない↓治せない↓感染症↓デッドエンド

となるのは明らかだろう。

「安全なのは調達依頼ね。とりあえず、実際に依頼を見てみなさいよ」

「んじゃ、そうしますか。どこで見たらいいんですか？」

「どこってすぐ隣のカウンターよ」

「誰もいませんよ?？」

「いないわね、まったくまーたあいつは……。コラ!出てきなさい」
「ひやう!？」

小さな悲鳴がすると隣のカウンターの下から茶髪でショートカットの女の子が出てきた。

「あうう……。脅かさないで下さいよ。クーデリア先輩」

「驚かさないでくださいよ、じゃなーい! 仕事中にびくびく隠れるなんていつも言ってるでしょうが!」

「だって、知らない人がいっぱい来るから……」

「そういう仕事でしょうが! とにかく、あんたにお客さんよ」

「どーも、初めまして」

「ヒッ!」

えっ? 悲鳴? 俺なんかしたか?

「む、無理ですよクーデリア先輩!」

「いいから、ちゃっちゃと仕事しなさい!」

「だ、だって、男じゃないですかこの人!」

「え? 俺そんなに怖いですか?」

「気にしないでいいわよ。見ての通り人見知りなだけだから」

女の子、しかも可愛い子に怖がられるとか複雑な気分だわ。

「後はこの子の仕事だから私は口出ししないわよ」

「クーデリア先輩ひどいです! 私には無理ですよ!」

「……………」

おお、見事に無視の態勢に入ってるな。

「あのー、大丈夫ですか？」

「ひっ！」

……また悲鳴か、俺そんな女の子に悲鳴を出させるような鬼畜外道系主人公に落ちたつもりはなかったんだが。

「……………？」

なんか、すごいじろじろ見られてるんですけど。

「なんか、同じ匂いを感じるかも……」

小声でつぶやいとるが丸聞こえだよ。同じ匂いてなにそれこわい。本当に大丈夫かこの子？

「えっと、あの、私フィリーって言います」

「ん？ ああ、俺は明音だ。よろしく」

「はい、大丈夫ですから！ 明音さんは何か私と同じ趣味を持てそうなんで、大丈夫ですから！」

「えっ、ああそう」

同じ趣味ってなんだろうか？

俺の趣味なんて筋トレぐらいなんだが……。

「まあ、とりあえずだ。依頼を見せてくれ」

「あっ、はい」

フィリーちゃんがカウンターの下から書類っぱいを取り出した。

「どうぞ」

「ん、どうも」

若干震えている手から、恐る恐る受け取った。

見てみるといろいろと書いてあった。

青ぷに討伐、たるリス討伐、赤い実調達……等々あるのだが、一番目を引くのが……。

「フィリーちゃん。ここに、ういの調達依頼ってのがあるんだけど……」

「それにするんですか？」

「いや、うにとって……。結構遠いんじゃないの？」

「いえ、明音さんは身長そこそこ大きいですし二日もあれば着きますよ」

「二日！ここって、そんなに海近いのか！」

「？ えっと、うには海にないと思いますけど」

「は？ え、んじゃどこにあるの？」

「東のほうにあるうに林にたくさん落ちてますよ」

「……………」

うにが林に落ちている？ それって栗じゃね？ それって栗だよね？ 栗しかないよね？

「そいつは栗じゃー！」

「ひっ！」

俺の叫びに涙目になるフィリーちゃんを見て我に返った。

「あー、悪い。とりあえずその依頼は四日で終わるんだよな」

「は、はい。調達依頼だとこれが一番早く終わります」

「それじゃ、それ受けるわ」

「あ、はいそれじゃ手続きするので少し待ってください」

「ところで、依頼報告ってここですればいいのか？」

「ここでも出来ますけど、他の依頼を紹介してる場所でも大丈夫ですよ」

「なるほど、なるほど」

しかし、うに……か。今から若干ワクワクしてる俺と食料を不安に思ってる現実的な自分がいる。

まあ……なるようになるだろ。

受付嬢は人見知り（後書き）

プレイしていると、うにに違和感がなくなっていく罨

茶色いウニにはご注意を

「ぷに、依頼受けてきたぞ」

「ぷに！」

あの後、街を出てぷにと合流した。

「んじゃ、出発するか。俺は地図担当するから、ぷには食料担当な」
「ぷに」

地図は頼んだらクーデリアさんに貸してもらえた。一緒にウエストポーチを貸してくれたあたりやっぱ良い人なのだろう。

ちなみに、この地図は未完成らしくこの地図を埋めていくのも冒険者の仕事らしい。

「ぷに、食べそうなものあったら教えてくれよ」

「ぷに！」

「ぷには本当にぷに言うよな」

「ぷにに」

あまりにもぷにがぷにぷに言うせいで、俺が数秒で考えた名前があまり意味をなしてないな。

「クーデリアさんにもぷについて紹介したしな」

「ぷに」

「でも、この世界って他にもたくさんぷにみたいなのがいそうだし、紛らわしくなるよな」

依頼を見たときに青ぷに討伐とかあったし。

「まあ、そのときはそんときで白玉に戻すか」
「ぷに」

おそらくは了承の意だろう。

「んじゃ、出発！」
「ぷに！ぷに！」

街を出てから一日経ったわけだが。

「今冷静になって見渡すと俺が元いた場所って森じゃなくて林だったんだな」

林と森の区別がいまいちつかない、現代っ子なのである。

「しかしぷには本当、食い物見つけるのうまいよな」
「ぷに」

基本的に木の実とかを食べて最近は何も食いつないでいる。ぷには意外と優秀だ。

「まあ、ちやかちやか進みますか」

おそらく、明日の昼ごろには着くはずだ。

俺はうに林に到着して確信した。

「やっぱ、栗じゃねーか!!」

何が『うに』だよ。どうみても全部栗じゃないか。

「はあ、ぱぱっと拾って帰るとするか」

見た感じかなり大量に落ちている。

「ぷに」

「? どうした、ぷに」

「ぷに?」

? あれ今後ろから聞こえたはずなのにぷには横にいる。

「……………」

恐る恐る俺は振り返った。

「ぷに」

「ぷにに」

「ぷに！」

「……………は？」

青が二匹と緑が一匹の色違いのぷにがいた。

やたらと見た目がかわいいけど、こいつらもモンスターなんだよな。

「よし、行け！ぷに！」

「ぷに！」

俺の相棒の方のぷにが奴らに向かって体当たりした。

「「ぷにっ！」」

「……………」

思わず目をこすってみてしまった。

ぷにが同族なのに容赦ねえとか、そういう次元ではなく。

「ぷに、お前って本当は強いのか」

こやつ一撃で三匹とも倒しおったよ。

「ぷに！」

「お、おう。流石だぜ、ぷに！」

なんで最初俺こいつに喧嘩売ったんだろう……。
敵が、弱すぎたという可能性もあるけど。

「俺は採取するから、モンスターは任せていいか？」

「ぷに、ぷに！」

……ぷにからまぶしいオーラが出てるように見えるぜ。

「うーに、うーに。僕は栗じゃなくてー、うになんだー」

作詞作曲俺。タイトル自己暗示の歌。

「ああ、手が痛い」

歌に気を取られて、ついさっきうつかり手を刺してしまった。

「これを投げるような奴がいたら、かなりの外道だな」

この世界の栗もとい、うにはトゲが鋭いからさらに怖い。

今度同じ依頼を受ける時は、せめて軍手ぐらいは持ってきたいな。

「おっ！川がある」

どうやら向こうの方にも、うにが落ちてるようだ。

ちゃんと丸太で橋もかかっている。

「んじゃ、渡りますかね」

落ちてても平気だろうが、風邪をひいたりしたら洒落にならんで慎重に渡っていく。

「ぷにっ！」

「ぐぼぁ！」

いきなりぷにが俺の後ろからタックルをかましてきやがった。

「お、お前、は！い、いつから！体当たり系ヒロインにっ！なったんだ！」

落ちそうなのを踏ん張りつつ突っ込みを入れてしまう。

「ぷに！」

「付いてくるなら、普通に来てくれよ。頼むから」

心臓に悪すぎるわ。

「とりあえず、渡っちまうぞ……あ」

ツルっと、気を抜いたせいか滑ってしまった。

川に落ちて周りに派手な音が飛び散った。

「がっぼ、ごぼぼ」

意外と流れが速く俺は焦ったが、幸い川幅が狭いので陸地はすぐそこにあった。

「おら！」

俺は水の中から手を振り上げて、まっすぐ陸地にたたきつけた。

「————！？」

すると、突然とてもつもない激痛が俺の手を襲った。

「！　　がが、ごっぼ！？」

あまりの痛みに水をかくことさえできない俺は、逆らうこともできずに流されていった。

そして、沈みきる直前に俺はなんとか、手をたたきつけた所を見ることができたのだ。

そこには悠然と構えているういの姿があった……。

茶色いウニにはご注意を（後書き）

ここまでプロローグ。

次回辺りからは文量が多くなるはずです。

今日から先輩

「ふん、ふふーん♪」

「ん……うん……ぐぬう。んー？」

あー……何か知らんが凄くだるい。何日振りかでふかふかのものに横たわってるせいだろうか。

それになんか愉快的な鼻歌が聞こえる。

「……？」

なんで俺、寝てるんだ？確か俺は凶悪な物体にやられて流されたはずだが……。

（起きろー俺）

ずっと寝ていたいのが、そうもいかないなので仕方なく目を開けた。

「んにゃ？」

視界に飛び込んできたのは、やや前衛的な恰好をした美少女がやたらとでかい釜をかき混ぜている姿だった。

「？ あっ気がつきましたか？」

少女は首だけを俺の方に向けてやたらとかわいい声で話しかけてきた。

俺は寝ている体を起して返事をした。

「ああ、一つ聞きたいんだが、俺はどうしてここで寝ていたんだ？」

「ああ、それはですね……」

少女が俺に返事をしていると釜が光り輝いた。

「おお、きれいだな」

「え？……ああ！？」

俺から視線を釜に戻すと、彼女は驚いたような声を出した。

「わ！わ！だめえええ！」

瞬間、目の前で眠い俺の頭を覚ますほどの爆発音が響いた。

「けほっ、けほっ、ううう、またやつちゃった……。どこを間違えたんだろう？」

またって言いおったよこの娘。意外とアグレッシブなのかもしれん。

「ああ……その、大丈夫か？」

「あ、はい。私は大丈夫ですけど……」

「気にしなくても、俺も普通に無事だよ」

「そうですか、よかったー」

自分より他人を心配するあたりこの子は、結構いい子っぽい。

「トトリちゃん！？大丈夫！？」

「あ、お姉ちゃん」

ドアが開かれると、これまた美人さんが登場した。

「もお、こんなに顔真っ黒にしちゃって。ケガはない？大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「そう……よかった。まったく！何回爆発させたら気が済むの！？」

「別に爆発させたくて、爆発させてるわけじゃ……。それに、私は悪くないもん。ちゃんと先生に言われたとおりにやってるんだから」

「いっつもそんなこと言って！誰が片付けると思ってるの！」

「スターーッブ！」

蚊帳の外状態になりかけていた俺は、とりあえずの声をかけてみた正直目の前で喧嘩されるとすごい気まずい。

「えっ！？きゃあ！？」

姉の方に悲鳴を上げられた……最近の悲鳴率が異常な件について。つか、俺の存在に気づいてなかったのかよ。

「あ、ごめんなさい見苦しいところを見せちゃって。えっと……もう、目を覚ましたんですね」

「おかげさまで」

「気にしないでください。見つけたのも手当したのもトトリちゃんですから」

「見つけた？トトリちゃん？」

俺が気絶してるのをそっちの妹さんの方が見つけてることか？

「あら？トトリちゃん、まだ何も言ってなかったの？」

「うん……目を覚ましてすぐに爆発しちゃったから」

「まったく……」

そう言うと彼女は俺の方に向き直って言った。

「私はツェツイっていいいます。こっちは妹のトトリちゃん」

「よろしくお願いします」

妹さんの方がペコリとおじぎをした。

「ん。俺はアカネっていいいます。助けてもらったみたいで、どうもありがとうございます」

「気にしないでください。海に浮かんでたのをトトリちゃんが偶然見つけただけですから」

それを人は命の恩人というでは、なかろうか。

「本当にっ！……ありがとうございます！トトリちゃんっ！」

「き、気にしないでください。私はただ見つけて手当てしたただけで、運んだりとかはお友達がやってくれた訳で……」

「そんなことは関係ない！正直リアルで命の危機だっただろうし」

「い、命の危機って何があったんですか？」

「……………」

うににやられて、川に流されましたなんて言えるわけないだろ。死にたくなるわ。

「まあ、それは置いて、何かおれいくらいはするぜ」

「お礼ですか？」

「そうそう、お金とかはないけどこう見えて冒険者だから力仕事くらいはできるよ」

「あ、アカネさん、冒険者なんですか！？すごいです！」

「す、すごい？」

試験なんて無いようなものだったのだが、すごいものなのだろうか？
いや、しかしここは夢を壊してはいけなくところなのか……。

「でも、本当にお礼なんていいですから」
「……………」

なんて……なんて、いい子なんだ！！
いつもの俺ならここで引くが、今回は命の恩人に加えてこんなに謙
虚ないい子なんだ。

「よし、意地でも恩返ししてやる。好意の押し売り上等だぜ」
「ええ！？」

「トトリちゃん、折角だからお手伝いしてもらったらかしら？
ここで断ったら逆に失礼になるわよ」

「うう、でも……あの、私よく外に錬金術の材料を獲りに行くんで
すけど、そのお手伝いしてもらってもいいですか？」

「内容がなんであれ、恩人の頼みなら何でも聞くら」

錬金術とかいうのが全くよくわからないけど、まあなんとかなるだ
ろう。

「ほ、本当ですか！？それじゃあ、ちょうど材料がなくなっちゃっ
たんですけ……」

「よろしい！」

俺はトトリちゃんの言葉を阻み即答した。

「それじゃあ、早速行くぞ！」
「は、はい」

「そ、それじゃ、行ってくるね。お姉ちゃん」

「お邪魔しました」

「はい、行ってらっしゃい。私はアトリエのお掃除でもするわ」

「あう。ごめんなさい」

「いいわよ、もう怒ってないから。それに冒険者さんと一緒ならトトリちゃんも安心だし」

「ゲッヘッへ。俺が悪い人だったらどうしますか？」

「あら、そうなのかしら？」

「ガラスのハートの持ち主である俺に、犯罪なんてできるわけがない」

「それじゃあ、トトリちゃんをよろしくお願いします」

「もちろんですよ」

そして、俺とトトリちゃんは扉を開けて外に出た

[illegible]

「しかし、ツエツイさんっていい人だな」

すごく名前言いづらいけど。

「はい。お姉ちゃんはとっても優しいんですよ。怒るとちよつと怖

いけど」

「なるほどねー」

話しながら歩いている、広場のような場所に出た。

「よ、何してんだ？こんなところで」

？ ……なんだこの確定的に俺の少年時代よりもモテそうな奴は？

「あ、ジーノ君。ちょっと錬金術の材料取りに行こうと思って」

「材料？こないだ取りに行ったばっかじゃ……あ、さてはまた爆発させたんだろう」

「違うよ。爆発させたんじゃないくて、勝手に爆発したんだよ」

……いや、トトリちゃん。流石にそれは無理があるんじゃない。

「どっちでも同じだろ。ちょうど暇だったし、俺も付き合うけど……」

そこで、ジーノ君とやらは俺の方を見た。

「この人誰だ？」

「いやいや、ジーノ君。こないだの帰りに見つけたのも運んだのもジーノ君でしょ」

「？ ……ああ！あの時倒れてた奴か！」

「さっき話した、俺の事を運んでくれたお友達？」

「そうですよ。私の幼馴染で、ジーノ君っていうんです」
「なるほど。少年、礼を言おう。俺の名前はアカネだ」

トトリちゃんの時より反応が冷たいとかないですよ。
別にこんな幼馴染がいることに嫉妬とかしてませんから。
将来、イケメンになるだろと思ってませんから。

「おう、よろしくな」

ミーは年上だぞ。おい……とか突っ込みたいが、ここは大人の対応だ。

「ジーノ君、アカネさん……実は冒険者なんだよ!」
「ホントか!？」

ふっふっふっ。崇めるがいいさ。
そして尊敬するがいい。クックック。

「でも、あんま強そうじゃないな」
「……………」

今はジャージで見えないかもしれないが、俺の筋肉なめんなよコラ。
中一の頃から、鍛えるだけ鍛えて使ってないこの筋肉をバカにするなよ。

ボクシング漫画見た後の誰もがするであろう、パンチ練習で鍛えた
パンチ力なめんなよ

「見るがよい、小童」

俺はおもむろに腕まくりをし、鍛えられた筋肉を見せつける。

「おお、すげえ!」
「ムフフフ」

ついに、すごいと言わせてやったぜ。

大人げないとか言うなよ、俺はまだ高校生だからな！

「よし、先輩も強そうだし。モンスターを倒しまくるぜ！」

「ジーノ君、材料を獲りに行くんだよ」

「……………」

えっ！突っ込みなし！？

まてまて、明らかに今何かおかしかっただろ！

「おい待て、ジーノ後輩」

「なんだよ、先輩」

「なんで俺が先輩なんだよ」

「俺は世界一の冒険者になるのが夢なんだ。だから先輩」

ふむ、まあ先輩とか呼ばれて嫌な気はしないし。いいだろう。

「んじゃ、俺も好きに呼ばせてもらうぜ」

「まっ、すぐに追い越して見せるけどな」

……俺は大人俺は大人俺は大人俺は大人俺は大人……フシュー！

落ち着くんだ俺。大人げない事をしたりはしたが、俺は大人なんだ。

俺は自己暗示をかけながら二人について行った。

……………

……………

……………

少し歩くと、馬車を拭いているロン毛がいた。

「よう、お前らまたどっかいくのか」

……ぷぷ。負け組オーラがぷんぷんするぜ。

この世界に来てから、美男美女しか見てなかったから若干不安になってきたところでこいつはありがたいぜ。

「ありがとう」

「は？」

「君は希望だ」

「おい、トトリこいつ大丈夫か？」

「ちょっと変な人かもしれないけど冒険者さんだし、大丈夫だよ」

あれ？なんか今トトリちゃんが毒舌なこと言った気がするんだけど……気のせいだよな。

「あんた、あれだろこないだ二人が運んできたやつ」

「まあ、そうだな」

「ふうん」

なんだか不気味だな。いや、流石に失礼か。

「俺たちはこれから先輩と一緒にモンスターを倒しに行くところなんだ」

「違うよ、錬金術の材料を獲りに行くんだよ」

「相変わらず仲がいいなお前らは」

バカな！こいつ嫉妬のオーラが見られない。
まさか、こいつの方が俺よりも大人だとも言うのか。

「今、トトリが出かけてるってことは、ツェツイさん一人きりなのか？」

おお、悶々としてたらいつの間にか話題が変わってた。
このセリフだけみると明らかにストーリーカーにしか思えないな。

「どうかな、お父さんがいたようになかったような……」

「お前の親父さんならいてもいなくても一緒だろ。よし、それじゃあ後で」

「今日はやめた方がいいかも、お姉ちゃん今日は忙しいから
「忙しい？」

「えっと……その、私のアトリエのお掃除とかがあって……」

「またやったのか、お前……。んじゃ、今日はやめとくか」

「なんかさー、いっつもなんだかんだ言っただけで会いにいかねーよな、にーちゃん」

ジーノ君それはヘタレってやつや、そっとしておいてやりな

「違うぞ、いっつもなんだかんだでタイミングが悪いだけで、それにな、こういった気配りができるのが大人の男なんだぞ」

「大人の男だったら、ここは片づけの手伝いとかで会いに行くべきだろ」

「うぐっ！」

「あー、にーちゃんみたいな奴のことをヘタレって言うんだろ？。」

かーちゃんがよく言ってるぜ」

「ちょーおまつ！」

こ、こやつなんという外道！そっとしておいてやれよ！

「へ、へたれ！？」

「意味はよくわかんないけどいいやすいよな、へたれ。今度からにーちゃんのことへたれにーちゃんって呼ぶことにしよう」

やめて！ペーターのメンタルポイントはゼロよ！

「ジーノ君そのへんにしといたほうが、ショックで固まってるみたい」

「なんで？へタレって言われるとショックなのか？」

「ああ、もうほら、行こ」

「ん、ああ」

二人は村の外に出て行った。

「……………天然って怖ええ」

これからは先輩のことへタレ先輩って呼ぶことにしようとか言われたら、軽く死ねるわ。

ペーターさんに黙祷をささげてから、俺は二人の後を追った。

今日から先輩（後書き）

ペーターは俺たちに希望を与えてくれる存在である。

相棒不在

現在はニューズの森とかいう所に向かっているのだが、大きな問題があった。

「……腹減った」

俺は今すごく腹が減っていた。何日寝てたのかまったくわからんが、とにかく腹が減った。

「お腹すいてるんですか？」

聞かれてた……恥ずい！

「正直、勢いで出てきたからまったく用意がない」

「ご、ごめんなさい。気がつきませんでした」

「い、いやいや！ トトリちゃんは何も悪くないって。全体的に俺がバカなせいだ」

「へえ、先輩ってバカなんだ」

「うるさいぞ後輩」

後輩にバカと言われるのは、流石に俺のプライドが許さない。

「まあ、気にしないでくれ。基本的に俺は現地調達で食っていけるから」

「本当に大丈夫なんですか？」

「いけるいける、大丈夫だって」

俺には頼りになる相棒がいるんだからな。

「……………」

あれ？

「……………」

ゴソゴソと、うにが入ったポーチをあさってみる。

「……………」

当然のようにいない。

「……………」

「あの、アカネさん？どうしたんですか？」

トトリちゃんが不思議そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「……忘れ物した」

「え？でもアカネさん、そのポーチ以外に何か持ってましたっけ？」

「いや、持ってはいないが……あそこって何て名前の村だっけ？」

「？ アランヤ村ですけど？」

「アーランドからどのくらいかかる？」

「どのくらいかかるんだっけ、ジーノ君？」

「確か何週間か、かかるんじゃないかったか」

「……………」

そんな長い距離を流されてたのかっていう驚きはあるのだが……と
りあえずだ。

「あいぼーーーーーう!!」

「ひゃっ!」

「な、なんだ!」

叫んでみました。精神の安定に一番効果的だと思う。

「ど、どうしたんですか!?!」

「なんでもない気にしないでくれ。俺の年ごろにはよくあることだ」

「そうなんですか?」

「そうなんです」

まあ、ぷにのことだし普通に生きてはいると思うが、果たして再会できるかどうか。

というか、俺はなんで今の今まで忘れていたのだろうか。

……しかし、ぷにがいなくなると食料調達を自分でやらなくちゃいけないな。

ぷにが持ってきたものは覚えてるし、なんとかかなるかな?

「……………」

唯一不安なこととしては、トトリちゃんが俺のことを可哀そうな人を見る目で俺を見ていることだ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

あれから、数時間してやっとニューズの森に辿り着いた。

俺の食糧事情は概ねなんとかなっていた。

食える草を食ってから、木の実を食べておいしいものをいっぱい食べた気になるという作戦が意外と使えた。

ただ、トトリちゃんだけならいいんだが、後輩までもが俺のことをいたたまれない目で見ていた。

二人とも俺に自前のパンを勧めてくるのだが、流石に成長期の奴らからもらうことはできないので逐一断っていた。

まあ、その甲斐あって今の俺のサバイバル能力はコンクリートジャングルに囲まれていた時よりも格段に上がっている。

「クックック」

「なあトトリ、先輩大丈夫かな？」

「元気そうだし、大丈夫じゃないかな？」

前よりもトトリちゃんの俺に対するスルースキルが上がってる気がする。

「ところで、ここに何しに来たんだっけ？」

バカ丸出しな質問の気がするが気にしない。

「先輩、しっかりしてくれよ。モンスターを倒しに来たんだって」

「そうじゃなくて、錬金術の材料を獲りに来たんだってば！」

要は、材料を採りつつ、モンスターを倒すってことか。

トトリちゃんはちゃんと用意してそうだし、けがの心配はいらないかな。

「うい、俺まだ相棒以外と戦闘したことないんが、大丈夫だよな？」

「ところで、錬金術ってなんだ？」

「知らないんですか？」

「ああ、俺は大分遠くから来たからよく知らないんだよ」

「そうなんですか？ えっと……錬金術はっていうのはいろいろなものを混ぜて不思議なものを作ることです？」

「なんで疑問形なんだいな」

「あ、あまりうまく説明できなくて」

「つまるところ、トトリハウスにあった釜に材料入れて、何かを作ることか」

「あ、はい。そうですそうです」

俺がわかったことがうれしいのかトトリちゃんの顔が緩んでいた。

……しかし錬金術か、俺の考えてたのと大分違うな。正直な話、鋼の方しか思い浮かんでいなかった。
まさか、釜を使うとは……。

「それって、俺もできたりするのか？」

「一応、教えてもらえばだれでもできると思いますよ」

「トトリちゃんが俺に教えてくれたりは……」

「む、無理です無理です！ 私、いつも失敗ばかりで人に教えるなんてできません！」

「そうか、んじゃトトリちゃんはだれに教わったんだ？」

「私は、ロロナ先生に教わったんです。ロロナ先生はすごい人なんですよ！」

「そ、そうか」

ロロナ先生とやらの事を話すトリちゃんはとても嬉しそうで、思わずたじろいってしまった。

「まあ、機会があったら紹介してくれないか？」

「いいですけど、アカネさんって錬金術に興味があるんですか？」

「未知の力に興味がわくのは当然だろう」

もし、使えるようになったらいろんな人に自慢できそうだな。

「ところで、後輩はどこ行ったんだ」

「あれ、そういえば……」

「せんぱーい！トリー！ちょっと手伝ってくれ！」

「どうした……はあ！？」

「うわっ！？」

こっちに向かって走ってきたジーノ後輩を追って、大量のタルを持ったリスのようなモンスターが来ていた。

「何してんだよお前は！？」

「二人で話してて暇だったんだよ。ちょっと喧嘩売りすぎちゃって」

テヘみたいな感じで笑う後輩君。

今度校舎裏にでも呼びだしてやろうか……。

「とか、いろいろ考えてる間に来てるし！？」

とりあえず、後輩はどうでもいいからトリちゃんをしっかり守ろう。

ツェツイさんにも頼まれてるわけだし、怪我させるわけにはいかな
いぜ！

「ふんっ！」

トトリちゃんを後ろにかばいつつ手近なリス野郎に向かって一発ス
トレートを放った。

「えっ！？」

そこまで効くと思ってなかったが意外と効いたようで大きく後ろに
吹っ飛んで行った。

やっぱりぷにが強すぎただけなのだろうか？

「おおっ！先輩本当に強かったんだな！」

「いまさら感心しても遅いぜ」

どや？俺のパンチ強いやろ？

「ふっふっふ」

「先輩、危ねえ！」

「えっ？」

首を前に戻すと前方からタルが迫ってきていた。

「ぐべっ！？」

俺は水を一気にあおりながら一つの決心をした。

「……ふう」

俺は二度と本気で戦わない!!

所詮俺は元高校生! 血生臭い戦いなんて向かないのさ!

そう! 俺は一刻も早く相棒と再会して、俺はあくまでサポートに徹してやる!

駄目人間の決意とか言うなよ、正直ジーノ君とか俺より筋力はないけど、明らかに俺より強いんだもん!

「待ってろよ! 相棒!」

「トトリ……先輩やられすぎて頭が……」

「だ、大丈夫だよ! たぶん……」

そろそろ泣いてもいいよね。

人生最高の瞬間

「うーん、あー眠みい」

村に戻ってきた後、俺たちは解散して俺は宿屋に泊っていた。金はモンスターが何故か持っていた金で何とか間に合った。

「今日はどうすっかな」

第一に何とかして金を稼がなくてはいけない。

トトリちゃんたちは今日も出かけるとか行ってたし、手伝いにでも行ってもいいが……。

正直なところ、後輩とか俺より強いから付いていく必要もない訳だ。

「とりあえず出かけるとするかな」

[illegible]

「のどかだなあ」

噴水のある広場まで来たのだが、この村は本当にのどかだ。森とかにいる時よりよっぽど異世界だなんて実感するわ。

「トリちゃん？」

お店らしきところからトトリちゃんが出てきた。
俺は声をかけようと思ったが、しかし……

「……っ!？」

扉の隙間から見えた光景に俺は固まってしまった。
明らかに酒場な感じの場所だった。

「えっ? え?」

俺がうろたえている間にトトリちゃんは店の前にいたジーノ後輩と
出かけようとしている。

「ちょっと、待ったー!ー!」

「えっ!？」

俺は走って一気にトトリちゃんと距離を詰める。
当然のようにトトリちゃんは動揺している。

「あ、アカネさん。どうしたんですか、そんなに大声出して?」
「と、トトリちゃん君は今どこから出てきたんだい?」

俺は君を信じているぞ、トトリちゃん。

「どこって、このゲラルドさんのお店ですけど?」

「何をやってる店なんだ?」

「何って先輩、看板を見ればわかるだろ?」

「看板?」

俺は店の上を見上げる。

えっと、何だ……。

『バー・ゲラルド』

「トトリちゃん、君が不良だったなんて……」

人は見た目と性格によらないってことなのかよ。

「ち、違いますよ！ 私はゲラルドさんに呼ばれただけです！」

「隠さなくてもいいさ、子供を酒場に呼び出す大人がいるわないだろう」

「ほ、本当に違うんですってば！」

「はあ、やっぱりみんな酒なんて飲んでるもんなのかな。高校のやつらもみんな一回は飲んだことあるみたいだし……」

ぶつぶつと自分の世界に没頭する俺であった。

「トトリ、言い忘れていたんだが」

その時店の扉が開いて、ガタイの言いおっさんが出てきた。

「あつ、ゲラルドさん！」

「よかった、まだいたか。……ところで、このぶつぶつ言ってるのは誰だ？」

「考えてみると、酒飲んだことある奴以外みんな彼女いなかったよな。ああ、死にたい……」

「えっと、アカネさんっていう私のお手伝いをしてくれてる冒険者

さんです」

「ほう、冒険者かちょうどいい。おい、お前」

「うむ？」

声をかけられて、俺はやっと目の前のおっさんに気づいた。

「誰？」

「ああ、この店の店主をしている。ゲラルドだ」

「な！？出たな諸悪の根源め！」

「？ 何のことだ？」

「アカネさん私がお店から出てきたから、いろいろ勘違いしてるみたいで……」

「何だそんなことか。アカネといったか？トトリはただ呼ばれたから来ただけだぞ」

「いやいや、むしろそっちの方が問題だよ！酒場に酒以外何があるんだよ！」

「話すから少しは落ち着け、一応お前にも関係があるだろうからな」
「う、ああ、わかつ……んんっ、わかりました」

この人、大人すぎるわ。冷静っていうか、落ち着いているっていうか。

俺のなれなてない敬語を使う相手がまた増えてしまった。

「トトリにはさっき話したんだが、この村にアーランドから依頼を回してもらうことになってな、その仕事をトトリにやってもらうと思っ呼んだんだ」

「なんで、トトリちゃんに？冒険者にやってもらった方がいいんじゃないですか？」

「いや、この村には冒険者が少なくてな」

「なるほど。いやトトリちゃんごめん！お兄さん勘違いしてたわ」
「いえ、分かってくれたならいいですから」

トトリちゃんの優しさはもう俺の中でカンストしてるわ。

「ところで、ゲラルドさん。言い忘れてた事ってなんですか？」

「ああ、そうだった。トトリには知り合いに冒険者がいたら、ここを教えてやってほしくてな」

「私、この村の人たち意外ほとんど知り合いじゃないけど？」

「そうだが、まあ早速一人いたじゃないか」

えっ、何？俺カモ？

「アカネくん。時々でいいから、店に顔を出してくれよ」

「あ、はい。わかりました」

？ あれ、ちょっと待てよ。

「おお、そうだ。そうだ」

「どうしたんですか」

「いや、アーランドで受けた依頼をまだ報告してなかったんだよ」

「そうなんですか？でもアカネさん、何でアーランドで依頼受けたのにこっちに？」

「アハハハ。さあ！ゲラルドさん！報告がしたいので、早く店に入りましょう！」

「あ、ああ。分かったから。押さないでくれるか」

「あ、あれ？アカネさん？」

多少強引だが、許してくれよトトリちゃん。あの秘密は墓場まで持

つてくと決めてあるんだ。

「先輩。俺たち、これから出かけるんだけど」

「あ、ああ。俺にかまわず行ってくれ。トトリちゃん！悪いけど手伝いはまた今度で！」

「は、はあ？」

俺は、パパッと酒場の中に入った。

「ふう……」

危なかった。急な誤魔化しを思いつかないのが、俺の欠点だな。

「よくわからんが、依頼の報告だったな。それなら、カウンターの方に来い」

ゲラルドさんはカウンターの方に歩いていく。

……つか、この店客が少ない、というよりもない！
大丈夫なのかこの店？昼だからだと信じたいが。

疑問を持ちつつも、カウンターのほうに歩いていく。

「どぞ」

俺はカバンから、うにと奇跡的に無事だった報告書を取り出した。

「ああ、確かに受け取った。品質も問題ないな」

「ところで、本当にこっちで報告しても大丈夫なんですよ？」

「ああ、この国の錬金術士のおかげでな」

「錬金術士ですか？」

「詳しくは言えないが、便利な道具が支給されたからな」

「そうなんですかー」

どこでもなドアーとか言い出さないよな。

「よし。これが今回の仕事の報酬だ」

「あ、どうも」

150コール……俺の宿代一日分以上じゃないか。

「顔が緩んでるぞ」

「おお、いかんいかん」

うまい。この仕事かなりうまいぞ！

「ゲラルドさん。早速次の依頼を！」

「随分とやる気だな。冒険者であるお前にちょうどいい依頼はこれくらいだな」

「どれどれ」

手渡された書類をしてみる。

……アードラの討伐？

「トトリとジーンだと心配だが、アールランドからここまで来る冒険者だ。実力から考えて十分だろう」

「ハハッ！もちろんですよ。ええ、ここまで来たんですから」

怖いわ。人間の栄って怖いわ。

アドラってたるリスとか青ぷにとか名前が明らかに一味違うんだが。

せめて、傷薬みたいなのが欲しいな。

「よしっ手続きが終わったぞ」

「（速いよ！）ええどうも。ところで、薬とか売ってる店ってありますかね？」

「葉があるかはわからんが、この店を出て真っ直ぐ行ったところに雑貨屋のようなものがあるぞ」

「あ、そうですか、どうもです。それでは」

「ああ、気をつけてな」

[illegible]

「どうすっかな」

とりあえず、この150コルで何を買うかだ。

物価が分からないから、何を買えるか全くわからんが……。

手袋が最低でも欲しいな。薬は金が余ったらかな。

ガチ戦闘はもうしないって心に誓ったのになー。早く相棒に会いたいぜ。

「つと、ここか」

『パメラ屋』

「……この村では店に自分の名前を付けるのが流行ってるのか？」

パメラってどう考えても人名だよな。違ったら恥ずかしけど。

「とりあえずっと」

俺は扉を開けて中に入った。

「いらっしゃい」

「ヘブン！」

俺の目の前にはきれいな長い薄紫色の髪を持つ美人さんがいた
何より特筆すべきはバスト！異世界中最高の威力だ！
クッ！この村の女性偏差値は化け物か！

あれ？俺なんかきもくないか！？

「大丈夫かしら？」

「あっ！もちろんですとも！ええ、全然大丈夫ですよ！」

「あらゝ。元気ねゝ」

「い、いえいえ！。あ、俺アカネっていいいます」

テンパリすぎて、何故か自己紹介しちまったー！

「私は、パメラって言うの。よろしくねゝ」

「こ、こちらこそ！」

フウ！俺また美少女とお知り合いになっちまったぜ！
俺の人生もうバラ色じゃないかな、これ。
自分から女の子と知り合いになれるとか、勝ち組みの行動でしょこれ。

「ところで、今日は何をお求めかしら〜」

「あ、はい。手袋みたいなものってありますか？」

「軍手ならそっちの棚に置いてあるわよ〜」

パメラさんは俺から見て右の方を指した

俺はそっちの棚に近寄って中を見ている

「お、あったあった」

まさに軍手だった。ジーノ後輩がしてるようなレザーグローブがいが、背に腹は代えられない。

「値段はっと……150コールだと」

運命か、これは……まさしく運命。

「これ、買います」

「まいどあり〜」

俺は先ほどもらったばかりの金をカウンター出そうとした。

「……………」

「? ……どうしたのかしら?」

パメラさんが手を前に差し出している。

そこに渡せったのか! その手に渡せったのか!

これが、その辺のコンビニ店員だったら、無視する所だが……。

「どうぞ」

「はい、確かに」

やばい、心臓がドキドキしてる。買い物ってこんなに心臓に悪いものだったのか
若干触れちゃったんですけどー! やばい、今だったら何をしても怖くないわ。

間違いなく、前の世界含めて一番幸せだわ。

「それでは、また来ます!」

「どうもね」

俺は意気揚々と外に出る。

「……………」

外に出て俺は後ろを振り向く。

「……また来よう」

こうやって、リピーターが増えていくんだろうなと思った。

人生最高の瞬間（後書き）

アカネくんが完全に前作のパメラ屋とか、ティファナさんのお店の
お客さんと化している気がする。

狩られる獲物たち

「というわけで村人の情報を頼りに、海岸沿いにやってきたぜ」

村から一日くらい歩いた場所のこの辺に、アードラとやらがいるらしい。

「考えてみれば、相棒以外だと初めてのソロ狩りになるな」

やっぱり、トトリちゃんたちを待ってればよかったかもしれん。でも、トトリちゃんを邪険に扱っちゃったから頼みづらいし……。

というか、ジーノ含めて二人の俺に対する印象ってどんなんだ？ 行き倒れの冒険者と尊敬できる冒険者のどっちかだとすると……後者か？

「はあ……名誉挽回したい」

正直このままだとカッコがつかない。今回の依頼を成功させて一つ……な。

「よし！張り切って討伐と行こうじゃないか！」

俺は、ざくざくと浜辺を歩きだした。

バサッバサッ

「ん？」

歩きだして間もなく、どこからか羽音みたいなものが聞こえた。

「上か？……わーお」

前方上空を見上げるとそこには、現代で見たことがないほどのビツクサイズな鳥が空を飛んでいた。

「もしかしくなくても、あれだよな」

この辺で奴ら以外に見かけたものと言えば、青ぷにぐらいなもんだ。

「……………」

「……………」

よし！

「帰るか！」

俺はそう決めると、そそくさと来た道をUターンした。

バサッバサッ

「あるえ？」

反転するとその前方にも奴がいた。

「……………」

バサッバサッ

後ろを振り返っても奴がいる。

バサッバサッ

さらに左右を見ても奴がいる。

「分身の術……だと……」

単純に四匹いるだけだが現実逃避せずにはられない。

「逆に考えるんだ、倒せばノルマを達成できる絶好のチャンスだね」

つか、こんなこと言ってる間にも近づいてきてるんですけど。

なに、俺ってもしかして獲物状態ですか？

つか、飛行とか格闘と相性が悪いって！軍手何かあっても意味がないって！

「…………これは、リアルに死の危険なんじゃないかな？」

「まったく、狩りをするならもっとライオンとかを見習えよ」

肉食獣の方々は巧みに退路を読み切って獲物が疲弊したところをガブリといくのさ。

「あの程度の相手なら、俺一人で討伐できたかもしれんなあ！」

バサッバサッ

「……………」

さあっと顔から血の気が引くのが分かった。
あの方々を雑魚とか誰が言うってんだよ。

「……とりあえず、逃げよう！」

どこにいるかわからないが、あの羽音はトラウマだ。
俺は逃げてきたのと同じ方向に逃げた。

バサッバサッ

「……前かよ！」

俺は、反転して逃げたした。

「……おい」

しばらく走ったところで、またエンカウントした。

「調整ミスだろこれ。もっと低確率にしろよ」

左の方に道があったので、そっちに逃げる。

「分布広すぎないか、ちょっと」

海岸から少し離れたところにいたので、脱兎。

「ぷにー、もう任せようなんて思わないから出てきてくれー」

俺はありえない妄想を言いつつ寝転がった。

「ぷに！」

「ッ！？」

今確かに、ぷにの鳴き声が聞こえた！

俺は、跳ね起きて声のする方向に向かった。

「ぷに、いるのか！？」

「ぷにっ！」

「おお……ぷ……に？」

「ぷに？」

「……………」

今、俺は無性に目の前の奴に殺意がわいている。
それこそ、疲れが吹き飛ぶほどにだ。

「紛らわしいんじゃないー!!」

俺は容赦なく蹴りをお見舞いした。

真っ黒なぷにに向かってだ。

「ぷにっ!？」

俺の蹴りを受けて奴は吹っ飛んでった。

「……ったく」

余計に疲れちゃった。

でも、あのぷにやたらと馴れ馴れしかったな。

「ぷにっ!!」

「ぶほっ!？」

来た道に戻ろうとする俺の背中に衝撃が走った。

「このっ!？……って、あれ？」

俺の目の前には真っ白なぷにがいた。

「ぷに!」

「あー……お前はあれか？俺がほんの数日間白玉って呼んでたぷにか？」

「ぷに!」

ぷには頷くように体を前に傾ける。

「おお、でもなんでこんな所に？」

「ぷに」

困ったような顔をするぷにだった。

「もしかして、お前も流されてきたか？」

「ぷに」

お前もかブルータス。

「まあでも、相棒のピンチに来るとは、流石だぜ！」

「ぷにに！」

「ところで、さっきの黒いぷについてお前だったり……？」

「ぷにににー!!」

目を吊り上げて怒った表情をされた。

「いや、悪かったって。ところで、なんで黒かったんだ？」

「ぷに」

一声鳴いて、ぷには洞窟の奥に向かった。

「? ……ついていけばいいのか？」

とりあえず、立ちあがってついていこうとする。

「ぷにっ！」

「おお！？」

洞窟の暗闇から真っ黒になったぷにが出てきた。

「お前……もう、白玉の名前が使えないじゃないか……」

つかどうやって、そんなことになってるんだよ。

「ぷぺっ！」

ぷにが口から何かを吐き出すと白に戻った。

「？ 何だこれ？」

暗くてよく見えないから、かがんで調べてみる。

「……………」

本日二度目の血の気が引く体験をした。

「ぷに……これ……」

「ぷに？」

そこにあったのは、シルクハットと真っ白な手袋だった。

「俺がいないうちにお前は野生に帰っちゃったのか！？」

「ぷに？」

これどうみても完全に人の装備品じゃないかよ！

「ぷにに」

「ぬおっ！」

ぷにが俺を口で引っ張って、洞窟の奥に連れて行く。

「ちょっ、待てって！」

「ぷに」

少しの間引きずられるとぷには止まった。

「ぷに」

「何だってんだよ……は？」

体を起して前を見ると、シルクハットと手袋をした黒い顔の付いた球体たちがいた。

簡単に言うとかーストやね。

「ぷに」

すると、ぷにがパクツとかーストを食べた。

「……うまいか？」

「ぷに！」

おいしいらしい。

見てみると、またぷにの体の色が黒くなっていた。

「帰るか……」

「ぷに」

シルクハットと手袋は戦利品としていただいていた。

アードラさんたちはぷにがまとめて蹴散らしてくれた。
俺はサポート要員にすらないなと思った。

……俺、何しに来たんだっけか？

狩られる獲物たち（後書き）

メルヴィンに>ジーン>アカネ>トトリ
アランヤ村の戦闘力はこんな感じだと思う

パワー・オブ・ザ・イヤー

「はあ、無駄に疲れた気がする」

あれからは、ぷに無双で特に問題もなく村に辿り着いた。

「ちょっと、そのあなた」

「んにゃ？」

背後から声がしたので、振り返ってみる。

「……誰？」

そこには、やたらと露出が多いお姉さんチックな人が立っていた。

「あんたがトトリの言ってた冒険者でしょ？ 真っ黒で変な服って聞いたからすぐにわかったわよ」

「失敬な、格好のことで、あんたみたいなのにとにかく言われたくないな」

つかトトリちゃん、俺のことそんなふうに使ってたのかよ……。

「で、誰なんだいな？」

「私はメルヴィア、冒険者であの子たちの姉みたいなものね」

「ふーん、ちなみに俺はアカネです」

「テンション低いわね……」

だって、疲れてるんですもの。

「ところで、その頭の白いぷに……何かしら？」

「俺の相棒だよ、これで結構強いんだぜ」

「ぷにぷに！」

「モンスターが相棒……聞いたとおり変わったやつね」

最近トトリちゃんの評価かマジで気になってきたわ。

「自己紹介も終わったところで、失礼しよう」

テクテクとゲラルドさんのお店のほうに歩いていく。

「……………」

「……………」

「何故ついてくるし」

「だって、今トトリ達もゲラルドさんの所にいるのよ」

さいですか。

「こんにちはー」

俺はお店の扉を開けて、中に入る。

「お！先輩、久しぶりだな！」

「まだ三日くらいしか経ってないと思うぞ」

開口一番に後輩君が声をかけてくる。

「？ トトリちゃんどうかしたか？」

トトリちゃんが何故かフリーズしていた。

「だ、だって！アカネさんのそ、それ！モンスターじゃないですか！」

……ぷにがいない方が話が円滑に進むんじゃないか？

「アカネ、いくら客がいないとはいえモンスターを連れ込むのはだな……」

「いや、これは俺の相棒、パートナーなんですよ！」

「相棒……ですか？」

「そうそう、ちょっとはぐれてたんだけど再会したんだよ」

「もしかして、こないだ叫んでた時の……？」

「そんなこともあったな」

あの時は正直取り乱しすぎたわ。

「でも先輩、ぷになんて弱っちいだろ」

「お前三人分の働きはしてくれるわ」

「ぷに！」

「嘘だ」

無知とはまったくもって恐ろしい、ここがお店じゃなかったらぷににGOサインを出すところだぜ。

「でも、よく見るとかわいいですね。名前は何て言うんですか？」

「ぷにだ」

「えっ？」

「いやだから、ぷに」

「あの……それって名前なんですか？」

「最初の一日くらいは、白玉って呼んでたんだけど呼びづらくてな」
「でも、わかりづらくないですか？」

確かに最近それは薄々思ってたわ。

青とか緑とか以外にも絶対いるだろうし……。

「んじゃ、トトリちゃんが考えてみる？」

「私がですか!？」

「トトリちゃんなら変な名前付けないだろうし。いいよな、ぷに？」

「ぷに!」

「わ、わかりました! 考えてみます!」

「がんばれよー」

トトリちゃんが考え込んでるのを尻目に依頼報告を済ませる。

「完璧な仕事だな、報酬を少し上乘せしておこう」

「マジで!？」

「ああ、まさか依頼した数の倍倒すとはな。恐れ入ったぞ」

ぷに無双の結果がまさかこんな所に……。ウマー。

「先輩一人でやったのか!？」

「ん、ま、まあ、そそ、そうだね」

「ぷに!」

「がはっ!？」

毎度おなじみのぷにタックルを食らった。流石にこれは怒るよな。

「すびばせん……全てはぷにがやりました」

「ぷに!」

えっへん、とでも言うかのように誇らしげな顔をするぷにであった。

「へえ、本当に強いんだな」

「俺だって、何か武器さえあれば……」

「そういや、あんたの武器って何なのかしら？」

いつのまにかテーブルに座っていたメルヴィアが質問してきた。

「拳と蹴りだ」

「あら、それじゃあ力はあるのかしら」

「フッフッフ」

俺のお楽しみタイムの始まりだ。

「見るがよい!」

後輩君にしたようにジャージをまくり上げる。

「あら以外、ちゃんと鍛えられてるのね」

「小娘とは違うのだよ！小娘とは！」

「あら、言うわね」

そりゃ、俺は趣味で鍛えてるだけとはいえ女子に負けるような鍛え方はしていないさ。

「はい」

「……？」

メルヴィアが肘をテーブルについて手を広げている。

……ああ、なるほど。

「後悔しないことだな」

俺はイスに座り右肘をついて手を合わせて。

俗に言う腕相撲の構えである。

「先輩、やめといた方がいいぜ。腕へし折られるぞ」

後輩君が耳元で囁いてくる。

「何をバカなことを言ってるんだ。あの細腕に負ける要素はないさ」

「一応、止めたからな」

「それじゃあ、いくわよ。レディ」

「ゴー！」

瞬間にテーブルをたたく音が響き渡った。

「くくっ、貧弱！貧弱！弱い者いじめになっちゃったじゃないか！」

俺の圧勝。さすがに負けないさ。

「どうだい。お嬢ちゃん」

「あらー、以外とやるわね。手加減しなくてもよかったかしら」

「何だい、負け惜しみかい？三回勝負ですか？いいですよ？」

「それじゃ、はい」

先ほどと同じような体制を二人で取る。

「あんまり手加減に慣れてなくて、負けちゃったわよ」

「へいへい」

俺は若干呆れつつ相槌を打つ。

俺が有頂天になるのは負けフラグじゃないってところを見せつけてやるぜ！

「そんじゃ、スタート！」

途端に響くのは粉碎音。

先ほどのをドンと言うのなら、今回ののはバキッとも言える感じ。

「――ア！　――ッ！」

声にならない悲鳴を出す。

「ちょっと、やりすぎちゃったかしら？」

「やりすぎだよ、メルお姉ちゃん！」

「おいおいテーブルにひびが入ってるじゃないか」

「先輩、だから言ったんだよ……」

「ぷに〜」

「折れた！絶対これ折れてる！」

「大袈裟ねえ、流石にそこまでやってないわよ」

「くうっ！」

負けた！こんな細腕に俺の数年間の結晶を打ち破られた！

「う……ぐず、うう……」

「ちょっと、大丈夫そんなに痛かった？」

「ぐず……うっせえ！同情なんていらねえよ！」

俺はそう言うのと扉に向かって駆け出した。

「いつか、絶対負かしてやるからな！……ぐずっ、うああ」

ボタンとドアを閉めて走り出した。

.....

.....

.....

「ちくしょー！」

「ぷに」

現在は宿屋でベッドに寝転がってる。

「メルヴィアの奴め。いつか、絶対に負かしてやる」

早速鍛えなおそうと思い俺は床に腕をついた。

「ぐおおおお！」

着いた瞬間、勝負に使った右腕に激痛が走った。

「というわけで、俺強化作戦を考えよう」

一番確実なのはゆっくりと鍛え上げることだが、効率化を図りたい。

「ぷに！」

「はい、ぷに君！」

「ぷに、ぷにに、ぷにーに、ぷに！」

「はい、却下」

まさしく日本語でおkってやつだな。

「ぷにに！」

いきなりぷにが置いてあった、俺のポーチを漁りだした。

「ぷに、そのポーチには食い物が入ってないぞ」

「ぷに」

「ん？」

ぷにが咥えているのは、こないだのゴーストの残骸だった。

「手袋をしても腕力は上がらないって……」

しかし、ぷにが押しつけてくるのでしかたなく装着してみる。

「んむむ？」

攻撃力が5上がった！

「なんだろう、この感覚……そう生命力が奪われているような。でも、それでいて力があふれる……」

「ぷにに！」

「いるか！ぼけえ！」

「ぷに！？」

手袋をぷにに向かって投げつける。

「どう考えてもそれ、呪いのアイテムじゃねえかよ！」

リアルにHPが削られていく感覚を味わったぞ。

「却下だ！……と、言いたいところだが」

もしかしたら、いけるんじゃないか？

「ぷに」

意識）チート使って勝ってうれしいんですか？

「今回だけだ。いつか自分の力で勝って見せるから！」

そう心に決めて、俺はゲラルドさんの店に向かった。

ネーミングセンス

「ゲラルドさん、討伐完了しました」

忌むべきあの日から一週間が過ぎた。

俺は、依頼の完了報告をしにお店にいる。

「なんだ、随分と疲れてるな」

「うい」

大体、近海ペンギンのせいだ。

あいつら、ゴースト手袋しないと全然攻撃通らないんだぜ。

「しかしお前、少し働きすぎじゃないか？」

「まあ、多少……」

なんでもアーランド行きの馬車に乗るには10万コールも必要らしい。

後輩君とトトリちゃんと俺の3人で懸命に金を稼いでいるのだ。

……メルヴィアも手伝ってくれてはいる。

「確かここ1週間で5000コールは稼ぎましたよ」

「そんなに稼いで、何か入用なのか？」

「まあ、いろいろあるんですよ」

「ふむ。俺から言えることとしては、無理だけはするなよ」

「もちろんですよ。それじゃ、今日はこの辺で」

そう言って、俺は店の外に向かった。

「報告終わったぞ」

「それじゃ、行きましようか」

外で待っていたトリちゃんとは合流して、俺たちは歩きだした。

「久しぶりにまともな飯を食えるな」

「あはは……」

ここ1週間の間は採って食っての適当な食生活をしていたのだ。それを話したらトリちゃんが夕食に誘ってくれたのだ。

「しかし、本当に俺が行ってもいいのか？」

正直、恩があるのにご馳走になるのは気が引ける。

「いいんですよ、アカネさんいつも手伝ってくれてるじゃないですか」

「いや、俺にも事情があるからな」

手伝いをするって言い出したのは俺だし、アーランドに俺も行きたいし。

「しかし、10万コールって聞いた時は驚いたな」

「私もですよ……」

「まあ、俺はアーランドに行きたいだけだから気にするなよ」

「わたしもそうですから、遠慮しないでください」

「二人は冒険者になるって目標があるって言いたいが……まあ、そうするよ」

ここ1週間で分かったが、本当にトリちゃんはいいい子だよ。やばいくらいに優しい。この間なんてタダで薬くれたんだぜ。

「よーし！飯を食ったらさらに頑張るとしますか！」

「わ、私もがんばります！」

決意を新たに、とりあえずはトトリちゃんの家に向かった。

[illegible]

「ふに！」

「何故いるし」

扉を開けてリビングに入るとふにがテーブルに乗っていた。

「私が呼んだんですよ。いつもぶにちゃんも手伝ってくれてるますから」

「ふにに！」

そうね。俺よりも役に立ってるモノネ。

「まあいい、ツェツイさん。何か手伝おうか？」

俺はキッチンで支度をしているツェツイさんに向けてそう言った。

「いいわよ、アカネくんはお客さんだから、座ってて」

「食器運ぶくらいは手伝うから、できたら呼んでくれよ」

「ええ、そうさせてもらうわ」

ツェツイさんには敬語じゃないんだが、若干口調が和らいでしまう。これが、噂に聞く癒し効果とかいうものだろう。ヘルモルト姉妹は本当に雰囲気似ている。

「そういえば、アカネさんに報告があるんです！」

「おおっ何だいな？」

トトリちゃんが勢いよく声を出した。

「ふっふっふ、ぷにちゃんの名前を思いついたんですよ」

「ぷに！？」

「正直忘れてたと言いたいけど……気にはなるな」

トトリちゃんがこんなに時間をかけて考えたんだ。きっとぴったりな名前になるだろう。

「で、その名前は？」

「ぷに！ぷに！」

ぷには興奮して待ちきれないようだ。

「はい！名付けて、『ぷにせいぎ』です！」

「えっ？」

「ぷ、ぷに？」

俺の耳がおかしくなったのか？何かとんでもないものが聞こえたような……。

「ぷにせいぎです。ぷにちゃんはモンスターだけど良い子ですから」
「……………」

正義、これは……予想の斜め上をぶっ飛んでったな、おい。

「……………」

どうですか、とでも言うようなトリちゃんから目を逸らして。
俺は素早くぷにとアイコンタクトを行う。

「ぷに、昨日俺が考えたのとどっちがいいよ！」

「ぷに〜」

考え込むような表情をするぷに、流石の演技力だ。

「え？アカネさんも考えてたんですか？」

「ん、まあネ。新しいのを一つ考えたんだヨ」

そして、俺の演技力はゴミレベルな気がしてならない。

「何て名前なんですか？」

「えっ!?!?.....まあ、あれだよ!」

白……丸……ぷに……モンスター……あらゆる言葉が俺の頭を駆け巡っている。

「ぷに……ホワイト」

「ぷにホワイトですか?」

「ぷに」

ぷにが俺の方をすごいジト目で見てくる。

俺は悪くねえ!

「それで、ぷにちゃん。アカネさんとどっちがいい?」

「ぷに……」

ぷにがさっきまでの演技ではなくガチで悩んでいる。

「シロっていうのはどうかな」

「ホワッ!」

隣を見ると、やさしげなおじさんが座っていた。

全然気付かなかったんだが、いつからいたんだ?

「えっと……誰? いつからそこに?」

「私はトトリたちの父親でグイードって言うんだ。ここには最初からいたんだけどね……」

オワタ。失礼なんてもんじゃないわコレ。もう恥ずかしくて死にたい。

「す、すいません。とんだ失礼を」

「いいさ、もう娘たちで慣れたからね」

「わ!?! お父さんいたの!?!」

「ほらね」

「は、はあ」

悲しい、悲しいぞ! 悲しすぎるだろ!

とりあえず、このことについてはもう考えないようにしよう。

「それで、シロっていうのは?」

「そののぷに君が随分悩んでいたんでね。第三の案としてどうかと思ってるね」

そう言って、グイードさんは朗らかに笑った。

「ぷに!」

「なんだ、ぷに。気に言ったのか?」

「ぷに!?!」

「そうかい、それはよかった」

「むう、お父さんずるい!」

今回ばかりはトトリちゃんを庇えない。

とりあえず、次からはトトリちゃんには頼まないようにした方がいいだろう。

「ま、シンプルなのが一番ってことか」

そういうながら、俺はイスに深くもたれかかった。

白玉とかぷにとかよりは呼びやすいしな。

「アカネ君、できたわよ。運んでくれるかしら？」

「おう、待ってたぜ」

そう言って、バツと体を起してイスから降りる。

「俺のちょっとカッコいいところ見せてやんぜ」

「はい。よろしくね」

.....

.....

.....

「今日は、ありがとな。久しぶりに満足な食事を食えた」

「いえ、いつでも来てくれていいですからね」

あ後は普通に食事を取って、今はトトリちゃんがお見送りしてくれてる。

「ん、体冷やすといけないから、俺は帰るかね」

「あ、はい。それじゃあまた明日」

「んー、また、明日なー」

「ぷにぷ」

手を振って、トトリちゃんと俺たちは別れた。

[illegible]

「ぷに……いやシロよ。俺はこないだ人生の絶頂を迎えたかと思っ
た」

「ふに？」

「しかし……違った。今日、俺は真の最頂期を迎えた！」

帰ってる間に頭が冷えてきた俺は、気づいてしまったのだ。

ある、重要な事実。

「俺は……ツエツィさんの！ 手料理を食べたのだ！」

勝ち組みなんて安い言葉じゃ言い表せないほどの優越感。

「これは、もう嫉妬で殺されてもおかしくないレベルだろ」

高校で彼女出来たとか言つてた奴が途端に薄っぺらく……いや哀れにすら思えてきた。

「クツクツク」

いつもならこの笑い方が負けフラグになるところだが、今は夜中の村、そうそう人なんていない。

「シロ、お前にもこの気持ちが分かるだろう？」
「ふにー」

なんか白い目で見られてる気がした……。

「一通り幸福感を味わったし帰るか」
「ふに」

俺たちは今度こそ宿屋へと向かった。

……………宿屋へ戻ると今日は宿屋の旦那が漁で大漁だったらしく、豪勢な魚料理が振る舞われたと聞いた。

「……俺もう絶対あの笑い方しないぞ」
「ふに」

ツエツィさんの手料理に及ばないとしても悔しいものは悔しいんです。

先輩としての誇り

「残念。俺の冒険はここで終了する」

唐突だが、俺の人生オワタな事態に遭遇している。

「キエエエー！」

街道を歩いてたら、俗に言うグリフォンが襲ってきたのだ。
隣でトトリちゃんが腰を抜かしている。

後方にはメルヴィアがいるが間に合わないだろう。

「所詮俺は、ぷにがいなけりゃ何もできないのさ」

ドヤッ

「キエエエー！」

グリフォンの振り上げられた前足が、俺に振りかかろうとしていた。

「オワタ」

——ガキンッ！

「ほわい？」

目の前にはメルヴィアと崩れ落ちたグリフォンがいた……。

……

……

……

「うゝむ」

「ぷに？」

現在俺は広場の噴水の脇にあるベンチでうなだれていた。

「絶対におかしいだろ」

一撃はないだろ、一撃は……。

「そもそも、お前がどっかに行ってたからなあ……」

「ぷに」

冒険に行こうと思ったら、ぷにがいなかったので仕方なく置いてったのだ。

近場だから大丈夫と思った結果があれだよ。

「やっぱり、あれか？ 必殺技的なものが必要なのか？」

「ぷに！！」

「なんだ？俺はもう使えるってか？はいはい、ワロスワロス」

ぷにが俺の頭から飛び降りて、俺に向かいあった。

最近はぷにのおかげで、行間を読む能力が向上した気がする。

「ぷに！」

「おっ！？黒くなった！？」

いつぞやの黒ぷにモードに変化していた。

「スタイルチェンジとかもう完全に主人公じゃんか……」

なんか、ぷにのせいで俺の影が薄くなってる気がしないでもない。

「ぷにくん！」

「さらに、シャドーボールって……俺の存在価値をそんなになくしたいのかお前は？」

変な鳴き声を上げたぷには上空に黒い球体を打ち上げた。

「つか、今のってゴーストの攻撃に似てね？」

「ぷに」

ぷに再会とは別に、ゴーストの討伐に向かった時のことを思い出した。

「カービィか！お前は！？」

何？捕食したら能力を使えるってこと？

「さて、そうだとしたらお前大分前から使えたんじゃないか……」
「ぷに！」

肯定ですか、そうですか。

今まで俺に見せてきた実力は全力じゃなかったってことなのね。

「待て！相棒のパワーアップはもう一人のパワーアップフラグじゃないか！？」

相棒に対して劣等感を抱く↓俺が暴走した行動を取る↓ピンチで必殺技

「これで、勝つる！」

「ぷに」

ぷには、やれやれとでも言いたそうな顔をしている。

「先輩。さっきから何やってんだ？」

「ぬおっ！」

ぷにから目線を上にあげるとジーノがいた。

「後輩よ……俺、もうすぐ強くなるから！」

「えっ？なんでだ？」

「必殺技だ……俺はもうすぐ必殺技を手に入れる」

「ま、マジかよっ！？」

「ああ、フラグは立ったからな」

「？ よくわかんねえけど、必殺技かあ……」

必殺技に憧れを抱くとは、どうやら後輩君も人並みに男の子らしい。

「な〜んか、おもしろそうな話してるわね」

全身の毛が逆立つのを感じた。

「おっ！メル姉！実は先輩が必殺技を手に入れたらしいんだよ」
「ちょっ！？」

まだ！まだ手に入れてないから！もうすぐって言っただろうが！

「必殺技……アカネもやっぱり男の子なのね」
「うぐっ！」

なんか遠まわしに厨二病って言われた気がする。

「ぷに！」
「あら、シロちゃんじゃない。ご主人がこんなので大変ね」
「おい待て、ぷにと俺は相棒だ。ご主人だとぷにが上になっちゃうだろうが」

メルヴィアが苦笑いを浮かべた。

「自覚はあったのね……。というか、なんでぷになのよ？」

そういや、ぷについて言いなれてるせいですっかり忘れてた……。

「ぷに、俺からの呼び方はもうこれで良いんじゃないか？」
「ぷに！」

いいらしい、流石は相棒ですね。

「先輩、結局先輩の必殺技ってどんなのなんだ？」

ちっ！うまく話を逸らそうと思ったのに！

「……………」

俺が黙っていると、メルヴィアが俺とジーノを交互に見ていた……なんぞ？

「なんで、ジーノ坊やはアカネのことを先輩って呼んでるのよ？」

ナイスだ！うまくこっちの方向に話を持っていけば！

「なんでって言われでも、先輩は冒険者の先輩だからな」

「でもジーノ坊やの方が明らかにアカネよりも強いでしょ」

「えっ！マジか！？」

「筋力とかは当然劣ってるけど、私の目から見てジーノ坊やの方が戦いなれてるわよ」

話が逸れて嬉しい反面、複雑な気分だ。

何というか、先輩としてのアイデンティティが危うくなってる気がする。

「待て、俺にはぷにというオプションパーツが……」

「今日は、それがなくて何があったのかしら？」

「ぐぬう……」

こやつ、的確に俺の急所をえぐってきやがるぞ。

「でもさあ、冒険者としては先輩は先輩だから、これからも先輩でいいと思うんだよ」

！ ジーノ後輩……俺は君のことを誤解してたわ。

なんというか、生意気でイケメンなやつだとか思ってたよ。
まさか、こんなにいい子だったなんて！

「こうは「それに必殺技も持ってるしな！」……イイイイイ」

自分でもどう出したかわからないような、ものすごい低い声が出た。
いまさら、そこに話を戻すんじゃねえよ！

「そういえば、結局どんななのよ？」

「えっとー、それはー」

長引かせて、とりあえず適当なのをパパっと言うんだ俺！

大抵、こういうのは相棒とセットの技になるって相場が決まってるから……。

「そういや、俺ちようど特訓に行こうと思ってたんだよ！先輩も来てくれよ！」

コオオオーハイイイイー！！

「あら、おもしろそうね。折角だから、私も付いていくわよ」

何？俺フラグの立て方ミスったの？

「はっ!?!」

いや、後輩はこんなこと言わないから!?!
つか、なんでトトリちゃん出てきたんだよ!?!

「アカネ、そろそろ初めの相図出してもいいかしら?」

メルヴィアが俺のことを呆れたような目で見ている。

このままでは、必殺技どころか後輩に負けるという醜態をさらす羽目になるのでは……。

「ちょい待ち」

俺はジャージのポケットから魔のゴースト手袋を取り出した。
もはや、ゴースト繋がりでこいつに頼むしかない。

俺は両手に手袋をはめた。

「それじゃ、始め!」

「たあっ!」

後輩が剣を構えて前かがみに突撃してきた。

「……剣コワ!？」

俺は横に飛んでなんとか袈裟切りを避けた。
足首とか鍛えというて良かったわ……。

「必殺！」

叫んで、右拳を握り力を込める。

後輩君は警戒してるのか、こちらの様子を見ている。

「シャドーボール！」

ストレートを空中に向けて放つと後輩に向かって黒い塊が飛んでいった。

「うわっ！」

それをまともに食らった後輩は、崩れ落ちた。

「流石、先輩強いぜ！」

「本当、見直したわよ！」

「クックック」

……こうなると思ったの？ バカなの？

現実には叫びもむなしく、空中に腕を放った隙だらけの格好となってしまった。

「えっと……」

絶好のチャンスなのだが、どうしようか戸惑っているようだ。

「運が良かったな。今日はMPが足りないみたいだ」

帰れよ、何て言われるはずもなく後輩君は俺に向かって剣を振りおろしてきた。

「ひっ!？」

バックステップでかわしつつ距離を取る。

(距離とってどうするんだよ! 懷に潜り込まなきゃだめだろうが!)

自分で自分の行動がよく分からない。

「こうなったら……」

俺はぷにの方に目を向ける。

ここに来るまでにある打ち合わせをしていたのだ。

(よろしく!)

(ぷに!)

「必殺!」

叫んで、先ほどと同じように拳に力を入れる。

違うこととしては、もう後輩君は警戒なんてしていないってことだ。

「ぷに！」

「シャドーボール！」

ぷにが俺に向かって放った黒玉を拳で後輩君に向けて打ち返した。
若干どころか完全に反則ではあるが、これでさっきの妄想は成り立つ！！

「っ！？」

ですよねー。

後輩君は普通に横にステップして攻撃をかわした。

「先輩！卑怯だぞ！」

「うっせ！これが必殺技もとい合体攻撃だ！」

これも一つの男のロマン。

俺のゴースト手袋の効力で威力は上がっている……はず！

「今のもうなしだからな！」

「ちっ！仕方ないか」

視界の端ではメルヴィアがアップを始めてたので仕方なくあきらめた。

「後悔するなよ、本気でいくぞ！」

……

……

……

「ぜえ、はあ……ぜえ、はあ」

忘れてた……この手袋していると体力の消費すごい激しいんだった。後輩君の顔を見るとかなり涼しい顔をしている。

「先輩、もうやめといた方が……」

「う、うっさい！まだ、いけるわ！」

対人戦で年下に負けるとか、いくら俺でもプライドぐらいある。

「……ふう」

俺は距離を取りつつ息を整えた。

「後輩君……見せてやるぞ。必殺技を」

「いや、もうそれはいいって」

呆れた顔をする後輩君だが、今回ばかりは本気の俺だ。

真面目にやるのは格好悪いとか言うのは、もはや昔の世界の話だ。
邪魔な手袋を取ってポケットに収納する。

その間に後輩君は今までと同じように剣を構えて突撃してくる。

俺も後輩君に向けて走り出す。

「はあっ！」

水平切りを屈んで避け、加速を生かしたまま技を繰り出す。

「夏塩蹴り！」

つまるところサマーソルト。

宙返りをしつつ蹴りを繰り出す。

俺のガチの必殺技だ。黒歴史と化していた俺の技だが、どうやら後輩君には効いたようだ。

「いってえ〜」

「痛いぞ済んじゃうのかよ！」

後輩君は顎を押さえて転げまわっていた。

俺の筋肉と瞬発力をフルに使った技だったんだが……。

「とりあえず、俺の勝ちな」

「ちえー、勝てると思ったんだけどな」

「一応、あれが俺の最終兵器だからな」

「すごかったな！あれ！本当に先輩、必殺技持ってたんだな！」
「ま、まあな」

まさか、こんなに真っ直ぐ褒められと思われず、若干照れる。

「でも、あんな技使ってるの見たことないわよ？」

近寄ってきたメルヴィアが話しかけて来た。

「いや、だって……」

厨二すぎて使えないだろ……あんなの。

「必殺技だからな」

「だったら、あの時使えばよかったじゃない」

「グリフォン相手に効くとは思えないわ」

確かにあれは対空技だけど、あれにダメージを与える自信はない。

「とりあえず、帰ろうぜ。俺はもう疲れました」

「俺はもうちょっと特訓してから帰るから、先に帰っててくれよ」

元気だなーこの子は。

「私も帰るとするわ、面白いものも見れたし」

「ぷに」

なんか、俺への好感度が上がっている気がする。

「あれか！真面目にやった方がカッコイイということか！」
「いや、そんなの当然じゃない」

前は当然じゃなかったんですよ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「イエスッ！到着！帰って休もう！」
「ぷに！」

「ちょっと、待ってくれない？」
「んにゃ？」

宿屋へ向かう俺たちをメルヴィアが引きとめた。
何か用があるのだろうか？

「何だいな？」
「大したことじゃないんだけど、これからもあの子の先輩をよろしくね」

「むっ、何か姉っぽいことを言い出した」
「うっさいわね。で、どうなの？」

「冒険者に対して失望させない程度にはがんばる」
「そ、ありがとね」
「あ、ああ」

メルヴィアは強いが女の子な訳だ。
つまり……なんというか、照れてる俺がいる。

「そ、それじゃ、また今度な」

「ん、またね」

「ぷに」

宿屋に戻って、寝ながら俺は思った。

「冒険者をこのまま続けてもいいかもしれないな」
「ぷにに」

仕事してんのは俺だけだな、って言われた気がした。
俺だって少しくらいは仕事してるよ……。

先輩としての誇り（後書き）

次回やっとなーランドに行くよ！

俺の怒りが有頂天

「結局金集まらなかったな」

「ぶに」

明日は馬車が出る日なのだが結局金が集まらなかったのだ。
そのため、俺は宿屋の部屋で寝ころんで落ち込んでいた。

「二人とも大分落ち込んでたよな」

「ぶにに」

俺はいつでもいいとしても、トトリちゃんたちはすぐにでも行きたいだろうに。

「うがー！」

トントン

「？ はーい、どうぞ」

扉がノックされた、俺は寝ころんだまま応答した。

「こんばんはー」

「トトリちゃん？ どうしたんだ？」

「はい！ 実はですね……」

「……………」

翌朝

「死ねい！」

「ひゃあ！」

ちっ！ペーターの野郎かわしやがった。

「い、いきなり何するんだよ！」

「自分の胸に聞いてみろ！」

俺はもう一度、奴に向かって拳を放とうとする。

「あ、アカネさん！ダメですよ！」

「そうだよ先輩！」

ちびっ子二人がそんな俺を抑えつけてくる。

「だって！あいつが！」

「だ、だから何なんだよ！」

本当に分かってないのか、しらを切ってるのか知らんが、絶対に許さんぞ！

「むきー！」

俺は二人の拘束を外して、再び殴りかかろうとした。

「ぷに!!」

「ぬおっ!？」

ぷにがペーターの後ろから鳩尾に体当たりをしてきた。
かなりうまいことカウンターを決められた。

「……ぐふっ」

いままでの中で一番のクリティカルヒット。
俺はその場に崩れ落ちた。

「これで勝ったと思うなよ」

「いや、俺は何もしてないんだけど……」

俺はよろよろと立ちあがる。

「で、結局なんなんだよ」

「だから、兄ちゃんが言ってた馬車の代金の話だよ」

後輩君がそう言うなりペーターは肩をふるわせ始めた。

「はっはっは!そうかそうか、お前ら本気で信じてたのか!あーは
っはっは!」

くそっ!俺が何もできなくなった途端に調子のいい野郎め!

「笑い事じゃねーよ!」

「そうだよ!ひどいひどい!」

「ぷに!ぷに!」

「うぐぐっ!」

こんな屈辱的な思いは始めてだ！

「悪い悪い、あんまりジーノがしつこいもんだからさ。それにツェツイさんもお前がアーランドに行くの反対してたみたいだし」

えっ、そうなの？初耳なんだけど……

「だからって、あんな嘘つかなくてもいいのに」

「でも、俺の嘘のおかげで結果的にツェツイさんにちゃんと許してもらえたんだろう？むしろ感謝してほしいくらいだな」

誰か、誰か俺に回復魔法をかけてくれ！そしたらグーでいけるから！

「そうだけど……なんか納得いかない」

「はあ、もういいや。それより早く出発しようぜ」

二人ともそこで妥協しちゃダメだって！

「そう焦んなって、長旅になるんだからもうちょっとゆっくりしてから……」

「トトリちゃん！ジーノくん！アカネくん！」

ペーターがなめたことを言っていると坂の方から癒し要素がやってきた。

「げっ！ツェツイさん！？……あああ、折角の見送りを邪魔しちゃ悪いな。俺、向こうに言ってるから」

ヘタレた事を言って、ペーターはどこかに駆け出した。

「……やっぱりヘタレだな」

「だね」

「今回ばかりは同情の余地はない」

つか後輩君、ちゃんと意味を理解したんだな。

そんなことを言っているとツェツイさんと他2名が近づいてきた。

「よかった。間に合って。これお弁当、4人で仲良く食べるのよ」

「うん、ありがとう。お姉ちゃん」

「なんか、ひとり分多いみたいだから、俺が2人前食べるとするか」

「アカネさん……そろそろ許してあげましょうよ」

「4人目など知らん！」

溜まった金は別の使い道があるだろうけど、さすがに許せん！

「アカネくん、ペーターくんも悪気があったわけじゃないから、許してあげてくれないかしら」

「ツェツイさんがそう言うのなら……」

何故かツイツイさんには強く出れない……。

「ま、それはともかくとしてトトリたちのことよろしく頼んだわよ」
「任せろ！」

メルヴィアから言われると別の意味で断れない。主に恐怖的な意味で。

「あんたじゃなくて、シロちゃんよ。シロちゃん」

「ぷに！」

「……………」

確かにぷにの方が頼りになるけど、そりゃないだろ。
こうなったら……。

「…………ぷに♪」

「アカネ……正直気持ち悪いわよ」

ツェツイさん達も苦笑いをしている。

……そんなに駄目だったか？ぷにのものまね。

「それじゃ、ペーターにもくぎを刺しに行ってくるわ」

そう言うのとメルヴィアはペーターの方に歩いて行った。

「あの二人って仲いいのか？」

「ええ、私とペーター君とメルヴィは幼馴染なのよ」

「な～るほど」

なんとなく3人の関係が分かった気がする。

「ツェツイさん、ペーターに避けられてないか？」

「え、ええ。そうなのよ。よくわかったわね」

驚くようなことじゃないさ。あの性格と行動を考えれば自明の理！
これをネタにいつかからかってやるとしよう。

「アカネさん。悪い顔になってますよ……」

「おっと、いかんいかん」

顔を引き締めようとしても、ついついニヤけてしまう。

「……俺の馬車に

何か、なんて起きるはずないからな」

「不安だわ……不

安すぎる。やっぱり私も一緒にいこうかしら」

なんか、あいつらがフラグっぽい事を言ってるんだが……。

「気をつけて行ってくるんだよ。ジーノ君。アカネ君もトトリのことを頼んだよ」

「おおっ！任せてくれよ！」

「！？ え、ええ。もちろんです」

グイードさんの存在を忘れてたとか口が裂けても言えないな……。

「ちょっと！ちゃんと聞きなさいよ！だいたいあんたは昔から……」

「あー！しつこいな！おい、もう出すぞ！早く乗れ！」

「あ、うん。それじゃ、行ってくるね」

「ええ、行ってるっしやい。変なもの食べちゃだめよ。あと、知らない人について行ったりしたら……」

「もうっ子供扱いしないでよ。それじゃ、行ってきたーす」

そして、俺たちは馬車に乗って村を旅立った。

「あー、そろそろ馬車にも飽きてきたな。退屈だな」

「うう……気持ち悪い……」

「いつまで酔ってるんだよ。いい加減慣れろよな」

「うう……アカネさんよりはマシだもん」

「気持ち悪いから寝たい……なのに寝すぎて寝れない」

電車の倍は揺れてる気がするんだが……。

「ぶに」

「お前は元気だなー……」

ぶには平常運転すぎて妬ましい。

「はー。こんなんだったら歩いていけばよかったな」

「でも、歩いて行くと危険だって。……私も帰りは歩きたいかも」

「俺……アーランドに残ろうかな……」

それが一番じゃないかなー。もう乗りたくないなー。

……1週間後

「ペーター、もうそろそろ着かないと俺の精神がストレスでマッハ何だが……」

「あと、丸1日ってところだ。我慢しろ」

「あと、1日かー、あー！やっとな！」

「見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはないな」

「アカネさん……」

「トトリちゃんが俺を痛い目で見ているのは確定的に明らか」

自分でも今のテンションがおかしいことぐらいは自覚している。

「うわわっ！」

ペーターの叫び声が聞こえると馬車が大きく揺れた。

「あいた！ううつおでこぶつけた……」

「おい！何で急に止まるんだよ！？」

「コルア！仏の顔を三度までという名セリフを知らないのかよ！」

三者三様の物言いをしてるとペーターが扉を開けて出てきた。

「や、やや、やばい！やばいのが出た！」

「わっ！な、なんなの！？」

「モンスターだよ！こんなでっかい奴！やばい！俺たちやばい！」

メキメキ

「うわー！なんかメキメキ言ってるー！」

「慌てるな！地球出身は慌てない」

「何言ってるかわからないよー！」

「どうすんだよ！このままじゃ俺たち潰されちまうぞ！」

「知らねえよー。あんなモンスターが出たの初めてだし」

「あーもー！やっぱ頼りにならねえなー！」

「きゃー！どうしよどうしよ！シロちゃん！起きて起きて！」

「いや、そこは俺に頼ろうよ！」

ぶにはこんな騒ぎでも相変わらず寝ていた。
ここはこっちよ、俺が頼りになるところを見せてやるか！

「俺に任せるがいい！とう！」

俺は馬車から飛び降りた。

「無事か、間に合ったようだな」

するとそこにはモンスターが倒れていて、黒いコートを着た目つきの悪い男が立っていた。

「先輩！大丈夫か！」

「アカネさん！」

ちびっ子二人が出てこようとするが俺はそれを止める。

「待て！モンスターはいないが、殺し屋みたいな顔つきの男がいる！」

「殺しっ……！」

目の前の男は明らかに一人くらいやつちやってる顔をしている。
子供が泣き出すレベルだ。

「い、いくらだ！？」

「な、何がだ？」

しらを切りやがって。

「ただ、俺たちを助けた訳じゃないんだろう……さあ、いくら払えばいい!？」

「誤解するな。騎士として当然のことをしたまでだ。謝礼などいない」

「……………」

俺の中の警戒アラームが鳴り響いてるんだが、信用していいのか？

「うわっ、すげー。モンスターが倒れてる」

「わっ、怖そうな人」

気づくと二人とも外に出てきていた。

「……怖そう?」

「あっ、やだ! き、聞こえちゃった。ち、違うんです! 怖いっていうのは、その……」

「すげー! こいつ、おっさん一人で倒したのか?」

「……おっさん?」

「こ、後輩君! 何言ってるんだ!」

「そ、そうだよジーノ君! 何言ってるの!」

こいつにはあの男の顔が見えてないのか!?

「いやー助かりましたよー。本当なんてお礼を申し上げていいのやら」

いつの間にかペーターも馬車を降りてきて、自称騎士の人にお礼を言っていた。

……あの二人が並んでいると、肉食獣とその獲物にしか見えない。

「先ほども言ったが、騎士として当然のことをしたまでだ。しかし、アーランドの間近にこんなモンスターが出現するとは……」

「ええ、びっくりですよ。長いことこの仕事してますけど、こんなことは初めてです」

ペーターのやつ世渡りの方法を心得てやがる。

ああいうのを長生きするタイプとかいうんだろうな。

「そうか、報告は私の方からする。君たちは早く街に入ったほうがいい」

あれ……？もしかして、ガチで騎士なのかな？

「おい！おっさんてば！無視すんなよ！」

「……………」

「ジーノ君！睨まれてる！めちゃくちゃ睨まれてるからー！」

騎士……なのか？どうみても狩人の目つきなんだが……。

「では……」

疑惑の騎士の人は踵を返して立ち去った。

「あ、行っちゃった。でもカッコよかったな！あれこそ冒険者って感じ！」

「後輩君！俺は！俺は！」

「先輩は……なんかちがうんだよなあ」

泣いた。

「怖かったあ。モンスターよりも怖かったかも……」

トトリちゃんが涙目になっていた。

こっちが正常な反応だろう。

「よし！決めた！俺、あのおっさんみたいな冒険者になる！兄ちゃん早くアーランド行こうぜ！」

「待て！後輩君！俺はどうしたんだ！」

「あのおっさんは遠くの目標で、先輩は近場の目標みたいな感じだな」

さらに泣いた。

「なんとか馬車も動きそうだし、早くこんな物騒なところ通り過ぎちまおう」

そういつて、俺たちは馬車に乗り込んだ。

……ぷにはまだ寝ていた。気楽過ぎるだろう。

俺の怒りが有頂天（後書き）

原作の会話を思い出すのではない思い出してしまうのがSS作家。

喧嘩注意報発令

「おお、着いた着いた！」

街に入ると数か月ぶりの町並みが目に飛び込んできた。

「ふわあ……ここが、アーランド」

「すげー！やっぱ俺たちの村とは全然違うな」

「見てみて、床が全部石だよ！歩きやすい！」

「家とかもでっけーな！どうやって作んだ？あんなの」

……この子たちをいつか東京に連れて行ってやりたいな。
だいぶおもしろそうだ。

「恥ずかしいから、あんまりきよろきよろすんなよ」

事実微笑ましそうに笑っている人が何人かいる。

俺がお兄さんポジション的なあれだろうか。

「はしゃぐのもいいけど、とっとと用事を済ませてこいよ。明日の
夕方には馬車を出すからな」

「ん、馬車の中のぷにをよろしくな」

俺がそう言うのとペーターは街の外に戻って行った。

「明日の夕方か……あんまり時間ないな。先輩、免許ってどこでも

「らえるんだ？」

「ああ、こっちだこっち」

俺は二人と一緒にギルドの方に歩きだした。

「ところで、アカネさん。免許ってどうやってもらうんですか？」

「どうやってって？」

「試験とかあったりするんじゃないかなって……」

「なりたーいって言えばすぐにもらえるぞ」

「えっ！？ 本当ですか！？」

「ホント、ホント」

正直あの嘘があったとはいえ、あんなに簡単にもらってよかったのか今でも疑問だ。

一応期限があったりはするが、その辺の説明はクーデリアさんに任せよう。

「っと、着いたぞ」

「うわあ、大きい」

「でけえー」

二人とも大きさにすごく驚いている。

やっぱりいつか東京タワーとか見してやりたいな。

「とりあえず、入ってからもう一回驚いとけ」

この中は現代人の俺の感覚でもでかいと感じたくらいだ。
リアクションに期待しつつ俺たちの中に入った。

「中也広い」

「ああ、いかにもって感じだな。これで俺もいよいよ冒険者に！」

「免許はあそこのカウンターでもら……える？」

なんか、カウンターの前に人だかりができていた。

「先輩、あれ何だ？」

「知るか、とりあえず近づいてみるか」

近づいてみるとクーデリアさんと知らないちびっ子が見えた。
ちびっ子の格好すごいな……赤いマント着てるけど、相当露出高い
だろ……。

「しっつつこい！やらないったらやらないつつてんでしょ！」

「「ひい！ご、ごめんなさい！」」

「二人とも何驚いてるんだ？」

俺とトリちゃんとの叫び声が見事にハモった。

この怒鳴り声はなんつか、怖い。

「わっ、なんか、ちっちゃい女の子が喧嘩してる」

「トリちゃん。金髪の方にそれを言うなよ、絶対に言うなよ」

「えっ、は、はあ」

トリちゃんに対してこのネタフリは早かったようだ。

「理由を言いなさい！何故この私が冒険者の資格をもらえないのか！」

「だから、あんたみたいな生意気で礼儀知らずなガキにくれてやるもんはないつつてんのよ！」

「な、な……礼儀知らずはあなたの方でしょう！シュヴァルツラング家の当主である私に対して、よくもそんな口を！」

「あら、シュヴァルツラング家の令嬢でございますの。私、フォイエルバッハ家の令嬢でございますの。同じ貴族仲間ですわね」

「あなたみたいな、金で家名を買った成金貴族と一緒にしないで」

「……………どうしよう、なんか蚊帳の外な感じがする。いや、事実蚊帳の外だ。」

隣でオロオロしてるトトリちゃんを見てるのも面白いが、ここは一つ俺の喧嘩を止める能力を見せてやるか。

そう決めて俺は二人の前に歩み寄った。

「待たれい！！」

「「なによ！」」

「…………ごめんなさい」

怖いよ。このちびっ子二人怖いよ。

「って、アカネじゃないの。あんたいつの間に戻ってきたのよ」

「ついさっき戻ってきました……ごめんなさい」

「何よあんた！邪魔しないでくれる！」

最近は何ルモルト家と言うこの世界の優しい部分に浸ってきたせいで、この口撃に堪えられない……。

「お、俺は後輩連れてきたんだヨー！ちょっと黙っててくれるアルか！」

思うままに口を開いたら、意味のわからん事を言い出してしまった。

「後輩？今は私が！免許を貰いに来てるのよ！後にして頂戴！」

「ふたりとも早く来て！」

Sだよ。この娘、絶対Sだよ……。

「えっと……その……」

「なんだよ、先輩？もういいのか？」

人ごみの後ろから二人が出てきた。

俺の中の精神ポイントがトリちゃんを見てめっさ回復したわ。

「アカネ……あんたね、もうちょっと状況を見なさいよ」

「うっさい！この子は、あれだぞ……そ、そう！錬金術士なんだぞ！」

「錬金術士？あれ？その杖ってロロナの……」

クーデリアさんがトリちゃんの杖を凝視している。

確かに変わったデザインな気がするけど、そこまで見なくても。

「ああ、もしかしてロロナの言ってた弟子ってあんたのこと？」

「え、はい。私の先生はロロナ先生ですけど」

「へえ。あんたがロロナの……。免許を貰いに来たのよね。ほら、こっち来なさい冒険者の資格なんていくらでもあげるから」

「え、えっと一つあればいいんですけど」

クーデリアさんの態度が一気にすごい軟化した……。

まだ見ぬロロナ先生って一体何者だよ……。

「ちょっと待ちなさいよ！何でそんな田舎くさい子がよくて、貴族である私がもらえないのよ！」

「何よ、あんたまだいたの」

「いたわよ！いたに決まってるでしょ」

まあ、確かにそうなるわな。赤い子的にはまったく納得いかないだろうし。

つか、なんでクーデリアさんがこんなに機嫌いいのか俺にもわからないん。

「いい？この子は錬金術師なの。この国に3人しかいない貴重な貴重な錬金術士。おわかり？」

「嘘だ！トトリちゃんがそんなすごい子なはずがない！」

そんなVIPの様な空気をトトリちゃんからは良い意味でまったく感じない！

「何よ！嘘なんじゃないの！」

「アカネ！あんたちょっと黙ってなさい！」

「……はい」

(・・ω・・)

「こほん。あのバカの言うことは放って置きなさい。この子はね、かの有名なロロライナ・フリクセルの弟子なのよ」

「そして、俺の後輩さ！……ごめんなさい」

すごい目つきで睨まれてしまった。

「ったく。つまりは！あの悪名高いアストリッド・ゼクセスの孫弟子な訳、それでも文句ある訳？」

「ぐ、ぐぐぐ……あなた！」

「は、はい！」

「名前は？名前は何と言うの？」

「え、えっと。トトリですけど」

「俺はアカネだ」

「トトリね……。その名前、しかと覚えておくわ！」

そう言うトトリは扉の方に歩いて行った。

「え、え？なんで、私が恨まれるみたいになってるの？」

「え、え？なんで、俺が空気みたいに無視されたの？」

「それは自分の責任でしょうが……」

訳が分からないよ。

「ま、ああいうのは自分で言っというて肩書に弱いものなのよ。ほら、資格をもらいにきたんでしょ。こっち来なさい」

「おい、トトリ！おまえだけずるいぞ！」

「あ、ごめん。あの、お友達も一緒なんですけど……」

「一緒にいいわよ、ほら早く来なさい」

「は、はい！」

ジーノ君……俺以上に空気だったなあ。

「アカネ。あんたも来なさい」

「？ あ、ああ」

なんぞ？ この後イクセルさんの所行こうと思ってたんだけど……。よく分からないまま俺もカウンターの方に近づいた。

「ほら、あんたの免許よこしなさい」

「？ はいな」

言われるがままに免許を渡す。

「そう言えば、自己紹介が遅れたわね。私はクーデリア。ここで冒険者関係の手続きをやってるわ」

「はい、よろしくお願いします。あのクーデリアさん……先生とお知合いなんですか？」

「まあね、ロロナとは腐れ縁って言うか、幼馴染って言うか、大親友って言うかまあそんな感じよ」

「はあ、よく分かんない……」

ああ、前言ってた親友ってロロナ先生とやらのことだったのか。

それはいいとして、なんで若干顔赤いんだよクーデリアさん……ツンデレか？

一瞬、良いなと思ってしまった俺爆散しろ……。

「……………！」

ぞくつとした。

何かフィリーちゃんが前居た場所あたりから、負のオーラが……。

「アカネさん。見てください！」

「ん？ ああ、免許貰ったのか、おめでとう」

「はい！ 本当にすぐに貰えちゃいました！」

うむ。よきかなよきかな。トトリちゃんとは別に後輩君は後輩君でかなり喜んでいようだ。

「そういえば、クーデリアさん。なんで、あの子に上げなかったんですか？」

「あれは論外。こんなもの、ちょっと頭下げればすぐあげるってのに」

「……俺も大分ふざけたことしたような気がするんですけど？」

「言ったでしょ、頭を下げればって、あんたはちゃんと謝ってきたじゃない」

つまり、あそこで謝ってなければ俺は悲しき犠牲者になってたってことか。

「それと、はいこれ」

「あ、どうも」

クーデリアさんから俺の冒険者免許を手渡される。

「？ なんか端っこのガラスが宝石みたいなのになってますけど？」

前は壊れそうだったのに今はよく分からない紫色の鉱物になってい

た。

「前に説明したでしょ、ポイントを貯めたらランクアップするって」
「？ 俺ポイントを貯めた覚えなんてありませんけど？」

「何言ってるのよ？ アランヤ村の方からあんたの依頼報告が大量に届いてたわよ」

「ああ、確かに依頼は山のようにやりましたけど……」

「驚いたわよ。いきなりいなくなったと思ったら港町から報告が来るんですもの。どうやってあそこまで行ったのよ？」

「後で！ 後で！ お話しますから！」

「え、ええ……」

珍しく俺の気迫が打ち勝ったようで、クーデリアさんは若干たじろいでいた。

「しかし、ランクアップか……」

「そうね。でも、まだ2なんだから、これからもしっかりと働きなさいよ」

「へーい」

ふと、トトリちゃんたちの方を見ると二人とも首をかしげていた。

「先輩ってランク低くないか？」

「そりゃ、こいつが免許もらったの2ヶ月前だもの。当然じゃない」

「え！？ それって、俺たちと会ったのほとんど同じじゃ……」

……もしかしくなくても、後輩君たちは俺をそこその冒険者だと思っていたのか……な？

「でも、アカネの冒険者としての力量は高いはずよ。聞いただろう

けど、海を渡ってきたらしいもの」

「……………」

今までの俺の苦勞がパーだよ！

どこからって聞かれた時はいつも、遠くからってお茶を濁してきたのに！

こんないつかバレそうな嘘をあんまり大勢に広めたくなかったんだよ！

「え！？ほ、ホントですか！？」

「ま、マジかよ！すげえぜ先輩！」

「……アハハハ」

二人の純粹な尊敬の目線で心の汚い俺はもう消えそうだ……。

「何よ、言ってなかったの？というか、その二人とあんたの関係って何よ？先輩とか言ってたけど」

「俺の恩人で今は先輩と後輩の関係ですよ」

「恩人……ねえ。ま、先輩ってんならちゃんと模範になりなさいよ」

「善処します」

模範か、今ん所はそこそやれている自信はある。

でも、メルヴィアとかの方が後輩君にとっては模範にふさわしそうだ。

「それじゃ、新人二人に一から冒険者について説明してあげるわ」

「あ、はいよろしく願います」

……説明中なう

「うう、冒険者免許に期限があるなんて……」

「ちゃんと真面目に仕事してれば、そうそうそんな事にはならないから安心なさい」

「うう、大丈夫かな……私」

期限について聞いてからいきなりトトリちゃんが落ち込み始めた。そういう悩みもちゃんとやるからには付きまとうってことなのかね。

「それで、あなたたちここにはしばらくいるのかしら？」

「あ、いえ。私たちは明日馬車で帰ることになってます」

「俺はどうすっかなー」

アーランドに残ってもいいが、トトリちゃんの手伝いをするという約束もあるから戻ることになるだろうか。

「随分と慌ただしいわね。それで、今日泊まる場所はあるのかしら？」

「あ、そう言えば……どうしよう」

「別に普通に宿屋に泊ればいいだろう？」

「でも、お金もつたいないですし……」

「それじゃあ、コロナのアトリエを使いなさいよ。今はコロナも留守にしていることだし」

「え、先生アーランドにいないんですか？」

「ええ、ここ最近ずっと帰ってきてないわよ。まあ、それはそれとして、はいこれ」

クーデリアさんがトトリちゃんに鍵を手渡した。

「え？なんで、クーデリアさんが先生のアトリエの鍵を？」

「え？ああ、それは、あの子うっかりしてるし……鍵なんて持たせたらすぐに失くしそうで……」

「なるほど……って言ったら失礼かな。でも、本当にいいんですか？」

「ええ、私の家でも良いんだけど、さっきのバカ娘のせいで仕事が残ってるのよ」

「ご愁傷様です」

もしかして、俺が来た日も仕事残ってたりしたのだろうか？
だとしたら申し訳ないな。

「おーい、行くなら早く行こうぜ。明日からまた長い事馬車なんだから、今のうちに休んどかねえと」

「あ、待ってよ。それじゃ、失礼します」

「俺はもうちょっとここに居るから、先に行ってくれ」

後輩君を追いかけてトトリちゃんもギルドの外に出て行った。

残ると言ったが、特にやることはない。

「……やっと、二人きりになれたね」

ボケてみた。

「私仕事があるから、おふざけに付き合ってもらえないんだけど」
「ぶー」

「というか、何かやることがあったんじゃないの？」

「ないっすけど？」

「なら、何で残ったのよ」

「幼馴染二人で知らない街を回らせてやろうっていう気遣いですよ」

結構この町は広いから、アトリエに付くまでいろいろな場所を探検してることだろう。

「ふーん。あんたがそんな気遣いできるなんてねえ」

「意外と紳士なんですよ、俺」

「はいはい。時間潰すにしてもここじゃない場所にしてくれないかしら」

「まあ、俺も行く場所ありますから、この辺で失礼しますよ」

「ちょっと待ちなさいよ」

立ち去ろうとするとクーデリアさんに引きとめられた。

「なんですか？」

「あんた結局、冒険者を真面目にやる気になったのかしら？」

「まあ、後輩もできましたし、一時的な職業にするつもりはないですよ」

「そう、ならいいわ」

「なんで、んなこと聞くんですか？」

「私の親友の弟子の先輩をやる気のないやつに任せてはおけなかったからよ」

「後輩ができたからやる気が出たところもありますけどね」

事実にアランヤ村に行かなかつたら、アーランドで小銭溜めてから普通の職業でも探していただろう。

「心配せずとも、この白藤明音にズビっとお任せですよ」
「不安になるようなこと言わないでくれるかしら」

……失敬な。

貴族と天才科学者

「……あれ？」

俺は宿屋の部屋から暗くなっている外を見ていた。

「寝て起きたら夜になってたでござる」

いや待て待て、何してたんだっけか俺？

確か昨日は、帰りにイクセルさんの所によって、アトリエにベッドがなかったから宿屋探して……。

夜まで筋トレしてから寝て……昼に起きて、また寝た？

「なんだ……二度寝しただけか、通りで腹が減ってるわけだ。仕方ないからもう一回寝るか」

現実逃避って大事だよね。

「ギルドなう」

とりあえずトトリちゃんたちがどうしたのか聞くためにクーデリアさんの下へ。

中に入るといつもの場所にいたので話を聞きに行く。

「クーデリアさん、夜に起きたら夜になってた」

「帰りなさい」

おそらく、これまでで一番いい笑顔で言われた。

「私言ったわよね？親友の弟子を頼むって」

「不可抗力だ。全ての犯人は布団です」

「馬車が出る時にトトリ、寂しそうにしてたわよ」

「うぐっ！」

「来なかった理由が寝てただけなんて、本当にバカだったのね」

一遍たりとも言い返せないのが悔しい。確かにバカだけどさ……。

「うう……村に行く方法って何かないっすかね？」

「あんたがあっちに行った方法で行けばいいんじゃないの？」

「クーデリアさんがそんなに残酷な人だったなんて知らなかった……」

たぶん2回に1回くらいで死ぬと思う。

「人をいきなり貶さないで頂戴。結局どうやったのよ？」

「一昨日教えるって言った手前教えますよ。ええ、教えますとも」

あの異世界ファーストインパクトを……。

………

……

「はーっはっは！あーっはっはっは！わ、笑わせないで頂戴！」
「……………」

あの体験をしたら笑うことなんてできないんだぞ。手には今でも跡が残ってるんだぞ。

「川っ！川に落っちこちて流されるって、そりやもうできないわよね」
「も、もういいでしょう！で、何か村に行く方法なんですか」
「そ、そうね……ぷっ、ま、まあ歩いて、くくっ、歩いて行くしかないんじゃないかしら、あっはっは！」

くそ、俺の気持ちを分かってくれるのは同じ思いをしたぷにだけだよ。

……ぷに？あれ？また行方不明？

「クーデリアさん。ぷに知りませんか？」

「ああ、あの子なら私が預かってるわよ。確かここに……」

クーデリアさんはカウンターの下から布袋を取り出した。

「モンスターここに置いていいんですか？」

「よくないに決まってるでしょう。早く持ち帰って欲しかったわよ」

よく見ると袋はもぞもぞと動いていた。

「ぷにー！」

「あつ！ちよつと！出てきてんじゃないわよ！」

ぷにが袋を食い破って俺の頭に飛び乗ってきた。
この頭の重みにもなれたもんだ。

「ちなみにこの子の名前シロになったんでよろしくお願いしますね」
「はいはい、分かったから早く帰って頂戴。他の冒険者の迷惑になるでしょ」

「へーい」

「ぷーに」

俺がクーデリアさんに背を向けて帰ろうとすると見た顔があった。

「も、モンスター！」

「おお、なんだっけ？シュバルツちゃんだっけか？」

目の前には大分きわどい恰好をしたちびっ子がいた。

「違うわよ！シュヴァルツラングよ！ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラング！」

「そうだったか？俺はアカネだ。で、何のようだよ」

「そのモンスターよ！なんでここにそんなものがあるのよ！」

「こいつは俺の相棒だよ。名前はシロ。3ジーノくらいの戦闘力を持っている」

「ぷにぷに！」

「後半意味が分からないわよ……。それにしてもモンスターが相棒……野蛮ね」

「んだと！俺のぷにはそのへんの奴よりもよっぽど頭が良いんだぞ！」

「ぷに！ぷに！」

「へえ、例えばなにかしら？」

乗ってきおったな小娘め。

俺のぷにの優秀さ。とくと味わうがいい！

「一つ、前に依頼書を紛失したと思ったら、ぷにがまとめてくれた」

あの時はぷにの整頓能力の高さに驚いた。

「一つ、依頼の報告をしてきてくれた」

あの時はコミュニケーション能力が意外に高い事に驚いた。

「一つ、大抵のモンスターは全て一撃で倒してくれる」

これはもはや口にするまでもない。

「……どうだ。わかったか？」

「あなたの冒険者としての能力の低さなら分かったわ」

「……あれ？」

言われて気づいたけど、俺いらなくね？

「ともかく！ぷにの性能の高さに恐れ入っただろう？」

「それが本当ならその辺のモンスターとは違うみたいね。あなたもその辺の冒険者と違うみたいだけど」

「お、俺だってちゃんと仕事はしてるんだぞ！」

「はいはい。で、もういいかしら？ 私は今日、冒険者の免許を取りに来たのだけれど」

「いつか、俺の力を見せつけてやる……」

恨み言を言いつつ退散し始める俺であった。

「ちょっと待ちなさい」

「あんだよく。傷口に塩を塗りこもってか」

どんだけSなんだよ。将来が心配だよ。

「そこまで暇じゃないわよ。あの錬金術士の子がどこにいるか知らないかしら？」

「トトリちゃんか？ 今ならたぶん馬車で帰ってるところだと思うが……」

「どこ行きの馬車なのよ？」

「東にあるムウだっけかな」

なんか怪しいので適当なことを吹きこんでおく。

「聞いたことないわね……。それじゃ、もういいわよ」

そう言うとかウンターの方に歩いて行った。

「……彼女がムウ大陸を発見することを祈るか」

「ぶに？」

彼女が優秀な冒険者になれば見つけれられるかもしれない。

「とりあえず、どうにかして村に戻らないとな」
「ぷに」

決して、ムウ大陸ではないので悪しからず。
今俺たちは宿屋の方に戻っている所だ。

「君、ちよつとその君」
「あん？」

いきなり後ろから話しかけられたので、とりあえず振り返ってみた。

「……怪しい」

そこには白衣でメガネ、いかにも科学者な見た目の男がいた。

「確かに怪しいけどね。まあ、そんなことよりだ。君ずいぶんと面白いものを飼ってるね」

「あん？ いや、こいつはシロ。ペットじゃなくて俺の相棒だよ」
「ぷに」

「相棒！ ほうほう、モンスターを相棒にするなんて、君はなかなかユニークな感性を持っているね」

「テンション高いなこの科学者もどき……」

「科学者もどきじゃない！ 僕はマーク・マクブライン。人は僕を異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインと呼ぶ！」

「……………」

こいつは……自称臭がぷんぷんするぜ。

「えっと。マークさん……で、いいのか？」

こいつには何というか、さん付けはしても敬語は使いたくないな……。

「違う！ 異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインだ！」

「……オーケー」

俺は大きく息を吸いこむ

「異能の天才科学者プロフェッサー・マクブライン！……だな」

「ああ、そうだね。ところで、君は何て言うんだい？」

「……俺か」

ここは、俺も一発凄いのをかまして、噛ませてやる。

「俺はアカネ。人は俺を全能の天才科学者プロフェッサー・アクネインと呼ぶ！」

「思いつかないのなら、無理にする必要はないと思うけどね」

「そうね」

流石にあの一瞬で思いつくなんて無理ですよね。

「で？ 結局何のようなんだ？」

「いや、君が面白い恰好でおもしろいモノを連れていたんで興味が

わいたのさ」

「興味ねえ、つか科学者なんていたんだな」

「嘆かわしいことにほとんどは自称だけどね」

「そういう機械ってどうやって作ってるんだ？結構あっちこちで見
るけど」

レジとかも普通に機械だったりするし。

「機械は全て掘り起こされたものを使ってるだけだよ。ほとんどの
人はその仕組みを知ろうとはしないね」

掘り起こされた……ロストテクノロジーってやつか？

「ふうむ。結構耳に痛いな。俺のいたところも似たようなものだっ
たし」

「おや？君はアーランド出身じゃないのかい？」

「海の方こうからえんやこら、俺のいたところはここよりも科学は
発達してたな」

「ほほう！それはそれは、面白い話を聞けそうだ」

「聞かない？そうだな……俺の世界にはガンダムという……」

………

……

「というわけで、人類の宇宙の戦争は終わりました。めでたしめで
たし」

「……ふむ。実に興味深い！」

「えっ、マジで」

正直いつ嘘だろとか言われるのかと待ってたんだけど。

「いや、創作だぜこれ。フィクションだよ」

「そのくらい途中で気付いたさ、でもロボットの可能性の一端を見た気がするよ。感謝しよう」

「う、うむ。どういたしまして？」

「ああ、お礼と行っては何だけど何かできることがあるならしようじゃないか」

「お礼ねえ……」

からかってやろうとした手前、気が引けるが、断るのは失礼に値するのはよく分かっているつもりだ。

「んじゃ、自転車作ってくれよ自転車」

アランヤ村に歩いて行くよりはマシなはずだ。

「自転車？なんだい、それは？」

「あー、こんなんだよ。ここに人が乗ってな」

俺は道端に座り込んで、適当な石で絵を描いた。

「ほほう、なるほど。うん。理解したよ」

「えっ、これでわかったのか!？」

下手ではないにしてもそこまで分かりやすすくないぞ、この絵。

「言ったはずだよ。異能の天才科学者の名は伊達じゃないというとき。しかし、面白い乗り物だ。僕のインスピレーションを刺激してくるね」

「頼もしいお言葉で」

「よし、すぐにラボに戻って作成するでしょう。1週間後にギルドで待っているよ」

そう言うと、早足で駆け出して行った

「ああいう人種の人もいるんだな、この世界」
「ぷに」

今回ぷに、空気だったな。

「しかし、自転車を本当に作ってくれたら、使える場所は限られるだろうけどいろいろと楽になるな」

「ぷに？」

「見事な完成品をマークさんが作ってくれたら見せてやるさ」
「ぷに！」

一週間後が楽しみだ。

最高の発明品

「よし、いくぞ、ぷに」

「ぷに！」

俺は今マークさんに作ってもらった木製の自転車に乗っていた。マークさん曰く試運転だそうだ。

「スピードキングは俺のものだ！」

俺は立ちこぎをして、加速をつけた。

車輪が木製なので、そこまでのスピードは出ないが、鍛えられた脚力により自転車はスピードを上げていった。

「サラマンダーよりはやーい！」

「ぷに！」

どうやらぷにもご満悦のようだ。

「よし。さらに加速だ。立ちこぎシステムオン！」

ベキッ！

「ぐべら！」

俺がペダルに力を入れた途端にバランスが崩れ、横に倒れてしまった。

ぷにはちゃっかり離脱していた。

「い、いったい何があったんだ……」

「どうやら、課題は強度にあるようだね」

俺がよろよろと立ち上がると、マークさんが自転車をいじっていた。

「……強度？」

「ああ、君の脚力が想定をはるかに上回っていてね。見事に折れてしまったよ」

見てみると、ペダルの部分が根元からバキッと折れていた。

「それにまさか立ってこぐとは思っていなかったからね」

「ああ、なるほど」

マークさんがいくら天才とはいえ、使用法は使用者しだいになるものな。

「まあ、本当に作れるとは思ってなかったんでかまわないですよ」

一時とはいえ昔の風を感じられて、俺は満足だ。

「？ 何を言ってるんだい？」

「へ？」

「欠点がわかったんだ。そこを改良しない科学者は科学者とは呼べないよ」

「ってことは？」

「次の試作品ができたら、また君に頼むとするよ」

「おお！流石は異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインですよ！」

「なに、科学者として当然のことさ。完成したら君の宿屋まで呼びに行くとするよ」

そう言うと、自転車を持ってマークさんは立ち去って行った。

「あの人ならいつか本当にロボットを作れるかもな……」

「ぶに？」

……一週間後

「木製とは違うのだよ木製とは！」

見事に鉄製となった自転車に乗って俺は風となっていた。

「ただ、車輪だけ木製っていうのは……」

正直言ってダサイ。

強度は上がったが、スピード自体は変わらないのだ。

「……よつと」

俺は自転車を止めて地面に降りた。

「結構、いいんじゃないか？」

「いや、まだだ。君の表情を見るにこれはもっとスピードを出せるはずだ」

「まあ、確かにそうだけど……流石に無理だつて」

改良できる点なんてタイヤぐらいしかない。

流石にこの世界にゴムがあるとは思えないしな。

「やる前にあきらめては発展はありえないよ。そのために次の試作品のために君に材料を取ってきてほしいんだ」

「まあ、ここまで来たら付き合うさ」

「それでは、弾む石を集めてきてくれたまえよ」

「あの不思議鉱物か、何の役に立つんだ？」

あれは言うなら異常に固いスーパーボールみたいなもんだ。

「そこを言っではつまらないじゃないか」

「わかったよ……採ったら、持っていくからな」

「ああ、早めに頼むよ」

……1週間後

「……よく考えたら、トトリちゃんたちもう着いてんじゃない？」
「ふに」

……そのまた一週間後

「……すばらしい」
「……ぷに」

今俺が乗っている自転車のタイヤは木製なのにまるで空気入りタイヤのようだ。
それにタイヤも黒く塗装されて大分カッコいい。

「異能の天才科学者プロフェッサー・マクブライン！あんたやっぱり天才だ！」

「すばらしい速度だ！流石は僕の発明品」

俺は自転車から降りたって、マークさんを絶賛した。

「でも、なんであの石でこんなに進化したんだ？」
「それはだね。あの石を加工して車輪の表面に塗装したのさ」

それで現代のタイヤみたいになったってことか？
……マークさんはとんでもない物を作ってしまったのではなからう

か。

「本当にこれ貰っちゃっていいのか？」

「かまわないよ。設計図はあるし、何よりそういう約束だからね」

第一印象は変な人だったのに、こんなに良い人だったとは。

「お礼のお礼ってわけじゃないが、必要なものがあつたら俺に頼んでくれてかまわないぞ」

「ふむ。君は結構義理堅い人間のようにだね。それでは遠慮せずに必要なものがあつたら頼むとするよ」

そして、俺たちは互いに握手を交わした。

年は離れているがこの世界に来てから初めて男の友人ができた。

何気に嬉しかったりする。

最高の発明品（後書き）

マークEDを見た後だとこれくらいのは簡単に作れるだろうなと思っ
た。

反省はしてない

ドキッ！騎士なあのは転校生

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

「ぷに~~~~♪ぷに~~~~♪」

俺とぷには上機嫌でアランヤ村へと自転車に乗って向かっていた。

自転車の完成後に、クーデリアさんやイクセルさんに挨拶して出発して今に至る。

おいてきぼり状態から一ヶ月、自転車を手に入れてやっと帰ることができる。

「長かった……」

「ぷに♪ぷにに♪ぷにに♪」

「いつになく上機嫌だな」

「ぷに！」

それもマークさんが気を利かせて付けてくれたぷに用のカゴのおかげだろう。

俺が支度をしている間に付けてくれていたのだ。

「今度なんかお礼でもするか？」

「ぷに！」

どうやら賛成らしいな。

しかし、ペーターがぷにを置いてってくれて本当に助かった。

ぷにいなかったら、いろいろと退屈すぎる。

「あゝ、なんか面白いもんでもないかねゝ」

「ぷにゝ」

折角いろいろ見ながら帰れるんだ。

ぷにがいれば大抵のことは大丈夫だから、寄り道して行ってもいいかもしれない。

「……………ん？」

なんか前方の方から人が歩いてきてる。こんな所にいるってことは同じ冒険者かね？

「……………」

減速して、目を凝らしてみると前にこちらへんで会った。あの山賊だか騎士だかの人だった。

「…………ぷに、あの人俺の中の怪しい人ランキング二位の人なんだけど」

「ぷに？」

一位はコロナ先生とやらだ。あの人は話だけ聞くとものすごい怪しい。

まあ、そんなことは置いといてだ。地味に距離が近づいてきてる。しかもなんか俺の事を凝視してる……何で？

「無視するべきか、こないだのお礼をするべきか」

俺的には後者がいいんだが、前者も無難といえは無難だ。

「ぷに。お前、1と2のどっちが好きだ？」

「ぷにぷにぷに」

3ぷにか……これはぷにの俺に対するネタフリと思っているのだから。

「オーケー。面白ことかましてやんよ」

「ぷに！」

「クックック」

そうこいうしているうちに大分近づいてきた。

オペレーションテンコウセイを開始する！

「遅刻、遅刻〜！一ヶ月前の馬車に乗り遅れちゃった〜」
「なっ!？」

そして俺は自転車で騎士の人にぶつかって横転した。

「痛った〜い。どこ見て歩いてんのよ」

急いでた私は、ちょっと目つきの悪い男とぶつかった☆

「ぶつかってきたのは君の方だろう！第一その妙な乗り物は何だ！」

「ちょ、ちょっとどこみてんのよ！」

騎士の人は私の大事なもの（自転車）を見ていたの。いやらしい！

「話を聞け！それに、その喋り方をやめたまえ！」

「い、いままで誰にも見せたこと無かったのに！」

「……………」

騎士の人のコメカミに青筋が立っているのが見えた。

おお、こわいこわい。

「い、いっけなーい！もう、こんな時間！急がないと！」

俺は急いで、自転車を起して立ち去った。

「な！？ま、待ちたまえ！」

ふっ、人間の脚力でこの俺の愛車に勝てるはずがなろう。

さらばだ。もう一度あったら、「あー、あの時の！」って言ってやるさ。

「グッバイ！」

「ふにー！」

ドコッ！

ぷにが前のカゴから俺の顔に突っ込んでき、バランスが取れずにまとも横転してしまった。

「……お気に召しませんでしたか」

「ぷに！」

そういや、このネタは俺の世界でしか通用しないもんな。

「ふう、俺が浅はかだったってことか……というわけで、俺を睨みつけるのやめていただけないでしょうか？」

座り込んでいる俺は騎士の人に見降ろされて睨みつけられていた。何気に片手で腰に刺さった剣の柄を持っている……。

「君は数秒前の自分のした事さえ覚えていないのかね？」

「人にぶつかって逃げました。自分がやられてたら許さない」

「ならば、すべきことはわかっていないのかね」

「……うう」

今回ばかりは調子に乗りすぎた俺が悪いということもあるので、素直に土下座の体勢を取った。

「申し訳ございません」

「何故あのようなことをしたのかね」

「俺の相棒であるぷにが、何か面白い事をしろとのお達しだったの
で」

「相棒のぷに？」

そう言うのと騎士の人は倒れた自転車の上に乗っていたぷにを見た。

「もしかして君はアカネという名前ではないかね？」

「……有名すぎるのが仇になった」

自慢ではないが俺はぷにを連れまわしてたおかげで有名人となっていたのだ。

このことで名前を知られることになるなんて……。

「やはりそうか、クーデリア君から話は聞いている」

「クーデリアさんから？」

「ああ、すぐ調子に乗って人をからかうとな。まさか、初対面で実感することになるとはな」

「……クーデリアさん」

こいつは不当な評価だ。今度あったら訂正させてもらう。

……しかし、そろそろ足がしびれてきて、きつい。

「そろそろ許してくれたりは……」

俺が様子をうかがうと、仕方ないと言うかのようにため息をつかれた。

「反省はしているようだな。次はこの程度では済まないと思っておけ」

「本当に申し訳ありません」

俺はうなだれつつ立ちあがった。

「それじゃ、急いでるんで失礼します。この埋め合わせはいつかしますんで……」

「いろいろ聞きたいこともあるが……まあ、いずれ会うだろう」

そう言うのと、騎士の人はアーランドの方向に歩を進めていった。

「……目つきは怖いけど意外とやさしい人なのかね？」

「ぶに」

「反省してるって、さすがにやりすぎた」

最近マークさん以外とかかわりがなかったので、加減を間違えてしまった。

「結局名前聞き忘れたな……」

自己紹介をする空気じゃなかったしな。

まあ、あの人も言ってた通りその内また会うか……。

「よし！気分一新！アランヤ村へ向かうぞ！」

「ぶに！」

過去の事なんて振り返らずにゴーゴーだ！

……あれから一週間が経った。

あの時の元気が懐かしいほどに俺は憔悴していた。

「……うう、いきなり夕立が降るなんて……」

そろそろ今日の拠点でも決めようかと思ってた矢先に降られたのだ。

「はあ、足もパンパンで痛いし……」

ぷにが寝てて独り言状態になってるし。

雨から庇ってやった俺の身にもなってくれよ……。

「早く村に着いてほしい……」

所詮馬車なんて時速が速くて十数kmやそこらだ。俺の筋力でこぐ速さに適うはずがない。

そこらか考えるに、あと一週間弱ぐらいで着くはずだ。

「……だるい」

……五日後

「着いた」

夕方頃にやっとアランヤ村に到着した。

「やどやゝやどやゝ」

挨拶は明日にしよう。とりあえず今はベッドで思いっきり寝たい。

その後俺は宿屋で爆睡した。

宿屋の主人にお前の部屋は開けてあるって言われた時は惚れそうになったわ。

……今日ばかりはオチがなくてよかった。

メンタルブレイク

「よく考えてみるとトトリちゃんいるのかね？」

昼ごろに宿屋を出て、俺たちはトトリちゃんの家に向かっていった。ただ、今やトトリちゃんも冒険者だ。いつもいつも家にいるとは限らない。

「よし。方針変更、ゲラルドさんの店に行くぞ」
「ふに」

そこから数分程度歩いて俺たちはゲラルドさんの店に着いた。

「ゲラルドさんの店も久しぶりだな」
「ふにに」

懐かしみつつも俺は店の扉を開けたのだが……。

「いらっしやいませー」
「ん？」

記憶と違い迎え入れたのは、いつものゲラルドさんの声ではなかった。

「あれ？ ツェツイさん？」

何故かレジの所にツェツイさんがいた。

「あら、アカネくんにもシロちゃんじゃない。2ヶ月ぶりくらいかしら。いつの間に帰ってきてたの？」

「ああ、つい昨日だけど……何してるんだ？」

「？ 何って何かしら？」

「いや、何でゲラルドさんの店のカウンターの中にいるのかってことだよ」

「ああ、そういうこと。私一ヶ月くらい前からここで働くようになったの」

「なるほどね。まあ、いいんじゃないか」

主にゲラルドさんの店の客寄せ的な意味で。

「それはそうと、今トトリちゃん家にいるか？」

「ええ、いるわよ。ちょうど昨日帰ってきたところなの」

「良いタイミングだったってことか、んじゃ挨拶してくるわ」

「ええ、トトリちゃんも喜ぶと思うわ」

だと良いんだけどな……。

俺が悪いとはいえ、何も言わずにアーランドに残ったからな……さすがに怒ってそうだ。

善は急げと言うので、俺はそそくさと店を後にしてトトリちゃんの家に向かった。

さて、アトリエの前まで来たはいいが……。

「何と言って謝ろうか？」

「ぷに」

「寝坊しちゃってと正直に言うのがいいでしょうか、ぷに先生」

「ぷに！」

「アーランドで重大な仕事があったと嘘をついてもいいでしょうか？」

「ぷに」

ふるふると体を震わせた。

正直が一番か、いやしかし……。

「うゝん」

「ちょっと、あんた。邪魔なんだけど」

俺が扉の前で頭を悩ませていると、背後から聞いたことがあるような声が聞こえた。

「よう、シュバルツラングちゃん。ここはアランヤ村でムウ大陸じゃないぜ」

振り返りつつ、俺は現在地の修正をしてあげた。

想像通りそこいいいたのは赤いマントを着た貴族さまだった。

「なっ！あんた！」

俺の顔を見ると親の仇を見るかのような眼で睨まれた。

「よくもあの時は適当なこと言ってくれたわね！何がムウよ！余計な時間使わせて！」

「まあ待て、一つ教えてやる」

「何よ！」

「俺の言ったことを信じたのが悪い」

「……………」

そう言うとは今度はジト目で俺のことを睨んできた。

まあでも、あの時点での俺の言うことを信じる方が悪いと思うんですよ。ええ。

「……もういいわ。よく考えてみれば、あんたみたいなのに構うほうがばからしいじゃない」

「だがお前はこれから俺に嫌でも構わなければいけなくなるぜ」

「は？何でいまさらあんたなんか……」

「クッククク。位置関係をよく考えてみることだ」

俺がアトリエの扉の前、シュヴァルツラングちゃんが俺の目の前。

「そう。俺がここを退かなければ、ここには入れないのさ！」

今から何をするか考えると胸が躍るな。

「……………バカだとは思ってたけど、ここまでとはね」

「なんだと？」

「一生そこに突っ立ってればいいんじゃないの」

そう言い捨てると、彼女は隣にある扉。リビングに入る方の扉を開けて家に入った。

「……………」

「ぷに」

ぷにが慰めるように俺の頭で跳ねている。

「まだだ!」

俺は閃光の様なひらめきと共にアトリエの扉を開けた。

「邪魔するぞ!」

「はい、ってアカネさん!?!」

驚くトトリちゃんを尻目に俺はアトリエに通じるもう一つの扉を抑えた。

「策は成った。俺の天才的な頭脳を甘く見るからこうなるのさ」

すぐにでもこの扉の前に彼女が来て、「開けてください。アカネさん」と言うことになる。

「あのゝ。アカネさん?」

「クックック」

さあ、来い。すぐに来い。カムヒア!

ガチャ

「トトリ。来たわよ」

「あ、ミミちゃん」

「……え？」

何故か彼女は外から通じる扉から入ってきた。
彼女は俺のことを目で笑っていやがった。

「なんというか、ここまでバカだと可哀相になってくるわね」

「……なんだ。双子か」

俺はもう一人が来るのを扉の前で待った。

「え、ミミちゃん双子だったの？」

「違うわよ。そんなバカのことなんて放っておきなさい」

「……うう」

俺はよろよろとソファに座りこもうとした。

「邪魔よ」

「んにゃ!？」

座ろうとするとところを阻まれて、彼女がそこに座って本を読み始めた。

「……トトリちゃん」

俺はよろよろとトトリちゃんの方に歩く。

「あ、アカネさん。大丈夫ですか？」

「大分精神的ダメージがやばい」

こんな年下にいいようにされるなんて……。

「あとトトリちゃんごめん。あの日はただの寝坊だから」

「えっ！そ、そうだったんですか！」

プライドを打ち壊された俺にこの程度のこと打ち明けるのは造作もないわ。

「それはそうと、アカネさんってミミちゃんと知り合いなんですか？」

「微妙なラインだな。トトリちゃんこそ、どういう関係なんだ？」

確か免許を取りに来た時に大分険悪になってたような。

「ミミちゃんは、冒険のお手伝いをしてもらってるお友達なんです」

「ぶっ！！な、何言ってるのよ！べ、別にあんたなんか友達じゃないわよ！」

ミミちゃんが本から顔をあげて、大声で何気にひどい事を言ってきた。

「え、私友達じゃないの……？」

「うっ、そ、そうよ。あんたが錬金術師だから、仕方なく付き合ってるだけで……」

これはツンデレなのか本当なのか、いまいち判断がつかない。

「じゃなかったら、貴族である私が下賤な田舎者であるあんたなんかと……」

「ても、私別に錬金術師としてミミちゃんの役に立ってないよ？」

「う、それは……立ってるわよ！そういうことにおきなさい！」

「ツンデレ一丁入りました〜！」

「あ、あんた！何言ってるのよ！」

立ちあがって俺に食ってかかるミミちゃん。

しまった！あまりにも分かりやすかったものだから、つい口に出ちゃった。故意じゃないよ。

せつかなので、先ほどの復讐としてミミちゃんの耳元で囁いた。

「本当は仲良くなりたいけど、貴族のプライドがそれを許さないの〜」

「だ、黙りなさい！な、何を言って、——っ！もう帰るわ！」

そう言うどんと扉を閉めてミミちゃんは出て行った。

「俺の勝ちだ！ふん。最後に笑うのはこの俺よ」

「アカネさん！ミミちゃん怒っちゃったじゃないですか！」

「まあ、そういうこともある」

「もう！折角ミミちゃんと仲良くなれると思ったのに……。アカネさんも、もう帰ってください！」

「……………え？」

「そんなんだから、ミミちゃんにバカなんて言われるんですよ」
「……………」

ボタン

「……………」

「ぷに」

先ほどと同じようにぷにが俺のことを慰めてくれるが、さっきとは
比じゃないダメージを負ってしまった。

「……………」

「ぷに、ぷに」

俺、今日ここに何しに来たんだっけか？
そもそも何でアランヤ村に帰ってきたの？

「ハハッ、ワロス」

「ぷに」

女の子に優しくしなかった結果がこれだよ。

こういう冒険の楽しさも

「くらえや！ゴーストパワーの右ストレート！」

俺はゴースト手袋付きのパンチをペンギンモンスターに向かって振り下ろして倒した。

今日俺はトトリちゃんとミミちゃんの二人と一緒に海岸の方に冒険に出ている。

ミミちゃんとはトトリちゃんの仲介で仲直りしたのだが……

『あんたってトトリの役に立ってるの？』などと言われたので、今日俺はぷにを置いて冒険にきたのだ。

ついでに言うと、アーランドに戻ってから俺が仕事している描写がない気がする。実際にはバリバリ働いているんだぜ。

「どうよ、俺のパンチの威力は？」

1体残して俺は後ろに飛んで距離を取った。

「威力はあるみたいだけど無骨ね。私がお手本を見せてあげるわ」

そう言うともミミちゃんは残りの一体に向けて飛び出した。

「ハッ！」

流れるように横に薙がれた槍でペンギンは切り裂かれた。

「どうかしら？」

「ああ、なんつか、あれだな。技って感じだな」

よく分からなかったが、力任せではなく重心や遠心力を利用した俗に言う匠の技と表現できるものだった。

対して俺は力だな。熟練の技じゃなくてイカサマ手袋でドーピングしてるし。

「うん。ミミちゃんはやっぱりすごいね！」

「と、当然でしょ。私がこの程度の相手に苦戦するはずないでしょ」

「今回ばかりは素直に褒めとくわ。うん、見直した」

「……あんたに褒められると素直に喜べないわね」

マジで複雑な表情をされた。俺の評価が相変わらず微妙すぎる。

「少しは見直してくれよ。俺は今日ぶにを連れてない素の状態だぞ」

主に手袋以外は、呪いのアイテムだけどころかなり使えるんですよこの手袋。

なんつったて、装備して生命力的なものを奪われるたびに強くなっ
ていくんですもん。

「弱くないのはわかったけど……あんた大丈夫なの？」

「わっ！アカネさん顔が青いですよ！？」

「大丈夫、大丈夫。一晚寝れば治るから」

奪われているのは主にHP的な何かだからセーフ。寿命だったらす
がに使えない。

「全然攻撃くらってないのに、なんでそんなに弱ってるのよ……」

「そういえばアカネさんって打たれ弱かったですもんね」

「前よりは改善されてるよ。こっち来てから戦いが多くてな」

まあ、原因はそこだけじゃないけど。

「そういえば、アカネさんのいた所ってモンスターいないんですか？」

「いないいない。とっても平和」

こっちの方がいろいろと退屈しなくて楽しいけどね。

「何？あんたアーランドの出身じゃないの？というかモンスターのいない所なんてあるのかしら？」

「それがねミミちゃん。アカネさんはね、海を渡ってこっちに来たんだよ！」

「……は？」

トトリちゃんの言葉でポカンとした顔になった。

「こ、こんなのが？う、嘘でしょ？」

「ホントだよ。そうですよねアカネさん」

「ホント、ホントだよ」

海を渡った除けばね。正直この展開はもう飽きたぜ。

「変な恰好してると思ったらそういうことだったのね」

「ういうい。まあ、話はこれぐらいにしてそろそろ行こうや」

「あ、そうですね。モンスターがいない内に材料取っちゃわないと」

そう言い、材料が取れる場所にトトリちゃんは向かった。

「んじゃ俺は休むとするかね。砂浜だと周りの警戒しなくていいから楽だわ」

「気楽なものね。まあ、休めるうちに休んでおきましょ」

俺とミミちゃんは砂浜に腰を下ろした。

「……………」

「……………」

「そいや、ミミちゃんは何で冒険者になったんだ？」

なんとなく寂しかったのでミミちゃんと会話をすることにした。

「は？何よいきなり、それに何であんたまでその呼び方を……………」

「まあまあ良いじゃないか。これはあれだ。世間話。で、なんでだ？」

「あんたに言う義理はないわよ」

「んじゃ、子供の頃の話とか」

「余計に要求が高くなってるじゃないの」

「将来の夢」

「却下」

「ぶー、だったら何が良いんだよ」

「あんたと話すほど仲が良い覚えはないのだけれど」

どうやら、ミミちゃんと会話コマンドを実行するには好感度が必要らしい。

「んじゃ、ミミちゃんから俺に聞きたいこととか」

「別になんだけど」

「何かあるだろ。海に向こうはどうなってるの?とか」

聞かれたら聞かれたで、表現を濁しながら会話することになって疲れるけど。

「……そうね。それじゃ、一つ聞いてもいいかしら」

「なんなりとどうぞ」

「あんた海に向こうから来たらしいけど、何か目的があったの?」

おお、やっとこの質問をしてくる人が……。

みんな何故かこれについては聞いてこなかったんだもんな。

「一言で言うなら、事故だ」

「事故?」

「そう、俺の意思でこっちに来たわけじゃない」

「……どうやったら、事故で海を渡ってこれるのよ」

「うむ。そこは気にするな。とりあえず一つ言えることとしては目的はないってことだ」

「あんたから話したいって言ったのに訳分らない事言わないで頂戴」

「だってねえ」

いまだにこっちに来た理由が解明されてないんだもんな。

時空転移の古代装置みたいな物もなかったし、ありそうにないし。

「俺がここにいる。それだけで十分だろ?」

「何でも聞いてこいって言ったのに、何よそれ」

さつきからミミちゃんはうなだれてばかりだ。
微妙に答えづらい質問だったからな、仕方ない。

「オーケー、次は真面目に答えてやんよ」

何でもこいと、俺は親指で自分を指す。

「仕方ないわね」

そう言い、ミミちゃんは少し考え込んでから言った。

「……家族は、どうしてるのかしら」

「家族？まあ、元気でやってるんじゃないか？俺が居なくなったら弟と妹がいるし」

良い親と良い兄弟だったが、こっちに来てからあまり考えることがなかったな。

「寂しかったりしなかったのかしら」

「うーん。寂しがる余裕がなかったと言うべきだな。初めは働かなければ金がない状態だったし」

「そうなの。それじゃあ家族の方はどうかしら？」

「あゝ。うん元気でやってるんじゃないか？」

原因不明の行方不明とかになってたりするのかな。
もしかして帰ったらオレって一躍有名人じゃね！？

『行方不明の高校生数年ぶりに発見』

こんな感じのタイトルでワイドショーに出ちゃったりとか！？

「ありだな」

「なにがよ」

流れるようなツッコミに若干感動した。
しかし、今の俺の思考って……。

「俺は意外と薄情な人間なのかもしれない」

「家族置いて出てくなんて薄情以外の何物でもないと思うのだけれど？」

「おっしゃる通りで、いつか帰りたいもんだね」

「そういえば、船とかはどうしたのかしら？」

「ブローケン。壊された」

もともと無い物を壊すのは骨が折れそうだけだな。

「そうなの」

そう言うのとミミちゃんは少し暗い顔になった。

「まあまあ！おかげで俺はかわいい女の子たちと知り合えたわけだけどね！」

主にツェツイさんとかパメラさんとか。

「……少しでも同情した私がバカだったわ」

「少しでも同情されたことに驚愕した」

これは俺に対する好感度が少しは上がったと思っていいのだろうか。

「……はあ、結局あんたはあんたってことね」

「どういう意味だよ？」

「第一印象通りってこと」

「その第一印象を聞きたい……と言いたところだが聞かない方が良さそうだな」

主に俺の精神的な意味で。

絶対ダメ人間とかその類のものだろ。流石にわかつちゃうわ。

「お待たせしました」

その後もそこそ会話しているとトトリちゃんが採取を終わって戻ってきた。

「うむ。お疲れ様。良い材料は手に入ったか？」

「はい！たくさんありましたから」

何を採っていたかはわからないが、良いものが入ったなら良かった。

「……………」

「なによ？」

「なんだいな？」

トトリちゃんが俺とミミちゃんの顔を交互に見ていた。

「二人とも、仲良くなったんですか？」

トトリちゃんが嬉しそうな笑顔で良い事を言ってきた。

「もちろんさ。二人は仲良しだよな！」

「何言ってるのよ」

俺のハイテンションも凍りつくほどの冷たい反応だった。

「まあ、裏表のない奴ってことはわかったわね」

「遠回しにバカって言ってるのか？ それ」

「気のせいよ」

そんな俺とミミちゃんのやり取りをトトリちゃんは笑顔で見ていた。

そのトトリちゃんの笑顔を見て思った。

「うん。ありだな」

「ありね。……これでいいのかしら？」

「よろしい」

ミミちゃんと少しだけ仲良くなれた。

お姉さんと真面目な空気

「うーむ、家族か……」

俺はゲラルドさんの店で座り込んで、数日前の冒険でミニちゃんに聞かれたことを考えていた。

「言われなきゃ気づかないって時点で親不孝だよな」
「ぷに」

テーブルに乗っているぷにが、まったくだと言うように頷いた。

「ぷには家族いたりすんのか？」
「ぷにぷに」

ぷにが体を横に振った。どうやらないようだ。

「そっか。しかし、どうしてんのかね」

俺が考え込んでいると後ろから声がかかった。

「何悩んでんのよ？」

「家族について」

声の主はメルヴィアだが、こいつに悩みを言うってのは正解なのだろうか。

「あら、ホームシックかしら？」

「違う。俺だって人並みにそういうことで悩むってだけだ」

「ぶにに」

ぶにがつい最近まで忘れてただろと言うようにツツコミを入れてきた。

「あれ？そいや、メルヴィアって俺の出身知ってたっけ？」

こっちに戻ってくるまでは、なるべくこの設定隠してたから言っていなかった気がする。

ん？今はもういいのさ。交友がある人には大体知られちゃったし。

「ええ、トトリから聞いたわ。未だに信じられないけどね」

「失敬な」

「トトリはあんたのこと、そこまで強くないけど凄い冒険者って思ってるみたいけど……」

トトリちゃんが俺のことをどう考えているのかがやっとわかった。

「うむ。これからは一層良い冒険者として働くとするか」

「話を遮らないでよ。私にはね、あんたが海を渡ってきたってことが信じられないのよ」

「……………」

どうしたもんかね。ミミちゃんに言ったような誤魔化しが通じそうにない。

何というか、やたらと真剣な空気を感じる。

航海に何か思い入れがあるのか、単純に俺の能力を考えてのことか……。

「待て待て。どうしてそんなに疑うんだよ。今更、俺の出身なんてどうでもいいだろ？」

自惚れかもしれないが、出身うんぬんとかで仲違いするような関係ではないと思っている。

「確かにそうだけど。でも、トトリにだけはそういう嘘についてほしくないのよ」

「そういう嘘ってなんだよ？」

「海を渡ってきたってことよ。結局のところどうなのよ？」

海を渡ってきたことか……確かに嘘だ。

そして、付き合いはそんなに長くないがメルヴィアが珍しく、いや初めてこんな真面目に語ってきているんだ。

どうするかね。疑ってるだけだし、違うって言えばそれはそれで良いけど、何か理由があるのかもしれないし……。

「ふむ。何か理由があったりするのか？」

「ええ。結構大きな、あんたに話せないくらいの」

「……………」

うー、空気が真面目すぎる。

そこまでして、この嘘を突き通す理由は……………あるにはあるか。

トトリちゃんは俺の恩人だから、悲しませるような真似はしたくない。

俺がこの嘘を明かしたら、トトリちゃんはたぶん悲しむだろう。虚構とはいえ、尊敬している冒険者が違う存在になってしまうのだから。

ならだ。よく分からない理由で明かすよりは隠し続ける方がいいと俺は考える訳だ。

「俺は本当に海から来ました。はい！この話終わり！」

「そう。まああんたがそう言うならそうなんでしょうね。……ふう、久々に真面目に話してたら疲れちゃった。ゲラルドさん、何か飲み物！」

メルヴィアが俺のテーブルの椅子に腰を下ろすとゲラルドさんに適當な注文をした。

そういや今日はツェツィさんいないのな。

ゲラルドさんが家は酒場なんだがって言ってるのが聞こえた。今更な気がする。主に客の入りの意味で。

「はあ、俺も久々に真面目にしたから疲れたな」

「あんたはもっと真面目にしてた方がバランスいいと思うけどね」

「ぷに！」

「誰がノリだけの軽い男だって？」

「そこまで言っていないじゃないの」

「まあ、確かに俺のこっちに来た時の軽さは凄まじかったが……」

今でも思い出すな。あの壊れたテンションでぷにを襲ったあの日を。

「ふう」

「何、遠い眼してんのよ……」

「いろいろと懐かしんでるんだよ。あと2ヶ月くらいで半年経つからな」

「やっぱりホームシックじゃない」

「違うわ！」

あれからダラダラと会話すること数十分。

「そーいや、メルヴィアってミミちゃんと会ったのか？」

「会ったわよ。かわいいわよねーあの子」

「まあ、面白い子ではあるけどな」

すぐに怒っちゃうので扱いは難しいけどな。

「トトリとはこれから仲良くしてもらいたいわね」

「まあ年が近い女の子なんてミミちゃんくらいだもんな」

「そうなのよね。年が近い子自体ジーノ坊や意外にいないし」

……そーいや未だに後輩君に会ってないな俺。

「話を変えるが、後輩君に俺まだ会ってないんだが、どこにいるん

だ？」

「あの子ならあんたが帰ってくる日にちょうど冒険に出てったわよ。ちよっと遠出してくるって言ってたから、そろそろ帰ってくるんじゃないかしら」

「んなタイミング良く帰ってこないだろ」

帰ってきたらそろそろ俺はメルヴィアを人外認定するぞ。

「言ったわね。なら賭けましょうか、今日帰ってくるに1000コール」

「いいだろう。今日帰ってこないに2000コール」

「あら、随分自信あるみたいね」

「そりゃ、確率的に考えて俺が有利に決まっ……？」

後ろを振り向くとバーの扉が開かれようとしていた。

「嘘だろ……」

メルヴィアの方に顔を向けると凄いニヤニヤ笑ってる。

そうしている間にも扉は開かれて、今一番見たくない顔が見えた。

「お！先輩だ！久しぶりだなあ！」

「帰れ！帰れ！」

「往生際が悪いわよ」

「後輩君なんか嫌いだ……」

「ぷにぷに」

俺がテーブルに突っ伏すとぷにが伝統の慰め方をしてくれた。

「俺の味方はお前だけだよ……」

「よく分かんないけど、悪いことしたか？」

「気にするな、その人外が悪い」

エスパーだろ。これもうエスパーの領域だろ。

筋肉系エスパー少女とか無敵じゃねえか

「随分な言い草ね」

「後輩君が帰ってくるタイミング当てるとかおかしいだろ」

「？ 当ててるって、俺さっきメル姉とそこで会ったぞ」

「は？」

「あら、もうばれちゃった」

俺はパチパチと瞬きをした。つまりあれか、これは……。

「イ・カ・サ・マ！」

「はい正解。賭けは無しにしてあげるわ」

「当り前じゃー！」

くそっ！この程度の罠にまんまと引っ掛かるなんて、窮地で圧倒的ひらめきなんて起こらないってことかよ！

「メルヴィアって俺のこと嫌いなん？」

再びテーブルに突っ伏す俺となくさめぷに。

「嫌いじゃないわよ。ただ、いじると面白いだけよ」

「後輩君チェンジ、この役割じゃない」

俺は突っ伏したまま腕を上げて手を振った。

「……………」

……あれ？返事がない。

「ジーノ坊やなら依頼の報告しに行ったわよ」

「……後輩君にまで裏切られるとは」

絶望。この気持ちこそがそうなのですね。

「悲しい。メルヴィアの俺の扱いとか後輩君の態度とか諸々悲しい」
「でも、最初に喧嘩売ってきたのってあんたでしょう」
「うっ！いい、痛いところを」

あの日のことを思い出すと腕が疼いてしまう。
主に恐怖や悔しさで。

「もう一回やってみる？」

「勘弁してくれ、やるとしてもあと何年後かだよ」

「根性がないわね」

「あの痛みと悲しみはわかるまい。あれ以来、俺は前よりも筋トレを念入りにやるようになったんだぞ」

「いいことじゃない」

「え？……本当だ」

あれか、負けた悔しみをバネにして頑張るスポーツ選手か、俺は。

「ふん。メルヴィアよ。俺を負かしたこと、いつか後悔するぜ」
「はいはい楽しみにしてるわ」

強者の余裕ってやつか、やたら様になってはいるが。

「さてと、明日も仕事があるし俺はそろそろ帰るわ」

「真面目ね」。まあ、そんなくらいしないとランクも上がらないわよね」

「うむ。トトリちゃんに追い越されでもしたら目も当てられないかな」

「あんたがそう言うのと、ありそうで怖いわね」

うん。俺も今フラグ立てたって思ったわ。

「んじゃ一発なんかオチをお願いしますよメルヴィア先生」

「オチって何よ、オチって」

「要は面白い事言えってことだ」

「……………」

意外に考え込んでいる、こういうのはスパッと言った方が面白いんだがな。

「えっと、アーランドに行ってるトトリとかけましてその間のツエツイとかけます」

落語かよ！つか、こっちの世界に落語ってあるのかよ！

見てて可哀相なので乗ってあげるか……。

「その心は」

「二人とも落ち着かない」

………

「メルヴィア、今度俺がお笑いについて教えてやんよ」
「——っ！」

赤くなっているメルヴィアは若干かわいかった。

「お後がよろしいようで」
「ぷに！」

アーランド行きの冒険

「よし、アーランドに行くぞ」

「ぷに」

「はい」

あれから3ヶ月が経ち10月になった。

俺が来てから7ヶ月、トトリちゃんが冒険者になってから4ヶ月くらいか……。

つい前までは、もうすぐ半年とか言ってたのに、時の流れは本当に早いな。

冒険者の仕事していると1ヶ月がやたらと短く感じてしまうから困る。

まあ、そんなこんなあつて、ポイントが貯まった俺は、アーランドに行くことにしたのだ。

もちろんトトリちゃんも一緒にだ。

移動方法は馬車が直っていないので、俺の自転車を使用する……はずだった。

「先輩？どうしたんだ？」

「何、うなだれてんのよ、先に行くわよ」

主にこの二人のせいで、俺は歩きで行くことになったのだよ。
チッ！無駄に時間かかってしまう。

今度マークさんに車の話でもしてみるか……いや、やめとこう、ガチで作りそうだ。

「はあ、俺を置いてくなよ」

俺はため息をつきつつも、先に行ったちびっ子3人組を追いかけた。

「黄金平野なう」

一週間程度歩いて、俺たちは黄金平野と呼ばれる場所に着いた。

名の通り、小麦が育てられており、他にも果物があつたりヤギがいたりの農場だ。

「わあ、材料になりそうなのがたくさん！」

「……良いのかな」

トトリちゃんは小麦やら、何やらを採っている。

私有の農場じゃないだろうし、良いよね？

俺が3人を眺めていると、ヤギがいる方に向かっていた。

「ヤギさーん、ミルク絞らせて〜。ミミちゃんもやってみる？」

「何で、貴族の私がそんなことしなくちゃいけないのよ」

「んじゃオレオレ、トトリ、俺がやるよ！」

「……元気だなあ」

俺は柵に腰掛けて、休んでいた。

なんというか、あの3人を見てると保護者にでもなった気分になってしまう。

「ばあさんや。子供たち元気だのお」

「ぶに〜」

まったり、まったり。

「んで、ここは……どこかなう」

あれからさらに一週間程度、俺たちは遺跡チックな所に来ていた。ちなみにミミちゃんと後輩君は別行動だ。二人とも冒険者なので、それぞれ埋めるべき地図の道などがあるらしい。

俺は前戻ってくるときにあらかた埋めたので、トトリちゃんのお伴をしている。

「地図には埋もれた遺跡って載ってますよ」

「遺跡、あんまりテンションが上がらん」

何というか、古いものが放置されてるって感じでいまいち遺蹟っぽさがない。

「おや、君は……」

周りを探索していると、聞き覚えのある特徴的な声がした。

「マークさんじゃないか、久しぶりだな」

「違う！ 異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインだ！」

久しぶりにあった俺たちは、前とまったく同じやり取りをした。

「えっと、アカネさんのお知り合いですか？」

トトリちゃんが不思議そうな顔をして尋ねてくる。

「ああ、俺の盟友だな」

「その通り、僕はマーク・マクブライン。人は僕を異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインと呼ぶのさ」

「ぶ、ぷろへっさー、まくぶらいん？」

「違う！ 異能の天才科学者プロフェッサー・マクブラインだ！」

「えっ！ そこからですか！」

トトリちゃんが完全に翻弄されていた。
もはやテンプレだな、このやり取り。

「はい！もう一回！」

「は、はい！いのーのてんさいかがくしゃぷろふつまくぶる…
…うう、言えない」

やっべえ、目の前にものすごくかわいい生き物がいる。

（マークさん！グッジョブ！）

とりあえず、心の中で褒めておいた。

俺がそんなことをしている間にも二人の会話は続いていた。

「ふふ、どうだい。名前だけでもすごそうだろう」

「はい、言えないくらいすごいです…あ、そうだ。私の名前は…
…」

「ああ、続きはまた今度にしよう、あまりゆっくりしてると…」

マークさんが珍しく語尾を濁した、何かあるのか？

「……ん？」

「おや、どうやら追いつかれてしまったようだね」

パタパタと遺跡の影から、角を持ち羽を持ついかにも悪魔らしい奴
らが出てきた。

「何あれ……」

「実はこの遺跡を守っているモンスターに追われていてね。それで
は、失礼するよ」

そう言うのと、走ってどこかに逃げ去ってしまった。
……盟友（笑）

「行け！ぷに！」

「ぷに！」

とりあえず、倒しておこうとぷにに指示を出した。
いつも通り軽く倒してくれるだろう。

「ぷに！？」

「オーマイガー」

ぷには悪魔の一匹に叩き落されてしまった。

「あ、アカネさん！どうするんですか！？」

「まかせろ、逃走経路を割り出すのは得意だ」

「うう、やっぱりー！」

トリちゃんは涙目になりつつ、走って俺の後を付いてきた。

「ふう、ここまで逃げればいいだろう」

「うう、酷い目にあった……」

俺たちが来た道走って戻っている間に奴らは戻って行ったようだ。

「はあ、俺がもうちょい強ければなあ」

主にトトリちゃんに情けないところを見せずに済んだ。少しの割合でぷにを連れてこられた。

「き、気にしないでください。冒険者は強さだけじゃないと思います！」

トトリちゃんのまっすぐなまなざし。

アカネにクリティカルヒット！

「ガハッ！」

「あ、アカネさん！？大丈夫ですか！？」

「オーケーオーケー、持病みたいなもんだ」

「は、はあ？」

トトリちゃんは本当に恐ろしく優しい子やで。

「とりあえず戻るか」

「は、はい。シロちゃん大丈夫かな……」

「大丈夫だって、危ないのは俺だから」

「アカネさんがさっきからよくわかりません……」

そんなに困った顔をしないでくれよ。

単純にこの後、俺がぷにの怒りタックルを食らうってだけだ。

その後戻って、結果として俺はモロに食らった。
最近、打たれ強くなってきた気がするお。

「長い道のりだった」
「ぷに」

大抵のモンスターは、ぷにが倒してくれたから楽だったけどな。

「ジーノ君とミミちゃん、もう来てるかな？」
「あいつらの地図見た感じだと、着くのは最低でも明日辺りになる
と思うぞ」

「そうですか……」
「まあ、先にギルドに行って手続き使用しとこう」
「はい！」

俺たちはギルドに向かって歩き出した。

「今日は場所の変更が多いな」
「？ どういうことですか？」
「こっちの事情です」
「ぷに」

どうやらぷにはわかってくれるらしい。

若干怪しい発言をしつつも俺たちはカウンターに近づいた。

「マスター、いつもの」

俺は懷から免許を取り出して差し出した。

「誰がマスターよ、言っとくけど全然渋くないわよ」

「ハードボイルド的な、あれはなかったですか？」

「ぜんっぜん」

「……………」

俺は所詮ギャグキャラの様です。

「あら、トトリもいたの」

「あ、はい。お久しぶりです」

「わざわざ遠くからお疲れ様、大変だったでしょこんなバカと一緒に
で」

……泣いた

「そんなことないですよ。アカネさんといると楽しいですから」

「……………」

嬉しいけど！嬉しいけどさ、そこは頼りになりますからの方が嬉しかった！

「そこは否定しないけどね。それよりも、ランクアップの手続きね」
「あ、はい。お願いします」

トトリちゃんはカバンから免許を取り出して、クーデリアさんに渡した。

「それじゃ、ちょっと待ってなさい」

クーデリアさんが奥の書類だから、功績一覧（俺命名）を持ってきた。

「どきどき」

トトリちゃんがクーデリアさんの書類を食い入るように見つめている。

最近この子は俺のことを萌え殺そうとしているんじゃないかと思える。

どきどきとか、もはや狙ってるとしか思えん。

「はい！おめでとう、二人とも無事にランクアップよ」

「やったー！」

「ぷにに！」

「ふん、当然だな」

「そのハードボイルドなお方、早く取って頂戴」

クーデリアさんが腕を伸ばして、俺に免許を差し出していた。

「ういーっす」

受け取った免許を見てみると今度は宝石の部分が銅になっていた。

「これは次が銀で金になると見た」

「よくわかったわね」

クーデリアさんが驚いた顔をしている。

まあ、ゲーム脳的には当然の事だね？

「そういえば二人はこの後どうするのかしら」

「えっと、ジーノ君たちを待ってから、その後村に帰ります」

「そう、考えてみれば免許の更新のために、わざわざここまで来るのは大変よね」

「これはもうアーランドに住むしかないな、うん、それがいい」

俺が圧倒的にすばらしい案を出してみる。

「住むなんて、そんなお金ないですしそれに私、錬金術がないと冒険者らしいこと何もできないですし」

「まあそうよね、ロロナだって錬金術がないとひ弱で役立たずで、ちよっとおバカな女の子ってだけだし」

「そんなところが、かわいいと？」

「まあ、そうなんだけど……って！何言わせんのよ！」

……やっぱり、ミミちゃんとクーデリアさんって似てるわ。

クーデリアさんは咳払いをして話を続けた。

「おほん！ そうね、ロロナのアトリエに住んだら良いんじゃないかしら」

「え？ 先生のアトリエを？」

「ええ。あそこならお金もかからないし、錬金術もできるでしょ。一石二鳥じゃない!」

「え、で、でも、勝手に使ったら怒られるんじゃない……」

「あたしが良いって言ってんだからいいのよ。大体、あの子が怒るはずないでしょ」

「はあ、でもクーデリアさん、どうして私のためにそこまでしてくれるんですか?」

「そ、それはあんたがあの子の弟子だからよ」

まあ、確かに錬金術師は希少らしいし、親友の弟子だもんな。やっぱりクーデリアさんは面倒見のいい人だな。

「べ、別に、あんたがここで働いていれば、ロロナが偶に戻ってくるんじゃないかなとか、そんなこと全然期待してないし……」

「ガッカリだよ!」

「な、何がよ!」

「自分の胸に聞いてみる!」

数秒目の自分を殴ってやりたい、この人は真性のツンデレだと!

「はあ、俺は宿取りに行ってきます。トトリちゃん、アトリエには明日遊びに行くわ」

「え、アカネさんもアトリエに泊ればいいんじゃないですか?」

「……………」

(脳内)

A「これって誘われてんじゃない?」

B「バカヤロー! トトリちゃんの信頼心の現われに決まってるだろうが!」

A「でも、いろいろとチャンスじゃね?」

B「……一応聞いてやろうじゃないか」

A「公然と」

B「公然と？」

A「寝顔を」

B「寝顔を……」

A B「見られる！」

「ぷに！」

「ぐはっ！」

ぷにが俺の邪な心を感じ取ったのか、ボディにタックルしてきた。

「ハッ！俺はいつたい、何を考えていたんだ」

「ぷに」

「すまない、苦勞をかけるな」

「ぷにに」

あやうく悪魔の誘いに乗ってしまいそうだった。

「あの、アカネさん？」

「ああ、やっぱり俺は宿に泊まるわ」

「そうですか、わかりました」

「うむ。ああ、そうだクーデリアさん。ジーノ君とミミ……あのシユヴァルツラングの子が来たらアトリエに行くように言うてください
い」

「？ あの子も？」

「はい。ミミちゃん、今は私のお手伝いしてくれてるんですよ」
「……ミミちゃん」

なにやらクーデリアさんが肩を震わせて俯いている、ツボった？

「つくく、ま、まかせときなさい。ちゃんと伝えといてあげるわ」

「よろしくお願いします。んじゃ、俺は一足先に戻ってますわ。トリちゃんまた明日」

「はい。それじゃあ明日待ってますね」

そう言って、俺はギルドから出て行った。

明日、アトリエを見るのが楽しみだな。

タックル・チェンジ・ダイブ

「第一回！ぷに強化会議ー！」

「ぷにー！」

「わゝ」

俺はロロナさんのアトリエに来ていた。

「こないだぷにはモンスターにやられてしまったわけだ。というわけで強化しよう！」

「ぷにに！」

「はあ」

「トトリちゃん、もっと気合を入れるんだ。これは俺にとっての死活問題なんだよ」

ぷにが強くならなければ、俺が戦うことになってしまう。

夏塩蹴りを使いまくるとかマジ勘弁。

「でも、シロちゃんってどうやったら強くなるんですか？」

「……食事？」

「え？ご飯食べると強くなるんですか？」

「いや、うん。簡単に言うともンスターをパクツと……ね」

若干トトリちゃんのぷにへのイメージが悪くなった気がする。

「えー！？も、モンスターを食べちゃうんですか！？」

「ぷに」

「そう、あれは、ある日の出来事……」

回想スタート。

トトリちゃんにゴーストに遭遇した時のことやシャドーボールについて簡単に話した。

「……というわけさ」

「シロちゃんってすごい子だったんですね」

トトリちゃんがぽかんと口を開けて驚いていた。

まあ、普通のぷに系モンスターとは違うわな。

「あれ？それじゃあ、話し合いしなくてもよかったんじゃないですか？」

「……ちよつとギルド行ってくる！」

俺は立ち上がって、アトリエの扉に向かった。

決して、言うまで思いつかなかった訳じゃないので悪しからず。

「行くぞ、ぷに」

「ぷに」

「えっと、がんばってください？」

といわけで、ギルドの依頼受付。

「フィリーちゃん、食べたら強くなれそうなモンスターの討伐依頼ない？」

「えっと……ごめんなさい」

謝られてしまった。人見知りのフィリーちゃんには高度な要求だったか。

「うんじゃ、強いモンスターの依頼で」

「えっと、それなら……」

フィリーちゃんが依頼書をパラパラと捲っている。

「これならアカネさんにちょうどいいと思いますよ」

「グリフォン討伐依頼？——！？」

俺のトラウマのページ、『グリフォンに殺されかけた』が蘇ってしまった。

いや、あの日は偶々ぷにを連れて行かなかったただけだし……。

「ぷに、大丈夫か？」

「ぷに！ぷに！」

どうやら自信満々のご様子だ。

「よし、それじゃそれ受けるわ」

「はい、それじゃあ少し待ってください」

フィリーちゃんがいつもの様に依頼の手続きを行う。

グリフォンが俺たちの目の前、街道の石畳に舞い降りた。

「先手必勝！ぷに、タックル！」

「ぷに！」

俺の指示でぷにがグリフォンに向かって、真っ直ぐ矢の様に体当たりをしかけた。

同時に俺も奴に向かって駆け出す。

「キエエー！」

見事顔面に命中。奴は大きく仰け反った。

「そこだ！」

そして、俺は上がった奴の上体が落ちるのに合わせてアッパーを打ち込んだ。

再び奴の体が浮き上がった。

「ぷにに！」

「ナイスアシスト！」

後ろからぷにが、浮き上がった奴に向かって、シャドーボールを放った。

それは奴の顔面に直撃し、体勢を立て直すことを許さなかった。

「まだまだ！かくかくと、落とし！」

足を振り上げ、ふらついている奴の後頭部に踵落としをくらわせた。

「――!?」

「キエエエー！」

奴はダメージを受けたそぶりを見せずに、俺に向かって咆哮してきた。

「チッ！」

俺は後ろに飛んで、距離を取った。

「手袋のある拳じゃないと効かないか……」

「ぷにに」

手袋は俺の筋力を向上させてはくれるが、脚への恩恵は薄かったようだ。

「――！来るぞ！」

「ぷに！」

奴は後ろに小さく羽ばたいて、加速するための距離を取っていた。

「キエエエエー！」

「んなっ！」

その速度はぷにの比ではなく、避けるために身構えた瞬間には、も

う目の前に迫っていた。

「くっ！」

咄嗟に俺は目を瞑り、腕をクロスして衝撃に備えた。

「……………」

だがいつまで経っても衝撃は訪れなかった。

「…………ん？」

モシヤモシヤと何かを咀嚼するような音が聞こえてきた。

「…………まさか」

俺は、恐る恐る目を見開いた。

そこには、まあ予想通りの光景があった。

「…………うまいよな」

「ぷに！」

あの体積はどこに行ったのか、目の前ではぷにがうまそうにグリフオンを食べていた。

「一口か？」

「ぷに！」

一口らしいです。

「巨大化でもしたのか？」

「ぷに〜？」

わからないそうです。

何故、俺は目を瞑っていたのだろうか。

「……人が珍しくガチバトルしてたってのに」

所詮は真面目な戦闘なんて俺には似合わないってことか。

「んで？ 新たなる力的なものは手に入ったか？」

「ぷに！」

ぷにがゴクンとおそらく飲み込んだのだろう、そしてどうやら力は手に入ったらしい。

「でも、見た目変わってないぞ」

「ぷにに！」

ぷにが突然、後ろに大きく跳んだ。

例えるなら、さきほどのグリフォンが距離を取ったように……。

「おい、待てやめろ」

「ぷに！！！」

見たことはないが、弾丸の様な早さとはこの事を言うのかなって思った。

しかも小さい分、圧力が大きい訳だよね……。

「ぐはっ！」

威力10割増し(当社比)

「きょう……か……せい、こう」

バタリと俺は地面に倒れこんだ。

《ぷにのツツコミのレベルが上がった》

小悪党な俺

「……………」

「……………」

アトリエには、パラパラと本をめくる音と金をかき混ぜる音が響いている。

今日の俺は珍しく読書をしていた。

本は格闘の指南書みたいな感じのものだ、読んでみると結構タメになる。

「……………ふぁ」

かと言って暇なのが変わる訳じゃない。

折角合流したミミちゃんと後輩君が出かけてしまったので退屈しているのだ。

「できたー!」

欠伸をしていると、トトリちゃんの元気な声が響いた。

「お、やっとできたのか?」

最近はずっとトトリちゃんの錬金術の生成物がランクアップしてきている。

前にダイナマイトっぽいを作ったにはビビった。

「はい！お待たせしました」

トトリちゃんが釜から鉄の塊の様なものを取り出した。

「これが噂に聞くインゴットか」

「はい、これでアカネさんも武器を作れますね」

事の発端としては、数日前に『第一回明音強化会議』をやった事だ。単純にそろそろ、もう少し強くななくちゃヤバイと思いやったのだが……。

『手に付けれる武器なんてどうですか』

このトトリちゃんの発言で会議は数秒で終わってしまった。

まあ、それでインゴットを作って親っさんの所に持っていくことにしたのだ。

ちなみに親っさんというのはとある武器屋のおっさんのことだ。

本名はハゲル。俺の数倍の筋肉を持っているという説明で十分だろう。

「んじゃ早速行くか」

「はい！」

俺はトトリちゃんと一緒にアトリエを出て行った。

「へい、らっしやい！」

「こんにちわ」

「どうもー」

武器屋の扉を開くと、野太い声で出迎えられた。

「お、嬢ちゃんに兄ちゃんじゃねえか、今日は何の用でい」

「あ、はい。インゴットを作ってきたから、ハゲルさんに武器を作ってもらおうと思って……」

「おお！ ついに嬢ちゃんも新しい武器を使う時が来たのか！ いつまでも師匠の杖じゃ格好がつかないからな！」

「い、いえ、私じゃなくてアカネさんですよ」

トトリちゃんがそう言うのと親っさんは不思議そうな顔をした。

「その兄ちゃんは確か素手じゃなかったか？ こないだも冷やかして帰りやがったし」

「あはは……」

俺は笑いながら、頬をかいた。

前に興味本位でここに来たのだが、そのときは武器なんていらんと思っただけで早々に帰ったのだ。

「いやあ、そろそろ素手じゃ辛くなってきたんですよ」

「それは分かるけどよ、何の武器を作ればいいんだ？」

「メリケンサック一択ですよ」

拳系の武器で熟練度を上げなくても使える武器なんて、俺はこれ以外に知らない。

問題としては親っさんが知ってるかどうかなんだが……。

「？　メリケン、何だって？」

「ですよー」

大体予想通りだったので、俺は腰のポーチから自作の絵が描かれた紙を取り出した。

トトリちゃんがインゴットを作っている間に俺はこいつを頑張って書いていたのさ。

俺は親っさんに紙を手渡した。

「む、こいつあ……」

「無理ですかね？」

現代世界ではこんな物とは無縁の存在だったので、製造方法なんて知るはずもない。

正直な話、あまり期待はしていなかったりする。

「やっぱ、無理ですよね……」

「あん！？　俺が何年武器を作ってたと思ってんだ！　ちょっと待ってろ！」

俺の無理発言に火がついたのか、トトリちゃんからインゴットを受け取ると早速作業に取り掛かっていた。

「以外にできたりする？」

「でもこの武器ってどうやって使うんですか？」

トトリちゃんが俺の絵が描かれた紙を見て尋ねてきた。

「ああ、そのこの4本の穴に指をはめて、その下の所を握って……殴る！」

「それだけですか？」

「シンプルイズベスト、単純明快」

「アカネさんらしいですね」

完全に被害妄想なんだが、バカって言われた気がした。

待つこと数時間。

「できたぞ！なかなかの自信作だ！」

「早っ！」

あれ？武器って作るのこんなに早いのか？

「まあ、とりあえず」

俺はハゲルさんからメリケンサックを受け取って両手にはめ込んでいる。

「……………」

マークさんもそうだが、この世界の職人はレベルが高すぎる。

出来栄えは昔見た物と同じ。完全に現代の物レベルだった。
ただ一つ、違いがあるとしたら……

「このトゲなんですか？」

「そっちの方が強そうで良いかと思ってな」

はめ込む穴の所に小さなトゲが付いていた。
確かに威力は上がるだろうけど、何といか……。

「アカネさん、何か悪そうです……」

「俺もそう思ってたところだ」

完全に漫画に出てくる小悪党状態だった。

「まあ、うん、流石ですね」

「当り前よ！今度はさらにすげえモン作ってやんよ」

これ以上凶悪にしたら、いろいろとマズイ気がするのだが。

「あはは、それじゃあ、またよろしくお願いしますよ」

「おう！また来いよ！」

俺は武器を持って上機嫌に店を出た。

【オマケ】

後輩君の場合

「おお！先輩、それ強そうだな！」

純粹に褒めてくれる。

ミミちゃんの場合

「それつけたまま私に近寄らないでくれるかしら」

ですよー。

クーデリアさんの場合

「武器なんて銃があれば他にいらないじゃない」

遠距離派だった。

フィリーちゃんの場合

「きゆう……」

「ちょ！気絶！？ドクター！」

お互いの心臓に悪い。

小悪党な俺（後書き）

最近忙しくて更新できなかった、すまんね。
早くコロナ先生を登場させたい……。

砂漠の紅一点

「熱い……頭痛い……」

「ぷに」

照りつける太陽に熱い空気おまけにほぼ一色の殺風景。

今は2月、俺がこっちに来てからほぼ一年、ついには砂漠にまで来ることになった。

「ああ、早く出てこい、砂漠の魔物さんよー」

普段の俺だったら、自分からこんな所には来ないんだが、とある事情があるのさ。

一言で言うなら、トトリちゃんブロンズ、俺ブロンズ。
ちよっと気を抜いたらこの有様だよ！

クーデリアさんにこの事実を聞いて、俺はランクアップするためにボスモンスターの討伐に来た訳だ。

「ぷにの新技と俺の新武装があればいけるはずだ」

「ぷにに？」

「大丈夫だ。2、3ヶ月なら、まだ新と言ってもいい……よな？」

それに何故かこないだの事のように思えるしな。

うん、いけるいける。

「しかしなあ、この寂しい風景はなんとかならんもんかね？」

見渡す限り茶色系統、偶に緑とかピンクがあるくらいだ。

「……ん？ピンク？」

「ぷに？」

遠くの方にポツンとピンク色の点があった。

「これを見に行かなかったら冒険者とは言えないな」
「ぷに！」

……

……

……

どうしよう……。

「きゅー」

「ピンク色は行き倒れの人だったでござるの巻」

「ぷに！ぷに！」

ぷにがボケてる場合じゃないと言ってくるので仕方ない。

「大丈夫……じゃなさそうな」

うつぶせに倒れているので、ひっくり返してみる。

「うう、みず」

「以外とかわいいな」

それは俺と同じ年くらいで、赤みがかった茶髪を持つ少女だった。
この格好にデジャヴを感じるのは何故だろうか？

疑問を抱きつつも俺はポーチから水を取り出した。

「ほれ飲め飲め」

俺は口元に水を持っていき、水筒を傾けて飲ませてやった。

「……………」

「んー、さっきよりは良さそうか？」

たぶん熱中症だろうから、後は日陰にでも入れとけば……。

「日陰がない！」

砂漠にはそうそう日陰なんてないし、そもそも涼しくない。

「どうする？ぷに」

「ぷにに！」

ぷにが飛びあがって俺の背中にぶつかってきた。

「担げと？」

「ぷに」

ぷに先生はとてもフェミニストなようだ。

「まあ、見つけたからにはしょうがないな……よっと！」

俺はおもむらに少女を担ぎあげた。

持ち方は米俵を持つ感じのアレだ、肩に乗せて腕を回すアレ。

「細いし軽いしやわかいな……疾しい事は考えてないぞ」

ぶにが白い目で見てくるの訂正しといた。

まあ多少役得ではあるが。

「とりあえず、砂漠を抜けるか」

ここからなら、少し歩けば砂漠を抜けられるハズだ。

数時間歩いて、やっと草木がある場所まで来た。

「よっと」

俺は少女を木陰の下に降ろした。

「ふう、やっぱこっちは涼しいな」

砂漠はダメだ、あれは普通の人がそう長く居ていい場所じゃない。

「少し休むもう、見張り頼めるか？」

「ぷに」

ぷにも了承してくれたので、俺は木に腰掛けて少し仮眠を取ることにした。

「おやすみ」

「ぷに」

.....

.....

.....

「あの」

ゆっさゆっさ。

「起きてくださーい」

ゆさゆさ。

「ううん？」

どうやら俺は揺られているようだ。

「誰？」

「あ、やっと起きた」

俺が目を開くそこには、あのピンクの少女が立っていた。

「む、起きてても良いのか？」

「はい、おかげさまで」

「そうか、なら良かった」

俺の予想に反して彼女は大分元気なようだ。

俺は立ちあがって自己紹介をした。

「俺はアカネ、見ての通り冒険者だ」

格好は未だにジャージで締まらないが。

「あ、私はロロナです。助けていただいて本当にあり「ロロナだど
！」ひゃう!？」

目の前の少女は驚きの名前を口にしてきた。

「もしかして、あれか？稀代の錬金術師でクーデリアさんの親友で、
トリちゃんの師匠な、あの！ロロナ先生か!？」

「は、はい！そうですけど、トリちゃんの事知ってるんですか？」

「……ジーザス」

少なくとも俺の考えていたロロナ先生は行き倒れたりしないし、ピ
ンクでもないし、ひゃう!？なんて言ったりもしない。

「えっと、どうかしましたか？」

俺の視線に違和感を覚えたのか、ロロナ……さん？が声をかけてきた。

「いや、あの、ええと」

どっちだ……普通に話すのと敬語で話すのどっちが正しいんだ。

「け、敬語の方がいいですか？」

「え？好きに話してくれてかまいませんよ？」

「そ、そうか、それじゃこっちで……」

とりあえず今までの魔王の様なロロナ先生は俺の脳内から抹消しておこう。

「さっきの質問だけど、トトリちゃんは俺の後輩なんだよ」

「後輩？なんのですか？」

「冒険者での後輩だ。なかなか頑張ってるぞ」

俺を追い越しかけるくらいには。

「わあ、トトリちゃん冒険者になったんだ……あれ、それじゃあ錬金術やめちゃったんですか!？」

「い、いや普通にいっつも錬金術は使ってるけど」

「そ、そうなんですか、よかった……。でもなんで、冒険者になったんだろう?」

「……そういや、聞いたこと無かったな」

俺が目的なしのせいで忘れてたが、トトリちゃんには目標があるのかもしれない。

「でも冒険者かー、アカネさんみたいな先輩さんがいれば安心ですね」

「う、うむ、当然だ」

やばいかわいい。レベルで言うと、トトリちゃんレベル。

「と、ところで、何であんな所で倒れてたんですか？」

「あ、それは、その、水を落っこしちゃって……」

「それじゃあ、すぐに砂漠を出ればよかったんじゃないか？」

「その、道に迷っちゃいまして……」

とりあえずドジッ娘属性を追加しておこう。

「まあ、だいたい分かりました。それにしても……」

俺はロロナさんを下から上までジロジロと観察した。

身長は平均的、容姿はかわいい、胸はそこそこ、口調も穏やか、行き倒れ。

とてもじゃないが、稀代の錬金術師様には見えなかった。

「あのー、どうかしましたか？」

ロロナさんが困ったように俺を見上げていた。

……変態っぽかったか？

「いや、失礼かもしれないがイメージと違ってな」

「あはは、よく言われます」

やっぱりか。

「まあ、でも、トトリちゃんの師匠っていうのは納得できるかも」

「ほ、ホントですか！？私、先生っぽいですか！？」

「まあ、トトリちゃんの先生としてはかなり合ってるんじゃないか」

主に癒し空間的な意味でだけど。

「ちなみに、錬金術って誰でも教えられるのか？」

「もちろんですよ。ちゃんと教えられたのはトトリちゃんだけですけど……」

「俺に教えてくれたりは？」

「もちろんいいですよ。助けてもらったお礼もしたいですし」

「うしっ！」

思わずガッツポーズしてしまった。

だがこれでやっと、不思議パワーを手に入れれる。

「それじゃあ、今度アトリエで待ってるわ」

「えっと、それって私のアトリエですか？」

「ああ、今はトトリちゃんが使ってるんだよ」

「あ、そうなんだ。それじゃあ、トトリちゃんにも会えるかな？」

偶に口調が素に戻るのに若干のシンパシーを感じた。

「あ、でも、今トトリちゃん村にいるんだっけかな？」

「え、そうなんですか」

途端にロロナさんはしょんぼりしてしまった。

「ま、まあ、でもクーデリアさんに会えるじゃないか、帰ってこないって怒ってたしさ」

「あ、やっぱり……そろそろ一度帰らないとなあ」

「それじゃあ帰ってきたらクーデリアさんにでも伝えといてくれ、会いに行くから」

「はい！また今度お会いしましょうね」

「その時は今どっか行ってる俺の相棒も紹介するぜ」

「それじゃあ、今日は助けてもらって本当にありがとうございました！」

そう言って、ロロナさんはアーランドの方向に歩きだした。

「ぷにに」

「ん？ぷにじゃないか、どこ行ってたんだ？」

「ぷにぺっ！」

ぷには口から水筒を吐き出した。

「ああ、水汲みか、あんがとな」

「ぷに！」

「さっきのあの人な、ロロナ先生だったんだぜ」

「ぷに！？」

ポーカーフェイスなぷにが珍しく驚いた顔をした。

「んでな、錬金術を覚えてもらえることになったんだ」

「ぷに」

「と言う訳で、とっとと砂漠の魔物を倒しに行くぞ！」

「ぷに！」

ちなみにこの後、砂漠の魔物はぷにダイブ5発くらいで沈んだ。
ベヒーモスっぽいのを倒すぷに……最強じゃね？

砂漠の紅一点（後書き）

もう限界だッ、出すね！（ロロナ先生を）

今日いろいろ設定イジッてたら感想受付なるモノを発見。
受け付けるのユーザーのみになってた（・ω・）

設定変更したので、暇があったら感想くださいな／（。ロ。）。
主に書き手が喜びます。

同族発見

今日は恒例のランクアップをするためにギルドに来ていた。

「討伐してきたんで、いつものお願いします」

「はいはい、それじゃあ免許よこしなさい」

俺はポーチから免許を取り出してクーデリアさんに渡した。

「それにしても、たった一年でよくここまで上げたわね」

「まあ、大方ぶにおかげですけどね」

「……ランクアップさせてもいいのかしら」

クーデリアさんはぶつぶつ言いながらも手続きを続けている。

「あ、そう言えばロロナさんに会いましたよ」

「ぶっ！な、何ですって!?!」

「いやロロナ先生ですよ」

「ど、どこにいたのかしら?」

「砂漠でぶっ倒れてましたよ」

途端にクーデリアさんは、申し訳なさそうな顔をした。

「親友が迷惑かけたわね……」

「まあ……ええ……」

何ともいたたまれない空気が出来上がってしまった。

親友の責任を自分にも感じる必要はないでしょうに。

「あれ？親友？」

「ん？どうかしたのかしら？」

「いや、クーデリアさんとコロナさんって親友なんですよね？」

「ま、まあ、世間的にはそうなるのかしらね」

はいはい、ツンデレツンデレのデレデレ期。

「年大分離れてませんか？」

コロナさんは俺と同じくらいだろうから、俺が18でクーデリアさんは去年22って言ってたから……5歳差？

「？ ああ、そういうこと」

「どういうことですか？」

「あの子も童顔だから年相応に見られないのよね」

「だから、そういうことですか？」

「あの子、私と同年よ」

「……………」

俺は少々この世界を舐めていたようだ。

つまり、俺5歳上の人にめっちゃタメ口聞いてたってこと？

て言うかおかしいだろ、あの人制服とか着ても違和感ない年齢にしか見えないって。

どう考えてもメルヴィアの方が年上に見えるわ。

今度会った時どんな顔すればいいのかわからない。

「ショックなのはわかるけど、そろそろ戻ってきなさいよ」

「……笑えばいいと思うよ」

「訳わかんない事言わないで頂戴」

「この世界には嘘が満ち溢れているんだ」

「うっとうしいから免許持って帰りなさい」

クーデリアさんはそう言うのと俺に免許を投げてきた。

「ところで、まだロロナさん帰ってきてないんですか？」

俺は免許をポーチに入れつつ尋ねた。

「帰ってないけど、何？あの子帰ってくるって言ってたの？」

「そろそろ帰らないとって言ってましたよ」

「あー、うん、そうなの、ふーん」

必死に平静を保っているみたいですが、口元の緩みを押さえられて
ませんぜ。

「それじゃあ、ロロナさんが帰ってきたら、俺は村に行ってますっ
て伝えといてください」

「それはいいけど、何でまた村に行くのよ？」

「いやー、トトリちゃんの誕生日のお祝いするの忘れてて……」

砂漠の冒険を甘く見ていたせいで、予定よりこっちに戻るのが遅れ
てしまったのだ。

今は3頭頃、トトリちゃんの誕生日は2月末ごろ。

本来はこっちに戻らずに直で行く予定だったのだが、どうせ間に合
わないならと一旦戻ってきたのだ。

「そんじゃ、とっとと行きなさい、あの子にはちゃんと伝えておく

から」

「どうもどうも、そんなじゃまた今度」

俺はそう言って、ギルドの外に向かった。

「居たあ！ペーター！」

「うお！な、なんだよ！」

足を確保することに成功。

「ペーターはツェツイさんの事がだいす「わ！な、何言ってるんだ！」
……ククッ」

正に想像通りの反応だ。さて、やるか……。

……

……

……

2週間程度経過。

「よし着いた！ペーターががんばってくれたおかげだぜ☆」

「し、死ぬ……」

ペーターが自発的に寝ないで馬車を動かしてくれた甲斐があったとい

うものだ。

「よっしゃ、早速アトリエに向かうぞ」

「ぶに！」

俺たちは早速アトリエに行こうとすると、ちょうどトトリちゃんが歩いているのが見えた。

どうやら港の方に向かっていているようだ。

俺はトトリちゃんの方に向かい、声をかけた。

「どうしたんだ、港の方に向かったりして？」

「わっ！あ、アカネさん来てたんですか！」

「ちょうど今着いたところだ、港の方になんか用なのか？」

「あ、はい、お昼だからお父さんを呼びに来たんです」

「んじゃ、ついでだし俺もついてくよ」

あわよくば、お昼をご馳走に……意地汚いとか言わんでくれよ。

「あ、それじゃあアカネさんもお父さん探すの手伝ってくれませんか？」

「それって手伝う事あるのか？」

「お父さん、ちゃんと目を凝らさないと見つからないから大変なんですよ」

あれ？お父さんって妖怪かなんだっけか？

俺は声に出せないような質問を考えつつも一緒に港に向かった。本当に目を凝らせた瞬間見つかったらどうしよう……。

「んでな、ロロナさんはみずくって言った訳だ」

「あはは、先生相変わらずみたいですな……」

ロロナさんの話をしながら俺たちは歩いていった。

「おっ、着いたな」

できれば一瞬で見つけてほしいな……。

「ふん！ふっ！ふぬぬ！」

港に入るなり、大きな声が聞こえてきた。

「あれ？この声ってトトリちゃんの……」

「お父さん？どうしたんだろ、こんな大声出すなんて」

俺とトトリちゃんとぷには急いで奥の方に向かった。

「ああ、トトリにアカネくん、良いところで来てくれ手伝ってくれないか？」

グイードさんは釣竿を必死に引いていた、どうやらかなりの大物の様だ。

俺とトトリちゃんはグイードさんの後ろにつき、一緒に竿を持った。

「よしそれじゃあ、せーのでいくぞ」

「うん」

「了解しました」

「いくぞ！せーの！」

3人でタイミングを合わせて、竿を引っ張った。

「よいしょー！」

「よし、もう少し、もうひと踏ん張りだ」

「おらあー！」

ザバーン！

「よし！……って、え？」

「きゅう……」

これは決してアザラシのゴマちゃんが釣れた訳ではなく……。

「へ？え、わ！ろ、コロナ先生！？」

「これはまた、予想外大物だね。こんなの持って帰ったら、ツエツイも驚くだろうなあ」

「それどころじゃないよ！先生！生きてますか！？先生！」

「ぷくぷく……おさかな……わたしは……おさかな……」

「よかった生きてる！ちょっとおかしいけど……って！あ、アカネさん何で泣いてるんですか！？」

「え？」

言われて初めて自分が涙を流していたことに気づいた。

だって、これは酷い……弟子が師匠のピンチに駆けつけるって……普通逆だろ。

それも昨日の今日でこんな事態に……こんな、事に……。

「涙が止まらねえ」

「え、えーと、と、とにかく連れて帰らないと！」

その後ロロナ先生を前と同じように担いで持ち帰った。
濡れているのをエロイと思ったのは、まあ仕方ないよね！

「はあ……助かった。今度はかりはダメかと思った……」

ロロナ先生が目を覚ましたので現在はトトリ家のリビングにいる。
というか、前のあれは何とかなると思ってたのだろうか？

「よかった……びっくりしましたよ。まさか先生が釣れちゃうなんて」

「でも、どうして海に？ しかも服のまんまで」

ツェツイさんが当然の質問をする。

これを一年前にされてたら、俺の場合河から流されてきましただな。今となってはもう笑い話となったもんだ。クーデリアさん以外に言っていないけど。

「わたしも、よくわかんないんだけど、確かうに林で転んで、河に落っこちちゃって……」

「ぶっ！」

「ぷに！？」

刹那、俺は飲んでいたコーヒーをぷにに噴出した。

「あ、アカネさんどうかしたんですか？」

「大丈夫トトリちゃん気にするな。アハハハッハッハ」

「笑い引きつっててますけど……」

「い、いやあ！ それにしてもロロナさん、大分流されて来たなあー！」

「え、あ、はい。でも、トトリちゃんとアカネさんに会えたから、ラッキーと言えばラッキーかも……」

俺は昔、あれは二回に一回は死ぬと言ったことがあった。

三回に一回に訂正しておこう、これを引き当てたロロナさんは確かにラッキーだ。

そしてロロナさんに対する好感度がグリーンと上がったわ。

「全然ラッキーじゃないですよ、死んじゃったらどうするんですか！？」

「あはは……ごめんなさい」

「……ごめんなさい」

「? どうしてアカネさんも謝ってるんですか?」

「いや、なんとなく……」

「ぷに」

トトリちゃんは不思議そうな顔をしている。

いまさら言える訳ないわな、うん。ついでにぷにも謝っているようだ。そういう君もでしたね。

「その様子なら、もう平気そうですね。何か軽いもの作ってきます」

そう言って、キッチンの方に向かった。

ツェツイさんは相変わらず気遣いのできる女性ですなあ。

「あの、トトリちゃん……怒ってる?」

ロロナさんがオドオドと聞いてきた。この二人の関係って師弟関係だったよね?

「怒ってますよ、私だってずっと先生に会いたって思っていましたけど、こんな風に再会するなんて……」

「本当にごめんね……次から気をつけるから」

「……っぷ」

俺は瞬間的に自分の口を手で抑えた。

だって!これ、完全に師弟じゃないじゃん!笑うのも仕方ないって!

「……く、っくく、っぷ」

「あ、アカネさん酷い！そんなに笑わないでくださいよ！」

ロロナさんが涙目で俺を咎めてきた。

彼女は河の一件で笑ってるのだと思ってるのだろうか……。。

「ぷに！」

「ぐはっ！」

ぷにが俺の事を物理的に黙らせてきやがった、ある意味ナイスだ。

「……ふう」

「えっと、大丈夫ですか？それにそのぷにって……」

「ああ、こいつはシロだ。こないだ言った俺の相棒だよ」

「へえ、シロちゃんですか、かわいいですね」

「ぷに」

褒められてぷににも満更じゃないようだ。

「まあ、とりあえず話を戻そうぜ」

「元と言えばアカネさんが私の事笑ったせいじゃ……」

アーアー聞こえない。

「で、トトリちゃんは先生の事もう怒ってないのか？」

「あ、はい。無事だったからもういいですよ。先生は全然変わってないみたいですし」

「あはは……本当はもう少しちゃんとしないとダメなんだけど……。トトリちゃんは何か変わったことある？」

「ありますよ。アカネさんから聞いたかもしれないですけど、私、冒険者になったんです！」

「あ、そういえばそうだったね、おめでとう！」

「そういや、そんな時に出た質問があるんだが聞いてもいいか？」

「？　なんですか？」

「うむ、なんでトトリちゃんは冒険者になったのかって言うことをな……」

「あれ？　言ってませんでしたっけ？」

「聞いてないっす」

「私も気になるなあ」

「えっと、それはですね……」

トトリちゃんの話を一言でまとめると。

トトリちゃんは、昔凄い冒険者だった行方不明のお母さんを探すために冒険者になったそうだ。

まさかこんな重大な事情があったとは……。

「感動した！　これからは、いままで以上に手伝いを頑張るぞ！」

「えっと……ありがとうございます？」

「ふにもがんばるよな？」

「ふに！　！」

ふにもかなりやる気満々のようだった。

「あはは、ロロナ先生にも感謝してますよ」

「え？　私にも？」

「はい、私ずっとお母さんを探しに行きたいと思ってたんですけど……体弱いし頭もよくないから無理だって諦めてて……でも、先生に錬金術を教えてもらってこれならもしかしてって」

「……………」

トトリちゃんはそんな思いで錬金術を習って冒険者になったのか、全部興味本位だったりの俺とはまったく違うんだな。

「それで、お母さんに会ったとき、お母さんと同じくらいの冒険者になってたら喜んでもらえるんじゃないかなって思ってた」

「ううっ……トトリちゃん……」

ロロナさんと俺の声が泣き声からハモった。

「わ！ふ、二人ともなんで泣いてるんですか？」

「だ、だってトトリちゃんすごく健気で……」

「俺と違って真面目に家族の事を考えていて……」

家族の喜びまで考えるって、もう俺がタダのクズ野郎にしか思えねえ。

「よし！決めた！私もトトリちゃんのお手伝いする！」

「え？先生が？」

「うん！一緒にお母さん探そう！」

「本当にいいんですか？」

「うん！そうと決まったら早速、トトリちゃん後でアーランドに来て！」

そう言うところロナさんは風の様に外へと駆け出して行った。

「え？先生、アーランドってそんな簡単に行ける距離じゃないですよ！」

お店番

「どうしてこうなった」

俺とぷにカウンターの中、他の人カウンターの外。
俺とぷに店員、他の人お客さん。

「どうしてこうなった」

確か俺は先にアーランドに行こうと思って、準備のためにパメラ屋
に立ち寄って……。

『少しの間だけ店番お願いできるかしら〜?』

「……! ^{チャーム}魅了か!」

「ぷに〜」

「あんな美人さんに上目遣いで頼まれたらねえ?」

「ぷにー」

ぷにがさっきから俺の事を冷たい目で見てくる……。

「これくださーい」

「はいな」

村の少女Aの対応をしつつパメラさんの帰りを待つ俺であった。

……

「遅い……」

「ぷに」

あれから数時間、もう店にお客さんはいない、そしてパメラさんもない。

「客も来なくて暇だしさ」

「ぷに」

さっき来た客なんて、俺の事見て舌打ちして帰りやがったし……気持ちは分かるが。

俺がダラダラしていると不意に扉が開いた。

「失礼する」

「ぷに、すげえ目つき悪い人来た！強盗だぜ強盗！」

「ぷに！」

「……………」

極めて平静を装ってるけど、青筋が見えてますぜ。

「で、ステルクさん、こんな村になんか用ですか？強盗ですか？」

「違う、この村に錬金術師がいると聞いたから来ただけだ」

スパンとね、一言で俺のネタを切り捨てられてしまった。

「ちょっとクールすぎませんか？」

「君が騒がしすぎるだけだろう……第一なぜ店員などやってるんだ？」

「パメラさんに押しつけられたのら」

「なるほど、もしやと思って来てみれば、やはり彼女の店だったか」
「お知り合いですか？」

「まあ、多少顔を知っているぐらいだな」

意外すぎる、この人に女性の知り合いがいるとは……。

「ステルクさんって女性に疎そうですね」

「……………」

無言で睨まれた、やっぱり強盗だよこの人……。

「ま、まあ、おふざけはこの辺にして、何かお求めですか？」

「できるのならば、最初から真面目にやりたまえ」

「性分なもので、すいませんね」

「まったく、まあいい、一つ聞きたいことがある。この村の錬金術師のアトリエと言うのはどこにあるのだろうか？」

……トトリちゃんとステルクさんって何か交友関係あったのか？
俺が知ってるのだと、初めてアーランドに行った時に助けてもらったぐらいか。

まあ、ステルクさんは悪い人じゃないし教えちゃってもいいか。

「店出てから右に向かったところにある坂を上った所にありますよ」
「そうか、感謝する。では失礼」

そう言って、店の外へと出て行った。

「……冷やかしかいな」

「ぷに」

……
……

「うわ！マジで先輩が店番やってる！？」

「帰れ」

俺はお客様に対してすごく良い笑顔で対応してやった。

俺が来たときのクーデリアさんの気持ちが少しわかった気がする。

「ひでえよ先輩、実は欲しいものがあってさ」

「なんだ本当に客だったのか、んで、なんだ？」

「必殺技！」

「帰れ、必殺技の価値プレイスレス。要は商品じゃないんだよ」

俺はシッシと手を振って帰ることを促した。

「先輩には必殺技が欲しいって気持ちわかんないのかよ？」

「……………」

漫画やゲームの技を練習しまくった俺に対して言うのか、若造め。

「いいだろう！インスタントに使える必殺技を教えてやる！」

「おお！流石、先輩！」

「説明は一言だ！剣を回りながら振れ！以上！」

「え！？そ、それだけ？」

「ああ、これさえ身につければ終盤まで使えるさ」

某緑の勇者はこの技だけで十数年はやってるんだ。後輩君もこれで勇者の仲間入りだな。

「この技の名前は、回転切りだ！」

「回転切り！？」

「そうだ、著作権うんぬん言われたら、ありふれた名前ですよで押し通せ！」

「？ よくわかんねえけど、まあいいや！ありがとな先輩！」

後輩君は早速練習してくるぜと言って外に出て行った。

「次の奴も冷やかしだったら、ぶん殴ってやろうか」

「ぷに」

……

……

「いらっしやいませ」

モブ男Aが現れた

「……………」

モブ男Aは うろうろと 商品を 見まわしている

「ありがとうございました」

モブ男Aは さっていった

「……今来た君が悪いのだよ」

アカネは ぷにをかいほうした

「行くがよい！」

「ぷに！」

ぷには アカネをこうげきした

かいしんのいちげき！

アカネはちからつきた

……

……

「ちょっと、あんたサボってんじゃないわよ」

「……ハッ！」

おれは　めをさました

「いや、これはもういいから」

「何言ってるの？」

目の前にはメルヴィアがいた、気絶してたとか……ぷにが最近手加減しなさ過ぎてきつい。

「いやこっちの話だ。で？何のご用でしょうか？」

「冷やかしかしらね」

「帰れ」

最初に冷やかし宣言したからって、許される訳じゃないぜ。

「俺の拳の餌食になってもらおうか」

「何かいったかしら？」

すごい笑顔で凶器（拳）を振り上げてきたよ、この人。

「冷やかしから強盗にクラスチェンジかよ、この野郎」

「今謝ったら許してあげないこともないわよ」

ちっ、流石にアレで殴られたら俺の頭がどうにかなりそうだし、謝っておくか。

「すまんね、君」

「ふん！」

「ぐぬ！」

頭をグーって……野蛮すぎるでしょう。

「謝ったのに！」

「あれを謝罪って言うなら、『ごめんなさい』はいらないわよ」

「メルヴィアにはあれで十分かな？って」

「もう一発欲しいのかしら？」

「ごめんなさい」

「よろしい」

くそっ！拳を振り上げたまま交渉ってフェアじゃないだろ！
あれか、核武装国と非核武装国の優劣の差ってことか……。

「そろそろ帰っていただけじゃないでしょうか」

「まあ、あんた弄るのにも飽きたし……それじゃあねシロちゃん」

「ぷに！」

メルヴィアはぷにだけに挨拶して帰ってった。
これは酷い。

……

……

「ただいま、ごめんなさい、待たせちゃったかしら？」

パメラさんが扉から入ってきた。

「い、いえいえ！全然待ってませんよ！」

「ぷに」

うっせえ！とぷにを目で制しておく。

「今日は本当にありがとうね、おかげで用事も済ませれたわ」

パメラさんは俺に、この俺に！満面の笑みを浮かべてきてくれたのだ。

「ハッハッハ、この程度で良ければいつだって」

「アカネ君はやさしいわね」

「いやいや、そんなことないですよ」

ぷに、聞いたか？俺優しいってよ。

「ぷに」

「シロちゃんもありがとね」

「ぷにー！」

「……………ちっ」

人は一瞬にして嫉妬の憎悪に落ちれるものなんですネ。

「それじゃあ、この辺で失礼しますね」

「あら、もう行っちゃうの？せっかくだからお茶でもどうかしら？」

はい

いいえ↑

「折角ですが、用事があるんで」

「あらそうなの、残念ね、それじゃあ今度何かお礼するから、また来て頂戴ね」

「はい」

俺はそう言って店の外に出た。

「彼女の笑顔はまるで太陽のようで、されど近づきすぎれば焼かれる運命^{さだめ}」

「ふに」

はつきりとわかった。いまこいつ「気持ち悪い」って言ったわ。

俺はうなだれつつも馬車の近くにいたペーターに近づいた。

「ペーター……」

「お!? な、なんだよ?」

前のおどs……前がんばりすぎたせいかな、ペーターはキョドっていた。

「偶にはヘタレもいいよね」

「は? お前何言って……」

「でも、俺は……俺は! 高潔なヘタレでありたい!」

「お前、頭大丈夫か?」

「さらばだ! ヘタレの王よ!」

「へ、ヘタレの王……」

俺はヘタレな訳じゃない、一步を踏み出せないだけだ

「ぷに」

今、ぷにが何を言ったかは想像に任せるとしよう。

お店番（後書き）

感想が来るとテンションが上がって連日更新するようになるから困る。

錬金術士への道―1

「わあー！ダメー！」

光る釜、叫びロロナさん、釜をかき混ぜている俺。

「レッツ爆破！！」

爆発する釜、しゃがみこんでいるロロナさん、吹っ飛んでいる俺。

なんで、こんなことになったんだっけ？

話は俺が2週間かけてアーランドに来たことから始まるんだ。

自転車に跨って意気揚々とやってきたんだ、どうなるかも知らずに

………

「1、2ヶ月ぶりってところか？」
「ふに」

村とアーランドを行ったり来たりしているせいで日付が曖昧になっているな。

「今は5月だったけか？」

「ぷに！」

合ってるらしい、なんで俺、ぷにに日付聞いてるんだろう……

「とりあえずアトリエだ、うん。行こう行こう」
「ぷにに」

自転車を押してロロナさんのアトリエに向かった。

「ロロナさん、いますか」

自転車を玄関の横に止めて、ドアをノックした。

「……？ いないのか？」

ドアをいくらノックしても反応がなかった。

「——ひあ！？」

突然、中から悲鳴と何かが落ちたような音とが聞こえてきた。

「……おじゃまします」

「ぷに」

若干悩んだが、とりあえず入ってみることにした。

いつも通り小奇麗なアトリエの中で、一番に目に着いたのは腰を押さえてソファにもたれかかっているロロナさんだった。

「うう、いたーい」

「ええと、大丈夫ですか？」

見かねて声をかけるが、まあ何があったかはだいたいわかった。

「わあ！あ、アカネさん！？トトリちゃんじゃなかったんですか！？」

「残念ながらそうですよ、とりあえず立ち上がってください」

俺はロロナさんに手を差し出した。

だって、いろいろ見えちゃってるんだもん。太ももとか太ももとか太ももとか。

「あ、ありがとう。うう、まだ痛い……」

「ソファで居眠りするからですよ」

「え？なんで知ってるの？」

「まあ、状況的にわかりますって……」

大方、ドアのノックが聞こえる↓トトリちゃんと勘違い↓転げ落ちる、って感じだろう。

「あはは、恥ずかしいとこ見せちゃったね」

「別に気にしてませんよ、わかったことですし」

主にあなたが天然であることに。

「あれ？　そういえば、アカネさんなんで敬語になってるんですか？」
「いや、まあ、ロロナさんが年上って聞いたんでこっちの方がいいかなと思って」

こないだの第二の川流れ事件の時は失念してたが、5歳上にタメ口は世間的にマズイ。

「そんなこと気にしなくていいですよ、アカネさんは私の弟子になるんだから」

「そういえばそんな約束も……でもだったら余計に敬語の方が良いんじゃないですか？」

「ううん、そんなことないよ。ちょっと師匠って呼んでみて！」

ヒートアップしてきたのか、だんだん敬語が崩れてきてる。まあ、こっちの方がやりやすいけど。

それにしても、なんで師匠なんだ？　てっきり先生って呼んでだと思っただが。

「ええと、師匠？」

「ううんと、もうちょっとだるそうで悪そうにしてみて、ししよっつて」

……悪そうってどんなん？　チンピラみたいな感じってことか？

「ししよっ、錬金術教えてくれよ」

「すごい！うん、イメージにぴったりだよ！」

もはや素の俺なんだけど、これってトトリちゃんと真逆なキャラだよね。

なんだろう、次は不良っぽい弟子が欲しいなってことなのか……。

「まあ、俺はこれでいいんですけど、それじゃあ師匠も敬語はなしにしてください……くれないか？」

「そうだね！私、師匠なんだもんね！」

こんだけ、えへへって感じの笑い方が似合う人は他にいないな、うん。

つかなんだ、ロロナ師匠は師匠って単語になんか思い入れでもあるのか？

「それじゃあ、さっそく教えてあげるね！」

師匠は棚から材料らしきものを取ってきて釜の前に立った。

「あれ？釜が二つ？」

釜の近くに来て前と違うことにやっと気付いた。前は一つしかなかった覚えがある。

「うん、トトリちゃんもここに来るからもう一個用意したんだよ」

「準備ってこれの事だったんですね」

将来的には俺もアトリエって呼ばれるものを持つことになるのかね。

「アカネ君がちゃんと錬金術使えるようになったら、もう一個置か

なきゃね」

「あはは、そうなるな」

かなりスペースが狭くなりそうではあるが。

「よし！それじゃあこの杖持って！」

師匠は俺に持っていた先端に水晶の様なものがついている木製の杖を渡してきた。

というか、理論説明なしでいきなり実技ですか、師匠マジパネエッス。

「それじゃあ、まずは簡単なものから教えるね。最初にこの二つを入れて」

そういつて師匠は脇におかれた机から俺になんかの根っこと水の入った桶を渡してきた。

確かこれはあれだ、マンドラゴラの根っこ。

トトリちゃんの採取の手伝いがこんなところで役に立つとは……

つか師匠、ちゃんと材料名言ってください。

先行きに不安を感じつつも釜の中に材料を入れた。

「うん、それでね、その後は釜をかき混ぜるの」

「ういっす」

杖を釜に入れて両手でぐるぐるとかき混ぜる。

「うん、良い感じ。あとはそのまま、ぐるぐるってかき混ぜ続けて」

「？　ぐるぐる？」

俺はその言葉のニュアンス通りに若干速度を緩めてかき混ぜた。

「あああ、違うよ！それじゃ、ぐくくるぐくくるだよ、もっとこう、ぐるぐるって」

「（わかるか！）ぐ、ぐるぐるっと」

とりあえず若干速度を上げて回してみた。

「それじゃあ、ぐるるんぐるるんだよ、もっとぐるるぐるるってしなきゃ」

レ、レベル高けえ。これでステップ1とか泣くぞ俺。

「こ、これでどうだ……」

「そうそう、そんな感じ！次は、その……青っぱい草。それをぱらぱらーって入れて」

「……………」

青っぱい草と言っても、机には3、4種類ほど草が置かれていた。俺はかつてこれほどまでに視覚という感覚をフルに使ったことがあっただろうか。

……草なんてだいたい全部同じ色だろ、どうしろと。

（思い出せ、思い出すんだ俺）

トトリちゃんはマンドラゴラの根っこを使った時、他に何を入れてたか……。

「……ぷに」

肩に乗っているぷにが目線を草の方に向けている、俺はその目線を追いかけた。

……そうか！マジックグラス！その草が正解か！

俺は草を手にとってそれを入れた。

「ふふ〜ん」

「ああ！それじゃあ、パラパラパラだよ！」

「え！？」

「ぷに！？」

途端に釜が光りだした。

「わあー！ダメー！」

……

……

「そしてこうなったとさ」

黒いススを被った俺とぷに、慣れの差なのか師匠は無事だった。

「ごめん、初対面の日のトトリちゃん」

『違うよ。爆発させたんじゃないくて、勝手に爆発したんだよ』

『それに、私は悪くないもん。ちゃんと先生に言われたとおりやってるんだから』

この言葉をまったく信じていなかった。そりゃあこんな教え方じゃあ爆発もするわ。

よくトトリちゃんは錬金術を使えるようになったよ……マジで。

「俺はもともと服が黒いからいいとして、ぷに……とりあえずゴーストモードになったらどうだ？」

「ぷに……」

ぷにが黒く変色した、これでちよつとはマシになったか。

ただ一番重症なのは……

「うう、トトリちゃんは分かりやすいって言ってくれたけど、やっぱり私教えるの向いてないんだ……」

師匠、それ絶対おせじだわ、違った場合トトリちゃんの天才さに俺が泣くから。

「師匠、大丈夫だって、次はできるようになってるからさ」

「ほんと？」

しゃがんだ師匠からの上目遣い……いいね！

「クックック、見ていてください」

ちなみに今の笑いはフラグじゃないから、うん、そういうことにし
といて。

俺は杖を握りなおしてもう一度釜の前に立った。

（波長を合わせるんだ……そう、師匠の思考をトレースするんだ……
…）

天然は素でやっているから天然と言う、しかーし！なりきれない訳
ではない！

「やるぞぷに！」

「ぷに！」

黒ぷには爆発にご立腹なのかやる気満々だった。

「マンドラゴラの根っこと水を入れて」

釜に入れた俺はそのまま杖でかき混ぜた。

「ぐる、ぐると」

ここまでは流れ作業、一度やったことを間違えるほどバカではない。

「んで、青っぱい草もといマジックグラスを……」

さっきのはパラパラパラらしいので、師匠的なぱらぱらーっていうのは……

「考えるな、感じるんだ」

偉大なる先人の言葉を口ずさみつつ俺は草を手にとった。

「ぱらぱらー」

「ぷに」

横でぷにがごとりと息をのんだ。

「……………」

爆発は……ない！

「よし！」

「すごい！アカネ君、本当にちゃんとできてる！」

それまで横で見ていた師匠が歓声を上げた。

「でもまだ油断しちゃだめだよ。もうすぐぽんっ！ってなるから、それまではぐるぐるし続けて」

「……はい」

「……ぷに」

ゲームでさ、残り一機でトラップをクリアしてさ、その後に初見殺しが待ってた感じ。
誰かこの気持ちをわかってくれないかな……ぽんっ！か、まあなんとかなるだろ

俺は戦々恐々としつつも釜をかき混ぜ続けた。

ぽんっ！

「おお……」

ホントに、ぽんっ！だった。

「これで、できたんだよな？」

「うん、後は掬うだけだよ……できてよかった、本当によかったよー……ううっ」

「わ、な、なんで泣いてるんだよ？」

「だ、だって、いままでいろんな子に教えてきたけど、ちゃんとできたのトトリちゃんだけだったから……」

今の俺にはその言葉の重みがはつきりとわかる。

俺自身もよくできた、感動した！って言いたい気分だもん。

「アカネ君、最初に失敗しちゃったから、私ってやっぱり教えるの下手なのかなって……」

「ぷにに、ぷ——！？」

「黙ってなさい」

ぶにが抗議しようとしたので空気を読んで止めといた。
これが師匠じゃなかったら、俺も一緒になって抗議してたろうけどな。

「でもでも、アカネ君ちゃんとできてよかったよ」

「……………死んでもいい」

師匠が後ろから泣きながら抱きついてきた、ここで死ぬるのなら俺の人生に悔いはない……。

いやー、こんなところクーデリアさんに見られたら死ぬかもしれねえな……。

「何やってんのよあんたたちは……」

「幻聴が聞こえてきた、師匠、とりあえず離れてください」

「あ、クーちゃんだ。聞いて聞いて、アカネ君ね私の弟子になったんだよ！」

師匠は俺から離れるとクーデリアさんの所に駆け寄った。

……別に名残惜しいとは思ってないでござるよ。

「わかってるわよ、あんたたち全然気づいてなかったみたいだけど、私最初からいたわよ？」

「え？ほんとに？全然気づかなかったよ」

「まったく……それにしても、アカネ」

クーデリアさんが俺を呼んだ。死刑宣告にしか聞こえない。

「はい……何のご用でしょうか……」

「ええと、その、……頑張ったわね」

クーデリアさんが慈愛に満ちた目で見てきた、ああ、そういうことですか。

「……ぷにも頑張りましたよ」

「ぷに」

「ええ、二人ともよくやったわね」

「うん！二人とも頑張ってたよ！私も教えるのに自信付いちゃった」

そんな自信は早々に捨てて来てもらいたいのだが、この笑顔の前でそんなこと言えるほど無粋ではない。

クーデリアさんも非常に微妙な顔をしていた。

「それじゃあアカネ君、トトリちゃんが来るまでに頑張っているようにしろね！」

「……………はい」

チラッとクーデリアさんを見ると可哀相なものを見る目で見られた。

「それじゃあ、今度は中和剤を作ってみよう！」

「おー」

「ぷに……」

俺はまだ昇り始めたばかりだ、この果てしない鍊金坂を……。

錬金術士への道－1（後書き）

珍しく同じ題材で話が続くっすよ。

錬金術士への道―2 錬金術は爆発だ

あれから1週間が経ったある日のアトリエでの出来事。

「邪魔するわよ」

実に一週間ぶりにクーデリアはアトリエを訪れた。

「あー、クーでりあさんじゃないですか」

それを迎え入れたのはアカネの気の抜けた声だった。

「みてくださいよ、クーでりあさん。おれー、れんきんじゅつすごいうまくまりましたよ」

「……シロ、こいつ頭大丈夫？」

「ぷに」

「このくすりをですねージャボーン！って入れてーぐるるーってかきまぜるんですよ」

アカネは試験官に入った薬を釜に入れてかき混ぜ出した。非常に頭が悪そうだが、その釜に爆発の兆候はなかった。

「適性のない奴が一週間ロロナの指導を受けるところなのね……」
「ぷに」

熱くなった目頭を押さえるクーデリアであった。

「シロ、楽にしてあげなさい」
「ぷに！」

いつものお約束とぷにがアカネにダイブしていった。

「ぐぼっ！」

後ろからの攻撃を受け、窯の縁をもって耐えるアカネであったが、無情にも釜は光り始めた。

「あれ？俺は何をとって……うえええー！」

アカネはゼロ距離爆撃を受けて後ろに吹っ飛んで行った。

「な……ぜ……？」

……
……

「俺！復活！」

「元に戻ってくれて安心したわ」

「ぷにー」

俺は理不尽な爆発から目を覚まして、クーデリアさんと会話していた。

「俺……ここ一週間の知識の記憶はあるんですけど、行動の記憶がないんですよ。どうしてなのでしょう？」

「あはは、無理しすぎたんじゃないのかしら……」

「ぷに……」

なんか今日のクーデリアさんにはいつもの勢いがない、なんか目逸らしてるし。

「なんか怪しいですけど、まあいいです。ところで師匠はどこですか？」

「私もロロナに会いに来ただけど、いないみたいだし……また今度来ることにするわ」

そう言ってクーデリアさんはアトリエの外へ出ていった。

「とりあえず……いろいろ作ってみるか！」

「ぷに！」

作ったという記憶はあるのに実感がない、大分ホラーな体験だ。

「よし、まずはパイから作ってみるか」

「ぷに」

……あれ？

「俺は何を言ってるんだ、錬金術でパイを作れるわけがない」

「ぷに？」

ぷにが頭に疑問符を浮かべている。

確かに作ったという記憶はあるし、作り方も覚えているけど……。

「と、とりあえず作ってみるか」

「ふに」

俺は小麦粉と水、調味料として岩塩を用意した。

「俺が思うに錬金術で作れるものには、普通の人でも作れるものがあると思うんだよ」

「ふに？」

俺は材料を入れて釜をかき混ぜつつ、自分なりの錬金術の解釈を話した。

「このパイだって材料は普通のパイだし、最初に作ったヒーリングサルヴだって薬師の人に渡せば作ってもらえるはずさ」

「ふに？」

「つまるところ、過程が違うだけで初めと結果が同じって事だ。不思議なマジックアイテムなら違うだろうけどな」

「ふに」

ふにが珍しく俺のことを感心したように見てきた。

「ふふん、いまさら見直しても遅いのだよ」

「ふに」

……
……

「ああ、なんか体が鈍ってる気がするな。俺ってしばらく運動してなかったりするのか？」

「ぷに」

肯定らしい。つまり俺は一週間フルで錬金術の勉強してたってことか……。

「今の俺の錬金術をレベルで表すとどんくらいなんだろうな？」

「ぷにぷに」

「2レベって低いな、おい」

肩乗りぷにと会話しつつ、俺は釜をかき混ぜ続けた。

「じゃーん！見て見てー！」

突然に後ろから師匠の大声が聞こえてきた。

何だと思って振り返ると、トトリちゃんも一緒の様だった。

ああ、トトリちゃんのこと迎えに行ってたのか。

「あれ？アカネさん、何してるんですか？あれ？窯も二つに増える……」

トトリちゃんが釜をかき混ぜている俺に近づいてきた。

「錬金術でパイ作ってるところ」

「ええ！？アカネさん、錬金術使えるようになったんですか！？」

予想以上に驚いとる、まあ先輩がいきなり錬金術始めたら驚くわな。

「あの、ロロナ先生に教えてもらったんですよね？」

「そうだよ！アカネ君はね、私の弟子2号なんだよ！」

「へ、へえ、そうなんですか……」

あれ？あんまり嬉しくないようなご様子……はっ！そうか！

「大丈夫だトトリちゃん、俺は見事に耐えきったからな」

「え？な、何をですか？」

「師匠の指導さ、トトリちゃんも教えてもらっただろう」

あの過酷な日々、きつとトトリちゃんはそれを思い出していたのさ！

「あ、はい。とてもわかりやすかったですよね」

「……そうね」

「えへへ、そんなに褒めないでよ」

これって素なのか？でも無意識毒舌のトトリちゃんなら、ここで本当の事言うだろうし……。

「うーむ」

「あ、アカネ君！手止まってるよ！」

考え込んだせいで、窯をかき混ぜる手が止まっていたようだ。

「あー、悪いな師匠」

「アカネさんは先生の事、師匠って呼ぶんですね」

「あー、うん。本人たっての希望だな」

師匠って結構形にこだわるタイプの人だからな、トトリちゃんを正とするなら俺は負ってことだろう。

「そうなんですか、先生じゃないんですね」

「？ ああ、そうだけど？」

「えへへ、ならいいです」

何か嬉しかったらしく、トトリちゃんはいつもの笑顔に戻っていた。

「お！できたできた」

俺は釜の中に手を突っ込んで、完成品を取り出した。

「プレーンパイの完成だぜ」

「ぷに」

見事に一般家庭でも食べられるようなパイが出来上がった。

「わあ、アカネさんすごいですね」

「うん！ たった一週間でここまでちゃんとできるようになるなんて！」

主に意識のない間の俺の頑張りのおかげだな。

いったいどれだけ過酷な事をしていたのかは、今となっては分からない。

「でもね、アカネ君」

師匠が厳しい目で俺……いや、俺のパイを睨みつけていた。

「私はパイに関してはうるさいんだから！、おいしいかどうか、私が食べるまでは分からないんだよ！」

「それじゃ、お茶の用意しますね」

「あ、私も手伝います」

パイをぷにに乗つけて、俺とトリちゃんはお茶の準備を始めた。

「……うう、シロちゃん。弟子の二人が冷たい……」

「ぷに」

……

……

……

「わー、おいしかったー」

「お粗末さまです」

どうやら師匠からは合格をもらえたようで、とても満足していらっ
しゃった。

「よし、お腹もいっぱいになったし、早速錬金術を始めよう。弟子二人と一緒に錬金術使うなんてワクワクするな」

「一緒についてどういことだ？」

「ふっふっふ、前から考えてたんだよ。錬金術と一緒に使ったら
どうなるんだろうって」

「はあ……？」

つまり3人一緒に釜をかき混ぜると言うことだろうか？
やり辛そうだな……。

「はい！それじゃあ、集まって」

俺とトトリちゃんは師匠の後を追いか釜の前に立った。

「あれ？俺、師匠の杖借りてるんだが……どうしたらいいんだ？」

「あつ、そうだった！ちよつと待ってて！」

そう言うとき師匠は釜の横にある箱から麻袋に包まれた細長い何かを取り出した

「アカネ君がこんなに早く錬金術使えるようになるなんて思わなくて、渡すの忘れちゃってたよ」

師匠はそう言うとき、袋から新品の杖を取り出した。

杖の見た目は、先端に丸くて青い水晶が付いていて、それを竜が抱きかかえているという物だった。

……なんとなく、ドラクエ臭を感じる。

「はい、これでアカネ君も立派な錬金術士だね」

「ああ、ありがとう。いつか自分のアトリエも手に入れて本当に立派な錬金術士になってみせるさ」

「うん、あとねあとね。もうひとつプレゼントがあるんだよ！」

師匠はまた箱の中を漁り、なにか衣装の様なものを取り出した。

「じゃーん！」

「……なんすか、それ？」

「うわあ……」

「ぷに」

トリちゃんも若干引いていた。こればかりは俺も引くわ。

だって、師匠の持っている衣裳って明らかに……。

「執事服？」

「うん！私がちょっと手を加えたオリジナルだよ！」

「どうして、執事服なんだ？」

「やっぱり錬金術士なんだから、こんな感じの格好の方がいいかなって」

錬金術士ってなんだっけ？分からなくなってきちゃった。

しかも手を加えたって……袖の部分にひらひら付けて、すその部分を腰まで伸ばして外套っぽくしてあるし。

もはやこれ、執事服じゃなくなってるよ。

厨二病患者って思われちゃうよ、こんなの着たら。

「ま、まあ、その内着てみるわ」

「うん、今度見せてね」

「あははは……」

こんなの着てるの見られたら、もう外で歩けなくなるな。

「よし！それじゃあ気を取り直して、早速始めようか」

「何を作るんですか？」

「そーだなー、うん、最初は中和剤作ってみようか」

「おーけー」

材料は液体だけなので、まあ失敗する要素はないだろう。

「ぐるぐるぐる」

「ぐ、ぐるぐる」

「……ぐるぐる」

材料を入れてぐるぐるし始めた。

立ち位置的には左から、師匠、トトリちゃん、俺の順番だ。

……ぐるがゲジュタルト崩壊を起こしそうです。

数分程度3人でぐるぐるしていると、反応がおこった。

「……パイか？」

「……パイだね」

「……パイですね」

「ぷにゅ？」

中和剤を作ってたら、パイになった。訳が分からん……。

「ちょっと、俺抜いて二人でやってみたらどうだ？ うまくいくかもしれない」

「そ、それじゃあもう一回……」

さきほどと同じように二人でぐるぐるしている。

また数分程度で反応が起きた。

「また、パイになっちゃった！」

「ど、どうしてですか……」

「ぷに、うまいか？」

「ぷに！」

残飯処理係のぷにがいるおかげで、パイは何とかなっているが……。

「そ、それじゃあ、今度は私が抜けてみるね」

「うんじゃ、やってみるかトリちゃん」

「はい！」

ワンモアチャレンジ、3度目の正直となるだろうか。

「……………」

数分かき混ぜると反応が起きた。

「あれ？できた？」

「本当だ、できてますね」

見事なまでに中和剤ができていた。

「つ、つまり！私と一緒に錬金術を使うとパイができちゃうんだね。す、すごい、発見だね！」

「た、確かにある意味すごいかもしれないけど……」

「あ、あははは……」

師匠は必死に明るく振る舞ってはいるが、俺とトトリちゃんは微妙な反応だった。

「うう、私はやっぱりダメな先生で師匠だったんだー！」

「ちょ！師匠！？」

「せ、先生！どこ行くんですか！？」

師匠は涙目になって、アトリエの外に出ていってしまった。

「……行っちゃいましたね」

「まあそのうち戻ってくるさ」

俺は、そう割り切って先ほど作った中和剤を掬おうとした。

「？ 何かおかしい気が？」

「ぷに？」

一言では言えないが、前に作った中和剤と何か違った。

「どうかしたんですか？」

トトリちゃんが近づいてくる。

「いやー、なんだかなー？」

俺は疑問を感じつつも中和剤を掬うためにビンを入れた。

「……ジーザス」

ビンを釜に入れた瞬間、中の液体が光り出した。

「トトリちゃん……グッバイ」

手を引っ込めた瞬間に激しい音と共に爆発した。

（これで、今日は2回目かー）

そろそろ吹っ飛ぶのにも慣れてきた。

アカネ作成・錬金術レポート

ロロナ＋トトリ＋アカネ↓パイ

ロロナ＋トトリ↓パイ

トトリ＋アカネ↓爆発物

ロロナ＋アカネ↓？ 要検証

科学者と錬金術

「……マジでできるとは思わなかった」
「……ぷに」

俺は釜の中から赤い筒に導火線がついた、いわゆるダイナマイトを取り出した。

「フラムって名前だけど、どう見てもダイナマイトだよな」
「ぷに？」

「まあ、ぷには知らんか」

「ぷにー」
「ふむ、仕上がりの方は……」

俺は手首をひねり、フラムを隅々まで見てみる。

「わあ、それアカネさんが作ったんですか？」

そうしていると、ソファで本を読んでいたトトリちゃんが驚いたような声を出して近寄ってきた。

「うん？ まあそうだけど」
「そうなんですか……」

トトリちゃんは若干顔を曇らせてそう言った。

俺なんかしっちゃったか？

「あー、どうしたんだ？」

俺がそう言うのとトリちゃんは、あたふたとしながら質問に答えてきた。

「えっと、その、アカネさん錬金術うまくなるの早くて羨ましいなあって思ってた……」

「あー、なるほど」

確かに、俺みたいなのが数年の努力に追い付きそうになったら悔しいよな。

まあ、でもなあ……。

「安心しろ、俺が作れるのはこいつだけだ」

「え？」

「実際には、こないだぷにレベル判定3のゼツテルを作れるようになったくらいだな」

「ぷに」

ちなみにぷにレベル判定とは、ぷにが鳴いてだいたいの難易度を教えてくれるという優れ物、俺の相棒は本当に万能ですな。

「ちなみにフラムだとレベル13だそうだ」

「ぷにに」

「え？それじゃあ、何で作れたんですか？」

「よくぞ聞いた、まずはこれを見るがいい」

俺は机の上から前回作った錬金術レポートを取って、トリちゃんに渡した。

「アカネさくせい、れんきんじゅつればーと？」

「その通り、とりあえず読んでみてくれ」

俺がそう言くと、トトリちゃんはレポートを読み始めた。

まあ、レポートと言ってもただの箇条書きのメモみたいなものなのですぐに読み終わったようだ。

「アカネさんとわたしが錬金術を使うと爆発物ってこないだのあれですか？」

「ああ、あの爆発中和剤だ。二度とやらん」

「あはは……。もしかして、アカネさんは爆弾を作るのが得意なんですか？」

「いや、別にそう言う訳じゃないんだけどな……」

化学の点数なんていっつもボロボロだったし……。

「まあたぶん、爆弾が得意っつーのが俺の特性なんじゃないかね」

「そうなのかもしれませんね」

「師匠は元からパイ作りが上手かったらしいから分かるけど、俺のはどうしてなのかさっぱりだしな」

もうこれはあれだ、将来特撮とかで爆発演出ができるようになるって考えればいいさ。

……正直考えるのが面倒なんですけどね。

「ところで、この最後の項目ってまだ埋まってないんですけど」

トトリちゃんは俺にレポートを向けて最後の欄を指さした。

最後の項目は『アカネ＋コロナ？要検証』と書いてある。

「……実は一つの恐怖と言うか、危険があってな」

「？　なんですか？」

これが上書き系ならいいのだが、融合系だと大変なことになる。

「トトリちゃんというストッパーがなくなり、師匠のパイと俺の爆発物が合わさって……」

俺はそこで一旦言葉を区切った。

「爆破パイ……とか」

「うわあ……」

俺がそれを言うとトトリちゃんの顔が青ざめた。

「知らず知らずに食べて、内側から……」

「こ、怖い事いわないでください！」

言ってて自分でも気分が悪くなってきた。

「……やめといた方がいいよな？」

「そ、そうですね……」

「ふに〜」

今の想像を忘れて、俺とトトリちゃんは自分のやることに戻って行った。

「ん？どーぞー」

俺とぷにが昼寝をしていると、扉がノックされたので、玄関の前に向かった。

「お邪魔するよ」

「あれ？どうしたんだこんな所に」

そこには見慣れた白衣姿のマークさんが立っていた。

トトリちゃんも気づいたのか作業を止めてマークさんに近づいた。

「あれ？マークさんじゃないですか」

「君は物覚えが悪いようだねえ、僕の呼び方を忘れてしまったのかな？」

「あ、そうでした。ええと……いのーのてんさいかがくしゃぷろへっさまくぶりやりや……」

この舌っ足らずさ何度聞いてもかわいい。

マークさんを見るたびにこれを見れるならマークさんに忠誠を誓うレベルだ。

「ごめんなさい、マークさんって呼んじゃダメですか？」

「いいよ」

「あっさり!？」

「うん、実能的確で分かりやすい呼び方だ。これからは他の人にもそう呼んでもらうでしょう」

「……………」

俺も何度かマークさんって呼んでただけだなー。何？聞いてみれ

ばよかったってこと？

つか、つまりあのトリちゃんはまだ二度と見れないということか……。

「……まあいい、で？今日はとういうご用なんだ？」

まったくどうでもよくはないが。

俺がそう言うのとマークさんは途端に顔を引き締めて俺たちに言い放った。

「今日はお二人にライバル宣言をさせてもらうよ！」

「ライバル？」

「宣言？ってなんだそりゃ？」

なんでいきなり友人からライバルにクラスチェンジするんだよ、バトル漫画かよ。

「お嬢さんはともかく……問題は君だよアカネ君！」

「俺？」

「そうさ、君は共に科学を極めようとする同士だと僕は考えていたというのに、錬金術なんて魔法に魅入られてしまうなんて」

「いや、魔法って……」

俺がツツコミを入れる前にマークさんは二の句を継いできた。

「古今東西、魔法使いと科学者は敵対する定めにあるのだよ」

「いや、だから魔法使いじゃなくて……」

「だからこそ、君たちと僕は敵同士となる運命なのさ」

「違うっつーの！」

マークさんの穴だらけの説明を止めるために俺は声を張り上げた。

「なにが、違うのかな？」

「いや、だからな、とりあえず……トトリちゃんお願い」

「え？ あ、はい」

今度投げっぱなしジャーマンでも覚えようかな。

「そ、それじゃあ説明しますね」

そう言ってトトリちゃんは錬金術は魔法ではないことを説明した

………

「なるほど、つまり錬金術は学問で学べば誰でも扱える代物だと」

「そういうことだな、わかったか？」

「君は何も説明してなかったと思うのだけどね」

マークさんの一言がなければ、途中で説明を交代したように見えるかもしれない。

「しかし、なら何故この国に錬金術師というのは3人……いや、アカネ君も入れて4人しかないんだい？」

「それはですね……」

「ここばかりは俺が説明しよう」

つい数週間前にあの辛い時間を過ごした俺にとってこの役だけは譲れない。

「ロロナ・フリクセル師匠は！教えるのが！下手！なんだー！」
「な、なるほどね」

俺の魂の叫びにあのマークさんでさえ若干引いていた。
本当なら小一時間話したいところだが、今回は我慢しておこう。

「指導者不足か……それはどの分野にも共通して言えることだね」
「ですよー」

「わ、わたしにはわかりやすかったですよ」
「……やっぱり」

前々からこの子は素で師匠の教え方を褒めてると思ったが、ここに来て確信した。

トトリちゃんは天才肌です。

「しかし、そうか……てっきり魔法使いの類かと思っていたけど、
実際はこの国の自称科学者たちとそう変わらないのか」

「あれ？でも、錬金術と違って機械は結構いろんな所で見ますけど」
「それは、あれだ。使えるってだけで構造をしろうとしていない……
…だっけか？」

「手短に言うとなくなるね、いや、しかしすまなかったね」

そう言うとマークさんは姿勢を正してこちらを真っ直ぐと見つめてきた。

「とにかく、全ては僕の誤解だった。すまない、この通りだ」

マークさんが頭を下げて謝ってきた。

「そんな、別に謝らなくても、わたし全然気にしてませんから」

「俺もだ、頭をあげてくれ友人が頭下げてもいい氣しないからな」
「それは助かる、これから同志となるのに最初からぎくしゃくした関係ではやりづらいからね」

「ん？同志？なぜに！？」

「何でも何も、さっきそこのお嬢さんが科学と錬金術、分野は違えど目指す方向は同じと言ったじゃないか」

「え！？い、言いましたっけ？」

（たぶん『……………』の説明中に含まれてたんだよ）

「今、神の声が聞こえた」

「……君は本当に魔法使いの類ではないのだよね？」

「今だけは自信が持てない」

これが噂に聞くメタメタ心靈現象とかいう奴だろうか……。

「こほん、お嬢さんは困ったことがあったらいつでも声をかけてくれてかまわないよ。その時は全力で手伝いをしよう」

「え、そ、それは助かりますけど、いいんですか？」

「もちろんさ、それじゃあいつでも呼んでくれたまえよ」

そう言ってマークさんはアトリエの外に出ていった。

「マークさんっていつも突然ですよね」

「天才ってのはみんなあんなもんじゃないか？」

あんな性分じゃなかったら俺の自転車なんて完成させようがないだろうし。

「ま、なんだかんだで平和に終わったからいいじゃないか」

「そうですね」

「平和が一番だな」

本当に最近は爆発以外平和だ。

冒険者の仕事も楽しいけど錬金術師もいいかもな……。

科学者と錬金術（後書き）

更新再開です、待ってた方すみませんね。

でこぼこ討伐隊―前編

俺が錬金術を習ってから2ヶ月経った7月のある日のこと。

俺は調合依頼の報告をするために、ギルドへとやって来ていた。

「フィリーちゃん、納品に来たぜ」

「あ、はい。どうぞ」

俺はカウンターの上にポーチから取り出したフラムとゼツテルを置いた。

「今回は自信がある、期待していいぞ」

「それじゃあ、失礼します」

フィリーちゃんはフラムとゼツテル、それぞれ2個と3枚を手にとって出来栄を見ている。

今回調合依頼の報告に来たのは3回目、結果はいまいちよろしくない。

しかし、ゼツテルを作れるようになったのは1ヶ月前、流石に良い評価をもらえるはずだ。

「ど、どうでしょうか？」

「え、えっと……」

フィリーちゃんの目が明らかに泳いでいるんだけど。

「ふ、フラムの出来はいつも通りすごい良かったですよ!」
「ゼッテルの方は……?」

そう聞くと、フィリーちゃんは困った顔をして言葉を詰まらせていた。

必死に言葉を選んでるみたいだけど、結果は明らかだな、うん。

「あ、う……ちょ、ちょっとだけ報酬引いておきますね」

「ガッテム!」

「ま、前よりはよくなってますよ」

俺の声に驚きつつも俺を慰めてくれるフィリーちゃんはできた子だよ。

つか、上達遅いのは師匠のせいだろ、できたての弟子放つとしてトリちゃんと村に行くなんて……。

きっとトリちゃんも同じだったんだろうなあ。

「うう、また来る」

「が、がんばってくださいね」

フィリーちゃんの励ましの声を背に浴びつつ、俺はギルドの扉に向かった。

「……うん?」

俺がふと横を見ると、ギルドの柱に掛った掲示板の前に見慣れているが、見慣れないコンビの二人がいた。

若干気になったので、俺は二人に近づいた

「よ、珍しい二人組だな」

「あ、先輩だ。久しぶりだな」

「誰かと思えば、またあなたなの……」

後輩君にミミちゃん、この二人の接点ってトトリちゃんぐらいしかないよな。

「で、何見てたんだ？」

俺は二人の後ろに立って掲示板を見た。

「これだよ、これ」

「うん？」

『グリフォン及びウオルフの討伐隊募集』

「はあ、なんで俺まで……」

俺はぷにを頭に乗せて、グチグチと街道を歩いていた。

「それもこれも、あの募集要項のせいだ……」

なんだよ、ブロンズ以下はシルバー以上を最低一人メンバーに入れることって。

あれか？前に頑張ってシルバーになった俺へのあてつけか？

「そもそも、なんでお前らまだブロンズなんだよ……」

トトリちゃんなんて、もうあと数十ポイントでシルバーだってのに。

「さつきから、うっさいわね。今回の討伐で成果を上げればランクが上がるのよ」

「俺もあと少しでランクアップなんだよ、頑張ろうぜ先輩」

「はあ、仕方ない。先輩の務めってことだな」

まあ、所詮はグリフォンにウオルフなんて狼風情。

昔の俺ならいざ知らず、今の俺の装備なら余裕だろう。

ゴースト手袋にメリケンサックおまけにフラム、最強の相棒ぶに、こんだけあれば楽勝さ。

「そもそも、何であの程度の奴らに討伐隊編成したんだ？」

俺がそう言うのと、ミミちゃんが俺の事を冷たい目で見てきた。

「な、何だよ？」

「別に、ただこんなのが自分より上のランクだと思おうと悲しくなっただけよ」

「……それは喧嘩を売ってるのか？残念だけど買うほどの余裕はないぞ」

別に負けるかもと思ってない、この後の事を考えて力を温存しているだけだ。

「あれだよ、先輩。確かウォルフがグリフオンの縄張りに入って街道が使えなくなってるから……だっけか？」

「簡単に言えばそうね。あなたよりも、この田舎者の方が物覚えは良いみたいね」

「へへ、まあな」

後輩君それ褒められてないから、微妙に貶されてるから……俺含めて。

「で、確か俺たちの担当区域はウォルフだっけか？」

「そうね、あくまで多いだけでグリフオンも多少はいるでしょうけど」

「グリフオン……昔は強敵だった」

今となってはぷにダイブを使えば二撃の下に葬られる存在となってしまうている。

「敵区域に近づいたら、作戦決めるために少し休まないか？」

「そうね、偶にはまともなことを言うじゃない」

もはや遠回しにバカにすることすらなくなってきたよ。

しばらく歩いて敵のエリアに近づき始めたあたりの街道のわきで俺

たちは座り込んでいた。

「んじゃ作戦を決めるとするか、俺リーダーな！とか絶対に言うなよ」

「わ、わかってるって」

この子は油断も隙もないからな。まったく……

「リーダーは俺に決まってるだろうが」

「……リーダーがあなたで成功するとは思えないのだけど」

「ぷに！」

「先輩って作戦とか立てられるのか？」

「お前ら……」

何で総じて俺の事をバカにしてきてるの？

言っとくけど知識的な頭の良さでは俺の方が圧倒的に高いんだからな！

俺は場の空気を変えるために咳払いを一つして自分の作戦を話し始めた。

「オホン！いいか、まず第一にだ。モンスターに当たる際は基本的に俺かぷに入れた二人組になること」

「？　あなたとシロの方が連携ができるんじゃないのかしら？」

「ぷに」

「まあ、確かにそうだけど……お前ら二人だとなあ」

俺は二人の顔を交互に見た。

「確かにあんまり一緒に戦った覚えがないんだよなあ」

「貴族の私が田舎者と連携できるほど行動する訳ないじゃないですよー。」

「だから、とりあえず間接攻撃持ちかつ超近距離派の俺とぷにを分けておくんだよ。そうすれば多少は上手く行動できる」

「悔しいけど理に適ってるわね……」

「後は敵全員をなるべく視界に入れつつパートナーを狙ってる間に攻撃してればそこそこ戦えるはずだ」

「まあ、当然ね」

「ぷには最初は温存して危ない場面でダイブを使ってくれ」

「ぷに！」

「……どうだ？俺のリーダーとしての素質は？」

「心の奥では納得できないけど、一応認めるわ」

「ぷに」

「でも、先輩って意外とちゃんと考えてるんだな」

最近俺への後輩君の評価が低くなってる気がする。

ちなみに俺はほとんど考えていない、某狩りゲーの時の定石の戦い方を言ったただけだ。

ただ、こっちに來てからこの戦い方で失敗した覚えはないので大丈夫ですよ。

「それじゃあ、行きますか」

「ぷに」

俺はそう言い、ぷにを頭に乗せて立ち上がった。

「ここからだ、こっちの方向ね」

続いてミミちゃんと後輩君も立ち上がり、俺たちは街道を外れた林の方に向かった。

この時は知らなかった、まさかあんなことになるなんて。

「今フラグ立った」

「ぷに？」

でこぼこ討伐隊―前編（後書き）

まさかの二部作、ガチバトルできるといいな！。

でこぼこ討伐隊―後編

「お、いたいた」

俺たちが林に入って数十分歩いた所で大分開けた場所に出た。そこには狼、俗に言うウォルフが4匹で行動していた。

「他の奴らが来る前に叩くとするか、編成は俺とミミちゃん、ぷにと後輩君で2匹ずつな」

「ぷに」

「了解よ」

「わかった」

俺はメリケンサックを手には装備し、手袋とフラムがポケットに入っていることを確認した。

「よし、準備は良いな。……行くぞ」

俺が小声で合図を出して林の中から左右に分かれて駆け出した。

「――グォ!?!」

奴らは俺たちに気づいたようで、うまいこと2頭だけがこちらに駆けてきた。

距離は大して開いていない、ならここは……。

「俺が止めるから、援護を頼む!」

「わかったわ!」

俺は走りながら指示を出した。

残りの距離は5、6歩程度、俺はメリケンサックのグリップを握りしめて拳を作った。

既に奴らの攻撃範囲内、俺は攻撃に対して身構えた。

「ガウ！」

「フッ！」

俺に向かって飛んで来た一頭の突撃を左に2度ステップして避ける。

「ガアア！」

「甘めえ！」

時間差で俺の首めがけて噛みついて来た一頭の突撃を先ほどよりも小さく左にステップしてかわす。

同時に右の拳を固めて、攻撃が空を切った奴のガラ空きの下っ腹にアッパーを振り上げた。

「ガッ!？」

きれいに決まったアッパーを受けて、奴は斜め後ろに小さく吹っ飛んだ。

ここまでは完全にいつもウォルフを倒している時と同じ流れだ。

「グウルルルル」

受け身を取れずに地面に投げ出された奴は、ふらふらと立ち上がりながら近づいてくる俺に向かって唸り声をあげた。

「悪いね」

奴が体勢を完全に立て直す前に俺は足を振り上げ、そのまま全体重を掛け真っ直ぐ奴の首に振りおろした。

「――グガッ!？」

足には骨を砕く嫌な感触、まあ慣れたけどね。

トトリちゃんなんて、倒した後普通にモンスターから材料剥ぎ取るんだぜ。

流石に俺もあの行為をやるのは慣れない。

「ミミちゃんの方はどうだ？」

最初に避けた一頭を相手にしているはずのミミちゃんの方を見た。

「もう終わったわよ」

「流石だな」

近づいてくるミミちゃんの後方には無残にも両断されたウォルフが転がっていた。

「て言うか、あなた自分で常にモンスター全体を見渡せとか言っていなかったかしら？」

「君を信用してのことさ」

基本的に俺は一体しか相手にできないので、必然的に避けたのは後ろに回すことになるのだ。

だから一応後ろの人は信用しておく、決して自分の言葉を忘れてい

た訳じゃあない。

「あいつらも終わったみたいだな」

俺が左を向くとぷにと後輩君がこちらに歩んで来ていた。

「――ッ!？」

途端、二人に影が降りた、上を見るとグリフォンが二頭、いや三頭が上空を旋回していた。

「全員! 林に逃げるぞ!」

「クッ、仕方ないわね」

流石のミミちゃんもプライドよりは安全性の方が大切なようだ。
俺とミミちゃんは林の方に逃げだした。

「ッ!？ おい、お前らもとつとと逃げろ!」

何故か林の方を向いて立ち往生していた二人に俺は大声で指示を出した。

「せ、先輩! まずい!」

「……は?」

じりじりと後ろに下がっていく二人の前には、林から顔を出す数頭のウォルフがいた。

「マズイ……」

頭の中が真っ白になる、他の担当区域の奴らは何をしてるんだ、ここにこんな数集まるなんて。

上空のグリフォンだけでも厄介なのにまさかウォルフまで来るとは。

「こ、こっちだ！こっちに走れ！」

俺は武器を外して右手をポケットに突っ込み、フラムを一本取り出した。

後輩君はぶにを抱えて、俺たちに向かって走ってくる。

それを追ってくる、5頭のウォルフ。高度を下げてきたグリフォンたち。

「フラム！」

俺は導火線の先を擦り火を点けて、ウォルフの群れに向かって投げつけた。

火を点ける手間のかからない不思議な導火線に今初めて感謝した。

投げつけたフラムは後輩君の頭を越えて群れの一頭の頭上で爆破した。

そこまで大きくない爆発は、周囲の一頭も巻き込んだ合計二頭を葬った。

「よし！」

キエエエー！

喜んだのも束の間、グリフォンの一頭が後輩君に向かい上空から真

っ直ぐに降下してきた。

残り数十歩、俺とミミちゃんはなんとか援護しようと駆け出した。

「ぷに！」

ぷにが一声鳴くと、後輩君の頭の上から降下してくるグリフォン目がけてぷにダイブを繰り返した。

「ぷに！？！」

「キエエエー！？！」

上空でぶつかり合う二頭。グリフォンはカウンターをもろに受けて、地面へと落ちていった。

ほぼ相打ち、流石のぷにも助走なしでの攻撃は無理があったようで大分ダメージを負ってしまったようだ。

「二人とも、とりあえずウオルフからだ！」

「わかった！」

「了解したわ！」

地面に伏しているぷにを守るために俺たちは、平行に並んでいるウオルフを迎え撃つ。

俺は左ポケットから素早く手袋を取り出して、何も付けてない右手に装着した。

当然既に奴らの制する範囲だが、身体能力が一時的に向上している俺なら……。

「フンッ！」

俺は前に小さく飛び、着地と同時に身を沈め、腕を地面すれすれまで近づけながら突き出した。

「ガッ!？」

左の一頭を後方に弾き飛ばす、他の二頭も俺と同時に駆けだした二人が相手をしてくれているようだ。

俺は拳を当てた、一頭を追撃するために再び走り出した。

「お終いだ!」

加速を生かしたまま、俺は倒れているウォルフに右拳を叩きつけた。

「ふう……」

ウォルフを倒したためか、手袋による疲労のためか、俺は一瞬気を抜いてしまった。

「あ……」

気づいた時にはもう遅かった。

前足を突き出して降下してくる一頭のグリフォン。

二人が何かを言っているのが聞こえる、今回は前のメルヴィアのような助けはない。

瞬きもできず、目の前の光景が近づいてくるのが見えた。

「これで終わりか」

俺は静かに目を閉じた。前はここでぷにが助けてくれたが、そんな

助けもない。

「グッ！」

地面に叩きつけられる衝撃、グリフォンの前足で俺は抑え込まれたようだ。

ここで、こいつが力を入れれば俺は……。

「――カッ――ハッ」

最後に二人に何かを言おうと思ったが声が出なかった。
俺は覚悟を決めて、目をさらに強く閉じた。

「ハアッ！」

途端に俺に掛る体重が軽くなった。
驚いて目を開けるとそこにいたのは……。

「ステルクさん!？」

「まったく、何をぼうつとしているのだ君は」

黒いコートに鋭い目つき、それが今日ばかりは頼もしく見えた。
グリフォンはというと今の一撃でやられていた。

「流石ですね」

俺は安堵から軽口をたたきつつ立ち上がった。

強いだろうとは思っていたけど、まさか以上に……。

「あとは任せて、君は休んでいるといい」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

俺は座り込むと同時に気を失った。

……

……

……

「……どこやねん」

俺が目を覚ますと見覚えのない天井が目に入った。

「あら、目が覚めたみたいね」

「？クーデリアさんですか？」

「ええ、よく無事だったわね」

「無事なんですかね？これ」

俺は起き上がると体に全身に痛みが走った。

「……くうーっ」

「あんまり無理しない方がいいわよ、幸い骨は折れてないみたいだけれど」

「そうすか、で？ここどこですか？」

周りを見渡すと、そこそこ広い部屋にベットがいくつも置かれていた。

「ここはギルドの医務室よ、あんたは一昨日ここに運び込まれたのよ」

「ああ、なるほど。……情けない」

ここにいないってことは二人は無事なのに俺だけ医務室行きて…。

「別にそんなことないわよ」

「でも、原因は俺が気を抜いたことですし……」

俺がそう言うのとクレーディアさんが顔を引き締めて俺の方を見てきた。

「言っとくけど、今回の件であんたに悪いことなにもないわよ」

「は？それはどういう……」

「他の討伐隊の怠慢、要はさばりね。少し働いて後は休んでたそうよ」

「……………」

何？つまり俺はそんなことで死にかけたの？

そんな不幸系主人公みたいな俺はごめんですよ？

「顔が怖い事になってるわよ」

「あははは……」

「今度は目が笑ってないわよ」

「……はあ」

思わずため息をついてしまった。

今回は楽な仕事のはずだったのに、まさか見知らぬ他人のせいで……。

「そいつらの報告をしておく、免許没収かつギルドへの一年の奉仕活動」

「え？」

この人すごい良い笑顔でものすごく恐ろしい事言わなかったか？

「奉仕活動って？」

「そうね、雑務の手伝いとか必要物資をそろえるとかいろいろね」

「一年もですか？」

「ええ」

なんか可哀相になってきた。奉仕活動だよ？お給料でないんだよ。いつかパンチしてやろうかと思ったけど、いらないかもしれない。

「やりすぎじゃないですか？」

「あら、この国の錬金師ロロライナ・フリクセルの弟子を殺しかけたんだからこのくらいは当然じゃないの？」

「そ、そうですね」

この人を怒らせてはいけない、俺は改めてそう思った。

「しかし、ステルクさんが来なかったらと思うとぞっとしませんね」

「そうね、すぐに送り込んでよかったわ」

「本当に、でもどうして気づいたんですか？」

「鳩よ鳩。あいつたくさん鳩飼ってるから今回の作戦に協力させてたのよ」

「それで、様子がおかしいのに気づいて？」
「そういうことね」

正直ステルクさん鳩飼ってるんだって言う感想しか出てこない。
今度ちゃんとお礼しないとな。

「ステルクさん、まだ街にいますか？」

「いえ、帰って来てすぐに出てったわよ、なんでも弟子にしろって
うるさいのがいるとか」

「ああ、たぶん家のジーノ君ですね」

初対面の時に目標とか言ってたからたぶんそうだろう。

ガチャ

俺とクーデリアさんの会話が途切れた所で、部屋の扉が開いた。

「あ、先輩起きてる」

「ちよっと、早く入りなさいよ」

おずおずと後輩君とミミちゃんが入ってきた。
二人は俺に近づいてきた。

「先輩大丈夫か？」

「ん？結構平気だな」

「だから言ったじゃないの、死んでも死なないような奴だって」
「……………」

酷くないか？

「え？ここに運んだ時、心配だって言っただけだったか？」

「ちょー！？」

「ふーん」

「な、なにニヤニヤしてんのよ！」

「別に」

「く、クローツ、帰るわ！」

ミミちゃんは顔を真っ赤にして帰って行った。
ツンデレって面白いっすね。

「んじゃ、先輩俺も帰るよ、これから村におっさんを追いかける
くんだ」

「あんまり困らせるなよ」

「ああ、そんじゃ、早く元気になれよ！」

後輩君も外へと慌ただしく出ていった。

「元気だな」

「それが良いところだったりするんじゃないの？」

「ま、そうですね」

なんだかんだで、俺は結構いろんな人に心配されているようだ。
考えてみればこっちに来てもう一年以上、人との繋がりも深くなっ
ているってことか。

「いい所ですね、ここ」

「は？この医務室あんまりお金かけてないわよ？」

「ん、まあ、いい所なんですよ」
「？」

人との関係がほんの数年でなくならない辺り、俺の世界よりもいい所ですよ。

「……あれ？ぷには？」

「あんたのアトリエで寝てるけど？」

ぷにとの関係も深く……なってるよな。相棒だもんな？

でこぼこ討伐隊―後編（後書き）

全然ギャグがない。

誰が書いたんだろうこれ。

オリジナル爆弾

「あゝ、肩痛い……」

「ぷに〜」

「労わってるつもりだろうけど、肩で跳ねられると余計に痛いわ」
「ぷに……」

医務室から出て一週間、ようやくと錬金術を使えるくらいに回復した俺は、師匠のアトリエで一つの試みをしていた。

「くく、このアイディアをくれたイクセルさんには感謝だな……」

それは、今日の昼ご飯を食べにサンライズ食堂に行った時の事。

………

………

……

「イクセルさん、腹減った〜」

「今忙しいんだから、少しくらい待ってろ」

俺は食堂のカウンター席で頼んだ料理が来るのを待っているのだが、今日の食堂はなかなか盛況で知り合いである俺は仕方なく後に回されている。

「うう、こんなパン一つじゃ腹が満たされん……」

サービスでコッペパンっぽい形のパンを一つもらったが、こんな物では十代の腹の足しにもならない。

「早く客よ、いなくなれ……」

待つこと数十分。

「いやゝ待たせたな。はい、お待ちどう」

「本当に待たされましたよ……」

まさかこんなに待たされるとは、俺はさっそく出されたスープとハンバーグを食しにかかった。

「はあく腹にしみるなゝ！待たされただけあって」

「悪かったって、そんなに腹減ったのか？」

「ここ一週間くらい宿に引きこもって療養してたから、まともな食事取ってなかったんですよ」

「療養？」

途端にイクセルさんが怪訝そうな顔をした。

「ええ、ちょっと仕事の方でへまをしたというか……」

「ふうん、まあ、無事ならよかったじゃないか」

「まあ、そうなんですけどね」

俺はハンバーグを咀嚼しながら、イクセルさんの全身を観察した。

「？　なんだよ、じろじろ見て」

「あ、いや、その」

俺は口に入っているものを飲み込んで言葉をつづけた。

「イクセルさんって、昔よく師匠と一緒に冒険してたんですよね？」

「ん？　まあ、冒険って言うより俺は材料を取りに行ってたんだけど、まあだいたい合ってるな」

それがどうしたんだ？　とイクセルさんは言葉が続けた。

「いや、実はイクセルさんも強かったりするのになって思いました」

「まあ、ロロナに付いてってたから、弱くはなかったな」

「グリフォンを一人で相手にできたりしましたか？」

「うーん、今はともかく、昔ならできないことはなかったと思うぞ」
「そうですかー」

若干落ち込む俺、やっぱりそのくらいの強さは必要ということだろうか。

昔に比べれば、力も強くなったし場数も踏んだとはいえ、俺は奴を一人で相手取ることではない。

「で？　なんでそんなこと聞いてきたんだ？」

「いや、いろいろあるんですよ」

決して俺は戦いたいと言う訳ではないが、前みたいな状況になったことを考えるともう少し強くなりたいと思う訳よ。

実際、あの時ステルクさん来てくれなかったら俺は確実にダイしていただろう。

その上、他の二人もどうなっていたかわからない。

「どうしたら強くなれますかね？」

「俺は単純に戦ってる間に強くなってたって感じだからなー」

「うー。やっぱり地道に行くしかないのか……」

「でもお前は錬金術使えるだろ？」

「俺は戦闘に使えるの爆弾しか作れないですよ」

俺は机に突っ伏した。

実際これより上はないんじゃないかって言うくらい強力ではあるけど、まだ威力が足りないと言うか。

「そう言えば俺昔から疑問だったことがあるんだよ」

「へ？ なんすか？」

俺は顔をバツと上げて続きを聞いた。

「いやな、ロロナの奴いろいろと爆弾使ってたんだけど、あれって錬金術で混ぜられたりしないのかって」

「え？ いや、それは……」

……

……

……

「という訳で！今日作るのは俺のオリジナル爆弾！三色爆弾さ！」
「ぷにに！」

そう、異なる属性の爆弾を3つ合わせたすごい爆弾を作ると言う訳さ。

「とりあえず、今作ったので材料はそろった」

俺はたった今作り終えた、わかりやすく雷の形をした、雷の爆弾を釜から取り出した。

そして、それを他の材料がそろった釜の横に設置したテーブルに置いた。

「では、始めるとしよう」

「ぷに！」

俺は一つ深呼吸をして、作業に取り掛かった。

「アカネの3分クッキング！」

「ぷに！？」

「テレレッテテテ、テレレッテテテ、テレレッテテトウールツテ」
「……ぷに」

ぷにが肩の上から痛い人を見る目で見ているが気にしない、ちょっとくらいはしゃいだっていいじゃないか。

「本日用意する材料はこちら、中和剤とフラムにレヘルン、そしてたった今作ったドナーストーンをそれぞれ一つずつ」

「ぷに」

俺は三つの材料を手を取った。

「そして、まずこの三つを」

「それをどうするの？」

「釜の中に！どぼ……ん？」

俺は材料を入れる手を止めて、斜め後ろを振り返った。

「師匠？」

「そうだよ」

あれ？なんか今日の師匠はいつもの笑顔なんだけど、威圧感があるような……。

「というかどうしてここに？確か村の方に行ってたはずじゃ……」

「うん。ステルクさんからアカネ君の事を聞いて急いで帰ってきたんだよ」

「へ、へえ、そうのか」

どう考えても日数計算が合わないだろ、何か不思議なアイテムでも使ったのか？

「あ、あはは……」

今の気分としては親のいない家で好き放題してたら、唐突に親が帰ってきた気分、以上に悪い事をした気になるって言うか。

「それで、アカネ君、今何をしようとしたのかな？」

「え、え、それは」

二の句を継ぐことができずに、言葉を濁すことしかできなかった。

「その爆弾をどうするつもりだったの？」

今日の師匠は妙に迫力がある、一言で言うなら本物の師匠っぽい。その威圧感に負けて俺は正直に話してしまった。

「か、釜の中に入れてようとしてました……」

「もう！ダメでしょ！そんな危ないことしたら！」

「ひ、ひい！す、すいません！」

ま、まさか師匠に怒られる日が来るとは思わなかった。

「どうしてそんなことしようと思ったの！」

「そ、それは、ちょっと昼にイクセルさんと話してたときに……」

「イクセ君が悪いんだね！ちょっと行ってくる！」

「え！？違っ！師匠！？」

師匠は既にアトリエの外へと出ていってしまった。

「……どうしよう？」

「ぷにぷに」

ぷには俺の手に持ったままの材料を見つめて鳴いた。

「……本気か？」

「ぷに！」

「そのチャレンジャー精神！それでこそ俺の相棒だ！」

「ぷにに！」

「よし！錬金開始！」

俺は爆弾三つを釜に投げ入れた。

反省は後でもできるが、この行動は今しかできない。そうだろう？

「やっぱり人生は所々でロックな精神を入れたほうが楽しいよな！」

「ぷに！」

俺は背徳から来る高揚感から妙にテンションが高くなっている。

「えんぐるるるゝ、ぐるるゝ！」

「ぷにゝ、ぷにゝ」

釜の中を杖でかき混ぜ続ける、あと数十分ほどかき混ぜたら中和剤の出番だ。

……数十分後。

「試験官に入っておりますは、高品質の中和剤」

「ぷに」

俺が前に品質は高くなるような材料を選びすぐって作った、とっておきのS級中和剤。

こいつを使えば、きつとうまくいくはずだ。

「こいつをこの中に行ってき垂らすと……」

「ただいま」

「え！？し、師匠！？」

突然帰ってきた師匠に驚いて俺は後ろを振り返った。

「ぷ、ぷに！ぷに！」

「あ、あー！ー！」

ドバドバと試験官にたっぷりと入った中和剤全てが釜の中に注ぎ込まれていた。

「続行だ」

「……ぷに」

もはや破れかぶれ、俺はそのままかき混ぜ続けた。

「あれ？アカネ君何作ってるの？」

「ふ、フラムだよ、フラム。そ、それよりもさっきクーデリアさんが来て呼んでたぞ」

とりあえず、この場を危険的な意味でも離れてもらうために軽く嘘をついておいた。

「え？くーちゃんなら食堂で会ったけど？」

「……て、ティファナさんが呼んでたの間違えた」

俺がそう言くと、背中に刺すような視線を感じた。

「アカネ君、もしかして！」

「ち、違う、俺は悪くない、ぜ、全部ぷにがやれって！俺は悪くね

え！」

「ぷに！？」

「事実だろうが！」

「ぷにに！」

ぷにが抗議するように俺の左肩で飛び跳ねた。

「ちょ、肩！まだ回復しきってないって！ああ！」

俺が痛みから杖を持ちかえ、右手をサイドテーブルにつく。
すると、ガタが来ていたのか、木製のテーブルは釜の方向に大きく
傾きいろんな材料が釜の中に混ざりこんだ。

「アカネですが、釜の中がカオスです」

「ちょっと、アカネ君！ど、どうするの！？」

「落ち着け、まだ慌てるような時間じゃない」

「だ、だって、今いろいろ混ざっちゃったよ！」

まったく、何を慌てているのか、何ら問題はないだって今作ってる
これ……。

「実はレシピとか製法全く考えてない、ノリと勢いで作ってるんだ
からな」

「あ、アカネ君が危ない錬金術師になっちゃった……」

師匠が涙目で愕然と立ち尽くしている。

まあ、混ざったのなんてこれのために作ったフラムとかレヘルンと
かの材料だから問題ないだろう。

「クックック」

「ぷに」

俺は完全にタガが外れて釜を混ぜ続けた。
すると突然釜が光り始めた。

「出でよ！我が爆弾よ！」

このまま釜が爆発するか、それともちゃんと爆弾ができるか。
確立としては9…1くらいの割合な気がする。

「おい、ぷに何ちゃっかり逃げてるんだ」

俺が釜の反応を見続けているのというのに、ぷには外への扉近くに
待機していた。

「師匠まで……」

「だ、だって、それ絶対に爆発しちゃうと思うし……」

「信頼がなさすぎる……」

しょうがないとか言うなよ？俺は成功することを一応信じてる。

「むっ？」

途端に光が収まり始めた。

「み、見たか！これが俺のレシピの力よ！」

「れ、レシピないって言ってたような……」

外野がうるさいが、気にせずに反応を見守った。

ポンッ！

「で、できた」

小さな爆発が釜で起きると、光が完全に収まっていた。

「これが、幻の三色爆弾プラスアルファ」

いろいろ混ざったせいでアルファの部分は分らないが。
取り出した、爆弾の見た目はというと……かなり前衛的だった。

基本的な形はフラム、赤い柄に雷のマークがプリントされて、本来
導火線があるはずの部分、フラムの先に雪だるまの頭がくっ付いて
いた。

「と、とりあえず。どうだ師匠？」

「知らない！こんな危ない事する子なんて……もう！せっかく心配
して来たのに！」

「あ、あう……」

どうやら本当に怒ってしまったようで、師匠はアトリエの外に出て
いった。

「ぶ、ブレーキ踏み損ねた？」

「ぶに」

「う、師匠が怒るなんて相当だよな」

「ぶくに」

「師匠の好きなものでもクーデリアさんに聞いてみるか……」

「ぷに」

ちゃんと村の方に行って謝らんな。

参考書・アカネのレシピ（三色爆弾）

材料

フラム・1個

レヘルン・1個

ドナーストーン・1個

その他

フラム、レヘルン、ドナーストーンに使われる材料の何か。

候補

フロジストーン

樹氷石

震える結晶

火薬系の素材

追記・再現できたら加筆しといてください

鍊金パイ作り

「今日の課題はパイだ！」

「ぷに」

師匠に逃げられた次の日、クーデリアさんに事情を話し、機嫌をどうやったら直してくれるか聞くと

『おいしいパイでもあげたら喜ぶんじゃないかしら』

とため息をつかれつつ言われたので、さっそく机に座って作業に取り掛かっている。

「ちなみに今回もオリジナルな」

「ぷに！？」

「仕方ないだろ、師匠ってパイ作るのすごいまいらしいからさ。普通の物じゃあ喜んでくれなさそうだろ？」

「ぷに」

「安心しろ。今回は前回の反省を生かしてある」

人は過去の失敗から学ぶ生き物だ。

俺の目の前にあるのは、羽ペンに白紙の紙ついでにぷに。

「今回は最初にレシピを考える！」

「ぷに……」

「そんな当然だろみたいな目で見るなよ」

「ぷにい」

ため息つきやがったよこいつ、確かに冷静になって考えると当然のことだけだ。

「とりあえず、どんなパイ作るか決めるか」
「ふに」

俺はペンをインクを入れた小瓶から取り出して、思いつくものを書き連ねていった。

アップルパイ、レモンパイ、チェリーパイ、マロンパイ、ブルーベリー、バナナe t c . . .

「……材料がそろいそうなものは、全部師匠作ってそうだな」

別においしければ良いんじゃないかって思うけど、どうせなら食べたことのない物を作りたい。

「……………」

俺はとりあえず、今書いたものに必要な物を名前の横に書いておいた。

アップルパイ・小麦粉 水 塩 リンゴ
レモンパイ・小麦粉 水 塩 レモン

「……俺って今錬金術のレシピ書いてるんだよね？」

だんだん自分のしてることに自信が持てなくなってきた。

「と、とりあえず続けるか」

……

……

「そして一週間が経った」

「ぷに！？」

「いや、なんか興が乗って来てついついやりすぎたんだよ」

調合の仕事をしつつレシピを書き続けているうちに……ね。

「目的を忘れるほど熱中できる、いいね！」

「ぷに！」

「ぐふっ！？」

このタツクルの意味は、ふざけるなとそう言うことですね。

「ま、まあでも良い感じのが何個かできたし、良いじゃないか」
「……ぷに」

ぷにが見せてみろって感じでレシピの束に目線に向けた。
たぶん三十枚くらいはあるはずだ。

「えーと、どれだったか……」

俺は紙の束を手に取り、一枚一枚見ていった。

「……なんだこれ」

びっくりアップルパイ・小麦粉 水 リンゴ 火葉

備考）中に焼きリンゴ丸ごとぶちこむ

「眠かったんだろうな俺」

とりあえずビリビリに引き裂いておいた。

「ぷに」

「確かに先行きが不安になってきた」

手に持っている物が急に魔の物質に見えてきた。

「よし、続けるぞ」

「ぷに」

アップルパイ

「セーフ！」

蜂蜜パイ

「これってハニーパイじゃん」

菓草パイ

「許容範囲だ。ベジパイなんて物もある」

ゼツテルパイ

「……ちゃんと作れるようになって嬉しかったんだろうな」

ゴミ箱に捨てといた。

「……ぷに」

「いや、きっと何か良いのあるって」

ぷにがジト目で俺の事を見てきたので弁解した。
確かに言い逃れできないのが一つあったけど。

「お、これとかいいんじゃないか？」

「ぷに？」

揚げパイ・小麦粉 水 油

「……パイって揚げれるのか？」

「ぷに」

とりあえず保留にしといて他のをしてみるか

………

……

「こんなもんか」

ぷに先生の審査をクリアしたのはさっきのを合わせて三つしかなかった。

「ココアミルクパイにぷにパイだけか……」

「ぷに」

「つか、このぷにパイは完全にエコ最良しただろ」

「ぷに」

しらを切っているが言い逃れはできない、このパイは単純に手作りパイをぷにの形にしてあるだけのものだ。

「何が驚いたって、横線引いてある材料にシロって書かれてた事だよな」

「ぷに」

あの時初めてぷにの青ざめた表情を見た。

「まあ、レシピはそろった訳だし」

「ぷに」

「レッツ！クッキン……錬金術！」

……

……

三日後

「唯一の成功がぷにパイってどういうことだよ」
「ぷに」

あれから、時間をかけて何度か試作を行ったが結果は酷かった。

「揚げパイは油でギトギト、ココアミルクパイは黒い塊になった」
「……ぷに」

一番悲惨なのは、後処理をしたぷにだろうな、若干目が死んでたし。

「いろいろ考えた結果、揚げパイには卵を加える、ココアの方は俺のレベルが足りないってことだと思う」

パイを作るのにレベル不足って言うのは若干納得がいかないけど、感覚的にまだ無理だってわかってしまう。

「適当なもの作ってもあれだし、ゆっくりと研究してくか」
「ぷに」

俺の初のちゃんとしたレシピがパイなのは微妙な気分だけどな。

……………三日後

「ふむ、できたか？」
「ぷに」

あれからさらに薄力粉も加えるなどして改良を加えていった結果。

俺の手には衣に覆われたパイがあった。

「試食なされ」

「ぷに」

ぷには恐る恐るといった具合にパイを丸呑みした。

「ぷに！」

「おお！丸呑みのせいで全然伝わってこないけどうまいか！」

「ぷに」

「よし、そんなじゃもう一回作って他の人の意見も聞いて回るか！」

ぷにの意見だけじゃあれなので、本職のイクセルさんとか師匠のパイを食べ慣れてそうなクーデリアさんとかにも試食してもらおう。

「えっと、小麦粉に卵に塩と水、油に薄力粉と」

くどいようだが、俺がやっていることは錬金術なのでそこんところろしく。

「んじゃ、始めるか」

「ぷに」

俺は材料を釜の横にある机に置き、杖を手を取った。
もちろん机はちゃんと買い換えてある。

「最初に入れるのは小麦粉に水に塩と」

まずはオーソドックスなパイの材料を入れる。

「このまま数十分かき混ぜて」

パイを作る速度は爆弾に比べて大分遅くなってしまふ。
ちなみに師匠はパイを作るのがやたら早かったりする。

「前戦闘中にパイ作り始めたのにはビビったよな」
「ふに」

どこからともなく釜を取り出して、パイを作って回復した時には開いた口が塞がらなかった。

「俺のこと怒ったけど、あの人も結構アレだよな」
「ふに」

まあ、俺の場合作ってたのが爆弾って言うのもあるけど。

……
……

コンコン

「ん？ どーぞー」

もうすぐ完成というところで、扉がノックされた。

「こんにちわー」
「おお、トトリちゃんじゃないか」

玄関にはトトリちゃんが立っていた。

「でも、こないだ村に戻ったばかりじゃなかったか？」

たしか、まだ2ヶ月ちょっとしか経ってないはずだ。

「えっと、アカネさんが怪我したって聞いて心配で……」

どうやらこの世界には天使がいるみたいだな。
主に俺の目の前に。

「心配しなくても、俺はもうピンピンしてるさ」

「はい、元気そうで安心しました」

「うむ、とりあえず早く入ってきなよ」

玄関に立ちっぱなしのトトリちゃんをアトリエに入るよう促した。

「あ、はい。先生、隠れてないで出てきてくださよ」

「え？」

トトリちゃんが声をかけると、扉の横から師匠が顔を半分覗かせてきた。

そういやトトリちゃんが帰って来たってことは、師匠も帰って来たってことだったな。

「えーと、師匠？」

「むー、アカネ君なんてもう弟子じゃないもん」

どうやら俺はいつの間にか破門されていたようだ。

「先生、まだそんなこと言ってるんですか……」

「だ、だって！アカネ君があんな事するから！」

「でも、言いすぎたかもって言ってたじゃないですか」

「そ、それは、そうだけど……」

「とりあえず、二人とも中に入って来たらどうだ？」

玄関先で喧嘩になるのも世間体的にまずいしな。

「そ、そうですね」

「むー、私のアトリエなのに……」

師匠の怒りはどうやらまだまだ収まらないらしい。

「師匠、これあげるから機嫌直してくれないか？」

俺は釜の中に手を突っ込んだ。

「物で釣ろうなんて、わたしそんなに甘くないんだから！」

「パイなんだけど……」

俺は両手で持って、師匠の前に差し出した。

瞬間、師匠の目の色が変わったのがわかった。

「師匠に機嫌直してもらいたくて作っただけど……」

「そ、そんなに言うなら、い、一応食べてあげる」

師匠は俺の手からパイを受け取り、口に運んだ。

本当にパイが好きなんだな、師匠って

「お、おいしいよ!これ!」

俺はあの後反省した、だからパイを研究した、そう反省したのだけど……

ちよろい、俺はそう思わずにはいられなかった。

「サクサクした衣と中のパイの生地が合わさって、良い感じに溶け込んで……」

なんか料理番組が始まってる。
謝るなら今しかないか。

「師匠、こないだの事は悪かったよ」

「こ、このパイは関係ないけど、許してあげるね」

「あ、はい」

パイを頬張りながら言われても説得力がないぜ。

「でも、こないだみたいなのもうしちゃダメだよ」

「絶対?」

「絶対!やりたいなら、ちゃんとわたしに相談してから!」

「オーケー、わかった」

なんかあっさりと解決しちゃったな、まあ師匠がそんな永遠と怒ってるのもイメージに合わないけど。

「ところで、先生には聞いたんですけどアカネさんの作った爆弾ってどんなのなんですか?」

「ん?ああ、それならここに……」

俺は部屋の隅に設置された俺のコンテナの中から三色爆弾を取り出した。

「この爆弾はきつとかなりの威力があるはずだ」

俺はそれをトトリちゃんに手渡した。

「ちょっとかわいい見た目ですね……あれ？」

「ん？どした？」

トトリちゃんが唐突に疑問符を浮かべた。

「この折れ目なんですか？」

今まで気づかなかったが、爆弾には二カ所折れ目のようなものが付いていた。

「あれ？本当だ、なんだこれ？」

「何？見せて見せて」

師匠も興味があるのか近づいてきた。

「ふむ、とう！たあ！」

「ええ！？」

「あ、アカネ君！？」

俺は折れ目に沿って爆弾を2度折った。こういう時は思い切りが重要です。

「折れた部分は……」

雷マークのある下段、真っ赤な無地の中断、雪だるまのついた上段に分かれた。

「……まさか」

「こ、これって……」

「三つの爆弾がくっ付いただけ……とか？」

「ふにふ」

「……………」

居たたまれない沈黙状態になってしまった。
誰か一人でもいいから笑ってくれよ。

危険も顧みず勢いで作った結果がこれだよ。

「師匠」

「な、何？」

「レシピって重要ですよね」

「そ、そうだね」

やっぱり俺は間違っていたようです。

結局俺は一度に三つ投げられる爆弾を作っただけってことかいな。

酒は飲んでも飲まれるな

前の三色バカ弾の一件から数日したある日、俺は机に座って参考書を読んでいた。

「やっぱり時代は完成された物にこそあるのさ」

「ふに」

無理にオリジナリティーを出す必要なんてない、昔の俺はそんなことを理解できていなかった。

所詮は素人の浅知恵でどうこうなる代物じゃないってことだな。

「やばい、今の俺超真面目じゃないか」

「ふに」

俺に知識まで加わったら、筋肉と合わせて最強になってしまう。

「クックック」

「ふに……」

俺がそんなこんなしていると、後ろから悩んでいるような声がした。

「うーん、どうやって作るんだろう？」

首を曲げて後ろを向くと、そこではトトリちゃんが立ったまま唸っていた。

「何悩んでるんだ？」

その様子が気になったので、俺は椅子から立ち上がってトトリちゃんに近づいた。

「あ、アカネさん実はですね……」

「うん？」

「お酒ってどうやって作るのかわからなくて」

思考がフリーズした。

「し、ししし、し、ししよ、師匠！」

「わ！な、何！」

俺が突然大声で呼んだので師匠は釜の前から、驚いたような顔をしながら振り向いていた。

だが、こっちもテンパってんですよ。

「あ、アカネさん？」

「と、とと、トトリちゃん。何でそんなことを？」

「あ、それはですね。ゲラルドさんに――」

「待て！聞きたくない！」

「ええっ!？」

まさか、またトトリちゃん不良疑惑が浮上するなんて。どこで教育を間違ってしまったんだろう。

「ど、どうしたの？」

「師匠、トトリちゃんが不良になってもーた」

近づいてきた師匠に俺は事情を説明した。

「トトリちゃんがお酒を飲みたいから作り方教えろって……」

「え！？そ、そうなの！？」

「そ、そんなこと言ってますん！」

トトリちゃんが何か言ってるが俺たちの耳にその言葉は届かなかった。

「なんで？どうして？わたしの育て方が悪かったの？わーん、どうしようしょー！？」

「いやきつと、これも俺みたいなのと知り合った悪影響なんですよ」

「ふ、二人ともお願いですから落ち着いてください！」

………

……

「な、なるほど。つまりゲラルドさんから新しいお酒を作ってくれと頼まれたから、作り方を聞こうって？」

「そうですよ」

「なーんだ、それならそうと最初からそう言ってくれよ」

いらない勘違いをしちゃったじゃないか。

「最初に言おうとしましたよ」

「はっはっは悪い悪い」

笑って誤魔化すのが一番簡単だね。

「まあ、それなら師匠の方が詳しいじゃないか？一応は二十歳は越えてるんだし」

「い、いちおう……」

そんなに落ち込むなよ、顔的には完全に未成年なんだから。

「そうですね、一応大人ですもんね」

「と、トトリちゃんまで……」

ああ、師匠涙目になっちゃってるよ、トトリちゃんって偶に毒舌だから怖い。

「うう、それでお酒の作り方だね？」

「あ、はい、そうです」

「私もあんまり詳しくくないけど……たしか、色んな物を発酵させて作るんじゃないかったかな」

「発酵ですか？」

「うん、お米とか麦とかお芋とか……ぶどうとかもそうだね、で作った材料でできる物も違うんだって」

「お酒ってそんなにたくさん種類があるんですか？うーん、何で作ればいいんだろう」

ここで俺のアドバイスが冴えわたる！

「まずは基本からやった方がいい！最初からオリジナルなんてやったら、痛い目を見るぞ……」

かなり最近の経験に基づく痛々しいアドバイスだ。

「いろいろ試作して材料を加えていくのが一番安全なやり方だ。揚

げパイだってそうやって作った」

「そうですね、それじゃあちよつと調べてみますね」

「がんばってねトリちゃん」

「はい！」

「俺の二の舞にはならないでくれよ……」

「あはは……」

なんかオリジナルがトラウマになつてゐる気がする。

……………次の日

「ふう、あー疲れた」

「ぷに」

今日も俺は真面目にお勉強ですよ、まあ元の世界ではインドア派だったし苦ではないけど。

「ぷに、飲み物持ってきてくれ」

「ぷに」

俺は机に突っ伏して、ぷにが水を持ってくるのを待った。

「ぷにに」

「お、サンキュー」

ガラスのグラスに入つた黄色い液体を俺は思いっきり飲み干す……。

「なんてことあるかー!」

「ぷに!」

俺はグラスを机に叩きつけた。

「臭いと色的にどう考えてもビールじゃねーか」

「ぷに」

「そんな漫画じゃないだからある訳ないんだって、水と間違ってお酒を飲むーなんて」

「ぷに」

ぷにが何かを期待するような目で俺の方を見つめてくる。

まあ、俺も興味がない訳じゃない。

「まあ、ぷにが俺を氣遣ってわざわざ!運んできてくれたわけだしな」

「ぷに」

「俺も飲みたい訳じゃあないけど、仕方ないな」

「ぷにに」

ゴクリと喉を鳴らし、俺はグラスを思いっきり傾けた。

未だかつて味わったこと無い苦みが俺の口の中を満たした。

「ふむ、意外といけるな」

最初はあまり飲めないって聞いたが、結構飲める。

「ぷにも飲むか?」

「ぷに!」

俺はぷにの上でグラスを傾けて、残りをぷにの口の中に注いだ。

「ぷにーん」

「むう、ぷに酒弱いんか？」

「ぷにつく」

ぷにが酒を飲み干すと、みるみる真っ赤になっていった。

「……倍プッシュだ」

「ぷににににに」

ぷにが笑いながら去って行っただけと思ったら、何本かボトルに入った酒を乗せて戻ってきた。

「これはーウイスキーか？あとはワインに焼酎……クックック」

「ぷににににににに！」

「にやははははははは！」

飲めや、歌えやのドンチャン騒ぎ。

「お酒って楽しいなー！」

「ぷにー！」

二人で騒いでいると突如アトリエの扉が開いた。

「邪魔するわよって、何？酒臭いわね」

「あ！くーちゃんじゃないれすかー！脅かさないでくだはいよー！」

「は？あんた今なんて言ったのかしら」

「くーちゃんですよー！」

「ぷにー！」

「……あんたら、さては酒飲んでるわね」

「ぷににににに！」

「ほらー、ぷにが妙なテンションだからばれちゃったじゃないか」

俺みたいにちゃんと取り繕わないからだよ、まったく。

「はあ、ガキが酒飲んでるんじゃないわよ、しかもアトリエで」

「ガキなんて！くーちゃんに言われたくないれすよ！」

「……それはそういう意味かしら？」

「あ、いや、これは」

途端に頭が冷水をぶっかけられたみたいに冷えた。

俺一体何言っちゃってんの。

「そこに直りなさい！」

「は、はい！」

俺は素早く正座の姿勢を取った。

「覚悟することね……」

「オワタ」

「ぷにににににに」

「黙りなさい」

「ぷにににににに」

「……………」

パンとクーデリアさんの手元から乾いた音がした。
そこに握られているのは拳銃だった。

「実弾じゃないから安心していいわよ」
「……………」

俺の横には床に倒れこんだぷにがいた。
ぷに、無茶しやがって。

俺は何てバカなことをしてしまったんだ。

「それじゃあ、改めて覚悟することね」

ふと、昔見た未成年禁酒ポスターが頭をよぎった。
軽い気持ちで人生を壊します見たいなフレーズがあった気がする、
事実でした。

……………
……………

「あ！アカネ君、この臭い、お酒飲んだでしょ！」

「師匠……もう、反省したから」

「え、うん、何で泣いてるの？」

「クーデリアさんって本当に怖いな……」

姿勢を少し崩したら、俺の膝元に銃弾が飛んでくるんだぜ。
マジで怖い。

「ぷに」

「そうだな、こう言うのでお決まりの締めをするか」

こういう話をした後には大抵つくアレだ。

「この話は未成年への飲酒を助長するものではありません」
「ふに」

「え？ アカネ君何言ってるの？」

「お酒はハタチになってから！」

「ふに！」

インスタントホームンクルス

現在は9月の中頃なんだが最近師匠の様子がおかしい。

ちょうど9月に入ったあたりからだろうか。

俺がアトリエに入ると、作業途中の何かを突然箱の中にしまいこんだり。

一番怪しい出来事だと、何かやたらでかい物を奥の部屋に持っててたりなど、とにかくおかしい。

師匠が落ち着きないのはいつもの事だが、最近は特に異常だ。

そんなこんながあったので俺はある日意を決して師匠に尋ねてみることにしたのだ。

「師匠、何か隠してないか？」

俺は錬金術を行いながら、同じように釜の中を杖でかき混ぜている師匠に尋ねた。

「え！？な、何のことかな？」

「目が泳いでるぞ」

「べ、別に何にも隠したりしてないんだからね！」

「し、師匠！？どこに！？」

俺の言葉に相当動揺したのか杖を持ったままアトリエの外に走り去って行った。

「……隣の釜どうしょ?」

「ぶに」

この後トトリちゃんが帰って来て事なきを得たのだが、あの師匠はやっぱり何か隠してる。

「うゝん」

「どうかしましたか?」

そして今俺はトトリちゃんと一緒に、買い出しに出て帰っていると
ころなのだ。

「いや、たぶんトトリちゃんにはわからんな」

「……?」

あの師匠、トトリちゃんだけには気づかせないようにしてるのが、
立ち悪いな。

「ま、師匠のことだし悪い事はしてないと思うけど」
「はあ?」

出来の悪いサプライズパーティーだとも思うとするか。
俺はちょうど着いたアトリエの扉を開けて中に入った。

「帰ったぞ」

「ぷに」

「あ！やっとな帰ってきた！」

帰ってきた主人を迎えに来るかのように師匠が俺たちに駆け寄ってきた。

「二人とも少し目瞑っててくれる？」

「え？いいですけど」

「ん、わかった」

どうやら師匠の準備が終わったようだ、俺は若干の不安を覚えながらも目を瞑った。

「……………」

何かを引きずるような音が奥の部屋の扉から聞こえてきて、俺たちの前でその音が止まった。

「二人とも目開けていいよ！」

「どれどれ——！？」

目の前にガチャガチャがあった、尋常じゃないでかさだけど。ちょうど俺よりも少し大きいくらいの赤いガチャガチャ、まさかこの世界で会うことになるうとは。

「な、なんですかこれ？いつの間にこんな……」

「ふっふっふ……大変だったんだよ、見つからないようにこっそり作るの」

いや、俺には大分バレバレだったけど、という言葉が喉元まで来たが何とか飲み込んだ。

「そこまでして隠さなくても……それで、何なんですか？これ」

「トトリちゃん、これはガチャガチャって言ってだな……」

「違うよ！これはホムンクルス自動精製装置……名付けて！ほむちやんホイホイ！」

ほむんくるす？ホムン・クルス？ホ・ムンクルス？

……………

「ほ、むんくるす……？って、その名前だと、まるでホムンクルスを捕まえるみたいなの……」

トトリちゃん、ツツコミどころが違う。

待て待て、何？ここで俺だけがおかしかったりするの？

ホムンクルスってそんなガチャガチャにコイン入れて出てくるようなもんだっけか？

そんなんあったら、少子化問題が一瞬にして解決するわ！

「トトリちゃん、細かい事は気にしないのにかく、これがあればいくらでもほむちやんが作れるの」

「えっと……ホムンクルスとか、ほむちやんとか、さっきから全然分からないんですけど……」

「大丈夫、簡単だから見てれば分かるよ」

……師匠が悪の科学的な存在に見えてきたんだけど。

簡単って、命の重みとか俺はうるさく言わない人だけどさ、流石におかしいって。

「ほら！アカネ君もちゃんと見ててね」

「あ、ああ、うん」

「アカネさん、さっきからぼうっとしてますけど……どうかしたんですか？」

「いや、ちょっと軽くもないジェネレーションギャップに打ちのめされてた」

「良く分かりませんが、大丈夫ですか？」

「なんとか」

横に居るトトリちゃんを見て汚染された精神を何とか回復することができた。

しかし今だ狂気の原因である物体が目の前に、そして師匠が何か説明してるけど聞きそびれてしまった。

「ぶに、俺がおかしいのかな？」

「ぶに」

ぶには俺の肩の上でお前は正しいと、そう言ってくれた気がする。

「……ていうか、何かもう稼働してるんだけど」

「ぶにに」

目の前ではガチャガチャが高い機械音をあげて唸っていた。

俺はその前に立っている二人を遠巻きに眺めていた。

「……何も起こらんな」

「ぶに？」

故障か？と思ったそんな時師匠が暴拳に出た。

「おかしいな。なんで……もう！動いて、お願い！」

カンカンとガチャガチャ上部のガラス部分を手の平で叩く師匠。

「あれって、ホムンクルス作ってる所だよな、壊れたテレビ直してるんじゃないよな……」

「ふに？」

俺はその光景に我慢ができず師匠に駆け寄り静止の言葉をかけた。

「師匠、そんな無茶しないほうが良いって」

「だって、せっかく作ったのに、お願いだから動いてー！」

またもカンカンと同じように師匠は叩きだした、この人って本当がすごい錬金術師なんて呼ばれてるなんて間違ってる。

「わ、動き出した」

トトリちゃんは機械が再び唸りだすとそう言った。

「やった！よーし今度こそ」

機械が起動している様子を3人と一匹で見守った。

すると突然機械が縮みこんだ。

「んにゃ？」

ドカンと、ガチャガチャは回転しながら上に飛び上がった。

もうやだ、今日ツツコミどころが多すぎて俺がボケれないじゃん。

機械が着地するとガチャガチャから人型の何かが、出てきた。

「……ほむー？」

紫色の髪を持ったメイド服に近い物を着こんだ謎の生物、大きさは俺のひざ下に届くかってくらい。

……かわいいじゃねえか。

「や、や……やったー！大成功ー！」

「ホームクルスって、こんなかわいい子だったのか」

「ぷにー」

「うわあ！か、かわいい。な、なんなんですか？この子？」

「えへへ、かわいいでしょ。この子がほむちゃんだよ」

「ほむー」

「あ、でもちょっと待って、ちっちゃいほむちゃんだから、ちっちゃむ、ちほむ……ちむちゃん！この子はちむちゃんだよ！」

師匠がそう言うときちむちゃん？は声をだしながらぶかぶかの右腕を振り上げた。

「ちむー！」

「鳴き声まで変わった！？あ、えっとその……初めまして……」

「ちむ！」

「お返事した！ああ、かわいい……先生、触ってもいいですか？あわよくば、ぎゅーって抱きしめても！」

トトリちゃんテンションが上がりすぎて言葉遣いがおかしくなってる、あわよくばって……。

「どっちかつつーとき、ちむちゃんに構ってるトトリちゃんの方が可愛いよな」

俺は小声でぷにに同意を求めた。

「ぷにぺっ」

唾を吐きかけられた、こんちくしょうめ。

「ん？」

突然機械からまた駆動音が始めた、なんぞ？

「あのね、わたしはトトリっていうの、トトリ。分かる？」

「ち・ち・む？」

ああ、確かにトトリちゃんは乳無だわ……俺はセクハラ中年親父だよ。

「うわぁ、どうしよう……かわいいすぎる」

「ああ、確かにかわいいな」

ちむちゃんを見て興奮するトトリちゃんを見て興奮する俺を冷めた目で見ているぷに。

何という変態スパイラル。

俺のテンションが変態すぎる？仕方ないだろ、今日は俺の脳のスベックを越える出来事が起きすぎたんだよ。

「あ、トトリちゃんばっかりちむちゃんと遊んでずるい！」

ぎゅおんぎゅおんと機械の駆動音がまた響いた。うっさいな、まったく。

「……じゃなくて、あの、あんまりのんびりしてる場合じゃないかも。ちょ、止まって！止まれー！」

慌てた様子で師匠がガチャガチャを叩いていた、なんかあったのか？

「先生、ちょっと静かにしてください、今ちむちゃんとおしゃべりしてるんですから」

「まったくだ、少しくらい静かにできないのか、せっかくの癒しの時間が」

「ぷにぷに！」

何だ？ぷにもなんか鳴いてるし……。

たく、あれでも良い大人なんだから少しくらい落ち着きって言う物を持ってもらいたいな。

「いや、うるさいのはわたしじゃなくて、この装置で」

さきほどよりも激しい音で唸りだした機械……もしかしなくてもま
ずい？

「わ、わ、わ！もう、ダメかもー！」

「だから静かになって……え？きゃあああ！」

「爆発？ふっ、そんなものもう慣れたわ」

爆発音とともに視界が白く染まった。

同時にポンポンと不思議な音が響いた。

「あうう、二人とも大丈夫……？」

「はい……なんとか。は！ちむちゃん、ちむちゃんは！？」

「ちむー……」

「よかったー無事だった……」

「ちむー」

「ちむ！」

「ちむ？」

「え？なんか声がいっぱい？」

「……これは酷い」

視界が晴れるとそこには、部屋を埋め尽くす数のちむちゃんがいた。

「た、たた、大変！早くなんとかしないと！二人とも手伝って！」

「え？何を！？」

手伝うって、捕まえろってことか？

捕まえてどうするの？……まさか。

「ちむー」

「ちむ！」

「ちむ？」

俺と師匠が慌てていると、トトリちゃんが徐々にちむちゃんの群れに埋まって行った。

「ああ、幸せ。もう、このまま死んでもいいかも……」

「わー！トトリちゃんが埋もれてるー！しっかりしてー！」

………

「ふう……何とか片付いた」

「疲れたー」

え？片づけた方法？せっかく俺が気を利かせてカットしたのに知りたいのかい？

こればかりは語るのもためられる内容だ。

「あうう……ちむちゃんがひとりだけになっちゃた」

「ちむー……」

意外にもちむちゃんは感情豊かなようで、涙目になっていた。

そりゃ泣くわな、兄弟姉妹が、一斉に消されたようなもんだもんな。

「気を落とさないで、専用の材料があればまた作れるから」

また作れるからって、なんか今日一日で俺の倫理観が大分おかしいことになった気がする。

「それじゃあ、ちむちゃんについて説明するね」

「あー、師匠、俺なんか気分悪いからもう帰るわ」

「え、大丈夫？でも、説明だけでも聞いというた方が……」

「いや、いいよ、俺の相棒はぷにだけだし」

「ぷに！」

「そう？それじゃあ、気をつけて帰ってね」

「ん、そんじゃまた明日」

俺は二人の別れの言葉を背に浴びながら外に出た。
9月の少し冷たい空気が俺の頭を冷やしてくれた。

「今日は……疲れた」

「ふにー」

もう何も考えたくない、今日は宿で泥の様に寝よう。

そして今日の事はなるべく忘れる事にしよう、その方がいいさ俺の精神的に。

「……師匠って悪い人じゃないんだけどなー」

「ふに」

天才と何とかは紙一重ってやつだな、うん。

黒き衣身に纏い

「……ボロイ」

「ぷに？」

俺は宿のベッドの上に座り、長年の相棒である黒ジャージを両手で広げていた。

「いや、むしろ2年半もよくもったと言うべきか」

寝るときは裸、それ以外はずっとこれを着ていたのだから当然か。

「ぷに……」

「いや、ちゃんと洗濯はしてたぞ」

乾くまで部屋で全裸待機になってたけど。

「しかしこれが着れなくなると……」

俺はちらりと横目で壁にハンガーで掛けてある執事服もどきを見た。

袖にはひらひらフリル、上着の丈は足元まで伸びて外套並、師匠に魔改造された哀れな姿があった。

「あんなの着てたら師匠以外、俺と目合わせられなくなるわ」

「ぷに」

「……修繕だ」

「ぷに？」

「考えてみる、このジャージをずっと着続けたら絶対師匠になんか言われるぞ……例えば」

俺は咳払いを一つして、師匠の声を真似て発した。

『アカネ君、錬金術士なんだからもっとちゃんとした格好しないとダメだよ』

「言われそうだろ？」

「ぷに」

「師匠はなー、男の服考えるの向いてないんだよなー」

トリちゃんの服はかなり出来がいい、そこだけは称賛に値する。

「まあ、師匠には悪いがああ服だけは着たくない、だからこそ！俺はああ服を直してみせる！」

「ぷに！」

「ハーツハツハ！」

ドン！

「あ、すいません」

真横から壁を叩く音が聞こえた。

窓から外を見ると、ちょうど日が昇ってきたところだった。

「……出鼻をくじかれた」

「ぷに」

……

「ポリエステル百パーセントとな」

俺はアトリエの机の前に座りながら、ジャージを調べていた。
つまり、今俺はジャージを着てない訳だ、これが何を意味するかわかるかな？

「あ！アカネ君、やっとその服着てくれたんだ」

「はは、うっせーな」

「アカネさん、目から光が消えていますよ……」

「あはははは」

仕方なかったんだよ、ジャージを調べるのに着たままじややりづらい事この上ないんだよ。

願わくば今日誰も客人が来ませんように。

「邪魔するわよー」

「ガッデム！」

迂闊だった、こんなわかりやすいフラグを立ててしまうなんて、しかも即回収されたし。

こ、ここはだな、作戦開き直りで行こう。

「クーデリアさん、今日の俺に触れると火傷しますよ」

キラッ

「ってことは、あんたは今燃えさかってるってことね」

「むしろ、もう灰になってますね」

酷くクールなやり取りが行われた。

「見なかったことにしてあげるから、次からはまともな格好してなさいよ」

「ありがとうございます」

「むー、カッコいいのに……」

そうだね、主に厨二あたりには受けがいいんじゃないかな。

「そんなことより、ほら、ロロナさっさと出かけるわよ」

「あ、そうだった。それじゃあ、二人ともわたしちよつと出かけてくるね」

「いってらー」

俺はぞんざいに見送りの言葉を投げかけた、大分心が荒んできてる。

「だ、大丈夫ですよ、アカネさん、その……に、似合ってますから！」

「その心づかいが今日ばかりは心に痛いッ、こんな姿を見られる事が既に末代までの恥だ……」

「き、今日はもう誰も来る予定ないですから平気ですよ」

「立った！フラグが立った！」

某アルプスのでかいブランコで大空に飛び立てるくらい綺麗に立ちちゃった。

「邪魔するわよ」

「なんというデジャヴ、お願いします帰ってください」

クーデリアさんと同じ言葉とともに入ってきたは、アーランドが誇るツンデレ、ミミちゃんだった。

「え？ミミちゃんどうして？」

「何言ってるのよ、あんたが今日一緒に出かけようって言ってきたんじゃないの」

「あ、忘れてた」

「ほら、とっとと出かけるわよ」

「あ、うん、すいませんアカネさん、それじゃ行ってきます」
「……………」

「ぷに」

「無視されるのが……一番キツイです」

一番的確な表現だと、汚いゴミがあってそれをわざと視界から外すみたいな。

「何が辛かったって、最初目があったときに家畜でも見るような目をしてきたことだよ」

「ぷに」

「俺にそっちの気はないんだよ！もう！これからどんな顔で会えばいいんだよ！」

俺は怒りの限りに手に持っているジャージを握り締めた。

「早く、これ以上客が来る前に早く修繕方法を考えなければ……」
「ぷに」

訳）フラグ立った。

コンコンと扉をノックする音が響いた。

「失礼する」

「ノックはさあ、したら返事を待たなきゃダメだと思っんですよ」

いくら馴染みの場所だからってねー、もしかしたら見知った人間がコスプレしてるかもしれないとか考えないのかね？

「む、そうだなすまなかった」

「……ステルクさん、あんた良い物着てるじゃないっすか」

「は？」

ターゲットロックオン！

標的は上着のコートっぽい奴！

若干厨二臭がするが今のフリフリ執事服よりは万倍マシだ。

「しかも俺のイメージカラーである黒、これは奪うしかない！」

俺は今までの人生で一番素早い動きを見せた……気がする。

ステルクさんは突然の事で対処しきれなかったようで、見事に後に回り込んだ俺に捕まった。

「へっへっへ、悪いよーにしないから大人しくしな」

「な、何を！ 離さないか！」

脇下から腕を伸ばしてステルクさんの腕をホールドした。

筋力だけは互角なんだ、いくら歴戦の騎士とはいえこの体勢ならま

ず負けない。

「ここで、俺に捕まり続けるか上着を俺によこすか、さあどっちを選ぶ」

「くっ、いい加減にしないか！」

「いくら吠えたところで、この状況は覆らないぜ」

「クッ」

突如、後ろから扉が開く音がした。今日は千客万来の様です。

「……悪い、邪魔したな」

何の用事だったのか、イクセルさんのその言葉とともに扉が閉まる音がした。

そりゃね、変な恰好した男が組み合ってたら誰でも逃げるよな。

「……俺、どうかしてました」

「そ、そうか、その、なんだあまり気を落とさないようにな」

「はい……」

ステルクさんはすごい微妙な顔をしながら、優しい言葉をかけてくれた。

「今日のことはなかったことにする、それでいいな」

「そうしてくれると助かります」

「そうか、それでは失礼する」

そう言って、ステルクさんはアトリエから出て行った。

ああいうのを良い男って言うんだろうな。

「よし！とつとと修繕の作業に戻るぞ！」
「ぷに」

もはや、フラグ立ったって思うことがフラグになってるから、余計なことは考えないようにしよう。

「よし！ぷに、ポリエステルの原材料は何だ！？」
「ぷに！」

「そうか！俺もわからん！」

詰んだ。

「落ち着いて考えよう、大丈夫だこちら1年半前は高2やってたんだ、ちよっと考えればいけるさ」

「ぷに」

「まずはポリとエステルに分解して考えようじゃないか」
「ぷにに」

「ポリ……ポリ、ポリ？」

三角形の秘密？

「それはポリンキーだっつーの」
「ぷに？」

「ごめん、俺って化学苦手だったんだよね」

無機まではいける、有機？ハハッワロス。

「エステルはあれだ、有機に出てきたエステル基ってやつときっと

何か関係があるはずだ」

「ぷに？」

「ああ、エステル基ってーのはな……うん、これはきっと関係ないな」

「ぷに！？」

「まずさあ！ポリとエステルで分けて考えるってのが間違ってるんだよ！」

「ぷに……」

そんなドン引きだわって顔するなよ、俺だって何が正しいかわからないんだよ。

「つまり考えるだけ無駄ということか」

「……ぷに」

「しかーし！俺は思いついた、そう言わば圧倒的ひらめき！」

「ぷにっ」

ぷにがミリ単位も期待してないけど言ってみろってたぶん言った。

「それはずばり、先人の知恵だのみ！」

「ぷに？」

「適当に錬金術の参考書読んだら、それっぽいものありそうじゃん」

よくよく考えてみると、この世界って文化レベル的にありえない水準の洋服ばっかだ。

つまり、ありえないものを作るのは錬金術だろうと言うことだ。

「というわけで、読書タイム」

「ぷに」

……
……

「ポリーウールにネイロンフェザーって……」
「ぷに？」

数冊読んだだけで、それっぽいのが出てきてしまった。

後ろの部分をハズせば、ポリにネイロン……ネイロンってつまりは
ナイロンだと思うっていうか間違いない。

「まあいい、僥倖じゃないかこれも日頃の行いが良いおかげだな」
「ぷに……」

「うっさい、で？ぷに的にはこのポリーウールってレベルどんくら
いなんだ？」

「ぷに……」

ぷには若干悩んだ顔をしたが、すぐに口を開いた。

「ぷにーん、ぷにーん、ぷにに」
「ん？」

いつものぷにぷにじゃなくて、よくわからないな。

「十進方的に考えてぷにーんが10か？」
「ぷに」

「つまり、ぷににが5とすると……にじゅうご！？」

25、ゼッテルが確か3だだったからその約八倍って……。

「ちなみに俺の今のレベルは？」

「ぷにに、ぷに」

「6……、4ヶ月で5上がるとしてもあと2年程度かかるってことかよ」

師匠に頼んだら作ってくれないかなー、でもあの人俺にこの服着てほしいみたいだから無理だろうなー。

「いや、待てよ」

「ぷに？」

「ある！あるぞ、解決策が！」

「ぷに！？」

俺は机を思いっきり叩いて立ち上がった。

「いざ行かん！ギルドへと！」

そうさ、冒険者が依頼を出しちゃいけないなんてルールはない！俺は早速アトリエの外に飛び出した。

「ぷに！ぷに！」

「ん？何だよ？」

肩でぷにがなにやら騒いでいる。

「ぷに！ぷにに！」

ぷにが俺の肩から飛び降りた、そしてそれを追って視線を下げると見覚えのあるひらひらが視界の端を過った。

「……………」

きよろきよろと周りを見てみた。

俺が顔を向けると目を逸らす人もいれば、可哀相なものを見る目、笑いをこらえるような目。

あらゆる、目が俺を見ていた。

「よっしゃぷに、ギルドに向かぞ」

「ぷに！？」

「早くしないと置いてっちゃうぞー」

「……ぷに」

体が軽いよ、まるで枷が外れたみたいだ！

この後依頼をしにいったら、フィリーちゃんがすごい悲しげな顔をしていた。

なんでだろうな？

腐の思考

俺は今日依頼の品を受け取りにギルドまで来ているのだが……。

「……………」

怪しい、今俺はとても怪しいモノを見ている。

「ぷに、あの二人何してんだ？」

「ぷにー？」

ギルドのカウンターの内側には何故か隠れているフィリーちゃんにトトリちゃん。

その視線の先には二人で会話している師匠にクーデリアさん。

「とりあえず面白そうってことはわかった」

「ぷに」

というわけで、隠れている二人に近づいていった。

「よう、何してんだ？」

「あ、アカネさん、ちょうどいい所に来ましたね」

フィリーちゃんは俺に気づくとカウンターの下から顔を出してきた。その目には妙な輝きがあった気がする。

「はい？」

「さあ、早くこっちに来てください」

「んにゃ!？」

そう言って、フィリーちゃんは俺の腕を引っ張りカウンターの内側へと引きずり込んだ。

この子ってこんな事する子だっけか？

「つか、トトリちゃんまで何してるんだ？」

「いや、それがわたしもよくわからなくて……」

「ふたりとも、あれを見て」

「アレって……師匠とクーデリアさんがどうかしたのか？」

別に何の変哲もない世間話をしているだけだ。

気になるところとしては、河に落ちたって言う単語がでたりとかクーデリアさんのツンデレが爆発していることくらいか。

「はあ、いいわ……トトリちゃんもそう思うでしょ？」

……この子頬を薄らとだけど赤く染めてるんだけど、口調もなんかいつもと違うし。

何か怪しい空気を感じる、こう背筋が寒くなると思うか……。

「そうですね。二人とも仲良しでちよつとوراやましいかも」

「いや、トトリちゃん、仲良しとかそんな生易しい表現じゃないと思うぞ」

うん、間違いなくフィリーちゃんが言ってるのはそういう意味ではないと断言できる。

一言で言うなら……百合？

「あ、アカネさん！わかってくれますか！」

途端に満面の笑みを浮かべてフィリーちゃんが俺に迫ってきた。

顔が異常に近い、男が苦手ちゃうんかと。

「わ、わかるって？」

「ですから、あの二人の関係ですよ」

「関係？」

横でトトリちゃんが疑問符を浮かべていた、君は一生分からない方がいいと思う。

「ほら、アカネさん説明してあげてくださいよ」

「え、俺！？」

何というキラークラス、これをどう繋げろというのだ。

正しい……いや、むしろかなりねじ曲がった解釈を話すとトトリちゃんの精神衛生によろしくない。

けど、ここでフィリーちゃんの意図しない答えをしたら、がっかりさせてしまう……のか？

（どうしよう、ぷに）

視線で肩に乗っている相棒にアイコンタクト。

（ぷにに）

（なるほど！了解した！）

アイコンタクト終了。

……さて、どうしたもんか。

実は全然意思疎通できてなかったりする。

まあ、どうせ俺が話さなかったらフィリーちゃんが話すだろうし俺から言っちゃうか。

断っておくが、俺は知識として知ってるだけでそっちの気はないからな。

覚悟を決めて、トトリちゃんに向けて言葉を発した。

「あれだな、うん、二人が好き合つてるとしたらってことだ」

「好きあ……ええええ！？そ、そんな二人とも女の人なのに、そんなことあるんですか！？」

ちらりと目線を右に向けると、フィリーちゃんは満足げな笑みを浮かべていた。

「まあ、あくまであるかもしれないって話だけど」

なんか、若干自分の顔が赤くなっているのを感じる、恥ずい。

「でも、アカネさんそれはちょっとベタすぎると思うんですよ」

フィリーちゃんが横からツツコミを入れてきた、何？討論会スター

トしちゃうの？

第一次百合会議？俺のいないところでやってくれ。

「実はクーデリア先輩の片思いでロロナさんはその思いに気づきつつも……っていう方が良いと思うんですよ」

……この子真性だ。今更ながら知ったかぶりをしたことに後悔を感じた。

俺はフィリーちゃんともっと仲良くなりたかったよ。でもさ、こういう方面でじゃないんだよ。

俺が仲良くなりたいのはフィリーちゃんであって、決して腐ィリーちゃんじゃないんだよ。

「トトリちゃんはと思う？」

「わ、私に聞かれても困りますよ！」

ああ！トトリちゃんが腐の毒牙にかかっている！

なんとかこっちに惹きつけなければ……。

「相談しがいがないなあ、トトリちゃんはどっちが好きかって意見を聞きたいのよ」

「ごめんなさい、なんていうかもう全然ついていけないです」

トトリちゃんが困ったような目を俺に向けてきた。

すまんトトリちゃん、俺には彼女を止める手立てはない……。

「むう、アカネさんは他に何かないですか？」

そりゃ飯を食うのに家畜を育てるより、普通は手軽な既製品を買うよね。

でも残念ながらこの肉は脂肪ばかりで、中身がないんだよ、だから許してください。

心の中で許しを請うもフィリーちゃんの目の輝きは増していく一方だった。

クソッ！負の力を持っているのに綺麗な目をしやがって。

その目に耐えられず俺は最も泥沼になるであろう選択をしてしまった。

「あれだ、クーデリアさんは師匠の事を好きなんだけど、想いに気づかない師匠に若干冷たくしてしまうみたいな」

ぷにが小さく鳴いた声が耳元に響いた、俺だって自分で言ってるよ。言ってるんだ俺って思ってるよ。

ただ俺のそんな思いを知らずにフィリーちゃんはえへへと笑った。

「流石です、やっぱりアカネさんはわかってますね」

「あはは……」

「アカネさん……」

トトリちゃんが俺の事まで悲しげな瞳で見つめてきた。

俺は悪くねえ！

俺の口からはなおも乾いた笑いがこぼれ出していたのだが、ふいに気づいた。

「あはは……はっ？」

横を見ると金髪でいつも通りちっちゃいクーデリアさんが立っていた。

「さっきから大声で、何をたわけたことを喚き散らしてるのかしらねえ。このバカ受付嬢にバカ冒険者は」

「ひゃあああ！くく、クーデリア先輩！？い、いつからそこに……」

「二人が好き合ってるー、くらいからかしらね」

ちょうど俺のセリフのところかよ、俺が変態みたいじゃないか。

「そ、そんな前から……全然気づかなかった、クーデリア先輩、ちっちゃいから……」

「フリーリー！このバカー！」

お前の前世絶対ボンバーマンだろ！

「ぶちっ」

何かが切れる音がした。

何がって？決まってるだろ？

「……さぼってるだけならまだしも、くだらない妄想にうつつを抜かした挙句しまいにはいつてはいけない一言まで……」

あれ？もしかして俺ターゲットから外れた？

「アカネ、あんたもよ」

「ですよー」

「錬金術で作れる物を自分で作らないで、しかもこいつに付き合っ

— — — — —
— — — — —

「……フィリーちゃんのせいで酷い目にあった」

「あ、アカネさんも乗ってきたじゃないですか」

俺はカウンターの外側に腰掛けて、内側にいるフィリーちゃんと話していた。

クーデリアさん曰く、小休止らしい。

「自業自得よ」

フィリーちゃんの横にはクーデリアさんともい恐怖の大王。

「爆弾に火を点けたのはフィリーちゃんだろうが」

「む、アカネさんだって気づかなかったじゃないですか」

「……説教をすぐに再開しましょうか？」

「「……………」」

しょんぼりと二人とも沈黙した。

「まあ、でも」

そう言い、クーデリアさんはフィリーちゃんを見つめた。

「なんですか？クーデリア先輩？」

「いえ、なんだかんだで男にも慣れてきたみたいじゃない」

「言われてみればそうだな、昔なんて事あるごとに悲鳴あげられてたしな」

思えば、この世界に来て初めて聞いた悲鳴はフィリーちゃんの悲鳴だったなあ……。

「アカネさんはその、話が合いそうだなって最初に思いましたから……」

そういや初対面の時に言われてた気がする、今更になってあの言葉の意味がわかった。
ていうかあの時既に俺はロックオンされてたのかよ。

「その合いそうな話はふかく追求しないであげるわ」

そりゃ自分が妄想の題材にされてるんだから聞きたくないよな。

「でもそれ抜きにしてもあんたたちっておかしいわよね」

「え？何がですか？」

俺は疑問の声を発した。

「だって、互いの呼び方どう考えてもおかしいじゃないの」

「「……？」」

全く話が分らず俺とフィリーちゃんは互いに顔を見合わせた。

「もしかしてわかってないの？」

「いや、だから何がって聞いているんですけど」

何か見落としてる物あったけか？

特に不自然な点はないはずだが……。

「二人とも、自分の年齢を言ってみなさい」

「え？19ですけど？」

「23ですよ？」

「「え？」」

今日は妙にフィリーちゃんと声が重なる。

いや、そんなことよりだよ。年上？年上だったのしかも四つも。

「あ、えーと、フィリーちゃ……いや、フィリーさん？」

「え？あ、アカネさ……アカネ君？」

しどろもどろ。

「やっぱりわかってなかったのね」

「年上だったんですね」

「そうみたいです……」

てっきり俺はトトリちゃんよりも2つくらい上かなくらいに考えてた。

「ええと……はあ、今更めんどくさいし、いつも通りでいいか？」

「あ、はい。そうですね、それがいいですよ」

一年以上もこの関係だったんだし、今更年期なんて言われても口調を変える気にはなれない。

「かっかっか、これにて一件落着」

俺はギルドの外向けて歩き出そうとした。

「待ちなさい」

良い話っぽくまとめようとしたけど無理でした。

「逃げようとするなんて、そんなに私の怒りを蘇らせたいのね」
「オワタ」

「あ、アカネさん！」

「し、仕方ないだろ！早く帰ってたんだよ！」

「さあ、再開するわよ二人とももう一回並びなさい」

この人本当、こう言う時は良い笑顔するわ。

………

……

今日の戦果

依頼品のポリーウール

腐の心

心に刻まれた新たなトラウマ

マイハートブレイク

やあ諸君、俺は今日も今日とて改造執事服を着てアトリエのソファに座りながら知的な読書をしているんだ。

別にこの服が気に行った訳じゃないからな？ ちよっと諸事情でハゲルさんに預けているんだよ。

修繕よりも、あの人に頼んで一から作ってもらった方が良いんじゃないかってことだな。

まあ、そんなことはともかくとして……だ。

「ちむー！」

「ぷに？」

「ちむちむ」

「ぷにににに」

「……………」

「ちむ」

「ぷに！」

「ちむ？」

「ぷに」

「——ッ！！」

気になる。

こいつらが話してる内容が気になって読書に集中できない。

「ぷに」

「……ん？」

俺が葛藤の中にとくと、ふいにぷにが視線を俺に向けて一鳴きした。

「何だ？」

俺が小さく呟くと、ぷには再びちむちゃんに向き直って会話を再開した。

「ぷににに」

「ちむ」

「……？」

なんか二人とも笑いだした、だからなんだよ？

「……ぷにっ」

ぷには俺に再び視線を向けたと思うと、人間で言う鼻で笑うと言う感じに鳴いてきた。

「もしかして、俺を笑いの種にしてないか？」

「ぷに」

「ちむ」

両者共とぼけた声を出しているが、それは肯定と同義じゃないか？

「どうせ、こいつはダメな相棒だぷに、とか言ってたんだろ」
「ぷに！」

ほほう、開き直るとはいい度胸だな、お主。
ちようと休憩しようと思ってたところだ、ここは一つ遊ぶとしようか。

「ゲッヘッへ、今すぐ謝らないと、この子がどうなることやら」

俺は悪役よろしく立ち上がってちむちゃんを抱き上げた。

「ぷに！？」

「ちむゝ！」

意外とノリがよろしいようで、ちむちゃんは目をバツテンにしてぷにへと助けを求めた。

「この子を返して欲しくば、アカネさん超素敵ー！と言うがいい」

「ぷに！」

「ほほう、俺には屈しないか？……ならば、こうだ！」

「ぷに！？」

俺はちむちゃんを上空へと放り投げた。

「ちむー！」

そして落ちてきたところを両手でキャッチ。
また放り投げる。

「ちむー♪」

キャッチ。

「クックック、恐ろしかろう」

「ちむ」

涙目になっているちむちゃん、演技派ですね。

「貴様が刃向かうと言うならばもう一度……」

俺は再び上に放り投げる構えを取った。

「あ、アカネさん！何してるんですか！」

「え？」

「ぶに？」

「ちむ？」

三人一斉に声の方向を向いた、そこにいたのは我らが癒しのトトリちゃん。

ただ今回ばかりは癒しとはかけ離れた剣幕で俺に詰め寄ってきた。

「やめてください！ちむちゃん泣いてるじゃないですか！」

「え、い、いやこれはだな」

単なるじゃれ合い、そう言おうとしたが途中で遮られた。

「ちむちゃん、大丈夫？怖くなかった？」
「ち、ちむ」

トトリちゃんに抱かれたちむちゃんは若干戸惑い気味だが頷いていた。

「もう！アカネさん、ちむちゃんに変なことしないでください！」
「は、はい。ごめんなさい」

思わず謝ってしまった、俺何か悪いことした？

「アカネさんは偶におかしくなるけど怖くないからね」
「ちむ」
「―――！？」

絶句、その表現以外浮かばない。

ちむちゃんが普通に裏切ったとかそんなことじゃない。トトリちゃん……ちよつとストレートすぎない？

「それじゃあ、アカネさんが落ち着くまであっちに行こうね」
「ちむー」
「……………」

何これ？

「何これ？」
「ぷに」
「何これ？」
「ぷにー」
「何これー！？」

俺は激情に任せ、アトリエの外へと飛び出した。

………

「……というわけねー」

「ああ、はいはい、わかったわかった」

現在はサンライズ食堂、目の前にはお酒。

「わかってないれすよ！イクセルさんはー、わかってない！」

「つーか、お前本当に未成年じゃないんだよね？」

「当り前じゃないですかー、そんな悪いことしませんってー」

「ぷにー」

今日はぷには飲んでないのかー、まあトラウマなんだろうなー。

「なんていうかーお酒に逃げたい……みたいな気分でー」

「つまりさ、あいつはその……ちむちゃん？だったかが絡むと性格が変わるってことじゃないのか？」

「だからってー、俺が異常者扱いなんて、俺はトトリちゃんには優しくしてるって自負があったのにー」

偶におかしくなるって、情緒不安定な人扱いだよ、やってられねえ。

「つーか、ぷにもぷにだよ、何か俺だけが悪いーみたいになっ
て」
「ぷにー」

ぷにが俺に話しかけられて露骨に嫌そうな顔をした。

「そもそも、お前があんな話をしてるから」

「っほ」

「何をほっとしてるんですかー！そんなに俺がめんどくさいですかー！」

「い、いやそういう訳じゃなくてな、ほら、俺だって仕事があるから、な」

……確かにそろそろ昼だし、ここに居座り続けるのも迷惑かもしれない。

「むー、それじゃ帰ります」

「そ、そうかそうか」

「なーんか喜んでませんか？」

「んなことないって、また来いよ」

俺はお代を払って食堂を後にした。

「うー、どこに行こう？」

「ぷに？」

今からだと、帰るに帰りづらい。

「ちむ？」

「んにゃ？」

足元からついさっき聞いたばかりの聲がした。

「んー、何してんだ？」

「ちむー！」

「ああ、おつかいか」

「ちむ」

「……………」

俺はしゃがみこんで、ちむちゃんの頬を掴んで横に引っ張った。

「ちむー！？」

「かわいい顔して、裏切りおってー」

「ちむー」

「言っとくけどなー、俺は別におかしな人ってわけじゃないからなー」

「ちむ」

ふむ、なかなか素直じゃないか。

だがしかし、お前のせいで俺は心にダメージを負った訳だ。

「復讐のゲログをお見舞いしてやろうか」

「ぷにー！？」

「ちむー！？」

「ああー、ちようどいい具合に気分悪くなってきた」

まあ、もちろんジョークだ。

本当にそんなことしたらトトリちゃんに絶縁状を叩きつけられかねない。

「にゃっはっは、逃がさぬぞ」
「ちむー！」

今の俺って、変な執事服来てちっちゃな子を捕まえてる変態にしか見えないんだろうな。

俺がふと、そんな思考をしたときだった。

「や、やめてください！家のちむちゃんに何してるんですか！」
「……………」

ふと後ろから声、力を緩めると、ちむちゃんは俺の後ろへと歩み寄った。

……デジャブ？

「もうダメでしょ、ちむちゃん。こんな変な格好してる怪しい人に近寄っちゃ」

グサリグサリと俺の心にクリティカルヒット。

前にお世辞でも似合っていると言ってくれたトトリちゃんはどこにいったんだろう。

「……そうだよな、やっぱり変だよな、自覚はあったよ」
「えー！？あ、アカネさん！？」
「グッバイ！」

俺は、立ち上がり片手を上げながら走り去った。

目頭が熱いのは酒で涙腺が緩んでるだけだ、そうなんだよ。

「……ぷに」

とりあえずはそうだな、ハゲルさんから品物を受け取りに行くか。

その後俺はアトリエに書置きを残して、アーランドから出ていった。

旅に出ます探さないでください

アカネ

マイハートブレイク（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません、全てはデモンベインのせい。

家出物語－1 前途多難

「やるぞ相棒、俺たちの本当の力を見せてやる」

「あ、アカネさん……？」

俺の眼前には俺の倍もあるほどの巨大なドラゴン。

後ろで倒れているトトリちゃんを庇うように俺は構えた。

「待たせたな、トトリちゃん」

「ぷに」

「あ、危ない！」

俺に向かってくるは、ギロチンのように鋭く巨大な爪。

一見すると絶対絶命だろう。

「甘い！」

しかし、俺はそれを横に拳一振りすることで行なした。

「再会に割って入るなんて、無粋だな……」

「……あ、アカネさん」

さて、さっさとこんな奴は片づけてしまおうとしよう……。

「……みたいな感じで戻りたい訳だ。うん、かっこいい」
「ぷに」

「そんな精神的に病んでる人を見る目で見るとよ」

超かっこいいじゃんか。ヒロインのピンチに駆けつけるヒーローみたいな感じでさ。

最強、無敵、そんな感じになりたいですよ。

「……ぷに」

「しかしどうすつかね？行くあてもないし」

勢いで出てきただけあって、俺は現在ふらふらと自転車で走行中。今は東に向かって街道を走っている。

「地図を見る限りだと東には、砂漠があってその先には森があるっぽいけど」

「ぷに」

「ああ、もうめんどいし村に逃げようかな……」

「ぷにぷに！」

「そればっかはやっちゃいかんと？」

確かにあれだよな、キリストの復活レベルで冷めた空気になっちゃうよな。

3日で復活はない、せめて2、3ヶ月くらい間を持たせんと。

「とりあえず、砂漠を抜ける……か？」

前方に怪しい男発見。

偉そうな口髭生やしている、ワシ頭の杖を持っていたいかにも紳士と言った感じの風貌をしている。

年齢は……40前半くらいか？

「あれだな、ナイスミドルって奴だ」

「ぶに」

そんなことを言いつつ、近づいていくとふいに声をかけられた。

「ああ、君。ちょっといいかね」

「んむ？」

俺は自転車を止めて、地面に降りた。

「なんででしょうか？」

「いやなんだ、随分と面白いものに乗っていると思ってね」

「ほほう、いい所に目を付けましたねえ。何を隠そう、これは俺の友人が作った現状最速の乗り物ですよ」

そう答えると、おっさんは何やら感慨深いという表情をしていた。

「ふむ、少し離れていたつもりだったが、技術の進歩と言うものはまったく早いものだな」

「まあ、なんていうか完全に離れ技なんですけどね」

俺の元の世界の知識に現チート代表のマークさんの力が合わさってこそその物な訳で。

「しかしその乗り物もそうだが、君はまた変ったものを連れているな」

「ぷに」

いつの間にカゴから出ていたのか、俺の肩にはぷにが乗っていた。

「こいつは俺の相棒のシロ。ちなみに俺はアカネって言います」

「む、失礼した。本来ならば私から名乗らねばならぬところであったな。私のことはジオと呼んでくれたまえ」

「どうもご丁寧に、すれ違っただけの仲なんですけどね」

「たしかに奇妙な縁ではあるが、これもまた一つの出会いというもののだよ」

「そんなもんですかね？」

……かけえ。

こんなセリフが合うのはこの人くらいなもんだろう、俺が言ったところを想像してみろよ？

なんだろうか、この人の言うことは説得力があると言うか、貫禄があると言うべきか。

ジオさんの外見と相まって、かなり様になっている。

「なんつーか、あれですね。ジオさんって王様って感じですよね」

「ん、んむう、そ、そうかね？」

ん？なんか急に焦り出した？いや、気のせいかな。

「そうですよ、俺の聞いた元国王って人に見た目似てますし」

半年くらい前、アトリエに来たステルクさんにいつも何してるのかと聞いた時だったか。

なんでも放浪癖のある元王様を追ってあっちこっちらに行ってるらしく。

とりあえず、手助けになればと思って容姿について聞いてみたのだ。

「たしか……口髭があって、前髪を片っ方降ろしてて、偽名で使ってる名前が……ジオ？」

あれ？

「すまんが、私はここで失礼させてもらう」

そう言って、ジオさんは彼が歩いてきた方向と逆に向かおうとしていた。

「いや、ちょっと待ってくださいよ！」

「すまんが見逃してはもらえないだろうか」

「そんな逃げるくらいならなんで、こんな街の近くをうろついてんですか」

「いや、近くまで来たものでな、折角だから様子でも見てみようかと思っただよ」

ちょっと楽観的過ぎないか？

もしステルクさんに見つかったらどうするつもりだったのか。

「まあ、見つけちゃったからには捕まえさせてもらいますよ」

「残念だか君では私を捕まえられんよ」

「いや、そんな元国王一人に逃げられたりしませんよ」

俺がそう言うと、ジオさんは仕方ないと言った様子でため息をついた。

「逃げたりなどせんよ。ただ知り合ったばかりの若者に手荒なまねはしたくない。もう一度聞こう、見逃してはもらえないだろうか？」
「それが警告何か知りませんが、あいにくと逃がす気もやられる気もありませんよ」

俺はそういつつも、ファイティングポーズをとった。

「一応、元国王様なんで手加減はしますけど――！？」

突然腹に衝撃が走った。

「む、なかなか鍛えられているな。今の一撃で倒れないとは」
「ゴホッゴホッ！」

瞬間移動でもしたのかこのおっさんは！？
おれの眼前には杖を持ったジオさんの姿があった。

「シッ！」

後ろにバックステップを2回。その隙をカバーするのは……。

「ぷに！」
「むっ」

俺の後方からぷにが突撃、しかし軽く身を捻っただけでかわされた。

「なるほど、ただのぷにではないということか」
「ぷにに！」

再度、突撃をするぷに。

「――ぷに！？」

「なっ！」

ジオさんが片手で杖を立てに振るった。

きれいに、それこそ寸分の乱れもないカウンター、必殺の一撃が決められた。

「元国王じゃなかったのかよ……」

俺は焦りを感じながらも、ゴースト手袋を嵌めた。

こんなんなら、さっき妄想してたドラゴンの方がまだ気が楽だ。

「国王が戦えないと誰が決めたのかね」

「まあ、確かに」

歴史を顧みれば、優秀な指導者であり優秀な戦士であったものはいるはずだ。

「フッ！」

とにかく俺の間合いに、その一心で俺はジオさん目掛けて駆けた。

距離は俺が一方的に縮めていった、ジオさんは一切動かない。

そしてジオさんの間合いに入った瞬間のことだ。

「――ッ!？」

不可視の一撃、まさにそう表現するべき一閃をどこに食らったのかもわからないまま、俺の意識は沈んでいった。

………

……

「おい、君、大丈夫か!？」

「う……うむ……?」

俺が目を覚ますと、目の前にはステルクさんの顔があった。

「ひい!？」

あ、思わず悲鳴あげちゃった。

「……………」

「あ、その、いきなり男の顔を見せられたら悲鳴の一つくらい上げますって」

「……そういうことにしておこう、で?」

「はい?」

「君はなぜこんなところで倒れていたんだね?」

俺が起き上がって周りを見た。

目の前には街道、周りは草むら、隣には片膝着いたステルクさんといまだ寝込んでいるぷに。

「ああ、そうだ。すいませんステルクさん」

「……？なにがだね？」

「ええと、ジオさん——！？」

俺がその言葉を出した途端、俺の首元を締めん勢いで俺の肩を揺すぶってきた。

「やはりか！どこだ！どこに行った！」

「ちょ！ちよっと落ち着いてくださいって！」

「む、すまない」

そう言って、俺の肩から手を離して冷静な表情を作るが、どうも落ち着きがない様子である。

「えっと、ここで会ったんですけど……情けないですけど、戦ったやられちゃって」

「情けなくなどない、彼は間違いなくこの国一番の剣の使い手だ」

「うわあ……」

そりゃ勝てん、ステルクさん以上の相手ってことかよ。

「それで、どこに向かったか分かるか？」

「分かったら気絶なんてしてませんよ」

「そうか、いや気を落とさないでくれ、君は何も悪くなどない」

「そう言ってくれるとありがたいですよ……？」

俺がそう言っていると、突如空から一羽の白い鳩が降りてきた。

「くるっぽー、くるっぽー」

「なに！それは本当か！」

「くるっぽ、くるっぽ」

「わかった、すぐに向かうでしょう」

「……………」

この人、鳩の言葉わかるん？

「彼の行方が分かった。急いで行かねばならないので失礼する！」

「あ、はい。お氣をつけて」

ステルクさんは南の方向に向かって走り去って行った。

「……………捕まえられんよなー」

俺はステルクさんの無事を祈りつつも、自転車を起し、カゴにぷいを入れて再び家出の続きを始めた。

家出物語―1 前途多難（後書き）

アルエー（・3・）砂漠を渡る予定だったのに何故かバトルになつて
るよ。

家出物語 2 やられたら倍返しが基本

アーランドから出てきてから一週間程度、俺は砂漠をパパッと抜けて森を探索していた。

さすがの俺でも自転車に乗ったまま走行できないので、ぷにを肩に乗せたまま押して歩いている。

「今の俺のランク的に来ちゃいけない場所なんだろうな」

地図を見る限りでは俺の探索領域からかなり逸脱していた。

「ぷに……」

「しかし！そんなこと気にする俺では、ない！」

「ぷに」

そんな露骨に不安そうな顔するなよ。

「大丈夫だって、別に監視カメラがある訳でもないんだしさ」

「ぷに？」

「俺の世界の便利アイテムだよ」

「ぷに」

「ま、こんな場所に来てるなんて誰も思ないだろうから、目立つことしなきゃバレないさ」

「……ぷに」

多少の葛藤があったようだが、どうやら納得してくれたようだ。

「つか、お前。いっつも無茶振りしてくるくせに、こういうところでは律義なのな」

「ぷに〜……ぷーににに」

「ぷーににに……？ ああ、クーデリアか」

「ぷに」

ぷにがそんなに恐れるとは、銃で撃たれたのがそんなに怖かったのか。

「いや、怖いに決まってるっつーの」

「ぷに！」

「……帰ろうかな」

「……ぷに」

一抹の不安を抱えつつも、俺たちは森のさらに奥へと進んでいった。

……
……

「森を抜けて荒れ地に入っと思ったたら、またすぐに森に入っただな」

「ぷに」

あれから、2日ほど歩いていくと、次第に自然が少なくなっていく、そこには荒野が待っていた。

特に目立つものもなかったもので、また2日ほど北に歩いて行くと、

またも森が待っていたというわけだ。

「……きれいだけど、変な森だな」

「ぷに」

それもこれも、そこら中で植物が光っているせいに他ならない。

見た目は鈴蘭と言ったところか、サイズが俺の倍くらいありはするが。

「奥にある、あの機械が関係してんのかね？」

ここからでは良く見えないが、奥で鉄でできた何かがあった。

狭い範囲が隆起している場所同士が橋で繋がっている辺りも見ると、大分人の手が入っているということだろうか。

「ぷにに」

「ん、そうだな。とりあえず探索しなきゃ始まらない」

ぷにに急かされ、俺は奥へと歩き始めた。

「お、あのぷにってお前の仲間じゃないか？」

「ぷに？」

少し奥へと進むと、そこには3匹の白いうさ耳をつけたぷにがいた。俺たちは、そいつらを木に隠れて様子を窺っている。

「黄色いのがうさぷにだったから、あれは白うさぷにってところかね。」

しかし……どうしたもんか」

奴らが陣取っている場所の先におそらく先に進めると思われる橋が架かっている。

必然的に、大回りしていくか突っ切るかしかない訳だが……。

「ぷに」

ぷにがイライラしとる、確かに大分キャラ被ってるもんな。

「押さえろ押さえろ、この辺のモンスターがどんくらい強いかわかんねえし」

「……ぷに」

もしこの場所が今の俺のランクより、2つ以上上だったら太刀打ちできる気がしない。

もちろんぷには別だが、俺は……ね？

「といわけで、回り込んでいくとしよう」

「ぷに。……ぷに！」

「――ぶっ!？」

納得したと思っていたのは俺だけのようで、ぷには奴らに向かって飛び出していった。

「……危ないようだったら援護して逃走するか」

俺は木陰に隠れたまま腰のポーチからフラムを3本ほど取り出した。その間にも、ぷにはやつらに向かって跳ねていた。

「頑張れよ、相棒……」

俺としては相棒の強さを信じているが、決してやられた前例がない訳ではない。

だからこそ、俺は今フラム片手に固唾をのんで見守っている。

「……………」

心臓の高鳴りを感じつつも奴らの行動を観察し続ける。

その間にも距離は詰まって行く。

目測5m程度

4m 握ったフラムを堅く握る

3m 木陰から若干身を乗り出す。

2

1

0

……………?ゼロ?

「……………うん?」

一切何の荒事もなく、ぷに含めて奴らは距離を完全に詰めていた。俺は状況を把握できず耳を澄ましていると、ぷにが奴らに何かを話

しかけていた

「ぷに、ぷにに、ぷーにに」

それに対して一匹が返答し、俺の相棒のぷにが続けていった。

「ぷに、ぷにに、ぷに」

すると一匹が相棒にさらに近づき、完全に距離を0にしていた。いわゆる密着状態。

そして頬擦りする相棒と、白うさ一匹。

「……………ちっ！リア充死ね！」

ナンパかよ！紛らわしいわ！
キャラかぶりに怒ってたんじゃなくて、溢れ出る情熱を押さえられなくなっただけかよ！

「相棒には…………女がてきないと思ってたのに…………」

どうしよう、ぷにがもしもだ。彼女との時間を大切にしたいから、もうお前とは付き合えないわ、みたいな事言ってきたら。

「悔しくなんかないんだからね！」

俺は本来考えていた遠回りルートを一人で駆けていった。

……………

……

「……痛い！痛い！すいません！申し訳ありません！」

適当に奥に進んで、俺は憂さ晴らしに弱そうなりスに喧嘩を吹っ掛けてボコられていた。

その数はだんだん増えて、今や2ケタに届きそうな数に苛められていた。

「やめて、マジ痛い！箱投げないでください！このフラムは違うんです！そういうアレじゃなくて！」

バシバシと鍋やら箱やらをうつ伏せで頭を抱えながら耐え続ける俺。

こいつら全然本気出してない、弱者をいたぶって遊んでやがる。

「ケツケツケ」

「てめえ！笑ったな！……い、いや今のは違って、ですね」

箱、鍋、箱、箱、鍋、箱、鍋。

死んでまう、こんなバカみたいなもので俺死んでまう。

「こ、ここは！この若干調合ミスったフラムを使って！痛！べ、別に何もしてませんから！」

苦し紛れにフラムを煙幕代わりにしようと、腹の下でなんとか線を外した。

「クックック、所詮は劣等！知恵の足りぬ獣どもよ！さっさと狩ってしまえばよかったものを……」

俺は不敵な笑みとともに立ち上がった、もちろんその間にもいろいろ投げつけられているので、我慢している。

「さらばだ！ハッハッハ！」

俺は高笑いとともにフラムを下に投げつけた。

……結果から言えば脱出には成功した。

「簡単に言くと、爆破、俺吹っ飛ばされる、隆起した場所にきたから奴らあきらめる。おk？」

「……………」

一難去ってまた一難、俺の目の前には一匹の俺の倍ほどの大きさがある、濃いピンクのリスがいた。

「そして、俺が君にぶつかったのも事故。全ては事故、ほら君と俺って何か似てるしさ許してくれよ」

体から漂う火薬の香りとか、君が上にかかっているフラムとか。

「いやあ、そのフラムすごいでかいよね、なんか箱に入って束になってるし、そんなにくらったら……」

死。

俺の脳裏にはさっきからその単語がちらついて離れない。

「……………」

「……………」

互いに一言も話さない、ただ相手からは敵意しか感じない。

RPGとかで言うなら、今のこいつの状態は様子を見るを選択した感じ。

「……………」

俺はじりじりと後ろに後退していった。

ただ、その下にはさっきボコッてきたリスどもがいる。

俺はポケットから手袋を取り出し嵌めて、その手を腰に持っていた。

「くそ！これで逃がせよ！」

俺は意を決して、ポーチから取り出した大量の爆弾を奴に投げつけた。

「ケッ」

奴は一つ鳴いて、その手に持つフラムを俺に投げつけてきた。

「やばっ——」

俺の爆弾と奴の爆弾、2つの爆弾の塊がぶつかり合うことで……。

瞬間吹っ飛ばされる俺、下ではリスどもが俺を見て嘲笑ってた気がする。

「バカどもが！これが我が逃走経路だ！ハッハッハ！」

全身に痛みがあるが、どこか心地よかった……Mじゃないからな。

[illegible]

「ふに」

「ん？ ああ、ここまで吹っ飛ばされたか」

俺は自転車を止めた入口付近で目が覚めた。

手袋を着けたのが功をそうしたようで、全身が痛むものの折れたりなどはしてないようだ。

「ナンパはどうだったんだよ？」

「ふに……」

ふにが横を振り向くと、そこは薄らと赤く染まっていた。

「まあ、人生そんなもんさ」

「ぷに」

「ただな、そこであきらめたら人生お終いだ」

「ぷに？」

俺は己の中で沸々と何かが熱くなっているのを感じた。

「復讐だ。復讐。自分を舐めた奴がどうなるか教えてやるのさ」

「ぷに！」

「そうだ！あんの小リスにでかリス！俺を舐めやがって、後悔させてやる！」

「ぷに？」

異世界の男たる俺をこけにしたリスども。

俺の専売特許である爆弾をパクツたピンクのリス。

「許さん。この旅の目的が決定したぞ！この森にいるリスどもを爆破してやる」

「ぷに！？」

「安心しろ、別に見境なくやる訳ではない」

「ぷに」

ぷにが安堵したような声を出した。

「……俺の気が済むまでやるだけだ」

「……ぷにに」

「とにかくだ、前の荒野まで戻るぞ。あそこに俺のアトリエを作る」
「ぷに」

「黙らっしゃい！俺の相棒ならついて来い、目にもの見せてやる！」

俺はまだ痛む体を動かし、自転車に跨った。

「次来た時が……貴様らの最後だ」

「ぶに……」

俺は一度後ろを振り返り、荒野に向かって走り出した。

家出物語－3 最高火力

アカネが家出してから3ヶ月、現在は年を越して2月のある日。

「ふむ。このあたりか」

彼、ステルケンブルク・クラナツハはちょうど家出野郎が居る森に来ていた。

それというのも、元国王探しがてらに頼まれていた用事を消化するためであった。

「まったく、彼女たちは私を便利屋だとも思っているのか……」

クーデリアからは、ここノイモントの森に生息するテラフラムリスの討伐を。

何でもここ最近、やたらと活性化しているらしく。並の冒険者では刃が立たないとの事で彼に白羽の矢が立った訳だ。

ロロナからは旅に出たアカネの搜索を。

これに関しては、ついでのついで。見つけたら連れ戻す程度の頼みごとなので、彼自身アカネがまさかここにいるなど思っていない訳で。

そして本命の国王探しだが、前回の結果は惨敗。

現在は東に行ったという、彼の鳩の情報を元にここまで来ている。

「……む？」

森の奥へと踏み込んでいくと、そこには奇妙な看板が刺さっていた。

『危険！今日一日入らぬように』

妙に達筆な字でそう書かれ、いや彫られていた。

質の悪い嫌がらせだろうと彼は大して気にも留めない様子で、奥へと進んで行く。

これに大人しく従っておけば、まあ幸せだっただろう。

「……？」

そこからしばらく歩を進めて行き、彼はある違和感に気づいた。その違和感からか、普段無口な彼からですら、口に出していた。

「何故だ……」

見渡す限り、モンスターが居ない。それどころか、そこかしらに地面の焼け焦げた跡が残っていた。

むしろ地面ごと抉れている場所すらある始末だ。

「……………」

彼は無意識に利き手である右手を剣の柄に持っていた。ここからは警戒態勢。一切の油断も許さない。

「アトリエと釜が完成したのはいいけどさ、どうするよ？」

俺は家出から1ヶ月と少し、前回の敗北から数週間の間に必要なものを作っていた。

アトリエは適当に木を爆破して作った木材を並べただけの、雨風を最低限防げる程度の物。

釜の方は、でかい石を削って作った石作りの物。

錬金術士として生活するには十分な設備だ。

「爆弾の材料はある、十分すぎるほどに」

フラムを作るのに必要なフロジストンは数日かけて砂漠まで行けば採れる。

「火薬は……ククッ」

今俺は傍から見ればかたりヤバい人の顔をしているだろうな。だがしかし、それも仕方ないだろう。

「タールの実に湖底の溜まり。かなり上質な火薬なんだぜ」

「ぷに」

「お前にとっちゃどうでもいいかだろうが、俺は結構嬉しい訳よ」

これは言わば、奴らを懲らしめるための重要なキーマンなのだから。

「んで、何の爆弾を作るかそれが問題だ」

「ぷに？」

「ただのフラムじゃあダメだ。何かもつとすごい爆弾を……」

俺は考えた、改良を施された様々なフラムを。

「地雷フラム、ロケットフラム、時限フラム……」

現代世界的に考えて、今すごい危険なこと考えてるんじゃないだろうか。

「他にも大砲とかさ、いろいろ作ってみるか」

「ぷに！」

「待っているがいい、あの日の痛み百倍にして返してやる……」

……………時は飛んで1ヶ月半。

「帰ってきたぞ……そうだ、帰ってきた」

「ぷにに」

爆弾を作るシーン？んな物見ても面白くないだろ？

言えることとしては、今日俺は二つの秘密兵器を持ってきたということだけだ。

「よし！ぷに、手筈通りに頼むぞ」

「ぷに！」

俺とぷには各々散開して、森の中へと潜っていった。

………
………

探すまでもなく、俺は黒いリスに紫のリス、前回俺をボコったのと同種のリスを見つけた。
数は1頭1頭で2頭いる。

「……みーつけたー」

俺はポーチからフラムを取り出した。

ゲッヘッへと下種な笑い声を出しながら、俺は奴らの前に躍り出た。

「先手必殺！我が実験台となるがいい！」

奴らは硬直している今が好機。

「ピッチャーアカネ、得意球は魔球フラム。俺こそが甲子園の怪物よ！」

ピッチャー、振りかぶって、投げた！

フラムが黒いリスに当たると同時に、もう一匹頭も巻き込んだの大爆発。

いままでのフラムの実に倍以上の範囲と威力だ。

これこそが、あの荒れ地で採取した新火薬の実力よ。

「これはメガフラムではない……フラムだ」

思わず某魔王様にならざる得ない。

これは俺最強の時代が来ちゃったんじゃないか？

「へいへいバッテリービビってる。ヘイヘイヘイ！」

爆発音に気づき周りから、数十頭のリスが来たが一樣に俺の事を恐れている。

「我が爆弾を恐れぬならば追ってくるがいい！」

決して勝てないから、逃げたのではない。これも作戦のうちだ。走っている間にも大量に投げられる箱に鉄鍋。

「無駄無駄無駄無駄！」

自己暗示って意外と効果あるよね。つまり大分痛いです。

そのままやられるのも癪なので、爆弾をばら撒きながら走っている。

……

……

危険地帯を回避して、俺はぷにのいる高い場所まで登った。

「痛い、いや、痛くない痛くない」

「ぷに」

俺はぷにに預けていた俺の杖を受け取った。

「ぷに、準備は良いな？」

「ぷに！」

「上々、ならば始めようではないか」

遠目に見える俺を追う奴らの群れ、あの姿が今から……。

「ぷに」

「ちよつとにやけてただけじゃないか、怨敵許すまじって奴だよ」

それに奴らはあくまでモンスター、決してかわいらしいペットなどではない。

人間を絶妙にいたぶるペットがいるなら、ぜひとも拝見したいくらいだ。

「未だ、あのピンクリスに接敵してないのは運が良かったな」

「ぷに」

「あいつら小物なら、すぐにでも吹っ飛ばせる」

そう言っている間にも、俺が先ほど回避した危険地帯に奴らは足を踏み入れようとしていた。

「君らは悪くないが、君らの仲間がいけないのだよ」

瞬間、目の前立つ火柱。地を揺るがす轟音。
熱風が俺の肌まで届いてくるほどだ。

「クックック……はーはっはっは！」

これこそが我が発明品地雷フラム、到底通常戦闘では使えないが今役に立てばよいのだよ。

「ハッハハー―ゲフツゲフツ！、ツハッハッハ！」

「ぷに〜」

「これで残るはピンクリスただ一匹のみよ」

「ぷにぷに？」

「格闘なんかしないっつの、レベルが違いすぎる」

まったく俺に死ねとおっしゃるのか。

そんなやり取りをしていると、前に俺を助けてくれたあの人の声がした。

「懸命だな。そもそも君は何故こんなところにいるのだね」

「……………てへっ」

まさか知り合いに会うとは思いませんでした。

「入るなって看板立ててたじゃないですか」

「……………」

無言で睨まれてる。何故？

「もしかして、怒ってたりしますか？」

「当然だ。君は少し自分の立場を考えた方がいい」
「立場？」

異世界人で冒険者で爆弾作りの天才？

「君はアーランドを代表する錬金術士の弟子であるということをお忘れしているのかね」

「あ、ああ」

素で自分が錬金術士って事忘れてた。

「そんな君がだ。違反行為をして、こんな所までくるなど言語道断と言うものだ」

「ま、まあ無事ですしいいじゃないですか……お願いですからクーデリアさんだけには言わないでください」

「ぶに……」

現実問題、一番誰が怖いかと聞かれればピンクのリスよりもクーデリアさんな訳ですよ。

「それはできないが、早く帰れたまえ彼女たちも心配している」

「ああ、もう3ヶ月ですもんね」

さらっと死刑宣告された気がするが、気のせいだろう。

「そう言えば、俺が出てきたあの日……ジオさん捕まえたんですか？」

「……それが叶えばこんな所に来ていないだろう」

若干自傷気味にそう言うステルクさん。

あの人強いから、仕方ないっちゃ仕方ない。

「それじゃあ、俺はまだやり残したことがあるんで失礼しまーす」

「ぷにー」

「あ、コラ！待ちたまえ！」

あの人に俺の最終目的を話したら止められるのは目に見えている。ここはステルクさんが隙を見せた今にパパッと逃げるのが一番だ。

……
……

「ターゲット確認。これより作戦行動に移る」

相手は一頭。前と同様橋の上に立っている。

既に相手も俺に気づいているようだが、依然として動かない。

「ま、俺がいまからやる戦闘なんて物語にしたら、ほんの数行で終わるものになるだろうけどな」

「ぷに」

俺が杖を前に振ると、目の前に黒光りした大砲が召喚された。

「その間抜け面に打ち込んでやるぜ」

「ぷにに！」

この大砲こそ、俺が数ヶ月かけて材料を厳選に厳選を重ねたスーパー大砲なのだ。

「食らえ！破壊の閃光！黄昏の光！」
ラグナロク

その大砲から出るのは、球ではなくレーザー、まさしく破壊光線。蒼の閃光が何の抵抗もしないピンクリスを飲み込んでいく。

「……ラグナロクはないな」

「ふに」

最高の威力なのにセリフは最高にスカッチまった。

「そして後には何も残らない」

光が止むとそこには塵一つ残っていなかった。

「すぐに方がつくとは言ったけど、まさかここまでアッサリいくとは……」

「ふに」

「まあ、勝ちも勝ちだ。互いに必殺の一撃を持ってたんだ。先にやったほうが勝ちなのは当然だろう？」

「ふに！」

まあ、もう何回か使用できるが、もう一回あの砲を作れと言われたら無理って言うしかないけどな。

「目標も達成したし。ステルクさんが来る前に帰るか」
「ふに」

この勝利を胸に、俺は帰るみんなの下へと……。

「……帰ったらラスボスいるの忘れてた」
「……ぷに」

笑って許してくれたりしないかな、クーデリアさん。

家出物語－3 最高火力（後書き）

……アカネが一瞬とはいえ最強物をやった……だと。

家物語 1-4 藪を突いて魔王召喚

3ヶ月ぶりにアーランドに戻ってきた俺たちはアトリエの前まで来ていた。

「どうすれば怒られないで済むかを考えとかねばな」
「ぷに」

ただでさえこの後にラスボスが待ってるんだ。師匠相手に精神をすり減らしたくはない。

「作戦名はETDだ」
「ぷに？」

「正式名は『えっ？ちょっと出かけてた、ただだぜ？』当然のように入って行けば意外と流れでいける……といいな」
「……ぷに」

師匠ならいけないかなと思いつつも、俺はアトリエの扉を開けた。

「師匠ー、帰ったぞー」
「ぷにー」
「うん。おかえりー」
「えゝ？」

ビックリしすぎて変な声が出た。
作戦通りの反応なんだが、なんかアツサリ成功したな。

「……なんて言うと思ったの？」

「だよなー」

「ぶに」

いくら師匠でもこんな数秒も考えてない作戦に乗ってこないよな。逆に安心した。

「二人して扉の前でコソコソ喋って、全部聞いてたんだから！」

「べ、別にちよっと旅に出るくらい冒険者なんだからいいじゃないか」

「うう、そ、そうかもだけど……」

いや、そんなことないから！師匠、がんばって反撃してくれ。

「でも、あんな置手紙だけだと心配しちゃうよ」

途端にしょんぼりとしてしまう師匠。

この人はクーデリアさんとは別の種類で俺にダメージを与えてくるな。

「まあ、悪かったよ。なんていうか勢いでそうだったというか……」
「ぶにに」

「……わかってくれればいいけど、今度からはちゃんと言ってね？」
「ああ。ところでトトリちゃんはいないのか？」

ついでに俺の旅の主原因でもある、ちむちゃんもいない。

「トトリちゃんは年越し辺りに村に帰っちゃったよ。ほら、トトリちゃんもうすぐ誕生日だし」

「ああ、確か来月あたりだったっけか」

「うん。わたしはこっちでお仕事あったから行けなかったけど……」
「いや、そんながっかりしなくても」

この人、トトリちゃんが好きすぎるだろう。

「そういえば、アカネ君の誕生日っていつなの？」

「俺？俺は一応、九月二十日だけど」

一応ってのは、まあ完全に日付が対応してるか自信がなかったりする訳だ。

「それじゃあ、ちゃんとお祝いしなきゃね」

「お、お祝いって……今年で二十歳になるのにそれはちょっと」

一言で言うとは恥ずかしい。

「わあ！アカネ君二十歳なるんだ。それならすごいお祝いしなきゃね」

どうやら余計に火が点いてしまったようだ……師匠、単純にトトリちゃんのお祝いできなくて鬱憤溜まってるだけじゃないのか？

「うん。楽しみにしててね」

「ああ、そうするよ」

そのためには、俺は魔王を倒しに行かねばいけない。

……

……

所変わってギルド前。

「バレている可能性も考慮して、作戦を立てておこう」
「ぷに」

話に聞く、ステルクさんの鳩とやらが伝えている可能性がない訳ではない。

「作戦名はOWPWだ」
「ぷに……」

ぷにがそのネタ飽きたみたいな目で見てくるが気にしない。

「正式名は『俺は、悪くない、ぷにが、悪い』 人これを転嫁と呼ぶ」

「ぷに！ぷに！」

「そうかそうか賛成か。というわけでレッツゴー」

「ぷに！？」

ぷにが攻撃に移る前に俺はとっととギルドの中に入った。

「クーデリアさん……お、いたいた」
「ぷにに！」

クーデリアさんはいつもの定位置にいた。
ぷにが何か言ってるが聞こえない

「クックック。クーデリアさんを恐れるお前はここで暴れられない、
そうだろう？」

「ふにに」

ぷにがぐぬぬっといった表情をしている。まあ、これも俺の頭が良
すぎるせいだ。君は悪くない。

「というわけで、クーッデッリアさーん」

俺はなるべくご機嫌な感じでクーデリアさんに声をかけた。

「あら、アカネじゃない。久しぶりね」

なんかさっきの師匠の反応とデジャヴって妙な恐れを感じてしまう。

「そんじゃ、とっとと免許出しなさいよ」

「？ はあ？」

事情がよく分からないが、言われるままに免許を差し出した。

「ま、まさか……」

俺はクーデリアさんの手に渡す寸前で手を止めた。

以下俺の妄想。

「はい。どうぞ」

「ええ、確かに……」

その瞬間、クーデリアさんは拳を強く握りしめ、免許を粉々にした。

「な、何を！」

「自分の胸に聞いてみなさい！」

「ひ、ひどい！」

「とっとと出てくがいいわ！」

「クーデリアさんの鬼！悪魔！」

「……何いきなり喧嘩売ってるのかしら」

「あ……」

妄想が現実世界を侵食した。

簡単に言う口に出ちゃった。

「これは、その、えっと……本音です！」

「へえ……」

これはもう混乱したじゃ済まされないレベル。

おいコラ、ぶにてめえ、笑ってんじゃねえよ。

「何のつもりか知らないけど、そんなにわたしを怒らせたいのね」

「ふ、ふん！どうせ、怒られる予定だったから関係ないですもんね
ー！」

……俺って今年で二十歳になるんだよね？
自分で自分の精神年齢が不安になってきた。

「怒られる予定……?」

「あれ?」

もしかして藪蛇?

「え、あの、あれですよ。ステルクさんから聞いてませんか?」

「ん? ああ、あの鳩の手紙ね」

伝わってるなら、何で最初に普通の対応?

「あんた。何か勘違いしてるみたいだけど、別に特別違反行為ってわけでもないのよ」

「……え?」

「冒険者免許を持っていれば基本どこ行ってもいいのよ。こっちはただ、その冒険者に見合った場所の地図を埋めるように指定してるだけ」

「でも、ステルクさんは……」

確かに、違反行為云々って言ってたはずだ。

「あいつはそういうお堅いところがあるってだけよ。自分の実力を把握すべきとか、そういうことね」

「……………」

つまり、遠回しに相手を気遣っての事ってことか、ステルクさんらしいのかなんというか。

「そうだったんですね。それじゃあ——!?!?」

失礼します。そう言いたかったけどぶにが俺の脚に噛みついてきた。

こいつ、最初の俺の発言まだ根に持ってやがるな。

「そうね。それじゃあ……わかってるわよね？」

「オワタ」

あの大砲を使ってもこのラスボスに勝てる気がしない。

「ふにににににに」

………

……

「はい。ランクアップよ」

「……どーも」

この人、すごいスッキリした顔してる。

いっつもいっつも怒られてるとこ『……』済まされるのには正直納得がいかない。

「しかし、よくあんたの実力でテラフラムリスを倒せたわよね」

「あいつは俺をコケにしやがりましたからね」

「まあ、苦勞したのは今のあんたからよくわかるけどね」

「……？」

別段俺はいつも通りのジャージ姿なんだが、変なところあるだろうか？

「気づいてないみたいだから言っとくけど」

「はい？」

「あんだ、いまものすごい火薬臭いわよ」
「……………」

鼻に二の腕を当てて、臭いを嗅いでみる。

「……二ヶ月も爆弾漬けだと嗅覚がマヒするんですね」

「そうみたいね」

「……………」

「……………」

微妙な沈黙が流れた。

「それじゃあ、俺トトリちゃんの所行くんで失礼します。」

「ちゃんと洗濯しなさいよ」

「はい……………」

火薬と硝煙の臭いがカッコいいなんて思ってた時期が僕にもありました。

ジャージからそんな臭いしても、なんか臭いの一言で終わっちゃう訳で……………。

「こんなオチは嫌だ……………」

紳士アカネ

三月の頭。俺はアランヤ村に着いてから、トトリちゃんの誕生日プレゼントを用意していた。
準備が終わった俺は一息つくためにいつもの宿屋の一室でベッドに座っていた。

「……俺って最近ペコペコしてばっかな気がする」
「ぷに？」

俺はアーランドから村に来るまでの間ずっと考えていた。

「師匠に謝って、クーデリアさんに関してはいつも謝ってばかり。どう思う？」

「ぷに」

「自業自得な面も確かにあった。だけどな……」

俺はそこで大きく息を吸った。

「男らしくない！……そうは思わんか？」

「……ぷに？」

ぷにが、お前そんなキャラじゃないだろみたいな目で見てきた。

「いや、俺だって男らしかったことあっただろう？ 例えば……」

「……………？」

「……………ぷに？」

ない？ いや、そんなわけ……

「……つまりあれか？ 俺は2年間ずっといいトコなしだったと！？」

「ぷに！ぷに！」

「う、うっせえやい！これから、いや、今からいいトコを作ればいいんだい！」

「ぷに？」

よしよし、ぷにもどうやら聞きたがっているようだな。

「そう、俺が考えに考え抜いた作戦。一言で言うなら、女性に優しく大作戦と言ったところか」

「……ぷに」

内容も聞かない内に、また下らん事をみたいなため息つきやがって。

「要は、俺がいつも怒らせるような真似をするから謝らなければいけない。ならば怒らせなければいい、そういうことだ」

「ぷにペッ！」

……俺の靴に唾吐きかけやがったぞこいつ。

「コホン！つまり！俺が紳士的な人間っぽく振る舞えば……『キャー！なんて男らしいの！』ってなること請け合いだろう？」

「ぷに」

欠伸ですか、そうですか……。

「仏の顔も三度まで……と言いたところだが、今にお前も考えを改めるだろう」

俺は立ち上がり、机の上にある本をポーチの中に入れて出かけようとした。

「ぷに」

「お前も来るんだよ、俺の雄姿を目に焼き付けるがいい！」

俺は無理やりぷにを肩に乗つけて外へ出ていった。

「今から俺はスーパーアカネだ」

何か大型量販店っぽい。

「……ウルトラアカネだ！」

「ぷに」

「何でお前はさっきからそんなに帰りがたってんだよ。今回の主目的はトトリちゃんに会いに行くんだから、ちゃんと着いて来いよ」

「……ぷに」

しぶしぶながら納得したようだ。まったく何をそんなに嫌がっているんだ。

「おっと、どうやらさっそくターゲットのお出ましのようだな」
「ぷに」

向こう側から歩いてくるやたらと露出度の高い服を着た女。
新生アカネの第一目撃者はメルヴィアか、相手にとって不足はないな、

俺は奴に近づいていき、第一声。我が産声を聞かせてやった。

「こんにちは。久しぶりだねメルヴィア」

「……!？」

「どうしたんだ？鳥肌なんて立てて、寒いのか？」

「……シロちゃん。こいつどっかで頭でも打った？」

「……ぷに」

酷い。俺が表面上は紳士的に振る舞っていると言うのに。

おっと、いかんいかん。表面だけの仮面紳士じゃあいけないよな。

「酷いな、まあでも、いつもの君らしいか」

「ちょ、ちょっと待って。何、あたしをからかってるの？」

「何で俺が君をからかうんだい？俺はただ、いままでの自分の態度が酷かったなって反省しただけさ」

本当に酷い。俺は今まで彼女を野蛮人か何かみたいに対応して、ああ、何て……酷い評価（真っ当な評価）だ。

「君は自分の後輩を心配できる素晴らしい女性なのに、今までの俺は目が曇っていたよ」

「な、何？何かお願いがあるなら聞くから、その喋り方やめてちょうだい。そろそろキツイわ」

「打算なんて無い。君がいかに理想的な女性か気づいたのさ」

主に戦闘面的な意味でな。

「ふん！」

「ガハッ!？」

こいつ突然ボディブローを放ってきやりましたよ。いくら鍛えてるとはいえ、この女の腕力の前には無意味な訳で、俺は地面に倒れこんだ。

「一発殴れば治ると思ったけど、どうかしら？」

「ぷに」

な、なんて奴だ。俺が紳士的なのがそんなに気に食わないと申すか。……落ち着け俺。ここで素に戻ったら負けだ。

「……何か気に障ったみたいだね。ごめんよ」

この紳士っぷり。これはメルヴィアも改心するレベル。

「シロちゃん。あと何発までだったらいけるかしら？」

「ぷに?……ぷにぷにぷに」

「そう、三発。そんだけやれば本性を出すわよね」

そこには拳と言う名の凶器を握り締めた笑顔のメルヴィアが居た。

「……………」

俺の中で天秤が揺れ動いている。

ネタを貫き通すか、痛いのは嫌か。

「……三分経ったんで、ウルトラアカネは終了の時間がやってまいりました」

Mなんとか星雲に俺の紳士人格が帰還した。殴られるのは嫌でござる。

「メルヴィアさ、もうちょっと俺のネタに付き合おうみたいな精神はないのか？」

俺は立ち上がり、土を払いながら聞いてみた。

「いや、本当にアレはないわよ。思い出しただけでも頭が痛くなってくるわ」

「そんなに酷くなかったと思うんだが……」

「あれね。あたしが、おしとやかな淑女になったって想像してみなさい」

「うん？………」

脳裏に浮かぶのは、ごきげんようと長いスカートを摘みながら挨拶をしてくるメルヴィアの姿。

「……っぷー！」

気持ち悪いと言うよりも、合わなさ過ぎて笑いが出てしまった。

このほぼ水着状態の服をきた女が、そんなゆったりとした服を着るなんて想像の中でしかあり得ん。

「……自分で言っというて何だけど、あんたの反応にイラッときたわ」

「不可抗力だ。逆にここでアリだって言われても困るだろ？」

「まあ、確かにそうだけど。複雑な気分ね……」

俺も妄想のお前とのギャップに若干ながら複雑な気分だよ。

「まあいいわ。考えてみれば、今日はあるに構ってる暇はないもの」

「ん？ 珍しくお仕事か？」

「珍しくは余計よ。あたしだって少しは働くわよ」

「ふーん。まあ、俺もトトリちゃんの所に行かなきゃなんしな。ところでトトリちゃん今居るか？」

わざわざここまで来たのにいませんでした。なんて事は勘弁してもらいたい。

「ええ、居るわよ。そういえば、こっちに戻ってきたとき。アカネさんが心配だー、とか言ってたけど何かあったの？」

「書置きだけ残して旅に出てた」

「とつと会いに行っただけなさい」

「怖い怖い。言われなくてもそのつもりだって」

メルヴィアが笑顔で急かしてきたので、俺はその場をそそくさと立ち去った。

.....

.....

.....

コンコン。

「はい。どうぞー」

俺がアトリエの扉をノックすると、いつもの返事が返ってきたので俺は扉を開けて中に入った。

「邪魔するぞー」

「ぷにー」

「あ、アカネさん!？」

俺の姿に驚いたようで、トトリちゃんが釜をかき混ぜる手を止めて俺の方を見た。

「トトリちゃん、手止まってるぞ」

「あ、もう終わってるから大丈夫ですよ……じゃなくてですね!」

「ソファ使ってもいいか？」

「ええ、どうぞ……でもなくてですね!」

むう、存外しつこい。

トトリちゃんの性格的に謝ってきそうなんだよな。

俺が勝手に出てったのに謝られるのは気が引ける、特にトトリちゃんに謝られるのはいい気分にはなれない。

「えっと、そのですね。アカネさん、この前のことなんですけどー」

「スターシップ!言わせないぜ」

「え、な、何ですか」

「俺は、今日、優しい大作戦を決行中なの。つまりはそういうこと

だ」

「ぜ、全然わからないんですけど……」

まあ、俺も自分で何を言ってるかよく分かんが。

「つまり、別にトトリちゃんは謝んなくてもいいってことだよ」

「で、でも、わたしがいろいろ言っちゃったから出てっちゃったんですよね……？」

トトリちゃんが肩を落として上目遣いで見てきた。

まったく、メルヴィアぐらいに適当な性格だったらもうちょっと気楽に対応できるんだけどな……。

「んじゃ、あれだ。俺のお願い聞いてくれたら、許すって事でどうだ？」

まあ別段怒ってはいないが、これで納得してくれるなら話が早い。俺は俺で、今日トトリちゃんに渡す物があるのだから。

「お願い……ですか？」

「そうお願い。至極簡単なお願いだ」

「わ、わかりました。なんでも言うってください！」

やる気満々なところ悪いが、かなりどうでもいいお願いなんだよな。

「うむ。九月二十日は俺の誕生日なので、それをお祝いしてくれって言うお願いだ」

「ふに……」

ぶにが何お前、まだ紳士キャラ演じてんのって言ってきた。素だよ、悪いかゴラ。

「誕生日のお祝い……？」

「そうそう、師匠がやたらと張り切ってるからさ、その手伝いでもしてくれないかなって」

「はい、わかりました！一生懸命お祝いしますね！」

「う、うむ。まあ、そんなに張り切らなくてもいいんだけど……」

まあ、世が世なら成人式なんて物もあるし、盛大に祝ってもらうのもいいかもしれない。

「とりあえず、俺の誕生部は置いといてだ……」

俺は腰のポーチから、用意しておいた本を取り出した。

「去年は特に何も渡せんかったからな。はい、ちょっと早いけど誕生日おめでとう」

今は三月三日だから、本当はあと半月程度ってところか。

誕生日当日に渡せるかもわからんから今のうちに渡しとかないといけないのさ。

「わあ！あ、ありがとうございます！」

トトリちゃんは喜んで俺のプレゼントを受け取ってくれた……が、本当に喜べるだろうか？

「トトリちゃん、トトリちゃん。よく本のタイトル見てみ」「え？」

俺がそう言うのと、トトリちゃんは真新しい黒の表紙に書かれているタイトルを声に出した。

「……アカネ流錬金術上巻？」

「その通り、それには読んで字のごとく俺がいままで書いてきたオリジナル錬金術のレシピとか、爆弾に適した材料の特性について書かれている」

「えっと、いいんですか？」

「いいのいいの、どうせトトリちゃんならパパッと作れるものばっかだろうし」

所詮、俺はトトリちゃんよりもレベルがかなり低い存在だし。

特性つつつても、旅に出た三ヶ月で見極めた物を書いただけの物だ。

「上巻ってことは、下巻もあるんですか？」

「……来年の誕生日には間に合わせる」

「お願いですから、無理はしないでくださいね」

「……まあ、善処する。つか、悪いなそんな物がプレゼントで」

製作期間は数日程度。一応、俺得意の爆弾についての知識を詰め込んでおいたが……。

「そんなことないですよ。嬉しいです」

ニッコリと、トトリちゃんは満面の笑みを浮かべてくれた。

この笑顔があればあと一年どころか、三年は戦えるな。

「まあ、喜んでもらえなら何よりだよ」

「はい。わたしも誕生日、アカネさんに喜んでもらえるように頑張

ります」

「まあ、ほどほどにな……所詮は俺の誕生日だし」

でも、嬉しくないと言ったら嘘になるな。

意外と今年の誕生日は良いものになるのかもしれない。

今日もやられ役

「……………」

今俺は埠頭で悟りを開いていた。

「我釣りをする、故に我あり」

「ぷに……」

座り込んで釣りをする俺とその横にはぷにがいる。

「……ここまで釣れないと、悟りの一つや二つ開くっつーの」
「ぷに〜」

こっちでは鍊金術ができずに暇だった俺はグイードさんから釣り具を貸してもらい、朝からここに居るのだが……。

「たぶん今頃みんなはお昼だろうなー」

「ぷに」

「昼飯は魚がいいと思ってたんだけどな」

「ぷに！」

ご飯が食べられずにぷにはご立腹のようだが、俺だって必死に頑張ってるんだよ。

「……そのタルに入ってるイワシでも食べばいいんじゃないか？」

顔を後ろに向け、大量のイワシが詰め込まれたタルを見た。
俗に言う、ご自由にお取りくださいって奴だ。

「……ぷに」

「そうだよな、生はきついよな」

「ぷに」

ずっと座ってたせいか、俺もぷにもイマイチ元気がない。

「……暇だ」

俺は思わず天を仰ぎ見た。

聞こえてくるのは小波の音に、鳥の鳴き声、そして剣戟の音。

「ぷにぷに」

「……そうだよなあ、釣れないの絶対あいつらのせいだよな」

首を戻して、横を見てみれば、そこには剣の修業をしている後輩君にステルクさん。

「あんだだけ、ドンドン音立てて踏み込んでれば魚も逃げるっつーの」
「ぷに」

「……どうする？」

「ぷに！ぷに！」

俺訳『先生！お願いします！』

「おーけー、俺の昼事情的にもそろそろ止めてもらわんといかんしな」

俺は竿を引き上げ、地面に置きながら立ち上がった。

そして今だに剣を振り回している野郎ども二人へと歩いて行った。

「おうおうおう！てめえら誰の許可もらってここで修行してんだ？
ああん！」

今の俺は切れたナイフ。街のチンピラAさんだ！

「――ハッ！」

「クッ！」

剣を振るステルクさんにそれを受ける後輩君。

この新宿の帝王AKANEを無視するとはいい度胸してやがる。

俺はポーチの中から光りものを取り出した。

「コロコロ、コロっとな」

地面を転がっていくのは、キラキラと光りを反射するビー玉たち。

「これで奴らはスッテンコロリン、さあ大変ってわけだ」

「……ぷに」

「クッククック、俺は素晴らしいぐらいに外道だなあ」

その間にも転がっていくビー玉たちは彼らの足元まで到達した。

「ぬっ！おい、待て！」

さすがステルクさん。我が奥義に気づいたようだが、後輩君は止まらない。

「タアッ！」

「クッ！——！！！」

ステルクさんの足元に転がるビー玉十迫る剣戟を受け止めるステルクさん

「イコール、ステルクさんの負けってな」

「ぷに」

そこには首元に剣を突き付けている後輩君の姿があった。

これで決着がついた訳だし、帰ってくんねーかな。

「や、やった！師匠に勝った！」

無邪気に喜ぶ後輩君に若干の罪悪感が刺激され……ない。今は危機感の方が上回ってる。

「そ、そんなに見つめちゃーよ」

「ぷに」

後輩君が喜んでいる横ではステルクさんが物凄い形相で俺たちの方を見ていた。

「ぷ、ぷに隊員！退路の確保は！？」

「ぷに！ぷにに！」

前方には敵影、残りの三方向は海に囲まれている。

「う、海に逃げるか！」

「ぷにに！」

落ち着けと言われた。

そうだ、クールだ。クールになるんだ。

「……正面突破だ」

「ぷに！？」

「俺を信じろ！何度俺がステルクさん及びその他を怒らせてきたと思っっているんだ？」

「……ぷに」

ぷには若干諦め気味に、前に進む俺に付いてきた。

「あ！先輩！俺師匠に勝ったんだぜ！」

あ、今ステルクさんのコメカミがピクってなった。

「そうか、よかったな。それじゃあ、さよならバイバイ。また来週！」

「ぷにに！」

後輩君との自然な会話からのダッシュ！これにはステルクさんもついてこれまい。

「さらばですステルクさん！この埋め合わせは今度しますから——
——ッア！？」

突然に俺は自分でもわからないまま尻もちをついていた。

「……俺を裏切ったのか友よ！」

そこに転がっているのは俺の戦友、ビー玉君。

「そしてお前もか相棒！」

遠く離れた場所にはぷにの姿があった。

「そしてステルクさん！俺も逃げていいですか！」

「いいと思ってるのかね？」

「と、時と場合によつては——ヒイ！」

ガキンッ！

地面に座り込んだ俺の足元に剣が突き立てられた。

「立て」

「い、イエッサー！」

俺は今だかつてないほどの速さで立ち上がった。

「何怒ってんだ？師匠」

空気読んで後輩君！わざわざ怒りに火を注がないで！

「お前は注意力が足りなさすぎる、それだから落ち着きもないのだ。よく足元を見てみる」

言われて周りを見渡す後輩君の視線に写っているのはビー玉諸君だろう。

「え？なんだこれ？」

「言うまでもないと思うが、そのバカがばら撒いたものだ」

「あれ？ってことは……」

それで気づいたのか、後輩君は落胆した様子だ。

「なんだよ。折角師匠に勝てたと思ったのに……。先輩、余計なことしないでくれよ」

「まあ、状況がどうであれ、負けは負けだ。そんなに落ち込むことはない。しかし、問題はこの男だ」

「……………」

今の俺はまさに蛇に睨まれた蛙状態。

「まったく。君も少しは落ち着きを持ったらどうかね。いつもいつもふざけた事ばかり……」

「すいません。持病のなんちゃって症候群なんです」

真面目なことをするのが苦手なんです。

「そういうところがふざけていると言うのだ！少しは自分の師匠や姉弟子を見習ったらどうかね」

「え？あの二人を……？」

「彼女らは君とは比べられないほど真面目に仕事をやっている。そういうところは見習うべきだ」

「む、俺だって仕事はちゃんとしてますよ！依頼だってコツコツこ

なしていますし」

まるで人をサボり魔みたいに、仕事面では俺は真面目だったの。

「ほう。以前会ったのがどこか、忘れた訳ではないだろう？さらに言えば今日もこんな所でフラフラと」

「ま、前は錬金術のレベルが上がりましたし、今日は……錬金術が使えないから、ちょっと休んでるだけで……」

「ならば何故その時間を鍛錬に使わない？」

「うぐっ……」

一応毎日筋トレはしてるけど、戦闘的な意味でのトレーニングはやってない……。

「それだからいつまで経っても自分の相棒に頼りっぱなしになるのだ。まったく、同じ男として情けない」

「ぷちっ」

いくら俺とはいえ、そこまで言われたら切れちゃうよ。

誰が相棒に頼りっぱなしだって？しかも情けないと？

「す、ステルクさんだって、いつまで経っても元国王一人すら捕まえないじゃないですか」

「……確かにそうだな。認めよう。だが、今はそのことは関係ない……」

「ぷーっ、自分の目標も達成できない人が他人に説教なんてお笑いですねえ。ゲラゲラゲラ」

全国のお姉さん方の俺に対しての好感度が下がった気がするが、気にしない。

今は目の前にいる自称騎士をギャフンと言わせてやる。

「……それは私に対しての挑発と受け取って良いのだろうか？」

「ふん！俺にだって一欠けらくらいはプライドがあるんですよ！後輩君！剣貸せ！」

「え？先輩剣なんて使えるのか？」

戸惑いつつも後輩君は俺に剣を渡してきた。

その間にステルクさんは散らばっているビー玉を避けていた。

「俺だって剣の練習くらいはしたことあるさ」

小学生の頃は傘でアバンストラッシュを。

中学生の頃は授業で剣道やって擦り足を。

高校生の頃はWiリモコンで回転切りを。

「それじゃあ、いきますぜステルクさん。怪我しないように気を付けてくださいよ」

俺は片手で刃の潰された剣を握りしめた。

ちなみにゴースト手袋は装備済みだ。

「ふん。素人の剣になど当たる気は毛頭ない。行くぞ！」

俺だって剣を当てる気なんて毛頭もないさ。

「先手必勝！飛翔剣ってね！」

読んで字の如く、俺は剣をステルクさん目掛けて投げた。そして俺は同時に駆けだした。

もちろん剣を当てるつもりはない。単純に避ける方向を限定し必殺の一撃を当てる。

電撃的に決着をつけるのは俺の十八番ですよ。

「夏塩蹴り！」

実に約二年ぶりに使う。俺は回避行動を取ったステルクさんの顎へと足を振り上げた。

「甘いな」

どのように避けられたかはわからないが、足に獲物を仕留めた感覚はなかった。

「……うげっ」

着地した俺の首元に冷たい物を突き付けられた感覚があった。逆に電撃的に決着をつけられてしまうとは……。

「実力に差がある以上先手で決める。その発想に間違いはないが、技の錬度が足りなかったな」

奇しくも、さきほど指摘された鍛錬不足を露呈させるような結果になってしまったようだ。

「クッ！わかりました。ちょっと今から修行してきます」

俺は首元の剣を避けて走り出した。
つまり技を鍛えれば万が一にも勝てる可能性はあったってことだろ！

「いつか負かせてやるんですからー!」

「せんぱーい! そういうの負け犬の遠吠えって言うんだぞー!」
「うわーん!」

後輩君の天然刃が一番威力があった。

村はずれの森にて。

「ハッ! 釣竿返すの忘れてた!？」

必殺技の伝道師

「フッ！フッ！」

パンチが風を切る音と木にインパクトする音がひたすらに続いている。

俺は今日、村はずれの森で珍しく特訓をしていた。

「絶対、一発、当ててやる！」

右、左のワンツートから右ストレートの王道コンボ。

昨日勢いとはいえ、負かしてやる宣言をしてしまった以上、適当に時間を使っではいけない。

「何が、怖い顔だ、イケメンじゃねえか！」

若干嫉妬が入った拳をひたすら木に叩きつける。

「あら、本当にいたわ」

俺がそろそろパターンを変えるかと考えると、ふいに後ろから声がかかった。

「ジーノ坊に聞いたけど。まさか、あんたが本当に特訓なんてしてるなんて、驚きね」

「……なんだ。お前か。驚きは余計だ」

そこにいたのは巨大な斧を持ったメルヴィアだった。どうせ面白そうだとかいう理由で来たんだろう。

「どういう心変わり？そこそ長い付き合いだけど、今まであんたが特訓してるのなんか見たこと無いわよ」

「主にステルクさんに一発、あわよくば勝利するためだな」

「あら、可能かどうかはともかくとして、あんたにしては真面目な理由ね」

「失敬な。俺はいつだって真面目だぞ」

「数日前のあんたにそれを聞かせてやりたいわね」

……ああ、あの優しいアカネ状態の時か。

「あれも面白そうと言う真面目な理由に基づいた行動だ」

「こっちとしてはいい迷惑ね、その理由」

「優しくしてたのに迷惑とはこれいかに」

これが俗に言う、ありがた迷惑という奴か。

「つか、そんな事はいいんだよ。ご用件は何ですか？」

「うん？別に、ただ面白そうだなーと思って来ただけよ？」

「……もうちょっと捻った答えをしてくれ。予想とまったく同じ答えになるってどういうことだよ。別にお前と以心伝心できても嬉しくねえよ！」

ちょっとは、こう。心配になってきちゃった。みたいな可愛げがあってもいいだろ。言ってきたら不快になるけど……。

「あたしだって別に嬉しくないわよ。むしろ、あんたに考えを読まれたと思うと不愉快ね」

「……ふう。もういい、俺はお前みたいな暇人に構ってるほど暇じゃないんでね」

暇人の部分に大分強くアクセントを入れて言い放ち、俺は再び木の方に向き直った。

ふっ、俺って奴は何てクールな対応だ。自分で自分に惚れ直しそう
だ。

「言ってくれるわね……ちょっとそこどきなさい」

「ぬおっ!？」

どきなさいって言いながら押し出しをかますなよ。

「いったい何……「とりゃ!」……え?……え?……え?」

メルヴィアがかけ声とともに放った一撃は……木を砕いた。

男が3人集まってやっとならう事ができそうな太さの大木を一撃で。
葉が擦れ合う音と共に大木は地面に倒れた。

「……………」

メルヴィアが得意げな顔で俺の方を見てきた。

この怪力女、想像以上だった。まさかここまでのバカ力だったとは
……。

「ふ、ふん。ま、ま、まあ。そ、そそ、そんなくらいは!で、でで、
できるよな」

「まあそうね。これでもまだまだ本気じゃないし」

「ぶっ！」

メルヴィア>>>>越えられない壁>>>>俺

この図式が俺の脳裏に焼き付いた。

「つまり、あたしは鍛える必要ないから暇を持て余してるのよ。わかったかしら？」

「あ、はい。すいません、生意気な口きいて」

「分かったならいいのよ。それじゃ、頑張りなさいよ」

「ういっす！頑張るッす！」

たぶん彼女はあれだ。テストで学年一位で模試で全国一位みたいな、そんな存在だ。

俺みたいな普通の人が競う事が間違ってるんだよ。

「……ここにぶにがいなことが悔やまれる」

ツツコミ役不在が悲しい。

………

……

「やっぱりあれか？必殺技か？」

さっきの事件から、いくらパンチや蹴りを練習してもなにか的を外れた気分だった俺は、パワーアップの王道ともいえる必殺技に光を

見ていた。

「音速を超える拳ソニックパンチ……」

顔が熱くなるのを感じる、自分で言っというてなんだが恥ずかしくなってきた。

二十歳近くで厨二病が再発とか痛々しすぎる。

「そうだよな、必殺技って年でもないよな……」

悲しいけど、大人になるってそういうことなんだよね。
どう考えても地道に連打を重ねていった方が堅実だ。

「あ、いたいた。先輩！」

「ん？」

振り返ればそこには妙に傷だらけになった後輩君が居た。

「どうしたんだ？その傷」

「ああ、これか。さっき師匠にやられちゃってさー」

「だからってんなぼろぼろに……。そんなに修行厳しいのか？」

「厳しいなんてもんじゃねーよ。全然手加減してくれねーし……。おまけに昨日の事根に持ってたのか今日は一段と本気になって……」

ああ、表面上は負けを認めてたけど、やっぱり内心苛立ってたか。

「それは、悪かったと言うか、ご愁傷さまと言うか……。で？何の用で来たんだ？」

「それだけどさ。先輩！オレに必殺技を教えてください！」

「え!?!ま、またか!」

前に回転切り、というすばらしい必殺技を教えた覚えがあるのだが……。

「ま、待て待て。必殺技が欲しいのは分かるが、それなら師匠かつ剣の使い手のステルクさんに教えてもらえばいいじゃないか」

「師匠に教えてもらっても師匠には勝てねーじゃん」

「む、まあ、確かにそうか……。いや、でも自分で考えた方がいいと思うんだが?」

「それも思っただけどさ、修行だけで手一杯だから、先輩に頼もうって思っただよ」

まったく、なんで人が必殺技について考えてるこのタイミングで来るのか。

「つかさ、前も思っただけど、なんで俺に必殺技を覚えてもらいに来るんだよ。どう考えても畑違いだろ」

俺は格闘。後輩君は剣。まったくと言っていいほど噛み合っていない。

「いや、なんか必殺技ついたら先輩みたいなのところがあるじゃんか」
「だから、なんでそんなイメージなんだよ」

「だってオレ、初めて先輩の必殺技見たとき、すげー!って思ったんだからしょうがないだろ」

「……すごい?」

「そうだよ。昨日師匠に使ったの見てさ、やっぱりかっこいいなって思っただよ」

「……かっこいい」

「それにあれ、当たれば一撃必殺って感じですねえ派手じゃん！」
「……一撃必殺。……派手」

すごい派手でかつこいい一撃必殺の技。

「たしか、あれ。夏塩蹴りって言ったけか？」

夏塩蹴り。サマーソルト。

「クックック……目が覚めたぜ後輩君」

「へ？」

そうさ、地道に堅実なんて俺らしくもない。

あれは所詮一時の気の迷い、本来の俺ではない。

厨二病上等じゃないか、必殺技に年齢制限なんてありはしないんだ。

「よし。永遠の少年であるこの俺。アカネが後輩君に必殺技を授けてやろう」

「ほ、ほんとか！」

そんなに嬉しそうな顔をするでない小童、この必殺技の伝道師たる俺にかかれれば一つや二つ軽い軽い。

「しかし、一つ条件がある」

「条件？」

「うむ。なんでもいい、俺の必殺技を考えてこい！」

「……いや、オレが考える時間ないから先輩に頼みに来たんだけど」
「うっさい。何でもいいんだよ、寝ながらも飯食いながらでもい

いから考えて来い」

これも後輩君の成長を促す試練。いつか彼も自分で必殺技を考えなければいけない日が来る。

「んじゃ、思いついたらまた来るからさ、絶対に教えてくれよ!」

「おう、せいぜい良いの考えてこい」

後輩君は去って行った。

さて、俺は修行の続きでもするとするか。

「その時は誰もしらなかった、彼があんなにもすごい必殺技を考えてくるとは……」

「やっべ! 今、俺強化のフラグ立った!」

「……………」

「…………さて、修行修行」

ほんと、今日何でぶにいないんだろ。

必殺技の伝道師（後書き）

ほとんど一話完結の作品だけど番外編とかやろうと思います。
適当に思いついたの感想欄にでも書きこんでやってください。

空白の一週間についてとか、家出した時の爆弾はどうやって作った
のとか

アカネが学園都市に行ったようですとか。

期間とかは特にないんで、いつでも書いてってください

かわいらしい相棒

「……………今日もぷにがない」

三月も中頃、もう一週間ほどぷにの姿はなかった。

ぷにの事だからどっか行っただろうと軽く見ていたが、さすがに心配になってきた。

ふむ。相棒がいなくなったのは、ちょうど奴がステルクさんから一人で逃亡した日だな。

「きつと、一人で逃げたことへの罪悪感から、俺に会えないんだ！」

ないない。

基本的に俺もぷにも逃げ遅れた奴が悪いみたいな思考持ってるし。

「となると……………修行？」

と言うよりも、あいつの場合豪華グルメの旅になるな。

今頃、モンスターを食い散らかしてたりしたり……………。

「なしなし！……………ないよな？」

どうしよう、モンスターどもからの報復行為とかあったら。

「まあ、あいつがどっか行っただ理由はともかく。あいつがいないと問題がある訳だ」

そう大問題だ。あいつがいないと俺は……。

「俺、独り言呟いてるただの痛い人じゃん」

今俺が座っている場所は、噴水の傍にあるベンチ。

周りからの可哀相な子を見る目が突き刺さっている。

「……くっ！」

誰か！俺に会話相手を与えてくれ。この空気に耐えられない！

「……エア友達のカネア君。さいきん調子どうよ？」

『まじ超良い感じっすよ！もうアゲアゲみたいなの？』

「……………そうか」

もう一つ問題があった。ツツコミ役がない。

「……………うう」

今ので余計に周りの視線が痛々しい事になった。

このままじゃ、俺が頭のおかしい人みたいじゃないか……。

「誰か、俺にツツコミを与えてくれるような人材は……」

きよろきよろと周りを見渡す。

おい、お前ら一斉に目を背けるとは何事か。

「……ハッ！」

見えた！俺に一番相性の良い奴が！

俺は立ち上がり近づいて声をかけた。

「へい！そのちむちゃん！」

「ちむ？」

「今から君は俺の相棒代理だ。いいな？」

「ち、ちむ！？ちむ！ちむ！」

ふふん。他の奴は分からないだろうが、ぷにで散々上げた伝達スキルならどんな事を言っているかだいたい分かるぞ。

ちむちゃんは今、勝手な事を言うなとご立腹なようだ。

「その完全には意思疎通ができない辺りが俺の相棒にぴったりだ」

「ちむゝ。ちむちむ！ちむー！ちむ！」

「……分かん」

必死に何かを訴えてきているが、まったく理解できん。

ぷにだったら、一言二言で喋るから分かりやすいんだが……。

「何か用事があるとか？」

「ちむ」

どうやら正解だったようで、ちむちゃんはだぶだぶの袖で村の出口を指した。

「採取でも頼まれたのか？」

「ちむゝ」

笑顔になったあたり正解っぽい。

ふむ。採取か……。

「よし。付いてくか」

「ちむ？」

「修行？まあ、それも大事だがそれ以上にこのミッションは重要なんだ」

「ちむ……？」

「ふっ、分からんか」

つまりだ、俺の未来予想図はこんな感じだ。

外でちむちゃんを守る↓ちむちゃんからの好感度アップ↓それを聞いたトトリちゃんの高感度アップ

「完璧だ……完璧すぎる」

「ちむ？ちむむ」

「そんな難しい顔するな。要は一緒に採取に行きましょうってことだよ」

「ちむ！」

ならばよし！みたいな感じでちむちゃんは歩いて行った。
俺もそれに続いて歩いて行く。

……大分歩幅の違いが大きいな。

ちむちゃんの三、四歩が俺の一步で追い越されている。

「よっと！」

「ちむ！？」

さすがにじれったかったので、俺はちむちゃんを肩に乗つけて座らせた。

「乗り心地はいかがですか？」
「ちむ〜♪」

どうやら満足してくれたようだ。

「んじゃ、行くか」
「ちむ」

.....

.....

.....

「三日も歩いてきた訳だが、この辺か？」
「ちむ」

村から北東に歩いて辿り着いたのが、狩人の森と呼ばれている森だ。
まあ、ただの森だな。
ここらにいるモンスターなんて、緑ぷにやタルリスくらいなので俺の望む展開にはなりそうにない。

「まあ、いいか。んで？採取するのは何だ？」
「ちむ〜。ちむちむ」
「うん。鎖グモの巣か」
「ちむ！ちむ〜」

どうやら違うらしい、いくら俺でもそこまで正確に読み取れんよ。

「ちむちむ」

「ああ、なんだあれか」

伸ばされた袖の先にあるのはハチの巣だった。

「……過保護だな」

「ちむ？」

採取物としては簡単な方だ。採取地もやたら近いのと相まって確信した。

トトリちゃんはやっぱりちむちゃんが可愛くて仕方ないようだ。

「ふ、羨ましいぜ」

「ちむむ」

俺が若干感傷に浸っていると、ちむちゃんは俺の肩から飛び降りて巣のある木の下に向かった。

「おい、危な……くはないか」

良く考えなくても、この地方のハチたちは全員で出払っていることが多いから安全だ。

「結構高い所にあるし、俺にまかせとけて」

「ちむ」

子供扱いにむつときたのか、口がへの字に曲がっている。
最初にも思ったが、かわいいな。過保護に扱うトトリちゃんの気持ちもわからんでもない。

「よつと！」

ハチが中にいない事を確認して、俺は巣を木からもぎ取った。文字通り力技だ。

「んで、これをどうすればいいんだ？」

「ちむ」

「ん？」

ちむちゃんが袖で目を隠している。

新手の殺人方法だろうか？主に萌え殺しの意味で。

「……目を瞑ってろと？」

「ちむ！」

よく分からないままに俺はハチの巣をちむちゃんに手渡し、目を瞑った。

「……………」

ごそごそと布が擦れ合う音がしている。何してるんだ。

「ちむ！」

「……もういいのか？って、あれ？」

ちむちゃんの手からはさっき渡したはずの物がなくなっていた。

「消失マジック？」

「ちむー」

「企業秘密？」

「ちむ！」

さすがはホムンクルスと言うべきか、秘密がいっぱいようだ。

「釈然としないが、まあいい。あと何個か採って帰る——」

ブンブンブンブン。

俺が昔、かなり嫌いだった音が聞こえてきた。

一回、ハチに襲われて以来ハエの羽音にすらビビるようになったんだよなあ。

しみじみしてる場合でもないが、現実逃避せずにはいられない。

「逃げるぞ！」

「ちむ！」

ちむちゃんを両手で前に抱え、俺は森の中へと逃げ込んだ。

背後からは依然として不快な羽音が鳴り響いている。

「くそ！俺のイメージカラーが仇になった！」

真っ黒ジャージが俺のトレードマークです。

「ふ、フラム！フラムを！」

「ちむ！？」

やりすぎかとも思いつつも、俺はちむちゃんを左腕でアメフトのボールのように抱え込み、片手を後ろに回しポーチの中を探った。

「……ない！」

そういや、村来てから一回も爆弾作ってなかったな。
そんなことやっている内に追い付かれそうだ。

「とりあえずっ！これ！」

「ちむ？」

俺は手袋を取り出して、木を避けながらも装着した。

ちむちゃんは良く分かっていないようだが、これで俺の身体能力は結構上がる。

今更言うまでもないが、体力の消費が半端ない事になるが。

「ホントッ！しつこい！」

「ちむ」

ブンブンブンと何十か何百かは知らんが本当に焦燥感を駆り立てる音だ。

「————ノオッ!?」

「ちむっ!?」

突如、俺は何かに足を引っ掛けて思いっきり地面にダイブした。
とっさにちむちゃんを両手で抱え込んだのは本能的だろう。

「土かぶり先輩！空気読め！」

いきなり地面からポンと出てきて冒険者を転ばせる。そんなやつかいなキノコなんです。

そうしている間にも当然、蜂たちは俺たちに近づいてきている。

「オワタ」

「ちむ！ちむちむ」

「――なっ！」

ちむちゃんが俺の拘束から出たと思えば、どこからともなくフラムを取り出した。

本当にどこから出したかわからんほどにだ。

「ちむ！」

ちむちゃんが投げたフラムは蜂たちの戦鬨で爆破した。

「おお」

煙が晴れるとそこには何も残っていなかった。

「……あるなら、早く使ってくれよ」

「ちむ。ちむ！」

「ああ、抱え込んでたから使えなかったと。……はあ」

一安心して、俺は大きくため息をついた。

良く考えてみれば、ちむちゃんに何も渡さないで送り出すはずないか。

「無駄に疲れた……」

精神疲労に加え、手袋も着用している分もプラスしてかなり体がボロボロだ。

自然と俺の体は木を背にしょって倒れこんだ。

「ちむゝ」

「うん？ いいのか？」

そこには、またどっから取り出したのか。パイを差し出しているちむちゃんがいた。

「ちむゝ！」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

俺は手袋を取り、パイを半分に千切った。

「いただきますーす」

「ちむー♪」

二人並んで座りながらもぐもぐと食べた。

「なんだかんだで、ちむちゃん意外と逞しいよな」

「ちむ」

パイくずを口元につけたまま、ちむちゃんは得意げな顔をしている。

「愛らしいしな」

「ちむちむ」

頬を赤く染めているあたり満更でもないらしい。
ホムンクルスとはいえ女の子だもんな。

「よし！ エネルギーも補充したし！ 採取を続けるか！」
「ちむ！」

立ち上がって、俺は再びちむちゃんを肩に乗せ歩き出した。

かわいらしい相棒（後書き）

気づいたら二万ユニーク。

これと一件きた番外編のアイデアから導き出されるものは……。

俺の相棒 前編

「……………どうも」

ちむちゃんとの冒険から帰ってきた日、俺はゲラルドさんの店に来ていた。

「あらアカネ君。いらっしやいま……………そのアゴどうしたの？真っ赤よ」

「……………ぷににやられた」

「あら、シロちゃん帰ってきたの？」

「……………知らん。とりあえず氷かなんか欲しい」

「あ、そうね。ちょっと待ってて」

そう言ってツェツイさんは奥へと引っ込んで行った。

「はあ、おい。ここ座るぞ」

俺はそう言って、メルヴィアの座っているテーブルの席に着いた。

「なに荒れてんのよ。感じ悪いわよ」

「……………うっせ」

俺がそう呟くとメルヴィアは戸惑った様子になった。

「ホントどうしたのよ……………あんたらしくないわよ」

「……………別になんでもない」

「はあ、調子狂うわね。話してみなさいよ、少しは気が晴れるかも」

しれないわよ」

「……………はあ」

俺自身も今の自分が嫌な奴になっている自覚はある。
メルヴィアの言葉に甘え、俺はぶつぶつと語り出した。

……………

……

「じゃーなー！また一緒に冒険しようなー！」

「ちむー！」

村に戻ってきた俺はちむちゃんと別れて、宿屋へと歩いて行った。
いや、ホントにちむちゃんは終始かわいかったな。

そして、俺は宿屋の部屋の前まで来ていた。

「ふう。しかし、ぷに戻ってかなー？」

俺は期待感を込めつつも扉を開いた。

「おっ！ぷに、戻ってたか！」

「……………」

部屋の中心にあるテーブルの上には、いつも通りのぷにの姿があった。

「まったく、相棒放ってどこ行ってたんだよ」

「……………」

「？　どうしたんだ？　何むくれてんだよ」
「……………」

いくら声をかけても、ぷには俺の方を振り向かない。
もしかして、ちむちゃんと帰ってくるところ見られてたとか？
だとしたら、少しは可愛げがあるってもんだが……。

「ホントどうしたん——ガッ！？」

瞬間、ぷにの姿が消えたと思ったのも束の間、俺のアゴに大きな衝撃が走った。

「な、何を……ガハッ！」

倒れるのをなんとか堪えたが、次は右脇腹に衝撃。
さらに左足、右肩、腰。
元々そんなに打たれ強くない俺は立っているのもやっとな状態になっていた。

「ハア……ハア……——ア！？」

最後に鳩尾への一撃で俺の意識は完全に断たれた。

……………
……………

「……………こういうわけだよ。笑えるだろ」

俺は自嘲気味に笑った。

「つまり、今も体中アザだらけって事かしら？」

「まあそうなるな。ここまで歩いてくるのも結構大変だったんだぜ」

「それは、君と話したかったから！」

キラッ。

「無理してるのが見え見えすぎて、逆に痛々しいわよ」

「まあ、誰かと話したかったってのは嘘じゃないさ。結構精神ダメージの方が大きくてな」

ぷにはもう二年來の相棒だ。あんな一方的に攻撃されるとは思ってもいなかった。

「……愛想つかされたのかね」

「そんなこと無いわよ。あんたたちほど良いコンビなんて、人間同士でもそういないわよ」

「コンビ……ねえ。俺が一方的に助けられてた感があるけどな。もしかしたらそんなのが嫌になったのかも……」

俺がネガティブになっていると、突然メルヴィアが大声を上げた。

「……ああ！もう！あんたに合わせてたけどもう限界よ！あたし、こういう空気大っ嫌いなよ！」

「ええ！？」

「まったく男のくせにウダウダと答えないこと考えて！これならいつものあんたの方がまだマシよ！」

「ひ、酷い」

「やられたくせにそのままなんて、あんたらしくもない」
「ま、まあ、そうかもだけどさ……」

やられたらどんな手を使っても倍返し、確かにいつもの俺の手法だ。
メルヴィア相手に腕相撲で負けたとき然り、リスにぼこられた時然り。

まあ、メルヴィアの時も含めて大抵失敗に終わっているが。

「でもなあ、正直勝てる気がしない……」

あの時のぷにはなんというか、完全に殺る気満々って感じだった。
実のところ、今でも生きた心地がしない。

「なら男の子得意のアレでなんとかしなさいよ」

「アレ？」

「必殺技よ、あんたもそう言うの好きでしょ？」

「まあ、な」

絶賛、後輩君が頑張り中だ。

「先輩！来たぞ！」

「……………」

俺の名前を呼びながら、後輩君が店の中に入ってきた。

あれ？なんかタイミング良すぎないか？

「後輩君。いつから聞いてた？まさか本当に今来た訳でもないだろ？」

「えっと、先輩が氷持ってきてって言ったところからだな」

「最初からかよ！何！？何ですぐ出てこなかったの！？」

「あゝ、先輩がいつもと違ったからさ、こう一番出て行きやすい空気を待ってたんだよ」

んな無駄なところで空気読まなくていいよ。天然が君の売りの一つだろうが。

そして俺もなんかいつものテンションになってきた。さすがは後輩君。

「……もういいや。それで？必殺技を思いついたのか？」

「おう！先輩にぴったりの技を考えてきたぜ！」

「ほほう、聞かせてみるがいい」

「ああ、名付けて！」

しかし、後輩君がその名前を告げることはなかった。

派手な音を上げて扉が開いた。

「す、ステルクさん！？」

「師匠！？ど、どうしたんだ！？」

「……119番。いやいや、えっと、ど、どうしたら」

そこにはフラフラと店の中に入って来るステルクさんの姿があった。皆一様にテンパっている。

「アカネ君。氷持ってきたわよ」

そして店の奥からは何も気づいていないツェツイさんが氷を袋に入れて持ってきた。

「ナ、ナイス！つ、ついでに救急箱も！」

「え？あ、わかったわ！」

ツェツィさんは状況をすぐに把握できたようで、氷を俺に渡すとまた奥に引っ込んで行った。

「ったく、あの人を少しは見習えよ。この二人はいつまでも慌てて…。」

俺は袋の氷を自らの頭に思いっきりぶっかけた。

「フンッ！よし！頭は冷えた！もう大丈夫だ安心しろ！」

「あんたが落ち着きなさいよ！」

「ガハッ！」

よりもよって鳩尾を殴りやがったこの女、これが噂の二次被害ってやつだ。

「大丈夫ですか？」

「ああ、すまない」

俺たちがバカをやっている間にゲラルドさんがステルクさんを椅子まで運んでいた。

俺ら何の役にも立ってねえな。

「……師匠。大丈夫か？」

「ふっ、お前に心配されるほど柔ではない」

強がっているのかどうかはわからないが、ステルクさんはどう見てもボロボロだ。

切り傷に加え火傷まで、様々な傷が付いていた。

「つかさ、そんな怪我なら医者に行くべきだろ」

「確かにそうだが、伝えねばならぬことがあってな」

そう言うと、ステルクさんはゲラルドさんの方に向き直った。

「店主。しばらくの間、この村周囲での依頼は受け付けられないようにしてもらいたい」

「？ それは一体どういう……」

「村近辺に凶暴なモンスターが出現した。安全の確保のためこの頼みを通していただきたい」

凶暴なモンスター。何故か、俺はその言葉に妙なとっかかりを覚えた。

「ふむ、構わない。と言うよりも、そうせざるおえないだろう」

「感謝する」

「それで、そのモンスターってどんな奴だったんだ？」

本来ならここでステルクさんの体を心配して、このような質問をするべきじゃないだろうが。

どうしても気になってしまったのだ。どうしても、さっきの相棒の影がちらついてしまう。

「……よく分からない」

「え？」

「森を歩いていたら突然火球が飛んできてな……」

俺はそこで自然と安堵の息を吐いた。

火なら関係ないな。

「その後に突然切り裂かれたと思えば、体当たりを受けた。情けない話だがまったく見えなかった」

「はあ……」

俺の中ではもうかなり、意味不明な珍獣が生まれつつある。
火を吐けて、鋭い爪があつて、かなり速いって、チートじゃなか。

「それでこうして何とか逃げてきた訳だ」

「……俺、怖くて外で歩けなくなりそうなんですけど」

そんな正体不明の幽霊みたいな存在がこんな近くにいると思うと……。

「少しくらい、何か見てないんですか？」

「ふむ。そうだな、あくまで私の経験に基づいた予測になるが……」

そして、ステルクさんの口から聞きたくない一言が零れ落ちた。

「大きさはぷにぷに程度と言ったところか」

「いや、それだけじゃ分かりませんよ……」

この時はまだ、俺はちょっと怖がるくらいで済んでいたのに……。
もうちょっと、俺が感が良ければ結果は違ったのかもしれない。
もう少し、俺が嫌な事実から目を逸らさなければ。

その一ヶ月後、ギルドの掲示板にある張り出しがされた。

『凶悪モンスター・白ぷに（仮称）』

- ・多岐に渡る攻撃、俊敏な動きに注意。
- ・その姿は体色が変化することから完全には把握されていない。目撃情報求む。

俺の相棒 中編

俺はギルドの扉を叩き開けた。

ギルド内の空気がいつもよりも騒がしい。

「おい！あれはどういうことなんだ！？」

俺はギルドに着くなり、クーデリアさんの居るカウンターに詰め寄った。

俺の視線の方向にあるのはギルドの掲示板。

「何でぷにが！意味が分からん！」

「……わたしだって不本意よ。でもね、仕方ないのよ」

クーデリアさんは辛そうに顔を伏せた。

それでも自分の意志とは関係なく言葉が口から出てきてしまう。

「急展開すぎるだろ！何の前触れもなしにこんな事ってねえよ！何とかならないのかよ！」

「……悪いわね。被害が出ている以上見過ごすわけにはいかないのよ」

そんなことは俺だって分かってる。

各地での冒険者への被害、馬車への攻撃。ここまでやれば当然ことだ。

だけど、それでも……。

「……………」

何か言いたい、けれどもまい言葉が出てこない。

あいつは俺の相棒だから、全部俺に任せろ。そう言いたい。
俺が弱いばかりに、それを言葉にできない。

「今のあんたにこんなこと言いたくないけど、帰ってもらえないかしら。見ての通りギルドも立て込んで忙しいのよ」

「……………」

俺は黙ったまま踵を返した。

今の俺がここにいたところで、何にも出来ないのは目に見えている。
何より、あの様子のクーデリアさんは見ていられなかった。

「なあ、噂の白ぶにとか言うのアイツ討伐に行ってみないか？ 5人
もいればやれるって」

「…………ツ！」

名前も知らない冒険者だが無性にイラついた。
お前らごときで相棒を倒せるかと、何も知らないでと大声で叫びたかった。

「ちっ！」

これ以上ここにしていると自制が効かなくなりそうだ。
とっとと出るとしよう。

……………

……

「あ、えっと、おかえり！」

「……………ああ」

宿屋に向かおうと思っていたのに、何故か自然と足がアトリエに向かっていた。

俺が扉を開けると、師匠は明るい声で迎えてくれた。

「今ちようどパイ作った所なんだよ。一緒に食べよう」

「……………気分じゃない」

「あ……………うん。そっかー、残念だなあ」

「……………」

心の中で自分に対して悪態をついてしまう。

師匠が無理にいつも通りに振る舞ってるんだから、いつもの調子を取り戻せよと。

「えっと、その、アカネ君。元気出して」

「……………」

「だ、大丈夫！きっとなんとかなるから！」

「なんとかって何だよ！！」

「ひうっ！」

「……………あ」

何やってんだよ俺。

師匠に苛立ちをぶつけるなんて最低だろ。

「わ、悪い」

「あ、アカネ君……」

バツが悪くなった俺は、すぐにアトリエから出ていった。

「……はあ、何しに来たんだか」

特に用事もないのに出向いて、怒鳴ってさようなら。
本当、何やってんだか。

「最近噂の……」

「ああ、あの……」

所々で街を脅かすモンスターとなった相棒の話を耳にする。
街も心なしかいつもより活気がなかった。

「ん？ あれは……？」

当てもなくふらついていると、ミミちゃんが誰かに肩を貸して歩いているのを見つけた。

さっきの師匠の件もあるし、あまり人と関わらない方がいいよな……。

「あ、ちょっと。あんた！」

「う……」

背中に目でも付いているのか、俺が来た道を戻ろうとしたら声をかけられた。

「ちょっと手伝いなさいよ。こいつ重くてしょうがないのよ」

そこには息も絶え絶え、ボロボロの防具を纏った冒険者と思われる人物がいた。

「ほら、早くしなさい」

「……わかったよ」

さすがにこの怪我の様子をみたら、放ってはおけない。

前のステルクさん同様、切り傷、火傷、打撃痕など様々な傷が付いている。

「……………ぷに」

俺は無意識に相棒の名前を呟いていた。

……………

二人で肩を貸して、ギルドの医務室まで運びこみ、受付のある広場にいた。

「珍しいな、ミミちゃんが人助けなんて」

「あら、シュヴァルツラング家の当主として負傷した人間がいたら手助けするのは当然よ」

「そうかい」

正直、ただの気まぐれなんだろうなって思っている俺がいる。

「で？どうすんのよ？」

「は？何がだよ？」

「決まってんでしょ、あんたの相棒よ。まさか、このまま黙ってる訳じゃないわよね」

「……………そのつもりだって言ったら？」

「あんたとの縁はここまでするわね」

かなりきつい仕打ちだが、今の俺には甘んじてそれを受けるしかない。

「……俺じゃあ、無理なんだよ」

ステルクさんですらやられた。

数多くの冒険者がやられた。

「大陸のあちこちに出現する凶悪モンスター、人々を脅かす恐怖の存在。それが今のぷになんだよ。一躍有名人だ。ちよつと妬けるな」

「それで？」

「あ？それでってなんだよ？」

「それで終わりなのかしら？」

そう言うとミミちゃんは俺を小馬鹿にするような目で見てきた。

「悲劇のヒーローなんて安っぽいキャラ、あんたそういうの嫌いだと思ってただのだけれど」

「んな！？」

「ここでわたしが、見損なったわ！とでも言えいいのかしらね？」
「そ、そんなことは……」

ないとは言えない。事実そうなると思ってた。

「まったく、あんたらしくないわよ。気持ち悪い」

何か前、メルヴィアにも同じこと言われた気がする。一言余分だけど。

俺が落ち込んでるのがそんなにいけないのかよ。

「逆に聞くけど俺らしい行動って何だよ？」

「……考えなしな行動とかかしらね」

「うわあ……」

むしろそれは俺じゃなくてぷにだ。

計画犯がぷにで、俺が実行犯みたいな。

「……でも、そうだな」

「は？」

「んにゃ、俺はぷにがいなきや何もできないってことだよ」

「そんなこと知ってるのだけれど」

「……………コホン！つまりだ！」

無理やり咳払いで誤魔化し、俺は話を続けた。

「こっちに来た時は、ぷにがいたおかげで街に着けた。ぷにがいたから俺は冒険者になれたんだ」

最初の出会いがなければ、俺はどうなったのか、想像もできない。

「ぷにがいたから退屈しなかった。ぷにがいたから無茶もできた」

もしも、流された後に再会できなかったら、俺は平々凡々に暮らしてたかもしれない。

「で？結局、何が言いたいんだよ」

「つまり！あいつがいないと何も始まらない！だから、俺が！」

ミミちゃんの言う通り、さっきまでの俺は若干悲劇のヒーローなんて物を演じてた気がする。

強さで適わないからあきらめるなんて、理由として弱すぎるだろ。

そう、俺のこっちでの人生にはぷにがいつも関わっていた。

そんな当然のことを、本人は意識してないだろうが、ミミちゃんの言葉で気づけた訳だ。

だから、言えるこの言葉！

「俺がやる！そうだ！俺に任せろよ！お前ら！」

今だに白ぷに討伐とかの話でがやがやしてやがる阿呆共に俺は大声で叫んだ。

「ったく！お前らが俺の相棒を倒そうなんて片腹痛いんだよ！」

さっき言いたかった事をいいながら、俺は掲示板の前まで歩いて行った。

掲示板の人ごみが割れていく。気分はまさにモーセだ。

「はい！ビリビリー！」

掲示されたぷにの張り紙を引き裂く。

非難の声を浴びせられるが、気にする事はない。

なぜなら、ミミちゃんが今俺の事を尊敬のまなざしで見ているから！

「妄想乙！」

「おい！誰だゴラ！俺の心読みやがって！」

最近の冒険者はテレパシーでも使えんのかよ。

「クーデーリアさん！」

俺はカウンターに駆け寄った。

「この俺！アカネに任せてください！」

「はいはい。分かったから、そんなに騒がないで頂戴」

そう言いつつも、口元がゆるくなっている辺り今の俺を待っていた
ということか。

「あれですよ。さっきまでの俺は頭のネジが締まりすぎてたんですよ」

「逆に緩めすぎてる気がするわね」

「クッククク。最高の褒め言葉ですよ」

もうあれだね。冒頭から全部俺がそう言うキャラを演じてたと思っ
てくれればいいよ。

あのダークアカネもとい黒歴史アカネ君の事はそういう扱いにした
方が気が楽です。

「というわけで、師匠の所に行かなきゃいけないんで、さいならー
！」

ああ、クーデリアさんの下からこんなにテンション高く去れたのはいつ振りだろうか。

………

「師匠！たっだいまー！」

「あ、あれ？アカネ君？」

「ああ、それでだな。さっきはすまなかったな」

「あ、うん。ちよつと驚いたけど平気だよ。アカネ君が元気になつてくれて嬉しいし」

えへへーと笑う師匠。この人は本当に良い人と言うしかないな。むう、このまま許されちゃ俺の気が収まらん。

「お詫びに、師匠の願いを何でも一つ叶えてしんぜよう！」

「え！ほ、本当！？」

師匠は途端に目を輝かせた。……早まったかも。

「お、男に二言はない……が、今はやる事があるから後にしてもらいたい」

「うん！えへへ、どうしようかなー」

不吉な笑いを背に俺は本棚の本を漁った。

俺がふにに勝つには、俺が奴よりも勝っている点。つまり錬金術で対抗するしかない。

それにぶにだって万能じゃない、いままでの戦いでもそれはわかっている。

「お、あつたあつた」

俺が呼んでいる本は『季刊錬金術・二号』あまりの需要の無さにすぐ絶版した悲劇の本だ。

「魔法の鎖……」

相手の素早さを遅くする効果を持つ鎖、これがあれば動きを鈍くさせられるはずだ。
今の俺に作れるかはわからないが。

「あとは……」

何か一時的に体力を上げられるような物が欲しいな。

「……………」

俺は横目でちらりとまだトリップしている師匠を見た。
あれでも偉大な錬金術師なんだし、聞いてみるか。

「師匠、ししよー、師匠！」

「わっ！ な、なに？」

「やっと気づいた……。ちょっと聞きたいんだけど、持久力とかを一時的に上げられる薬とかないか？」

なんかこの聞き方、社会的に問題アリアリだな。

「うーんと、あるにはあるけど、今のアカネ君じゃまだ作れないと思うよ……」

「……師匠が作ってくれませんか？」

ちよつと腰を落として上目遣い。敬語を使ってキャラ作り。

「ま、任せて！わたしががんばる！」

「……………」

我が師匠ながらちよいな。

「まあ、でも」

これで少しは光が見えてきた。勝てる確率は九分九厘と言ったところか。

十回に一回勝てるんだ、バカにしたもんでもない。

「待ってろよ……」

理由は知らんが、お前が暴れてるなら相棒として俺が止めてやる。

俺の相棒 後編

「鎖よし、フラムよし、手袋にドーピングお薬っと」

あれから3日、入念に用意を重ね今最終チェックをしている。

「いやー、本当に師匠様々だよな」

薬だけでなく鎖まで作ってくれるとは、正直なところ助かった。

あとは最近の目撃情報でも聞きに行って、出発するだけなんだが…

「はー、で？後輩君、そろそろ諦めてくれんか？」

いきなりやって来たかと思えば、俺もついて行くと言って聞かないんですよこの子。

「嫌だ。それに先輩一人でどうやって倒すんだよ」

「それは、あれだ。まあいつも通り一発勝負だな」

出会い頭に鎖で拘束して必殺の一撃を叩きつける。

これが俺の常套手段だ。

「あいつ俺と同じで結構打たれ弱いしさ。なんとかなるって」

ぶには攻撃を受ける事自体少ないため俺もあまり気にしていなかったが、あいつは打たれ弱い。

前に後輩君とミミちゃんデグリフォンとかの討伐に行ったときが特に顕著だった。

何だかんだで、俺とぷには戦闘のスタイルも結構似ていたってことだな。

「でもさ、オレも何かしたいんだよ。あいつ前にオレの事助けてくれただろ。だからさ……」

「ああ、うん。そうだな」

さて、どうしたもんか。

確かに後輩君と一緒に来てくれれば戦力は増加するが……。

「非効率的な考えだけどさ、俺は一人でぷにを止めたい。あくまでもただの意地だ」

十人いたら十人が自分勝手と言うだろうが、それが俺だ。

「それじゃあ……そうだ！」

「うにゃ？」

悩みだしたと思ったら、いきなり顔を輝かせた。

「前に先輩に教えられなかった必殺技だよ。必殺技！」

「……一応聞いておくか」

この局面でいきなり教えられても使えないだろうが、ぷにの知らない技を隠し持っておくのも良いかもしれない。

「それでだな、この技は………」

「ふむふむ……」

.....

.....

.....

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

アーランドから東に向かった林の開けた場所で、俺は鼻歌交じりに地雷フラムを埋めていた。

「演出至上主義ってね」

危険物が埋められているこの場所は俺とぷにが初めて出会った場所。

ドローフアイトに決着をつけてやろうってことさ。

「……よし、と」

フラムを埋め終わった俺は立ち上がり東を見つめた。

ギルドに届いた最近の目撃情報によれば、ぷにがいるのはさらに東の方向らしい。

だったら何で、ここに罠を仕掛けたかと言われれば、そっちの方が展開的に燃えるからとしか言えないな。

俺はなんとしてもあいつを止めたいが、それとは別に決着をつけてやりたいって気持ちもある訳だ。

この戦いが相棒の最後になるかもしれない以上、俺は最高の舞台であいつに勝利したいんだ。

「来るなら来い、全力でここまで逃げてきてやる」

俺は思い出の場所を振り返り、林の中へと進んで行った。

「……………」

林の中を進んでいく、既にゴースト手袋は着用済みだ。メリケンサックは着けるべきか悩んだがアイテムを取り出しづらくなると判断しポーチの中だ。

一時的に体力を増加させる強壯の丸薬という薬も服用済み。いつでも逃げれる用意は整っている。

襲われたら、一直線に逃げて行き、罠を駆使してぶにを倒す。それしか俺には方法はない。

そのまま警戒しつつ歩を進めていくと、視界の端に不自然な発光が見えた。

「……………ッ!？」

真横から飛んできたのは火球、俺は内心やっと来たかと思いつつも前に転がり避けた。

すぐに立ち上がり、周囲に気を配るが物音ひとつしない。

「……………へ？」

突然頬に鋭い痛みが走った。右手で触れてみれば手袋には赤い血が染み付いた。

見えなかった以前にわからなかった。

ステルクさんの言っていた突然切り裂かれたって言うのはこの事かよ。

「クソチートが！」

立ち止るのはまずいと判断し、俺は全速力で来た道に戻って行く。

「ふっ！」

特に確信がある訳でもないが、俺は右へと飛んだ。

予想通り、視界には高速で飛んで行くぷにと思われる姿があった。

「どうした！知能が退化したか！？」

ステルクさんは切り裂かれ、体当たりを食らったと言っていた。

他の被害を受けた冒険者たちにも同様の傷跡があったことから、あの攻撃がワンセットではないかと予想した訳だ。

さすが俺、今の俺を見たら皆俺の事を見直すに違いない。

「まあ、見えない事に変わりはないし……。それに食らった方が良かったかもしれん」

ぷにが俺の退路に飛んで行ってしまったので、俺は横からの迂回して行くしかない。

いつそのこと、ダメージ覚悟で吹っ飛んで行った方が賢かったかもしれない。

「とりあえず、これだ！」

俺はポーチからフラムを取り出し、放り投げた。

そのフラムが爆発すると、火炎ではなく出てくるのは煙。前に調合ミスったフラムを煙幕代わりに使おうとしたが、今回は完全に煙幕様に調合したフラムだ。

「あばよ」

俺は煙に紛れて、木々の中へと消えて……いけなかった。

「ぷに、ーっ！」

いつもよりも濁ったぷにの声が聞こえたと思うと、強風が吹き煙幕が吹き飛ばされた。

同時に俺の顔から何から全身に痛みが走り、視界に血が飛んでいるのが写った。

「……そういうことかよ」

そういえば、アードラ、あの鳥モンスターが真空波なんて技を持ってるって本に書いてたな。

ただ、オリジナルを食らった事はないが威力がケタ違いなのは、なんとなく分かる。

さっきの见えない攻撃は極小の出力で放ってたってことか。

「くそ！フラム！」

再び飛んできた火球に俺はフラムを投げつけ相殺した。

「————ガッ!？」

また真空波が飛んでくるという予想に反して、飛んできたのはぷに自身だった。

鳩尾に当たる事こそなかったが、俺はその場に倒れかけた目の前には自分が勝利したと誇示するように、ぷにが悠然と構えていた。

「に、逃げるんだ……」

あの場所まで、逃げる逃げたい。
なのに方法がない、鎖は決めの一手、フラムは当たるはずがない。

「詰んだ……?」

完全に甘く見ていた。あそこまで逃げる、それが一番難しい事だと、今更になって気づいた。

「ぷににににに」

「あん？」

聞こえてきた濁った笑いに、思わず弱気な思考を停止した。
イラついた。ああ、イラついた。

「不愉快なんだよ!てめえ!」

俺はボロボロの腕を前に振り、大砲を召喚した。

ラグナロク
「黄昏の光！」

大砲から発せられる蒼いレーザーはぷにのいた周辺を容赦なく薙ぎ払った。

「ふっ！」

俺は結果を見届けずに目的地まで走り出した。
足からも血が出ているが、そんなことに構ってられない。

「はあ！はあ！」

手袋の疲労に流血まで加わり、ドーピング分の体力すらも切れてきた。

だが、後少しだ。あそこにさえ行ければ……。

「————フフッ」

木々を抜け、開けた場所に出た。

決戦のバトルステージ、俺の絶対勝利の場所。

後ろからは葉が擦れ合う音が響いている。

あと数秒もしない内に来るだろうな。なら、俺がやるべきことは……。

「ハア！ハア！」

俺は地雷フラムを埋めた場所へと走って行く。

「ハア！……オラ！」

そして、その場所を思いっきり踏みしめ、跳躍した。

「…………ッ！」

口から小さな悲鳴が上がるが、決して痛みによるものだけじゃない。一言で言うなら、人は空を飛ぶようにはできていないと言うことだ。

「……………」

俺は今、周りのどの木よりも高い位置まで飛んだ。

あのフラムの本当の役割は俺を飛ばす発射台になる事。足がどうなっているか確認する余裕もなく、俺は重力に引かれてスピードを落としていった。

「いた」

落下が始まる瞬間に真下で周りの様子を窺っているぷにがいた。俺は拳を落下する方向に突き出しながら落ちていく。

「魔法の鎖！」

「ぷに、！？」

惜しかった。あと少し早く俺に気づいていればよかったな。

俺が左手で鎖を地面に投げつけると、鎖は生きているかのように動き、ぷにを地面に封じ込めた。

「彗！星！拳！」

「……………ぷに」

これぞ後輩君が考えだした必殺技。上空から叩きつける一撃。

ぷにに右拳を当てると同時に俺は両足を着く。

拳からは嫌な音と感触が伝わってきた。

「俺の！勝ちだ！」

「ぷ……………に……………」

俺は拳を引くと同時に後ろに倒れこんだ。

上半身だけを起こしてぷにを見ると、若干潰れてはいるものの生きてはいるようだ。

「ぷ、ぷ、ぷ、ぷ」

「……………？」

何か青くなって、口をすぼめている。

まさかとは思うが、新しい形態とかじゃないよな。

「ぷ、ぷ、プヴォエエー！ヴォエー！」

「う、うわああー！ー！？」

しばらくお待ちください。

「君さあ、何？何なの？折角人がカッコよく勝利を決めたのさあ」

「ぷに」

俺とぷには昔と同じように、並んで倒れていた。前と違って、鼻にくる刺激臭があるが……。

「オチが吐くってなんだよ。あれか？食べすぎで我を見失ったのか？」

「ぷに！」

「当たってんのかよ！？消化に悪いモンスターを食うからそうなるんだよ」

「ぷに」

「いっそさ。な、内部に取り込んだ魔物たちが！暴走する！みたいな感じの方が説得力あるわ」

それが食べすぎですよ、被害を被った方々に何てお詫びすればいいんだよ。

「……帰ったらクーデリアさんが怖いぜ」

「ぷ、ぷに」

どんと来いみたいなこと言ってるが、俺としてはDon't来いな訳で。

「……はあ。これで一件落着か」

「ぷに」

「それでさ。お前、なんでいきなり出てったんだよ？」

「ぷに、ぷにに。ぷに」

「新しい必殺技が欲しかったって？もしかして、お前俺と後輩君の話聞いてたのか？」

「ぷに！」

なんか、どんどん動機から何からしょぼくなってくな。
俺が一人で盛り上がったみたいじゃないか。

「とりあえずさ。お前はなんだかんだで大事な相棒なんだよ。あんま無茶すんなよ」

「ぷに」

珍しく素直に反省しているようだな。

「それに、今じゃお前の方が弱いんだしさ」

「ぷに！？ぷに！」

「ああん？勝ち勝ちだ。卑怯なんて言わせんぞ。勝てば官軍負ければ賊軍だ」

「ぷに」

「あんだ！？もう一回やろうってか！」

「ぷに！」

バシ！ドコ！

立ち上がった俺にぷにの体当たりが当たり、俺の拳がぷにに突き刺さった。

「……また、ドローかよ」

「……ぷに」

俺とぷには完全に力尽き、互いに気絶した。

……やっぱり、ぷにがいると面白い。

意識が沈み込む前に、柄にもなくそんな事を考えた。

俺の相棒 後編（後書き）

ふう。やっと終わった。

ゲーム的に考えたらここでイベントスチルゲットみたいな感じになるのかな。

お金の大切さ

「……………うん？……………ここは」

目を覚まし、俺の目に映った天井は一度見た事のある物だった。

「医務室か……。あ痛！」

体を起すと、俺の体中に痛みがあった。

「うう……うん？なんぞこれ」

右手にはギプスが着けられ、上半身裸で全身に包帯が巻かれていた。

「おいおい。大袈裟すぎないか？」

そんな骨折してる訳でもないのに、皆俺が心配で仕方ないんだろうな。

「俺って愛されてるな。そう思うだろ？」

「ぷに」

俺の横には既に目を覚ましていたぷにがいた。

こいつは全然怪我してるように見えんな。

「ふふっ、その証拠に、ほら耳を澄ませてみる。俺のお見舞いに来る足音がするぜ」

「ぷに」

まったく人気者はつらいな。ほら、足音が止まった。

「あら、やっと気づいたのね」

「なんだ、俺じゃなくてぷにか。よかったな、愛されてるぞお前」
「ぷに！ぷに！」

この場面でクーデリアさんが来たら、お前に用があるに決まってるだろうが。

俺何も悪い事してないもん。

「それだけ元気ならもう安心ね」

「あ、はい。おかげ様で」

「ぷにに」

「それじゃあ、はいこれ」

「はい？」

クーデリアさんが俺に一枚の紙を渡してきた。
なにになに？

「ええと……………は？」

そこには罪状のようなものが書かれていた。

『多数の冒険者への傷害行為』

『輸送馬車への妨害行為』

「つきましては賠償金三十万コール…………コレマチガイ、オレワルク
ナイ」

「それでも最低限まで減らしてあげたのよ。感謝しなさい」
「ガー、ガー、ピッツアー」

ワタシノ電子演算プログラムニヨリマス。
一週間で5000コールとスレバ、1ヶ月で2万コールとナリマス。
ツマリ15ヶ月で返済完了とナリマス。

「ガーッ！ガッー！システムエラー！強制終了シマス」

俺の人生シャットダウン。

クーデリアさんの冷めた目線でクールダウン。

「YO！YO！ダウン！ダウン！借金生活でノックダウン！FU！」

「ぷに……」

「何キチ○イ見る目で見てんだよ。つーか、悪いのは全部お前だろ
うが！」

「ぷに」

この野郎、俺に全部押しつけて済ますつもりだな。
それなら俺にも考えがある。

「はい！先生！」

「……だれが先生よ。で、何かしら？」

「実は、ぷにくんは食べすぎで暴れてただけなんです！」

「ぷに！？」

道連れじゃ、貴様もろとも地獄に落ちてくれる！

「ふーん。まあ、別にそんな事はどうだっていいわよ」
「な！？」

「ぷに〜♪」

「ギルドとしては、そっちの方が重要なもの」

そう言って、クーデリアさんは俺の持っている紙の方に目線をやった。

これか！この紙切れがいけないのか！

「……なら！この紙をぷにに渡すのはどうでしょうか！」

「相棒の責任はあんたの責任でしょ。第一、あんた言っただじやないの」

「な、何をですか？」

「全部俺に任せろーって、みんな聞いてるわよ」

ああ、あの時の覚醒オレ状態だった時か、いやでもさ……。

「そんなニュアンスで言って！ません！」

何という詐欺、『いえ結構です』って言葉を肯定って受け取るようなもんじゃないか。

「男のくせにみつともないわよ。ちなみに期限は2年以内だから、せいぜい頑張りなさいよ」

「そ、そんな」

「大丈夫。鍊金術の修行ついでに依頼をこなせばすぐ終わるわよ」

そう言って笑いながら、外へと出て行った。

悪魔め。

「あはは、借金返すのが目標なんて主人公っぽいな」

「ぷににににに」

「死ね！——がああ！？」

ぷにに左ストレートを叩きつける、避けられる、怪我で体が軋む、超痛い。

「これで勝ったと思うなよ……」

「ぷに……」

ぷにが憐みの目で見てきた。元凶のくせに……。

「今たぶん、十万コール弱くらいはあったかな……」

「ぷに！」

「全然足りねえよ！しかもこれ！将来のアトリエ建設費だから！」

身内の不祥事で金を消費するなんて、そんな経験したくもないかった。

「十万コールを元手に一発当てるとか？」

「ぷ、ぷに！？」

「探したら、賭場の一つや二つ見つかったもいはずだ……」

「ぷに！ぷに！」

そうだよ。こんだけ金があれば20万くらいすぐに……。

「ぷに！」

「がはっ！」

腹に。ズドンと。来た。

「————ッ！！」

「ぷに！ぷにに！」

「と、止めるにしても。ほ、方法ってもんがなっ！」

痛みに耐えながら抗議していると、医務室の扉が開いた。

「し、失礼します」

「お、おう。フリーちゃんじゃないか。どうしたんだ？」

俺は無理矢理息を整えて、あたかも平静のように振る舞った。

「えっと、クーデリア先輩にこれを持ってくように言われて……」

そう言いながら、俺に数枚の紙束をいつも通りおどおどと手渡してきたが……。

「えっと、どうぞ」

「……………」

俺は無言で手を引っ込める。

「え、えっと……」

俺の行動に戸惑っているようで、どうしようかとおろおろしている。見ていて可愛……可哀相だが、クーデリアさんからさっきもらった紙が、地獄への切符だったことを俺は忘れていない。

「そ、その紙には……何て書いてある？」

「えっ？ えっと……診断書、ですけど」

「？ 診断書？」

俺はほっと一息ついた。

よかった。追い打ちじゃなくて本当によかった。

「わあ。アカネさん身長大きいんですね」

「ちょ、ちょっと！み、見ないでくれよ恥ずかしい」

「あ、ごめんなさい。つい、目に入っちゃって……」

フリーちゃんが謝りながら俺に紙を渡してきた。

何か悪いことした気分になってしまう。

「お、おお！マジででかいな俺！」

夢にまで見た180。成長期ってすばらしい。

つか、2年以上身長は測らない俺って……。

「ところで、フリーちゃんって身長何センチなんだ？」

「え、えっと、たしか155です……」

「……………」

まさか正直に答えてくれるとは、俺の悪戯心が疼いてしまうじゃないか。

「血液型は？」

「O型ですけど……」

「……スリーサイズは？」

べ、別に聞きたい訳じゃないんだからね！流れで次はこれだろうって思っただけなんだから！

「…………え、えっと、そのですね……」

「い、いや答えなくていいんだからな」

顔を真っ赤にして、ちょっと脅かしたら言いそうな雰囲気だったの
で、さすがの俺も止めてあげた。

この子は本当、もうちょっと強気な態度になってもいいと思うんだ
けどな。

「あ、アカネさん。女の子には言っていない冗談と悪い冗談が……」

「もうちょっとキツク言ってみ？」

「え？……」

「……………」

「……………」

あ、涙目になっちゃった。

「やっぱり無理か」

「……アカネさん。わたしで遊んでませんか？」

「ははっ」

「うう、やっぱりそうなんだ……」

「だって、ベッドの上にいと暇なんだもん」

筋トレもできなければ錬金術も使えない、その上借金まみれ。

「疲れてる時はさ、犬とか猫とかと戯れるといいと思うんだよ」

「わたしは人ですよ……」

「待てよ……」

突然、俺の脳内にインスピレーションが舞い降りた。

犬、猫、獣、獣耳……猫耳フィリーちゃん。犬耳師匠。猫耳トリ
ちゃん……。

「……………」

なんてことだ、こんな所で世界の真理に触れてしまうとは。これはまさしく、賢者の石を作成するに等しい所業……。

「こんなところで寝てられねえ！」

俺は怪我の痛みも忘れ、ベッドの上に立ち上がれ……なかった。

「あ！足が！ののん！」

「あ、アカネさん！な、何してるんですか！」

フィリーちゃんが珍しく大きな声を出してきたが、そんなことに構ってられないほどの痛みが俺の足に響いた。体は自然と先ほどと同じ体勢に崩れ落ちた。

「こ、これは一体……」

「もう、驚かさないでくださいよ……」

「あ、ああ。悪かった」

俺は自分の現状を把握するためにもさっきもらった紙を左手を使って読み始めた。

「右手骨折、両下腿にひび及び重度の火傷、全身の裂傷。全治2ヶ月……」

下腿ってひざよりも下の部分だっけか？
いや、しかしこれは……

「すごいな俺」

「そうですよ、ここに運び込まれた時みんな心配してましたよ」

「あ、いや。たぶん考えてる事に違いがあるわ」

俺がすごいと言っているのは怪我の度合いの話ではなく、ほとんどが俺の使った技の反動という点だ。

飛ぶときに火傷して、着地してひび、叩きつけた拳で骨折。

「ぶに、お前よく無事だったよな」

「ぶに？」

骨折するほどの勢いで叩きつけたのに、こんだだけピンピンしてるとはな。

「む、肋骨も何本かやられてるのか。手袋なかったらどうなったんだか……」

「？ 手袋……？」

「ああ、いや、別になんでもない。気にするな」

俺は誤魔化すようにページをペラペラと捲っていく。

「……………あ？」

治療費・1万コール

「……………」

そりゃね、こんだだけ怪我して運び込まれたら高くつくよね。

「もうやだ。お金嫌い……」

「ぶにー」

黙ってろ元凶。

お金の大切さ（後書き）

番外編ネタ以外の感想もお待ちしております。

入院生活？ 必殺技

「師匠の本が持ってくる本がギリギリすぎる」
「ぷに」

入院生活で暇なので、師匠にアトリエから錬金術の参考書を持ってきてもらったのだが……。

「ネクロノミコンにナコト写本、どこで拾って来たんだよ」
「ぷに」

俺の世界にある架空の書籍のはずなのにな。
しかも、書いてある内容がこれまた酷い。

「シエルペルホルンって確か、あの産業廃棄物な本にも載ってたよな」
「ぷにに」

最高レベルの魔導書Ⅱ季刊錬金術・二号

「あの本って実はかなり実用的だったり？」
「ぷに」

魔法の鎖とか前のぷにとの戦いで決め手にもなったしな。
ネクロノミコン（笑）

「しかし、他の奴はな」

ベッドの横に積み上げられている本を横目で見る。

そこにあるのは、師匠のパイノート。あの人は俺をどんな錬金術士にしようとしているのだろう……。

「もういい、やめやめ。ぷに、カバンからノート取ってくれ」

「ぷにー、ぷに！」

「ん、サンキュ」

ぷにが持ってきたのは、いわゆる大学ノート。俺はペラペラとページを捲った。

「んと、最近作った爆弾は……煙幕フラムだけか」

「ぷに」

「ああ、あんま使えなかったんだよな。お前がすぐに吹き飛ばしたもんな」

「ぷに！」

ぷには威張ったように一鳴きした。

そういえば、今のぷにとってどんな状態なんだ？前に一通り吐きだしたけど。

「ぷにさ、まだ前使ってた技使えるのか？」

「ぷに？ぷにぷに」

目の前で、無理無理と言う感じでぷには体を横に振った。

「なら結局強くなったのは俺だけってことか」

「ぷにー」

「不服ならお前も努力するこったな。ま、俺の新必殺技に適う訳ないけどな」

まったく後輩君はすばらしい技を考えてくれたもんだ。
問題としては自分への反動ダメージだよな。

「あ？　そう言えば後輩君に必殺技教えてなかった」

俺の技と引き換えについて約束だったのに、すっかり忘れてた。

「いやしかし、どうしよう？」

「ぶに？」

「いやさ、適当に居合切りでも教えようと思ったんだが……。なあ、ダメだろ？　ここは俺も本気で考えないとさ」

「ぶに！」

ただそうになると、剣なんてあんま詳しくない俺が考えても妙案が出てくとは思えん。

となると、ここは……。俺は外へと耳を傾けた。

「師匠の持ってきた本を代償に！　召喚！　騎士ステルク！」

そう言いながら、俺は上半身を起こして分厚い本を対面の扉に投げつけた。

そして、タイミング良く扉が開いた。

「――なっ！？」

「ステルクさん。怪我人のところに来てその態度はどうかと思いますよ」

ステルクさんは額を押さえてたたらを踏んでいた。

「……ふむ。ステルクさんは不意打ちに弱いっ」と

左手を使ってノートにメモメモ。

「俺のノートにミミズが現れたようです」

「ぷに〜」

利き手使えないとか致命的過ぎる笑えない。

「……………」

立ち直ったステルクさんが無言で睨んできた。
やっぱりこの人イケメンだけど怖いわ。

「よし。後輩君の必殺技は暗殺剣に決まりだな」

「ぷに!?!」

「これでどんな奴でもスパンと一刀両断……」

そこまで言ってやっとステルクさんが話に入ってきた。

「私の弟子にあまり怪しげな技を教えないでもらいたいのだが」

「だって、ステルクさん倒すにはこんくらいしか思いつかないんですもん」

「私を倒す?」

「む……」

ここは隠し通した方がいいよな。

師匠の知らぬ間に弟子が自分を打倒する技を開発っていう展開の方が燃えるし。

「君が何を考えてるかは知らんが、まあ、だいたいの事情は分かった」

「何だって!？」

「……ぷに」

「大方、あいつが私を倒すための技を君に頼んだのだろう」

「何故ばれたし」

「……ぷに」

さっきからぷにが呆れたような溜息を吐いてる。なんぞ？

「まあ、バレたからには仕方がないですね。それで？」

「それで、とは？」

「ここはあれでしょう？こう、弟子の欠点を咥いてクールに去る！みたいな展開が王道というか……」

「それを聞いて、私に一体どうしろと言うのだ……」

「ですから、ここは一つ。ね？」

ステルクさんはため息を一つ吐いて、俺にこう言ってきた。

「そもそも。君に頼むと言うこと自体が間違いなのだ」

「え？」

「あいつの使っている回転切りとかいう技も、どうせ君が教えたものだろう？」

「ま、まあそうですね……」

何？俺の教えた技になんか文句でもあると？

「君の戦い方は一撃に全力をかけるスタイルだ。あいつには合うはずがない」

「……………ふむ」

「君に教える請うなんて、あいつの持って生まれた敏捷性を殺すよ
うなものだ」

なるほどなるほど。つまり小さな連打で数を狙えってことか。

「……ステルクさん。そこまで話してもらってあれなんですけど」
「む？ どうしなのかね？」

「いや、その。俺が知ってる剣の必殺技って大抵大技なんですよ」

ゲームとかの知識だと必然的にそうなってしまう。

小技連打とかだと物理的に無理だらって技ばっかだし。

「どうでしょう？」

「言っただろう。君に教える請うのが間違いだと」

「ああ、つまり……」

……
……

5月15日 ギルド医務室

「せんぱーい。トトリに呼ばれたから来たんだけど……」
「くらえっ！」

つきつける『ステルクさんの証言』

「後輩君。これを見てくれ」

俺は後輩君にノートを手渡した。

「……先輩。これ字汚くて読めねえんだけど」

「それを読んでくれれば分かる通り、いままでの君には決定的な間違いがあった」

「ああ、なんだいつものか」

いつもの奇行？

「君は！自分の敏捷性を生かすことができていなかったんだ！」
「へ？」

意味が分らないと後輩君がポカンとしている。

「俺は気づいてしまったんだよ。俺の思いつく技では君の真の力が発揮できないと……」

「し、真の力！？」

「そうだ。速く小さく鋭く、流れるような連撃。これこそが最速を極める者。それが君だ！」

「最速を極めるもの……。か、かけえ！」

「ふっ、そうだろう。さあ、行くのだ！師匠を倒すために！」

「ああ、わかった！ありがとな先輩！」

そう言い後輩君は医務室から飛び出して行った。

「……………」

「……ぷに」

「うん。なんか罪悪感がいまさらになってひしひしと……」

「ぷに」

「結局さあ、全部受け売りだったもんな」

「ぷに」

しかも具体的な内容を一切言っていない。

「今度ハゲルさんに頼んで後輩君に合う剣でも作ってもらうか」

「ぶに！」

「よし！そうと決まれば、さっそく金属の作り方を研究……」

しようと思ったけど、横に積んでるのはパイの作り方の本ばかり。

「ぶに。アトリエから金属系の本片っ端から持ってきてくれ」

「ぶに！」

とりあえず入院中は金属の研究とサウスポーのマスターに全力を注ぐか。

入院生活？ 鍊金トーク？

「……金属ねえ」

医務室暮らしが始まってから早2週間、俺は今日も今日とて本をパラパラと読んでいた。

「いまいちすぎる」

参考書に書いてある金属は実用性に溢れてはいるのだが、今一つだ。もつとこう、一ターンに二回行動できるくらいの軽さがほしい。

「ぶにー、つぎのー」

俺は寝たままぶにへ本を差し出したが、何の反応もない。

「あ、そういやそうか」

俺が本読んでる間、ぶにが暇そうだったから討伐依頼でもして金稼げって言ったんだっけか。

まさか、本当に行ったとは思わなかった。

「……どうする」

ベッドの左には床の上に大量に積まれた本があるのだが、手が届かない。

うん？ ちょっと移動すれば届くだろうって？

ガシャガシャ

「……………」

ガシャガシャ

俺の目には手錠でベットに繋がれた右足首が映っている訳ですよ。

「あのクソ医者が！」

ちよつと無理しただけでこの仕打ちとは、筋トレはちゃんとしないと鈍っちゃうんですよ。

ある逸話によると、昔その医者はステルクさんをベッドに鎖で括りつけたとか……。

「ヘルプ！ヘルプミー！」

むなしく部屋に響き渡る俺の叫び。

……仕方がない。男は諦めが肝心だ。

「ふぬ！はっ！」

体をよじらせ、左手を本の山へと伸ばしてみる。

「へいっ！カモン！ウェルカム！」

いくら歓迎の言葉をかけても奴らはピクリとも動かない。
俺は手をパタパタと振って、何とか掴もうとする。

「キタ！よつと！」

俺は背表紙を掴み、そのままを思いっきり引き抜いた。

「……ふう。どれどれ」

再びベッドにふかく座り込み、俺はタイトルを読んだ。

「石の魅力？医師には痛い目に合わされたばっかなんだが……」

どうでもいいことを呟きつつ、俺は読み始めた。

「……………」

章で分けられた本のようで、第一章にはグラビ石とかの知識が書いてあったり、グラビ結晶なんて聞き覚えのないもの調合方法も書いてあったりした。

「……………わからん」

3章に入った途端に、俺の理解の及ばない内容が書かれていた。

「落書きにしか見えん……」

ページを捲るたびに俺のアホの子が露呈していつていしまう。違うんだ。これは内容が難しすぎるだけでだな。

「うう、これは……き、記号？」

よくよく見てみると、ただのらくがきにしか見えない記述の中に記

号らしきものがあつた。

「ああと、うゝん？」

一ページだけを集中して読んでいると、錬金術の公式だということがなんとなくわかってきた。
どういった内容がまったくわからんけど……。

「ふ、ふりーげんと鋼？」

さらに読み進めると、なんとなく気になる一文を見つけた。

「鋼、つまるところ武器にできるかもしれない」

とりあえず内容を流し読んで、なんとか材料だけでも読み解こうと試みる。

「……………」

……………

……

「……………疲れた」

俺の目の前あるノートには、汚い字で材料が書き綴られていた。

- ・湖底の溜まり
- ・グラセン鉱石
- ・グラビ結晶
- ・中和剤（赤）

「半分以上知らない材料ってどういうことやねん！」

俺は叫びと共にベッドへと仰向けに倒れこんだ。

「湖底の溜まりしか知らんよく、グラセンってなんだよ。グラタンの仲間かつーの」

脳を酷使したせいかな、まったく面白くもない言葉がこぼれ落ちる始末だ。

材料を見るにグラビ結晶なる物があるあたり、軽い金属にはなりそうなんだが。

「グラビ結晶は、まあ、まだ見ぬグラビ石を使えばなんとかなるはず。問題は……」

箇条書きにされた材料の一番下の項目に目をやる。

「中和剤って赤色とかあったっけ？」

俺が知る限りでは、中和剤は一種類しかない。

俺が無知な訳ではない……と思う。

「……寝よう」

このままでは、調べてわからない。別ので調べてまたわからないの

調べ物ループに陥ってしまう。

ここはおとなしく、今度師匠に助力を仰ぐとしよう。
俺は布団を被って寝ようとした……。

「思ったが、もうちょつと本でも読もうか」

決して、こっちに向かってくる足音が聞こえたから真面目にしている訳ではない。

俺は起き上がって、本を読み始めた。

そして、ドアをノックする音が聞こえた。

「アカネさくん。起きてますかー？」

「ん？ トトリちゃん？」

入って来たのはトトリちゃんだった。

片手にはなんか紙袋を下げている。

「で？ 何しに来たんだ？」

「あ、はい。実は、ハゲルさんが届けてくれって」

「おお！ ついにできたか」

俺が紙袋を受け取り、中を見るとジャージ君がそこには入っていた。
これようやく、病人服からおさらばだ。

「えっと、それじゃあ帰りますね」

「ん？ なんか急ぎの用でもあるのか？」

べ、別に寂しいから構ってほしいとか、そういうんじゃないんだからね！

……本家であるミミちゃんには適わんな。

「特にないですけど、邪魔じゃないですか？」

「いや、別に？」

「……でも、勉強してるみたいですし」

「ああ、特に理解もしてないからいいって」

俺は本を閉じ、横に置いた。

石の魅力よりも魅力あるものが目の前にあるんだ。ごめんよ。

「そんなに難しいんですか、その本？」

「ん、読んでみれば分かるはず」

俺はトトリちゃんに左手で本を差し出した。

「———待ってくれ」

「？」

トトリちゃんが読む、理解する、アカネさんに教えてあげますよ、俺行方不明。

最後が大分飛んだ気がする。

でもわかってほしい、確かに俺は錬金術では後輩だけどさ、譲れない一線みたいなものもあるのさ。

「……………」

「あのー？アカネさん？」

「くっ、ど、どうぞ」

トトリちゃんが待っているなら、差し出さない訳にはいかないだろ。俺的に考えて。

本を受け取ったトトリちゃんは、ベッドに座って読み始めた。

「……………」
「……………」

トトリちゃんがペラペラと本を捲っている。
俺はそれを固唾を飲んで見守る。

「……………」
「……………」

（ぷっ、こんなのもわからないなんて、アカネさんもまだまだだな
〜）

「はっ！」

と、トトリちゃんはそのんこと思ってる子じゃないやい！
確かに、偶に毒舌だけど……。

……………数十分

俺が一人悶々としている間にトトリちゃんはある程度読み終えたよ
うで、本を閉じた。

「どうでしたか？」
「えっと、最後の方が……」

難しかった？ 簡単だった？ どっちだ！

「よく分からなかったです。錬金術の公式なのは分かったんですけど、調合方法が難しくて……」

「そ、そうだよー。うんうん。フリーゲント鋼のことかはどうだった？」

俺から小心者っぽさが滲み出てきている気がする。

「材料からよくわからないのぼつかでさ……」

「そうですね。中和剤とかは基本的なんですけど」

「う、うん！ソウダネ！」

赤は基本らしいです。どうでしょう？

「この鉱石以外は頑張れば揃いそうなんですけど……」

「そうなんだよな。他は何とかかなりそうなんだけど」

あれ？なんか今すごい錬金術士っぽい会話してない？

「あ、でも。あそこならもしかして……」

「ん？どこ？」

「えっと、村から東に行ったところにある洞窟です。奥までまだ行ってないんですけど、鉱石がたくさんありましたよ」

「へえ、そんなところあったんだ」

「はい。こないだランクアップしてやっと行けるようになったんですよ」

ランクアップかそういうや最近ランク上げてないな。

「あれ？」

「どうしたんですか？」

「いや、トトリちゃんの今のランクって何かと思ってさ」

「？ 6ですけど」

「へえー！……！？」

6？ろく！？

待て、落ち着け俺。

グラス、アイアン、ブロンズ、シルバー、ゴールド、……？

俺は現在、ゴールドつまり5。

………5だ。

「ハッハッハ、ソウカソウカ、6カー」

「あの、アカネさん？」

「ハッハッハ」

………

……

「君は本当に懲りないな」

「くそ！俺を解放しろ！俺には使命があるんだ！」

俺ベッドに鎖でぐるぐる巻き。

前の拘束は力づくで壊しました。

「うおーん！」

叫びもむなしく、俺は動けない。
患者の自由はどこ行った。

11月17まで更新停止のお知らせ

試験があるため更新をお休みさせていただきます。

更新確認に来ている人に申し訳ないので、お知らせさせていただきます。

書き溜めようとも思ったのですが、遅筆ゆえに無理でした。すみません。

こ、こっから下は字数稼ぎなんだから！感謝の気持ちなんかじゃないんだからね！

、（＊、旦那）ノ

いつもご愛読していただきありがとうございます。

感想も返信遅くなりますが、楽しく読ませてもらってます。

これからも、この神の如き作品を読んでやってください。

11月17まで更新停止のお知らせ（後書き）

× 神
○ 紙

ごり押しランクアップ

拘束入院から解放され、現在は7月の初め。
俺はアトリエの机の前で悶々としていた。

「……時間が足りぬ」

「ぷに？」

「やること多いのに、入院で何もできんかったからな」

「ぷにー」

呆れたような声を出された、無計画な男って嫌ねって事か？

「九割お前のせいだってことを忘れんなよ」

「ぷに」

「わかってるなら良いんだよ。……しかし、これはなあ」

机の上に開かれたノートにはいくつかの予定が綴られていた。
かつこよく言えば備忘録。

「後輩君に剣をあげる。まあ、これは俺の錬金レベルが上がってからだな」

「ぷに」

「はい次、エントリナンバーツー借金」

「ぷに」

返済額三十万、期限は二年以内。
まったく、こいつは大変だなあ。

「苦勞するかもしれないけど、地道にやれよ」

「ぷに！？」

「はん！俺はこんなもの知らんなあ！」

「ぷに！ぷに！」

「……やったとしてもだ。俺が二、お前が八の割合だ」
「ぷに……」

すっかり意気消沈したようだ。

とりあえずスルーして、俺は次の項目を読み上げた。

「師匠のお願い、これは怖い」

「ぷに？」

「ああ、そういやお前は知らなかったな。お前を倒すアイテム師匠に作ってもらってな、勢いで願いを何でも一つ叶えるとか言っちゃたんだよ」

「ぷに〜！」

「不正などなかった。服関係じゃない事を祈る、はい次」

一番下、最後の項目にはでかでかと赤文字で書かれている。

「ランクアップ！」

「ぷにににににに」

「笑うなあ！」

くそっ！本来ならもうランクアップ出来ているはずなのに、あの医者が拘束したせいで……。

「最重要事項かつ最重要機密だ。いいな？」

「ぷに〜？」

ぷにはとぼけた声を出して、いつもトトリちゃんが立っている釜に目を移した。

……この野郎。

「俺が三で、お前が七だ。これで秘密にしてくれ」

「ぷに〜？」

「四、六」

「ぷにっ！」

話にならんよと重役が言うように偉そうな声を出しやがる。
なんという下剋上。

「五、五。これをお願いします！」

「ぷに？」

訳）何かいったかね君？

「ろ、六……いや、七、三で、これ以上はっ！」

「ぷっにつにつにつにっ！」

訳）いや、君は話が分かるね！

完全にぷにの脳内イメージが、高級ソファに座った白髪の社長になっている。

「これが取引の技術だとも言うのか……」

「ぷに〜」

ぷにが元気出せみたいな感じで、机に置いた手をぼんぼんとしてく

れた。死なねえかなこいつ。

「……はあ。とにかくだ。どうやってランクアップする？」

「ぶに？」

「ちなみに白ぶに討伐ポイント合わせると残りポイントは20だ。いかにして貯めるか」

一応一つは思いついている、それで何ポイントかわからないが……。

「まあいい！とにかく！トトリちゃんが冒険に出ている今が好機！ランクアップするぞ！」

「ぶに！」

俺はアトリエを出て冒険者ギルドへと向かった。

ギルドのカウンター前で、俺は依頼一覧を熟読していた。

「ふむ」

「あのー、アカネさん？」

「んにゃ？」

「えっと、もう十分もしてますけど。どうしたんですか？」

そんなに読んでたか、しかしどう伝えたもんか。

「ん！ああ、べ、別にー」

「すごい目が泳いでますけど……」

「な、なんでもないやい！また来るから！」

パパッとアトリエに戻るよ！

.....

.....

.....

「また来ました」

「えっと……」

フリーちゃんの視線は俺の手に提げたカゴに向かっていた。

ビンやら、葉やら、なんやらが大量に詰め込まれている。

「もう一回依頼見してくれ」

「あ、はい。どうぞ」

俺は依頼の一覧表を受け取った。

「にー、しー、ろく、や……」

「？ 何数えてるんですか？」

「いやー、うん。……ごめんなさい」

「い、いきなり謝られても……」

俺は今から、外道の所業する。
いくら謝っても謝りきれん。

「依頼を受けよう」

「あ、はい。どれですか？」

「これと、これと、これとこれにこれ、あとこれとこれに……」

「え！あ、あの多くないですか？」

「そんなことはない」

「あ、あの、納品関係だとすぐに納品してもらった方が楽でいいんですけど……」

そう言いながら、フィリーちゃんはまた俺の持っているカゴに目を向けた。

「別にこのカゴは関係ないです。ホントデス」

「で、でも……」

カゴからはフラムがはみでている。依頼書にもフラムがある。白々しいだろう、だが俺は心を鬼にする。

「お願いします」

「あ、う、うう、お仕事増えちゃう……」

小声で何か言ったが聞こえん！聞こえんぞ！

「ぐ、ぐおお……」

「苦しいのはわたしの方ですよ……」

そう言いながらも、依頼の手続きをしてくれていた。いろいろすいません。

……………

……

「えっと、全部で九個で、期限は二ヶ月です」

「ああ、ありがとう」

大分大変だったようで、若干涙目になっている。

「はいこれ」

カウンターの前に置くのは、手続き中に用意した。依頼の品物。

「……………」

「どうしたんだ？依頼完了だよ？」

「あ、アカネさん。わたしのこと、嫌いなんですか…………？」

「むしろ好きだ。だが、君が受付嬢なのがいけないのだよ」

「いじめです…………」

「ハハッ」

さすがのフィリーちゃんも怒ってるようで、眉間にしわがよっている。

「がんばれ！がんばれ！」

「アカネさんなんて嫌いです…………」

「……………」

精神攻撃には精神攻撃か、成長したな。

なんか胸が痛いよ。

………

「依頼料合計二千コールです」

「フィリーちゃん。もっと笑顔にならなきゃ、せつかくの可愛い顔が台無しだぞ☆」

「……………むう」

「いや、ほんと悪かったよ。これにはやんごとない事情がだな」
「事情ですか？」

よかった、食いついてくれた。

「一言で言えば、トトリちゃんが俺よりワンランク上」

「そ、それは……ご愁傷様です？」

「お、オホン！それで、ポイント集めに奔走しているんだよ」

「あ、そういうことですか」

そう、俺は別にフィリーちゃんに嫌がらせをしに来た訳ではない。
あれは、あくまでポイント集めのためだ。

「前にさ、依頼を三つ同時に報告したら、アカネは三人いるとか言うのがあったから、もっと多くすればと思った訳だ」

俺って頭いい！

「確かに九個はありますが、酷くないですか？」

「そこは素直にごめんなさい。それで？何ポイントなんだいな？」

「えっと、10ポイントですね」

「ガッテム！」

「ひゃ!？」

思わず拳をカウンターに叩きつけてしまった。
残り10ポイント、果てしなく遠く思える。

「何かすぐにできそうな奴ない?あと10なんだけど……」
「す、すぐにですか……」

フィリーちゃんは難しい顔をして考え込み、言葉を発した。

「えっと、同じ服を一年着るっていうのがあるんですけど」
「いや、待て。俺はすぐにできるのが良いつて言ったんだが?」
「え?でも、アカネさんいつも同じ服着てますし」
「い、一応これは三世代目だもん!そんなにずっと同じの着る訳――!――!」

途端に俺の頭に電流が走った。

……俺って、最初の一年以上、ずっと同じジャージ着てなかった?

「……………」

「え、あ、アカネさん。まさか……」

「ま、待て!誤解だ!」

俺が顔を上げると、フィリーちゃんが若干引いていた。

「い、一応、洗濯はしていた!」
「……………」

ま、また一歩下がられた!?

「こ、これに変えたのは2ヶ月前だから大丈夫だ。うん」

「あ、そうなんですか」

「誤解が解けて嬉しいです」

あやうくゴミ男認定を受けるところだったな……。

「まあよくないけど、いいや。申請してくる」

俺はそう言って、隣の受付。クーデリアさんの下へ向かった。

「クーデリアさん！ランクアップ手続きを！」

「残念だけど、足りないわよ」

声をかけた瞬間にバツサリと一刀両断。何故に？

「話は聞いてたけど、あと5ポイント足りないわね」

「な、盗み聞きですか!？」

「あんたの声が無駄に叫んでるからでしょうが！」

「その発想はありませんでした。さすがギルドの責任者」

「……あんたがいない2ヶ月がいかに平穏か、よくわかったわ」

俺がいないと、刺激が足りないってことだね。

「で、でも！それじゃあ、あと5ポイントどうすれば！」

「そうね……」

「くー、クーデリアさん。何とぞお力添えを……」

「まあ、アトリエにあるあんたのコンテナを一杯にしたら、5ポイントくらいは――」

「アカネ君。な、何してるの!？」

「師匠! 止めるな! 止めないでくれ!」

その日、一日中、井戸とアトリエを往復する男がいたとかいないとか。

「コンテナを水で埋め尽くすのだー!」

「わーん! アカネ君がおかしくなっちゃったよー!」

ごり押しリンクアップ（後書き）

更新再開しました。

今日は番外編も投稿予定です

キャッツシヨット 前編 漢のロマン

ランクアップしてから一週間程度、俺は今日も今日とて錬金術に勤しんでいた。

現在錬金しているのは俺がレシピを改変したフラムの試作品。

錬金も終盤に入った頃に、俺は前もって考えていた歌を口ずさんだ。

「そーらを自由に飛びたいな♪」

「はい！飛翔フラムー！」

釜に腕を入れて取り出すのは、いつもより一回りほど小さいサイズのフラム。

「ひしょうフラム？なんですかそれ？」

は！？隣にいたトトリちゃんの○太君ポジションに入った！

「いいかいトトリ君。これはね空を飛ぶことができるフラムなんだよ」

「空を飛ぶですか？」

「そうだよ。これは爆発を小さくして指向性を持たせることで、安全に跳躍できるフラムなんだ」

「えっと……アカネさんの考える事って独特ですよね！」

すごいや！毒舌トトリちゃんがこんな気を遣った発言ができるなん

て！

「……………」

「……………」

どうしよう、微妙な空気が流れている。

飛翔フラムそんなにダメなのかな？確かに着地手段はまだ用意していないけど……。

「……………」

「……………」

そ、それよりもこの空気を打破しなければ。

「ど、独特って言ったらマークさんだよな！」

「そ、そうですね！この前なんてネコ型ロボットなんて作ってましたし」

え？

「なん……だと……。トトリちゃん何て言った？」

「え？ね、ネコ型ロボットですけど……」

「な、なんてことだ」

前々から天才だとは思っていたが、まさかアレを作っただと。

これはもう、こんなゴミみたいなフラムよりもタケコ○ターを貰いに行かなくては！

「待ってろ！ドラえ○ん！」

「ど、ドラえも○？」

……

「……………」

にゃー、にゃー。

「どうだい？すばらしい出来だろう？」
「うん、そうだね。かわいいね」

しやがみ込む俺の目の前にいるのは一匹の黒猫。

にゃー、にゃー。

「ははっ、癒されるな」

「それにしても、目が死んでるようだけどね」

「……はあ」

いや、待てよ？

マークさんなら頼めば秘密道具の一つや二つ作ってくれそうだな
……。

「マークさん、ちよつとご相談が……」

「相談？」

「ああ、四次元なポケットを作ってほしくてな」

「四次元ポケット？」

「マークさん……消されるぞ」

「ふふん、僕の天才的な頭脳はいつも狙われているからね」

さすがは天才、削除も恐れぬとは感服したぜ。

「それで？それは一体どういう物なんだい？」

「何て言ったらいいか……。こう、いくらでも物が入って取り出せる道具でだな」

「？ それなら君ら錬金術士で作れるんじゃないかい？」
「へ？」

まさかの錬金術士万能説？

「以前お嬢さんと冒険に行ったときだったか、採取した素材を次々と入れていく姿にはさすがの僕でも驚いたね」

「そ、その道具って、どんなのだった？」

「見た目はバッグと言うのが的確だね」

「ど、どんな？」

「ネコ型だね」

「くそっ！謀られた！」

まさか、ドラえもんはトトリちゃんだったとは！

「ドラえもん〇！」

「ドラえもん？」

マークさん、あんた漢やで。

……
……

「……………」

「あの？アカネさん？目が……」

「……………」

青い猫のバッグの腹から物を取り出す、なんでもこれはトトリちゃんのコンテナと繋がってるらしい。
すごいな、うん。すごいけどさ……

これじゃ、取り寄せなバッグじゃないか。

「……………」

「え、えっと。レシピなら本棚に入ってますよ」

「うん。今度作ってみる」

「は、はい。あの、よく分かりませんが元気出してくださいね」
「うん。がんばる」

そう言うと、トトリちゃんは釜の前に歩いて行った。
はあ、所詮俺にはすぎた代物だったってことか。

「にゃー、にゃー。うん、かわいい」

このバッグ見た目結構かわいい。
やたらと細部までよくできている。

「……………ん？」

目が猫の耳に止まった瞬間、俺の脳裏に何かが浮かんた。
何か忘れてはいけないことを忘れてるような……。

「……………」

なんとなく、釜の前に立つトトリちゃんをちらりと見る。
そしてまた耳に視線を戻す。

「……………はっ!？」

猫の耳、ネコミミ!猫耳トトリちゃん!
病室での神のひらめき!

「待ってろヴァルハラ!」

今日の俺、出たり帰ったり忙しいな。

……………
……………

「ドラえも〇、もとい親っさん!」

「あん?どうしたんだ兄ちゃん、んな急いで」

俺が製作を頼みに来たのは、アーランド二大技術者の一人ハゲルさん。
ん。

この人なら俺の望む物を作ってくれるはずだ。

「親っさんの裁縫能力の高さと愛を見込んでお願いが!」

「な!?!べ、別に裁縫は仕事で使うからで、趣味とかそんなんじゃないぞ!」

「本当は？」

「夜な夜な少女服のデザインをしちまうくらいに好きだな」

「……………」

「……あ」

ノリで言ってみただけのに、こんな真実が明らかになるとは……。それにしてもこんな古典的な手段に引っ掛かるとは、ハゲルさん侮りがたし。

「た、頼む！今言ったことは忘れてくれ！」

「いや、別にいいと思いますよ？趣味は人それぞれですし」

「ほ、本当か？こんなゴツイおっさんが気持ち悪いとか思わないか？」

「むしろ少女服のデザインをしているというのなら、俺の頼みには好都合です」

この人なら、きっと俺の望む至高の猫耳を作れるはず！

この筋肉隆々のおっさんから生み出される猫耳なら……大丈夫？

「とにかく、親っさん。俺の話を聞いてください」

「話？」

「そうですそうです。とりあえず、モデルとなる女の子を想像してください」

「……………」

親っさんは腕を組んで目を閉じた。なんか手慣れてる感じがして怖い。

ちなみに俺の脳内イメージはトトリちゃん。

「頭の上に猫の耳、犬の耳、なんでもいいから獣耳が生えたとしま

す」

「おお！」

親っさんの的にアリだったようで、目を見開いて感動していた。

「さらにその子が両手を上げてにゃーって鳴く訳ですよ！」

「兄ちゃん！」

「親っさん！」

親っさんは立ち上がり、俺たちは自然と手を握り合っていた。
言葉なんて無くても伝えあえる、これが漢のロマンの力って奴だ。

「何日かしたらまた来な、兄ちゃんの納得いくもん作っとくからよ
！」

「はい！頑張ってください！」

楽園へと一歩前進したのを感じながら、俺は店を出て行った。

……
……

「あと一歩、何か足りない。俺に足りないもの……」

何かが不足している、そんな思いと共に街をぶらついている。

申し分のないモデルたち、最高のデザイナー兼クリエイター。
これだけあれば十分のはずなのに、俺は未だ満足感を得ていない。

「……うん？」

ふと、視界の隅に目に入った。

何屋かわからないが、ガラスの向こうに見えた。

「クッククク。そうだな、モデルがいるなら撮影しなきゃ失礼だよな」

俺は最後の神器を求め店の中に入った。

キャッツシヨット 中編 犯罪者A

「……ふーむ」

俺はアトリエでソファに座り、両手に持ったカメラを見つめ唸っていた。

ちなみにカメラの種類はポラロイドカメラ、現像しなくていいので楽だと思ったけど結構でかい。

「……よし」

なんととはなしに、釜の前の師匠をレンズ越しに見てみる。

「師匠」

「ふへ？」

「はい、チーズ」

「わわっ！」

師匠がこっちに振りむいたところでシャッターを切る。カメラのフラッシュのせいかな、師匠は目を瞑っていた。

「おー、ちゃんと撮れてる」

数秒して、カメラの下部から写真が出てきた。

そこには目を見開いて驚いている師匠の姿が映っていた。

「うー」

立体の師匠の方は俺を睨んで唸っていた。

「アカネ君！お、女の子をいきなり撮ったりしたらダメなんだからね！」

「ははっ、わるいわるい」

「ひゃう！？」

パシャッと睨んでる師匠を写真に収めた。

これはもう師匠で一冊アルバムを作るしかないな。

「だ、ダメだって言ったでしょ！」

「わかったとは言ってないな」

「にゃ！？」

頬を膨らませている師匠を思い出の一ページに加えた。

「も、もう！知らない！」

「……ならば」

師匠は体を元に戻してしまったので、ちむちゃんの方にカメラを向ける。

ちむちゃんは何やらすり鉢で材料を加工していた。

「題名、お仕事ちむちゃん」

「ちむ？」

気がつくも時すでに遅し、ちむちゃんを写真に収めた。

「ちむ！ちむ！」

「ほっほっほ、おぬしもまだまだじゃの」

「ちむ」

「いやー、結構写真撮るのって面白いな」

元の世界の数倍良い被写体がこっちにはゴロゴロ転がってるからな。今から獣耳な皆を撮るのが楽しみで仕方がない。

「―――！」

俺が目覚めたカメラマン魂の本能が開き始めていた扉に気づき、瞬間的にカメラを構えた。

「ただいま帰りま――わっ!？」

「グッド！」

この写真は俺の宝物リストに加えるでしょう。

「あ、アカネさん。いきなり何を……」

「まあまあ、これあげるから」

俺がトトリちゃんに近寄って渡すのは、さきほどのちむちゃんの写真。

「わあー!ち、ちむちゃんの写真!」

安い、安いぞトトリちゃん。これで買収できるなんて……。

「あ、ありがとうございます!」

「まあ、喜んでもらえたようでよかったです」

「えへへ……」

顔を緩ませながら、トトリちゃんはアトリエの中に入ってきた。とりあえず、撮影を頼む時はちむちゃんの写真を渡せばいいのはわかった。

「……………待てよ」

俺がポケットから、取り出すのはさっき撮った師匠の写真。今のと同じ理論で考えれば……。

「は？別にいらないわよ」

「な、何故!？」

クーデリアさんならこれで買収できると俺の灰色の頭脳が囁いていたのに。

「何よその、クーデリアさんはこれで買収できると思ってたのにみたいな顔は」

「べ、べべ、べべ別にそんなあ、そんなこと考えてないですよ!」

「考えてたのね……」

「くっ!だって、師匠と言ったらクーデリアさんかステルクさんかなって!」

こうなったらB案の師匠の写真をステルクさんに売りつけて借金の足しに作戦を執行するしか……。

「つーか、何でいららないんですか、師匠の事を愛してるんじゃないですか！」

「それはあんたとあのバカ受付嬢の妄想でしょうが……」
「はっ！」

げ、現実と妄想の世界が混同していた。

これも偶にフリーちゃんに語られているせいだ。これじゃ俺が変態みたいじゃないか。

「で、でも、クーデリアさんなら師匠の写真とか欲しいかなって」

「あのねえ、あいつとわたしが何年の付き合いだと思ってんの、写真なんていくらでも持ってるわよ」

「よ、よく考えればそうだった……」

クーデリアさんを買収、撮影権を入手計画は最初から崩壊していたようだ。

「まったく……。わかったなら帰りなさい。こっちだって暇じゃないんだから」

「ふん！このアカネ！タダでは退かぬぞ！」

「なっ！？」

腰のポーチから素早くカメラを取り出しレンズ越しのクーデリアさんに向けてシャッターを切った。

「交渉材料、クーデリアさんの写真を手に入れた！」

「あ、あんたねえ！」

「脱兎！」

「待ちなさい！」

「ふははははは！」

俺は勝った！最後の最後で勝った！次に来るときが怖い！

………

「はあはあ、お兄さん。この写真買わないかい」

俺の装備、サングラス、マスク。

会話相手はもちろんステルクさん。

俺の手にあるのは師匠の写真三枚。

「……君はいつから犯罪者になったんだ」

ステルクさんが呆れたように言葉を投げつけてきた。
なんか、ツツコミが弱い事に寂しさを感じてしまう。

「で、買いますか？買いますよね？」

「買わん！」

「嘘だ！自分に素直になれよ！そんなだからいつまで経っても――
もが！？」

師匠にと続けることはできなかった。

「……………」

ステルクさんは無言で口を塞いできて、睨みつけてきた。

だが残念、サングラスのおかげで睨みがあんまり怖くないぜ。

「むーっ！むーっ！」

「はあ、もういい」

ステルクさんは疲れたように手を離し、体を反転させて歩き出した。どうしてあんなに疲れてるんだろうな？心当たりがないや。

「ステルクさん！悩みがあるならいつでも相談に乗りますから！」
「……………っ」

ステルクさんは首を曲げて、俺を流し眼で睨んできた。

「……怖っ」

サングラスをしてなかったら即死だったな。

「びえーん！びえーん！」

ああ、後ろで見知らぬ子供Aが泣き出してしまった。

「泣き止め少年。ステルクさんの背中が悲しそうだから、泣き止んでください」

「ひうっ！」

少年は俺を見るとなによりおびえた表情になった。そして、大きく息を吸い、少年が叫んだ言葉は――。

「助けてー！誰かー！」

「待てい！ちょ、ちょっとマジで止めてください！」

人生でこの言葉が自分に向けられる日が来るとはな。
ま、周りの人が俺をすごい目つきで睨んでる。

「ち、違う！誤解だ！」

「貴様！うちの息子に何を！」

「その子に何をしている！」

「親と市民A，Bがあらわれた！」

たたかう

まほう

アイテム

にげる↑

「しかしまわりこまれてしまった！」

俺の脳内で、知り合いの皆が俺の事を囲んで手拍子で前科者コールしている。

お、俺は何もしてないのに！サングラスとマスクをして泣いてる子供に話しかけたただけだ！

「俺を使え！」（裏声）

「飛翔フラムさん！」

腰のポーチから取り出したるは、秘密兵器飛翔フラム。
こいつで俺は空を舞う鳥となる！

「あばよ！俺を捕まえたいなら、後十人は連れてきな」

決め台詞と共に、フラムを落とし足で踏みつけ着火した。

「ぐあああーっ！」

「（。Д。）ポカーン」

踏む↓熱い！↓横に飛ぶ

「横にある川に落ちてる、今ココ」

ハハッ、焦って忘れてたけど、ゴースト手袋しないとジャンプで飛べる訳ないよな。

「二度目、俺、二度目だよ」

水飛沫の音に懐かしさを感じた。

………

「死ぬかと思った」

命からがらアトリエに戻った俺は改造執事服に着替え、一旦は落ち着いていた。

ちなみに俺の腰のポーチは耐水コーティング済みなのでカメラは無事だ。俺は過去から学ぶ男なのだよ。

「うう、だが俺は悟った。俺に足りないものは何かを」

クーデリアさんとステルクさんが写真を貰ってくれなかったのは、

レア度が足りなかった。
ありきたりな写真の一枚や二枚じゃ、長い付き合いの二人が満足するはずがない。

そして、そんな写真を取ることになる以上、四六時中カメラを持っていなければ無くなる。

しかし、それはあまりにも怪しい。またさっきのような騒ぎになりかねない。

「だからこそ、俺は作る。このアイテムを」

俺の手に取る本『服飾マイスター』に乗っている装備品。

「見えないクローク」

俗に言うステルス装備。これがあれば、俺も一端のカメラマンよ。

「いやしかし、道徳的に……いやいや、どのみち獣耳作戦で必要になる」

ミミちゃんは簡単にくどき落とせそうにないだろうし、耳乗っける、撮る、逃げるでやるしかない。

「別に、覗きで使おうってんじゃないんだ。うん、世の中の男たちならわかってくれるさ」

かわいい女の子のかわいい写真を取りたい、それって男として自然なことだろ？

「うん。ありがとう。そうだよな、わかってくれるよな」

「あの、アカネさん。さっきから何をぶつぶつ……」

「いやちよっと、自分の正当性を高めようかな、みたいな？」

「はあ？」

危ない危ない、今の完全に聞かれてたら一発で逮捕だったな。

俺、頑張るよ。どっかで仕事をしているぷによ、俺を応援してくれ。

「ぷに？」

ぷにというブレーキのなくなった変態は暴走中である。

キヤッツシヨット 後編 撮影大会

『みえないクローク』

周りの風景と同化し、見えづらくする装備品。

要はすばらしいアイテムだと言うことだな。

作成難易度は高かったものの、俺はやり遂げた。

試しに昨日、一日中、これを着たままアトリエの隅に立っていたが誰も気付かなかった。

むしろ今も着たままアトリエのソファに座っている。

そして、俺のポーチには創造神ハゲルより賜った至高の獣耳の数々。

「クックック」

この状況にも関わらず、自然と笑いが漏れてしまう。
俺は今日、これを使って桃源郷を作りだすのだから。

「ちむー！」

「――！？」

完全に俺ワールドに入っていて気付かなかった……。

ソファのちょうど反対側にある反道徳心の塊であるちむちゃんほいはいがいつの間にか稼働していた。

んで、今回出て来ていたのは男のちむちゃんだった。

「何かわかりやすい名前は……男の子だし……おとこ」

「ちむ？」

「……………」

もどかしい！口出しできないのがもどかしい！

このままでは、あのちむちゃんの名前が悲惨なことになってしまう……。

（すまぬ……）

申し訳ない心とともに、俺は喜んでいるトトリちゃんをカメラに収める。

ちむ（男） よ君の犠牲は無駄にはしない。

「よし、ちむおとこ！ちむおとこくんにしよう！」

「ちむ！？」

「え！？」

「————」

人生でこれほど声を出したいことがあっただろうか、いやない。

おかしいやん、ちむ（男）のカッコ外したら名前になってもうたやん。

ちむおとこくんは涙目になってる、師匠はすごい戸惑ってるし……。

「これからよろしくね、ちむおとこくん」

「ちむー！ちむー！」

「ト、トトリちゃん、本当にその名前にするの……？」

いけっ！師匠！言ったれ！

「え？なんか変ですか？覚えやすくていいと思ったんですけど」

いいえ。DQNネームも真っ青です。

「そ、そう……。トトリちゃんがいいなら、まあいいか……。名前付けるのとか苦手な子なのかな……。？」

「いいわけあるかい！」

「え、ええー！？」

「あ、アカネ君！？」

ソファから立ち上がり、片手でクロークを脱ぎ捨てる。
限界だ。こんな場面で俺に黙ってろっていうほうが間違いなんだよ。

「あ、アカネさん？」

「な、なんで……。？」

「弱き者の嘆く声があるところ、俺はいつでも現れよう」

ちなみに二人の視線がだんだん俺の右手、カメラを持っている手に集中してきた。
まずくね？

「ち、ちむおとこくん！」

「ちむ？」

「お前！そんな名前でもいいのか！」

「ち、ちむー！」

俺の問いかけに首をぶんぶんと横に振るちむおとこくん。
よし、後は流れで押し切る！

「アカネ君……そのカメラって――」

「君の名前は今からちむパワーだ！」

「ちむ!?!」

おい、何でそこで涙目になるんだ。

「と、トトリちゃんもいいと思うだろ? 男の子だしさ、やっぱり強そうな名前の方がいいと思うんだよ」

「ちむパワー……。で、でも! ちむおとこの方がこの子も気に入ってますよ!」

「ちむ!?!」

「あのー、カメラ……」

師匠が何か言ってるが、今の空気に割って入れないようだ。

まさか、こんな所でシロに続く第二次名付け戦争が始まるとは、まあ、俺の圧勝は最初から決まっているが。

「ちむー……」

「悩んでんじゃねえよ!」

「アカネさん、脅かすのは卑怯です!」

「いや、俺の名前の方が明らかにいいだろ……」

「……どっこいどっこい」

師匠が聞き捨てならん発言をしてるが、今はちむパワーくんの決定に集中せねば。

「ち、ちむ……」

「――なっ!?!」

ちむパワーくんはもの凄い残念そうにトトリちゃんの方に、ダボダボの裾を上げた。

「えへへ、やっぱり、ちむおとこくんはこっちの名前の方が良いみたいですよ」

「ちむく……」

「くそっ！こんな選んだだけで、目が完全に死ぬ名前に負けた！」

俺は膝と両手を床について、敗北を認めた。

やっぱり、決まり手は容姿か！可愛い女の子がいいのか！そりゃそうだ！

「それで、あのアカネ君……。そのカメラ……」

「撤退！……の前に」

立ち上がり、素早く腰のポーチから犬耳を取り出し師匠に装着する。昨日、寝る前に筋トレ休んでこの動作を何千回もやった甲斐があったぜ！

「にゃんと言え！」

「わっ！な、なに！？にゃ、にゃん！？」

「もらった！」

師匠が付けられた物を確認しようと、両手を頭の上に乗せた。

そして、その両手が頭まで達する数コンマ前、俺が神に語った妄想、両手を上げてにゃんと鳴く姿が完成した。

俺はそれを写真と心の中に収めた。

「おっしや！次だ次！」

「え、ちょ、ちょっと！アカネ君！？」

「二人とも、うるさいですよ！折角ちむおとこくんとお話……って、先生なんですか、それ？」

俺はトトリちゃんが今まで気づかなかったのに驚愕しつつ、クロークを回収しアトリエを出た。

………

……

「前方にターゲット確認！オーバー」

クロークを着て一人軍隊ごっこ、ではない。俺は既に一人の隠密のエースだ。プロとしての意識を持たねばあのターゲットを越すことなどできない。

「ミミ・ウリエ・フォン。シュヴァルツラング、厄介なお嬢様だ。オーバー」

前方を歩いているのは、赤いマントの少女。運動神経が良く、反射神経もいい、さっきの師匠の様にはいかなだろう。見えにくくなっているとはいえ、もし捕まりでもすれば即アウトだろう。

「いったいどうすればいい？オーバー」

「――え？」

「少年に発見されたぞ！オーバー！」

何故気づかれた！？ほぼ完璧なステルスのはずなのに。しかも、こいつこないだ俺を不審者呼ばわりした小僧じゃないか。

「とにかく距離を取れ！オーバー」

「ひっ！」

「完全に気付かれた！逃走を開始する！」

よく子供は第六感が鋭いとは言うが、ここまでとは……。

「なぜ、追いかけてくる……」

少年Aは何故か俺を追いかけて来た。このクローク、若干風景に違和感が出るので、一回気づけば結構わかってしまうのだ。

「――はっ！」

俺に天啓が舞い降りた。

このままミミちゃんの方に走る、子供をぶつける、子供泣く、ミミちゃんは戸惑う、俺の勝ち。

戸惑ってるミミちゃんに耳を付けるってな。

「クックック」

こんなくだらないジョークでも笑えてしまう、さあいざ行かん！

「ついて来い……」

あと数十メートル。

「来るがいい……」

残り数メートル。

「来い……」

後ろを振り帰る。

「いなーい!？」

「――っ!？」

何故か少年が消失していた。そしてミミちゃんが俺の方を見た。

「……………」

「……………」

めっさ睨まれとる。つか、絶対気づいてるって。
まずいな。師匠たちに気づかれる分にはいいが、街中で気付かれる
と社会的な地位が危ない。

「……………」

「……………」

じりじりと横に移動する、ミミちゃんの目線は俺を追う。
完全に気付かれてるね。わかってたよ。

「……………」

「……………」

ミミちゃんの手が俺に伸びてくる。
ぷにに追い詰められたとき並に絶望感が溢れてきた。

「おい！それ見つけたの僕が先だぞ！」
「は？」

少年！信じてた！お前はみんなに夢と希望を与える存在になれる将来のスーパースターだ！！

そうだよな、大人が走る速度にお前がついてこれる訳なかったよな。

「離れろって！」
「ちょ、な、何して、離しなさい！」

少年がミミちゃんのことを両手で押す。
見逃さない、彼女が見せた、その隙を。

（秘儀！黒猫耳！）

アニメだったら使いまわされていると思われるようなほど、寸分の狂いもないフォームで俺は物を取り出し、乗せる。

「ちょ、な、何よこれ！」
「ふうっ！」

猫耳付けて、子供に絡まれるミミちゃんというスーパーレアな写真を手に入れてしまった。
これをミミちゃんに見つけられたら殺されるな。

.....

……

「ラストステージ来たり」

うまく逃げた俺は、最終関門ギルドへとやって来た。

なんせここは2頭同時討伐になることが決定している、片方に見つかっただらおしまいだ。

「乗せる、撮る、回収する、この三つの動作をいかに素早くやるかがポイントだ」

俺は用心に用心を重ね、柱の陰から二人の様子を窺う。

「ん？」

ふと、違和感に気づいた。

反対側にある柱の風景の一部がおかしい、普通の人なら気付かないだろう、だが俺には分かる。

猫耳のフォーム練習の後、完成度を見るために二時間以上鏡の前でクロークを着ていた俺にはわかる。

「……どうやら、最低のクズ野郎がいるみたいだな」

みえないクロークは依頼の品として調合依頼に出ることもある、そういうことだ。

隠れて盗み見、もしくは盗撮をするとは、最低なんて言葉では足りないんだ変態野郎だ。

これは俺が正義を執行するしかあるまい。

こんな奴がいるから元の世界では規制されることが多くなるんだ。もっと健全な使い方をしようとか思わないのか。

「だが、チャンスだな」

クズ野郎を殴れば、当然音が出る訳だ。

そうすれば、クーデリアさんがこっちに来る。そこで行動し、フィリーちゃんの方に移る。

「完璧な撮影プランだ。流石は俺」

そうと決まれば、前方の盗撮野郎に天誅を与えようとする。

「世にはびこる、悪を滅ぼし、我は正義となる」

前口上と共に、前方の柱に向かって歩いていきクーデリアさんの前を横切ろうとした瞬間、乾いた音が響いた。

「————え？」

響く銃声、静まり返るギルド。

はずれた銃弾はもろに俺を狙っていた。

「な、なぜ……？————あ」

疑問に思いつつも自分の体を見回して気付いた。

足元辺りがだいぶ汚れて、大分目立ってる。そりゃ汚れが宙に浮いてたら気付くよね。

たぶん、さっきのミミちゃん作戦で走ったせいだと思う。

「ふう、状況分析は終了した。さてと……」

だんだんと近づいてきてるクーデリアさん。

ここでいつもなら諦めるが今日は違う、なぜなら見つかった瞬間逮捕エンドに直行してしまうから！

「……………！」

さっきまでのクローク野郎が見つかるのを恐れてか、ギルドの扉へと逃げている。

迂闊だ！迂闊だぞ！

俺はそれを見つけた瞬間走り出した。同時にクーデリアさんが銃口を上げた音が響いた。

俺の脚力と常人の脚力、どちらが強いかは明白だろう。俺は奴に軽く追いついた。

「バトンタッチ。あとよろ♪」

「――！」

拳を一発入れる、そして彼？は運悪くクーデリアさんが放った銃弾も受けてしまった。

別に盾として使ってない、ホントダヨ。

「俺の冒険者レベルでは、この場所を制覇するのはまだ無理だったってことか」

いつか俺の冒険者と錬金術士としてのレベルが上がったら、また来よう。

さらばだ！

.....

.....

「あの、ごめんなさい。許してください」

「うん、アカネ君。やっぱりその服かっこいいよ！」

「あはは、アカネさん。頑張ってくださいね……」

「ちむ！ちむむ！」

ちむおとこが俺を罵ってくる、何か不満でもあったか？

今の俺の現状を一言で言うなら、改造執事服を着て撮影大会。

「酷い！ちょっと隠れて師匠とかトトリちゃん撮ってただけなのに！」

「それがダメなの！まったくもう、錬金術を変なことに使って……えへへ」

そうですか、俺の写真を撮れてそんなに嬉しいですか……。コスプレ写真を撮られる気分ってこんなのかな？違うよな。

「トトリちゃん、ヘルプ」

「今回はアカネさんが悪いですよ」

「ちむ！」

「うう……」

ちなみに写真は死守した。クロークは捨てられた。カメラは……師

匠が今持つてる。

俺って奴は、目的の半分も達成できないでこの様だよ。
まだアランヤ村でやることも残ってたのに……。まあ、パメラさん
とツェツイさんなら頼めば付けてくれそうだけど……。

「じゃあ、次はこれね」

「え？ 何それ」

師匠が持っているのは黒いローブ……猫耳フード付きの。

「さっきおやじさんが、兄ちゃんにこれ渡しといてくれて持って
きたんだ。サービスだーって言ってたよ」

「創造神は悪神だったようですね。待つてくださいたぶんそれ俺の
じゃないです」

「え？ でも黒だし、それにアカネ君これ着たら絶対可愛いよ！」

「そうですか、可愛いですか」

トトリちゃんの方をしてみる。

「……あはは」

目を逸らされた。

「ちくしょー！」

「ほら、早く着て着て！」

悪い事はできないなって思いました。

キヤッツシヨット 後編 撮影大会（後書き）

猫耳っていいよね。ただし美少女に限る。

相棒の死

7月も終わりに入ったころ、俺はアトリエで椅子に座りながら本を読んでいた。

「は〜」

「ぷに？」

俺がため息を吐くと、ぷには心配したのか俺に向かって鳴いてきた。その優しさをもっと別のところで生かしてほしい。

「まあ、一週間前のことが今も俺の心を引きずってるだけだ。気にすんな」

「ぷに〜？」

「ははっ、アレ見てみろよ」

「ぷに？」

俺が目線に向けた方向にあるのは本棚、そしてその中には赤い真新しいアルバムが一冊入っている。

言うまでもないと思うが、中に入っている写真は俺のお宝写真詰め合わせだ。

俺のと言っても俺が撮ったではなく、俺が撮られた写真なので勘違いしないように。

「カメラも没収されたし……」

「ぷに！？」

借金あるくせにそんな物買ったのかと、驚いているようだが言わせ

てもらおう。

「無駄使いじゃない！必要経費だ！」

「ぷに〜……」

「俺が稼いだ金をどう使おうと俺の勝手だろうが！」

「ぷに……」

完全にダメ親父の発言したな俺。

「まあ、そんなこんなで落ち込んでんだよ、そっとしておいてくれ……」

「ぷに」

俺は読書を再開した。本はいいね、何もかも忘れさせてくれる。

本を読んでいる内に中和剤（赤）の正体がわかった。簡単に言えば今の中和剤の元となったものの一つと言ったところだ。

赤は火と風の属性をくっつけ、青は水と風の属性を混ぜるために使われる。

んで、今俺たちが使ってる中和剤はなんでも結合させれるスーパースターって事だ。

これを知らなかったのは決して俺の勉強不足ではない、こんな基礎的なことを教えてくれなかった師匠が悪い。

そして、これを知らなくても、一年以上は錬金術を使える事が判明した。

まとめると別に今の中和剤で事足りる訳だ。あの参考書が単に古かったって事だな。

「フリーゲント鋼にまた一步近づいたようだな」

「ぷに」

「あとはグラビ結晶とグラセン鉱石か、まだ解読出来てないところもあるし先はまだまだ長いな……」

「ぷに！」

ぷにが珍しく俺のことを励ましてくれた。

だからその優しさをもっと別のところでだな、どことは言わないが。

「よし！ んじゃ出かけるか！」

「ぷに？」

「グラビ結晶ってのは作れそうだから、とりあえず一回作ってみた
いんだよ」

「ぷに」

「んじゃ材料を取りに久々の冒険に行くか！」

「ぷに！」

俺は立ち上がり、ポーチを腰に巻いた。

「それじゃ、行ってきまーす！」

「ぷにー！」

「あ、うん。行ってらっしゃい。気をつけてねー」

師匠に見送られ俺たちはアトリエを出た。

………

……

「よし、三ヶ月ぶりくらいの出勤だな。自転車君」
「ふに」

宿屋の入口のそばに置かせてもらっているマイ自転車。
こいつとはもう二年くらいの付き合いだな。

「ふに！」

ふにがカゴに入り、俺はサドルに跨った。

「んじゃ、行くか！」

俺は立ち漕ぎの姿勢で思いっきりペダルを踏み込んだ。

「——ニヤっ！？」

瞬間、何かが折れたような音と共に、俺の脚は行き場を失いバランスを崩した。

「ぬおっ！」

「ふに！」

俺は自転車に乗ったまま横に倒れた、寸でのところで受け身を取ることには成功し怪我だけは免れたが……。

「じ、自転車が！」

「ふに！？」

立ち上がり、自転車を見るとペダルが片方折れていた。

その姿は、痛々しく、俺の胸を締め付けてきた。
俺はショックから地面に膝をつき、自転車にすり寄った。

「おい！目を覚ませよ！お前はこんな所で死ぬような奴じゃないだろ！」

「ぷに！ぷに！」

「うるせえ！こいつはまだ生きてる！死んでなんかいいええ！」

「ぷに！ぷにー！」

悲しみと絶望の嘆き、どうしてこんなことになってしまったんだ……。

「寿命だね」

「マ、マークさん！？？」

顔を上げるとそこには、こいつの生みの親であるマークさんがいた。
なんでここにいいのかという疑問も持たずに、俺は問いかけた。

「じゅ、寿命ってどういうことだよ！」

「そのままの意味さ、君の脚力から考えてそろそろ壊れるんじゃないかと思ひ忠告に来ただけだ、まさかちょうど壊れたところだったとはね」

「な、直すことはできないのか？」

「ふむ、できなくはないけど、一度壊れて丈夫になるのなんて人間くらいなものさ、この意味は分かるだろう？」

マークさんはそう言って俺のことを真剣に見つめてきた。

意味は分かる、つまりこいつはもうダメだって事だ。直してもすぐに壊れる。

「二年も使つてると自然と愛着が出てくる物なんだよ」

「分からないでもないね。だけど、その間にも技術は進歩していくものだよ」

「そうだな……」

俺は折れたペダルを手に取り、立ち上がった。

「さらば相棒！そしてよろしく二代目！」

「うん？」

あれ？

「えっと、ここは、マークさんが進歩した二代目を持つてくるみたいな……」

「ないね。言っただろう？忠告しに来たんだと」

「……マークさん」

残念と言う感情がここまで込み上げてきたことはない。
俺の高ぶった感情の行き所がなくなってしまった……。

「えーと、今から新しい自転車作ってもらえないか？」

「いいよ」

「さ、さす——」

さすがは異能の天才科学者と続けようとしたところで、俺の言葉は遮られた。

「と言いたいけど、まだダメだね」

「な、何で!？」

「科学者として、改良の余地がある物をそのまま複製するなんて芸

がない事はしたくないのさ」

「……………」

こ、これだから技術者って輩は……。

「つーか、二二年もあったんだから案の一つや二つくらい……」

「ないね」

「ないんかい！」

ダメだ、完全にマークさんのペースに嵌ってしまってる、ここはなんとかして作ってもらう方向に誘導しなくては……。

「で、でもさ、もう改良できる所なんて一つも残ってないぜ？」

タイヤ以外は。

「いや、君の目線を見る限りおそらく車輪の部分にまだ不満があるようだね」

「クッ！こんなところで無駄に鋭い！」

仕方ない。ここは素直にYESと言って空気入りタイヤの話でもして作ってもらおう。

この世界にゴムがあると思わずに作成してもらった当時は、言っていなかったのがここで役に立つ。

「それじゃあ——」

「待った！言わないでくれたまえ！」

「ええー」

「ここは僕に任せてくれたまえよ。二ヶ月後、君に最高のプレゼントをしてみせよう」

「え、ちょっと、待って！」

俺の叫びもむなしく、マークさんは路地裏へと消えて行った。

「に、二ヶ月後……」

「ぷに」

「うん。たぶん俺の誕生日プレゼントってことなんだろうけどさ……」

たぶん師匠かトトリちゃんからでも聞いたんだろう。俺は息を目いっぱい吸い込んで言った。

「遅いよ！」

誕生日まで遠出できないことが決定した。

ついでに言うと、この後の自転車の処理が結構めんどくさかった。折れたペダルは思い出の品として部屋に飾られてる。

相棒の死（後書き）

今回は短めです。

料理人への道 上

「イクセルさ〜ん、いつものお願いしま〜す」

「あいよー」

今日も今日とてサンライズ食堂に昼食を食べに来た俺はカウンター席に座り注文をした。

客も多く、イクセルさんは忙しそうに動き回っている。

たぶんこれ、俺が後回しにされるパターンだな、うん。

「空腹はスパイス、空腹はスパイス……」

ぶつぶつと自己暗示をかけつつ、俺は料理が出てくるのを待ち続けた。

……………待つこと数十分

「はい、お待ち」

「がるるるっ！がう！」

こんだけ待たされれば、野生化もしますよ。こちらら育ち盛りの二十歳前だもん。

「うちの店は動物お断りだ」

「くう〜ん」

イクセルさんは皿を下げようとしてきた、なんという非道。

「冗談だって、ほらサービスだ」
「……………」

そう言って、イクセルさんはアイスコーヒーを一杯出してきた。
アイスの方は無料じゃないから嬉しいは嬉しいんだけど、待たされた時間的に考えると微妙な気分だ。

「まあ、コーヒー代が浮いたと思えば……」
「へえ、お前もそういうこと気にするようになったのか」
「そうもなりますよ……」

借金とか治療費とかいろいろ出費がかさんだせいで、最近はいり物とかにいろいろ気を使うようになってる。

「イクセルさんだから言いますが、実は借金があるんですよ……」
「借金？」

「はい、しかもその額がですね……」

こっちに顔を寄せるように合図をし、イクセルさんの耳元で額を囁いた。

「30万コール!？」

「ちょ!し、しーっ!あまり大きな声で言わないでくださいよ」

「い、いや、お前一体何やらかしたんだよ!？」

「まあ、いろいろですよ、いろいろ」

だいたいはぶにのせいだけだな。

「つか、お前そんな借金有るくせにここに飯食いに来てんのかよ…

「……」
「だって自炊できませんし、第一そんなに変わらないんじゃないですか？」

料理作る時間と習得する時間を考えると、差額に釣り合わない気がする。

そりゃ年計算すれば大分違うんだろうけど、今は目先の借金に集中したいしな。

「お前なあ、一応聞いとくけど朝とか夜はどうしてるんだ？」

「最近は朝抜いて、夜は基本的にパンとか食べて済ませてますね」
「……………」

俺がそう言うといくセルさんは啞然としたような表情になった。
俺なんか変なこと言った？

「信じらんねえ……」

「そ、そこまで言わなくても」

「お前、もうちょっと食事を楽しもうとか思わないのか？」

「可愛い子が作ったのなら楽しめますけど、それ以外は……お腹空いてる時はおいしいねって感じですかね」

こっちに來て一番食事を楽しめたのはトトリ家での食事。

ツェツイさんの手料理はもう、言葉では言い表せない感動があるね。

んで、なんかイクセルさんの顔が怖いことになってる。知らぬ間に地雷でも踏んだ？

「あの？イクセルさん？」

「……お前、今日店終わってからもう一回来い」

「え？」

「俺が料理の楽しさと、大変さを教えてやるからさ」

イクセルさんが大変さの部分にアクセントを付けて言ってきた。
笑顔にはなってるものの、さっきの顔よりも怖いんですけど……。

「で、でもイクセルさんもお忙しいでしょうし……」

「別に俺はいいぜ、後はお前しだいだな」

俺の判断に任せられるらしいけど、断るなオーラが俺を威圧してくる。

「よ、よろしくお願いします」

「よし！んじゃ、後で店に来いよ」

「はい……」

第二の師匠が誕生した瞬間であった。

……
……

「……………来てしまった」

空がすっかり暗くなり、月が昇った頃、俺はサンライズ食堂の前まで来ていた。

中では今頃イクセルさんが待っていることだろう。

「ぷにの奴め、最近やたらと仕事を真面目にやってるもんな……」

ぷにがいたらこの恐怖を少しは軽減できただろうに。

師匠は優しくかったが、イクセルさんはなんか教えるのに厳しいイメージがある。

「お、お邪魔します」

恐る恐る食堂の扉を開けると、いつも通りカウンターの中にイクセルさんがいた。

「おっ、来たか。んじゃ、これ着てくれ」

「あ、はい」

手渡されたのは、白いエプロン。

……ジャージエプロン、これは流行るな。

くだらないことを考えつつ、調理実習とか以来のエプロンなのでもたつきつつも着た。

「教えるのは、トトリの奴に教えたのと同じ奴にするかな」

「え？ トトリちゃん？」

「なんだ、聞いてないのか？」

「トトリちゃんもイクセルさんに料理教えてもらってるんですか？」

特にそんな素振りはなかったように思うんだが……。

「まあ、あいつのはレシピを教えて作って来た料理の完成度を見るっただけだけだな」

「？ よく分からないんですけど」

「錬金術だよ、錬金術。同じアトリエにいるのに気付かなかったのか？」

「……………気付きませんでした」

まさか錬金術で料理を作るとは……。

俺もパイは作れるけど、他の料理まで錬金術で作るって発想はなかったな。

「いや！それなら俺も同じ方式でいいんじゃないですか!？」

「それじゃあ、意味がないだろ」

「い、意味？」

「言っただろ？料理の楽しさと大変さを知ってもらって」

つまり、釜かき混ぜて作っても意味はないってことですか。

「わかりましたよ……。それで、何を教えてもらえるんですか？」

「そんなに焦んなくて、今日は初日だから軽いのから教えるぞ」

「ういっす」

返事をし、俺はカウンターの中にあるキッチンに立った。

「今回教えるのは香茶とコンソメスープだ。そんなに難しくもないし初心者にはちょうど良いレベルだな」

「なんだ、コンソメスープですか——」

そのくらい簡単って言うおうと思ったけど気付いた、この世界に固形コンソメなんて物はないんだと。

「レシピは後で渡すから、材料の切り方とか細かいところを重点的に教えるからな」

「……はい」

ここからが地獄の始まりでした。

「お前、野菜の皮もむいたこと無いのかよ……」
「すいません……」

いつつもピーラー使ってたんだもん、包丁で皮むいたことなんて現
代っ子はあまり無いと思うですよ。

「おい！切るときは手を丸めろ！危ないだろうが！」
「お、おっと、そうだった」

調理実習の経験がまったく生かされてない。
もう2年以上前だし仕方ないね。

「……………」

卵白だけをうまく取り出すのに必死な男の図。

「こんな感じですか？」
「ああ、次は鍋に移して煮込んでくれ」
「ういっす」

卵白に玉ねぎ、セロリ、にんじん、牛肉のミンチにスパイスを各種。
これを混ぜて、次は鍋に移して煮込む。

……コンソメの素の偉大さが分かってくるな。

「……沸騰させるなって言ったよな」

「い、イクセルさん怖い！怖いです！」

「まったく、沸騰させると濁るからちゃんと覚えとけよ」

「は、はい！」

お店の新人コックさんってこんな感じだったりするんだろうか。

………

……

「で、できた……」

煮込んだものをガーゼのような物で濾して、ようやくコンソメス
ープが完成した。

これで初心者レベルとか、明日からどんだけハードになるんだろ……。

まあ、師匠の教え方よりはわかりやすいし丁寧だけど、比べるのも
失礼なくらいに。

「よし、後は香茶だな」

「ですよー」

温度やら入れ方やらを散々注意され、店に入ってから数時間後俺は

解放された。

そして、明日も来るように言われた。

俺の肩書きに料理人が加わる気がしてならない。

次の日の昼

「師匠、パイっていいですね。作るのすごい簡単ですし」

「え、うん。そうだけど、なんでそんなに泣きそうな顔になってるの？」

「錬金術の便利さに感動しちゃって……」

材料を加工する、釜を混ぜるの2アクションで完成するんで、錬金術さんマジパないです。

料理人への道 上（後書き）

ユニークを見たら10000ってた、ビツクリしすぎて椅子から落ちた。

皆さんいつも読んでくれて本当ありがとうございます。

料理人への道 中

イクセルさんの料理教室を強制的に受けさせられてから一週間、俺は与えられた課題をこなしていた。

作成するのはタルトにデニッシュなのだがやたらと難しい。教えられてる間に作れなかったので、作ったものを持っていく方針になったのだ。

タルトは最近作れるようになったからいいが、もう片方は未だに作れない。

「デニッシュ、こいつ難しすぎるだろ……」

これまでまったく機能していなかったアトリエのキッチンで俺は愚痴りながら生地を捏ねてる。

初期段階では水分量が分からずに生地が崩壊するわ、バターの入れ過ぎで生地をダメにするわで全然焼成に入れないわ。

今現在、ようやく生地をまともに作れるようになったのだ。

「……生地を伸ばして六等分つと」

レシピを見ながら、慎重に作業を進める。

そろそろ成功しないと師匠がうるさいからな。

俺とトトリちゃんが二人ともイクセルさんから料理を教えてもらっているのが気に食わないのか、最近機嫌が悪い。

パパッと全課程を修了して師匠の機嫌を取るとしよう。

「んで、切ったのを二本ずつ重ねると……うん？」

レシピの一文を読んで俺は首をかしげた。

「生地を三つ編みにする？むう、そういえばイクセルさんがやったような気も……」

紐での三つ編みすらできない俺に生地で三つ編みしろって何その無理ゲー。

「な、何とかなるさ！」

………

……

何とかならなかった。

俺はぐったりとしたままキッチンを後にし、いつもの部屋に戻って来た。

そこには釜をかき混ぜているトトリちゃんがいた。

「あれ？アカネさん、今日はもう終わりですか？」

「うん、もう無理。やる気なくした」

なんちゃって三つ編みをする、焼く、黒コゲマン参上！

「三つ編み以前に、生地がダメだったってことだよ、もうヤダ」

「よ、よく分かりませんが大変そうですね」

「本当に、錬金術使えればどれだけ楽か……」

完成品持ってくださいだから、錬金術で作ってもバレないっちゃばれないんだろうけど、そこまで錬金術に頼ったら負けな気がする。

「それで？ トトリちゃんは今何作ってんだ？」

「えっとオリジナル料理を作れーってイクセルさんに言われて、ちようど今作ってるところなんです」

そう言いつつも釜を混ぜ続けるトトリちゃん。これを調理と言っ
てはいけない気がする。

「しかし、オリジナルか、このままだと俺も作らされるんだろうな……」

「でも、自分だけのお料理考えるのも結構楽しかったですよ」

「そりゃ、錬金術で作れば楽しいよ、俺すごい大変なんだよ」

なんかもう、釜をかき混ぜていろいろ作っていたあの時代が懐かしい。

オリジナルレシピも錬金術なら楽しいだろうさ。

「あはは……。本当に大変そうですね」

「そうなんです。……お」

そんな風に駄弁っている間にオリジナル料理とやらができたようだ。
トトリちゃんは釜に手を入れて取り出した。

「で、できた。やったー！ できたー！ わたしのオリジナル料理！」

「い、意外とうまそうだ……」

箱に入って出てきたその中には数種類の料理が詰め合わさってい

た。

「そ、そうだ。名前どうしよう？えっと、えっと……」
「……………っ」

思わずぐくりと喉が鳴った。まさかこんな短いスパンであの恐ろしいネーミングをまた聞くことになるとは……。

「よし、トトリア風ブランチ！トトリア風ブランチに決定！」
「……………泣いていいよ」
「ちむ」

俺の足元ではちむおとこくんが泣いていた。
なんでここでまともな名前を付けてしまうんだろうかこの子は。

「ついに完成したな」
「にゃっ!？」
「え？わあああ!?!いい、いい、イクセルさん!?!」

俺がちむおとこくんに同情していると、突然横にイクセルさんが現れた。

扉が開く音もしなかったんですけど……。

「ふっふっふ、待っていたぜ、この時を」
「え？え？な、なんでイクセルさんがここに？」

俺が尋ねるより早く、トトリちゃんが当然の疑問を言葉にした。この人店放っというて何しに来たん？

「だから待ってたんだよ。お前がその料理を完成させるのをな!」

「え、でも、わざわざアトリエまで来なくても。どうせ後で、わたしの方から持っていくんですし」

「それじゃあちよっとアンフェアだからな。やっぱりこういうのは正々堂々とやらないとな」

「えと、全然話が見えてこないんですけど」

何か二人だけの話になってるな……。まあ、俺はちむおとこくん慰めてるからいいんだけど。

「オリジナル料理を作り上げた以上、お前も一人前の料理人……。そこで俺と料理対決をしよう！」

「料理……対決？は！？な、何言ってるんですかいきなり！？」

「いきなりじゃないさ。前々からずーっと考えてたし。なんだよひよっとして嫌なのか？」

なんという疑似光源氏計画、自分で対決の相手を育てるとは……。つか、イクセルさんのキャラがおかしい。

「嫌ですよ！ていうか、意味が分かりませんし！」

「いいんだよ、意味なんて分からなくても！どっちの料理が上手いか勝負するだけなんだから！」

「だから、なんで勝負しなくちゃいけないんですか？」

「それは！俺もお前も料理人だからだ！」

よかった、俺はカウントされてない。

トトリちゃんには申し訳ないが俺は安全圏にいることにほっとした。今のイクセルさんに絡まれたくない。

「うう、ダメだ……。話が全然通じない……。なんかアカネさんみたい……」

「くっ！」

ほっとした瞬間に鋭利な槍が飛んできた。俺って傍目から見るとこんなテンションなの？

思い当たる節は……ないでもないような気がするけど、ないことにしたい。

「なあ、いいだろ？最近誰も勝負してくれないからつまらないんだよ。コロナも逃げ回ってばっかだしさ」

うわあ、師匠もこのバトルジャンキーの標的なのか、流れるにトリちゃんの次に俺が来そうで怖いな……。

つか、このまま料理を続けたら将来確実にトリちゃんの二の舞になるな。

「そうなんですか？それはちょっと寂しいですね」

「だろ？じゃあ決まりって事でいいよな？」

こういう手合いに同情したら負けだよトリちゃん。

「……なんか、あのツツコミだらけの会話聞いてると俺の身が持たないんだが……」

「ちむ」

俺とちむちゃんは、ソファの方に移動してゆったりとコントを眺めてることにした。

「あ、トリちゃんの心が揺れてる」

「ちむ」

トトリちゃんが勝ったら豪華食材セットを渡すって言ってきた。この大人ついに物で釣りだしたぞ。

「ちむむ」

「ダメ押しの一品、イクセルさんの秘蔵レシピか……。参加しただけで渡すって必死すぎだろ」

「ちむ」

一体何が彼をそこまで彼を勝負に駆り立てるのだろうか、もはや病気の域だ。

「あ、トトリちゃんが受けるって言っちゃった」

「ちむ」

「あー、久々の料理対決！腕が鳴るぜー！」

そう叫んで、イクセルさんはアトリエの外に出て行った。

「うー、イクセルさんなんか人が変わったみたいでしたよ」

「お疲れさん。まあ、頑張っ行ってらっしゃい」

「アカネさんも逃げちゃうし、酷いです」

「いやー、俺としても何とかしたかったんだけど、俺が話しかけても無視されそうだったし……」

俺が止めたら絶対に、料理人同士の話に口出しすんな！とか言われてただろうしな。

「た、確かにそうですね」

「だろ。まあ、諦めて行ってくるといいさ、別に殴り合いしに行く訳じゃないんだし」

「そ、そうですけど……」

トトリちゃんは不安そうにしている、できることなら俺もついて行きたいが行くことはできない。

料理も作らないまま行ったら絶対にどやされる。

「ま、頑張ってくれよ。俺も俺で料理を頑張らんくちやいけないでな」

「わ、わかりました！……行ってきます！」

そう言っ、トトリちゃんは料理を持ってアトリエの外に出て行った。

作り直さないあたり、自信はあるみたいだな。

「ところで、まだ不満は残ってるか？」

「ちむ」

「なら、その憤りを生地に向かってぶつけるがいいさ」

「ちむ！」

俺とちむおとこくんはキッチンの中へと戻って行った。
そーういやちむちゃんはどこ行っただろうな？

……………

……

「ふー、やっとできた」

「ちむ」

ちむおとこくんの協力を得てようやくデニッシュを作れた。

彼の料理スキルは結構高い事が判明した。

「後はこれを持ってけばいいんだけど……」

「ちむ？」

今持ってっていいものか？そろそろ勝負はついたと思うけど、

「帰りましたー！」

「ちむー！」

タイミング良くトトリちゃんが帰ってくる声が聞こえてきた。

何故かちむちゃんも一緒だが。

俺は結果を聞きにキッチンから出た。

「おかえり、どうだった？」

「えへへ」

トトリちゃんの腕の中には食材セットと思われ木箱、その上にレシ
ピが乗っかっていた。

「おー、勝ったか」

「はい！それに見てください！」

トトリちゃんがテーブルに食材を置き、その中から紫色の物を取り出した。

「これでまた新しいちむちゃんが作れます！」

「な、何故食材セットにちむちゃんの素が……」

「わかりませんが、でもこれで新しいちむちゃんが……」

トトリちゃんは頬を赤らめ、トリップしていた。

この重度のちむちゃん好きがなければなあ……。

「そんじゃ、俺はイクセルさんの所に行って料理渡すついでに元気づけるとするかね」

「あ、はい。イクセルさんも落ち込んでたみたいなんで良いと思います」

落ち込むほどに惨敗したのか……。

「そんじゃ行ってきます」

「はい。……えへへ」

不気味な笑い声に見送られ俺はアトリエを出た。

すぐに俺はこの判断が誤りであったことに気づく、敗者のことはそっとしておくべきなのだ。

料理人への道 下

「……死ぬ。いや、殺される」

俺は地べたを這いずりながら宿屋の部屋に入った。

窓から差し込む僅かな日の光を浴びながら、ベッドの方に這って行く。

「……………うう」

力を振り絞りベッドによじ登ったはいいいものの、なかなか寝付けない。

イクセルさんの殺人料理講座に耐えるためにコーヒー飲みすぎた……。

「……なんでこんなことに」

寝付けないからか、俺は自然と今日までの事を思い起こしていた。

「……………」

「あの？お味の方は？」

俺が課題であった料理二つを渡し味見されてから数分、イクセルさんは何故か黙りこくっていた。

やはりトトリちゃんに負けたことがショックだったのだろうか。

「……………決めた」

「へ?」

ぼそりとイクセルさんが何かを言った。

歴戦の俺の感が逃げろと告げている。絶対ロクな事が起こらない、断言できる。

「す、すいません。ちょっと「お前とトトリで料理対決をやる!」……………おう」

ガッツポーズで妄言を吐きだすイクセルさん。人との縁の切り方を本気で考えたくなった。

「どうだ? 名案だろ?」

「えっと……………」

「なんだよ、なんか不満でもあるのか?」

当たり前やん。何でそんな断らないと信じきった顔をしてるんだよ、どっからその自信がわいてくるんだよ。

「とりあえず…………。その考えに至った理由を話してほしいです」

「ふっふっふ、やっぱり聞きたいか」

「ええとても……………とつとと話せや」

聞こえない程度にぼそりと本音を加えておく。

この状態のイクセルさんには敬語使わなくていい気がしてきた。

「聞いてると思うが、俺はさっきトトリに負けた。だから俺は考え

「たんだよ、どうやったら勝てるかってな」

「それって料理の修業すればいいだけじゃ……」

論破完了。これで帰れたらいいのにな。

「何を当り前のこと言っただよ？」

「……………」

トトリちゃんはこんなのを俺みたいって言ったのかよ、俺こんなにうざくないよ。

「そうやって勝つことも考えたさ。ただ、ふと思ったんだよ」

思わなくていいっす。負けてからのこの数十分でどこまで考え込んでたんだよ。

「一度負けてからのライバルとの再戦で、そんな普通に勝っていいのかってな」

「いいとお「よくない！　そう思うだろ！？」……………」はい」

「そうだろそうだろ。俺の弟子であるお前を鍛えて、ロロナの弟子のトトリを倒す。燃える展開じゃないか！」

なんというバトル漫画脳。とりあえず最大のツツコミどころにアタックだ。

「ちょっと待ってください。俺ロロナ師匠の弟子なんですけど？」

「料理だったら違うだろ？　お前は料理道具でトトリは錬金術使うんだから」

「で、でもトトリちゃんもイクセルさんの弟子じゃないですか！」

「いや、弟子つつつてもレシピと材料教えたただだから……。そ

の点お前はちゃんと一から教えてるだろ？」

ダメだ全然話を通じない。

トトリちゃん、絡まれてたの見捨ててごめん。これはキツイわ。
こうなったらダメ元でいろいろ聞いてみるか。

「……俺がトトリちゃんに勝ってイクセルさんは満足何ですか？」

「お前が勝てば俺が勝ったも同然だろ？……それに師匠を超えたと
慢心した弟子を倒す。王道じゃねえか！」

ダメだなこれ、何個か質問するまでもない。絶対に折れないよこの
人。

こうなったら、別の方向から……。

「俺が勝負に出た場合って何かもらえたりするんですか？」

「ん？ ああ、そういや考えてなかったな」

「言っておきますけど、俺はレシピや食材セットじゃなびきません
よ」

これを封じられれば打つ手はないはず！勝利！圧倒的勝利！

「他にお前がほしそうな物一つと、昔のコロナの写真ぐらいしか
……」

「イクセルさん。俺がその程度で動くと思ってるんですか？ まった
く……」

「じゃあなんでエプロン着けてんだ？」

「はっ！？」

くっ！止まれ俺！俺は師匠の写真程度では動かないんだ！

「しよ、勝利、勝利したら何をもらえるんですか？」

逃げる、この一手、この一手で逃げ切る！脱出！脱出だ！

「そうだな……。そっち系だと昔アストリッドさん。ああと、ロロナの師匠から押し付けられた若干際どい写真が……」

「イクセルさん！一番テーブルのお客さんがお待ちですよ！早く仕事を終わらせて料理修業といきましょう！」

「……お前って単純だよな」

なんでそこで冷めるんだよ。なんか恥ずかしくなってきたやうだろ。

「……………俺、泣いてるのか？」

ふと気付くと目元から一筋の涙が零れ落ちていた。

浅はかだった数週間前の俺、悪魔の誘惑に負けた弱い俺。

あそこではつきりと断っていればよかったんだ。

あれ以来毎晩毎晩、鬼のようなイクセルさんの指導。まさに生き地獄状態。

料理対決以前のイクセルさんはどこへ行ったのか。

「……それも、それも明日で終わる」

今日俺はオリジナル料理を完成させイクセルさんに一人前の料理人と認められた。

激しく時間の使い道を間違っているが、明日ついに終わるんだ。結末は俺の勝利以外にはあり得ない。

「クックック」

………

「トートリちゃん！」

早朝、俺は扉を派手に開けてアトリエの中に入った。

「アカネ君？ トトリちゃんなら出かけてるけど？」

「……………」

扉を閉めて、下がる。

「……………ないわー」

「何がですか？」

「……………っ！」

「へ？」

振り返るとそこにはトトリちゃんが疑問符を浮かべて立っていた。

「あのー？ アカネさん？」

「と、ととと、ととと！」
「ととと？」

トトリちゃんに料理対決を申し込むと言いたいのだが、うまく言葉にできない。

基本的にトトリちゃんには優しくをモットーに掲げているので、あまりトトリちゃん相手にこういう事やるのは慣れてないんよ。

「と、とと！トトリちゃんに料理対決を申し込む！」

「え、ええー！？」

「今日中に料理を持って来るがいい！それじゃ！」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

逃げようと思ったんだが、回り込まれた。

俺の罪悪感パラメータがぐんぐん上がってる。

「質問は一つだけお願いします」

「え？ええと……なんでわたしとアカネさんが勝負しなくちゃいけないんですか？」

ここは偉大なる先人の言葉を借りるとしよう。

「それは！俺もお前も料理人だからだ！」

「い、イクセルさんと同じ答え……」

「ついでに言うと、勝負に勝ったら豪華爆弾詰め合わせがプレゼントトされます」

言うまでもなくメイドインオレ。

「い、いるようないらないような……」

「伝えることは伝えたんで、そんなじゃ！」
「あ、待ってくださいよ！」

トトリちゃんの制止の声を背中に浴びつつ、俺はサンライズ食堂へと走った。

……
……

待つこと数時間、時間はちょうど昼のピークが過ぎた頃、食堂の扉が開いた。

「こんにちはー」
「お、来たな」

食堂の中に入ってきたトトリちゃんをイクセルさんが出迎えた。俺はその様子を眺めながらカレーを食べていた。もちろん自作。

「うまうま」
「アカネさん、それおいしいんですか？」

トトリちゃんがこっちに来ると微妙な顔をして尋ねてきた。そりゃカレーなんて食文化こっちにはないからしゃーないね。

「うまいよー、一口食べる？」
「そ、それじゃあ……」
「お前ら！ちよつとは勝負の緊張感持てよ！」
「ええー」

宣戦布告という大仕事を終えた俺としてはグダグダしたい気分なんだけどな。

それに今うまくいけば間接……んんっ！俺は中学生かつつの。

「ほら、とっとと自分の料理用意しろよ」

「ういーっす」

俺はカウンターの中にある鍋とフライパンに向かった。

「トトリの方は……なんだ、前と同じ料理かよ」

「し、仕方ないじゃないですか。またこんな事になるんて思いませんでしたし」

「ま、それなら審査員をわざわざ変えた甲斐があったってもんだな」

そう言えば前の審査員はちむちゃんだったらしい。

審査員を替えるのはやっぱり二回同じものを食べると評価が変わるからってことだろう。

このフェアプレー精神だけはかっこいい。

「今回の審査員はこいつだ！」

イクセルさんがそう言うのと、食堂の扉が開いた。

「ぷに！」

「し、シロちゃんですか？」

「そうだ。こいつなら公平な審査をしてくれるはずだからな。さっき見かけたのを餌付けしたんだよ」

まあ、確かにぷになら俺のことを助けるために高く評価するなんて

ことは百パーセントないと断言できる。

「そんじゃあ俺まだ準備中だからトトリちゃん先お願い」

「は、はい。わかりました」

準備と言っても温め直してるだけなんだけどね。

「そ、それじゃあシロちゃん。はい、召し上がれ」

「ぷに！」

カウンターに乗ったぷにはトトリちゃんからフォークで食べさせてもらって……。

「おい、アカネ？緊張感を持てとは言ったけどな。そんな人殺しそうな顔しなくてもいいんだぞ？」

「アーン、トトリちゃんからアーン……」

残念ながら今日は毒の持ち合わせがなかった。
まあいい、その内ヤツテやるとしよう。

………

……

「……よし」

呪詛を吐きつつ、俺は自分の料理を完成させた。

「ぷに！」

「はい、お粗末さま」

「ぷに」

「ちっ！」

今からでも遅くない。タバスコを一瓶入れれば殺れるはずだ。

「だが、俺には使命がある。ここは我慢しよう！さあ、食うがいい！」

「ぷに？」

俺はカウンターに料理を叩きつけるように置いた。

「その名も！マーボーカレーだ！」

「まーぼーかれー？」

トトリちゃんが全く理解できていないようなので説明するでしょう。

「マーボーカレーとは！マーボ―豆腐とカレーを混ぜたものだ！」

「??」

「アカネ、それで説明したつもりなのか？」

「的確すぎるでしょう。さあ食え」

「ぷに」

ぷには犬のように皿に食らいついて食べ始めた。

「ぷに！」

「早っ!？」

一瞬驚いたが、考えてみれば別段驚くことでもない。さっきみたいに行儀よく一口一口食べさせてもらった方が異常なのだ。

「よし！それじゃあ審査結果の発表だ！」

「ぷに！」

「は、はい！」

「やっと終わる……」

俺とトトリちゃんは立ち上がり、その間にぷにが入った。

「ぷにー、ぷにー」

ぷにぷに鳴きながら、俺とトトリちゃんを行ったり来たりするぷに。焦らすなよ、どこぞのクイズ番組の司会者みたいな真似はせんではないよ。

「ぷに」

「おっ！」

ぷにが俺の横で止まった。

「ぷに？ぷにー」

「……………」

何期待してんのみたいな鳴き声を上げて、ぷにはトトリちゃんの方に向かった。

最近、ぷにのうささのレベルが上がって来た。

「ぷにー」

「ぷにー」

行ったり来たりすること五往復程度、そろそろ止まる頃合いだろう。

「ぷに!!」

「……………え？」

「あれ？」

「お、俺!？」

ぷには俺でもトトリちゃんでもなくイクセルさんの下にいた。

「ぷに!ぷにに、ぷに!」

「えっと…………？」

イクセルさんが俺の方を見てきた、通訳を希望の様です。

「あんたがナンバーワンだって言ってます。たぶん」

「そ、そうなのか？」

「ぷに!」

ぷには強く頷いた。

「ぷにに!」

「いつも食べに来てるイクセルさんの料理が一番うまいそうです」

「……………そうか、勝負なんか抜きにした料理、それが一番だって事なんだな？」

「ぷに!」

「……………」

何これ？

「目が覚めたぜ。サンキューなシロ!」

「ぷににににに！」

「……イイ話ダナー」

「良い話ですね」

俺の数週間を返してもらいたい。

「よし！今日は俺の奢りだ！お前ら好きなだけ食え！」

「ぷにー！」

「い、いいんですか！」

「ワイワイワイ」

ちなみに後日一枚だけ写真は貰った。

今回の出来事の収穫…師匠は昔からかわいかった事がわかった。

アカネの誕生日

俺の誕生日の九月二十日まであと十日、俺は森に来ていた。

「よし！とつとと終わらせて帰るぞ！」

「ぶに！」

本当ならこんな時期に依頼なんて受けないのだが、クーデリアさん曰く急ぎの依頼だそうで何故か俺に白羽の矢が立った訳だ。依頼の内容はアーランド近辺の森のモンスターの討伐という今の俺なら軽くこなせる内容ではある。

「まったく、もう！むふふふ！」

「ぶに……」

ぶにが可愛そうな人を見る目で見てきた。心外だな。

「気付かないか？この時期に！俺でなくてもいいのに！こんな依頼が俺指名で来た！この符合が意味するもの……」

「ぶに？」

「俺の誕生日パーティーの準備に決まってるだろ！まったく、俺を追出してどれだけ盛大にやるつもりだよ……ふふふふ」

「ぶに……」

帰ってアトリエに向かったらクラッカーの音が響くのか、それともサンライズ食堂を貸し切ったのパーティーか、もしかしたら街を挙げての大パーティーとか！

「まあ、早く終わらせ過ぎたらアッチが困るだろうしな。方針を替えてゆっくり終わらせるとしよう」

「ぷに」

今頃みんなで俺のパーティーの準備をしていると思うと胸が熱くなるな……。

「ふふ、ふふふ、むふふふ」

「ぷに……」

………

「帰って来たな、アーランド」

「ぷに」

上機嫌にモンスター共を討伐した俺と九割がた仕事をしたぷには街へと戻って来ていた。

「クックック。その道行くお嬢さん、今日は何日か知ってますよね？」

「え、ええ、二十日ですけど……」

「グッドグッド！そう！二十日二十日ですよ！」

今日は俺の誕生日！クリスマス並に有名な誕生日！

おっとお嬢さん何をそんな逃げるように駆けて行くんだい？

ふふっ、こんな有名人に会って恥ずかしくなっちゃったのかな？

「ククククク」

「ぷに……」

「そんなに急かすなよ、まずはアトリエに向かうとするか」

クラッカーが俺を待っている！

「よし、開けるぞー」

心臓がドキドキと煩い、若干手が汗ばんできた。

このままじゃ過呼吸に陥ってしまいそうじゃないか……。

「……ふうー」

「ぷに！」

「わかったわかった……よし」

覚悟を決めて、俺は扉を開けた。

「……………」

いない。アトリエの中にはちむちゃん一人すらいなかった。

「……書置きもない？」

「ぷに」

アトリエの中を見渡すも、特に目立った物はなかった。

「なら、やっぱりサンライズ食堂かな？」

若干疑問が残るが、とりあえずはそこしかないだろう。

「ぷに？とつとと行くぞ」

「ぷに」

奥の部屋まで探索していたのだろう、キッチンの方からぷにが出てきた。

「よし！サンライズ食堂へ出発！」

「ぷに！」

まだ収まらない心臓の高鳴りと共に俺はアトリエを出

………

……

「あれー？」

サンライズ食堂前までやって来た俺は、食堂の中を外から覗いていた。

「貸し切りどころか、現在進行形で満席じゃないか……」

「ぷに」

「あぁっ、そうだ。もしかしたら俺の依頼報告で皆出てくる手筈かもしれないな、うん」

「ぷに……」

若干嫌な予感を感じつつも、俺はギルドへと向かった。

……

……

「……………」

「ぷにー」

宿屋のベッドに腰掛けた俺の頭の上で慰めるようにぷにが飛び跳ねている。

既に外は日が落ち真っ暗になっている。

「クーデリアさん所いっても、フィリーちゃんの所行っても何もなし」

「ぷに」

クーデリアさんにおいては、はいお疲れの一言で会話が終了した。

「その後永遠とアトリエと食堂、街中をくまなく回っても何もない」
「ぷにー」

もしかしたら日付が違うのかと思い、街の人に尋ねてみるも百人中百人が二十日と答えた。

「こんなことをされる心当たりは、なくもない。むしろありすぎる」
「ぷに」

「最近はいクセルさんの所に行っただけで師匠に構ってなかった

し、トトリちゃんには唐突に料理対決を申し込んだりした」

「ぷに……」

「でもさ！こんな事する子じゃないだろ！」

「ぷに」

「ううー！」

どうということかも知みならず、俺は唸ることしかできなかった。

「はっ！」

瞬間、ある一つの可能性を閃いた。

「もしかしたら、今からドアがノックされてハッピーバースデー！
みたいな」

「ぷに？」

「そうだ！絶対そうだ！よし、頭から避けてくれ」

「ぷに」

ぷにを頭からどけて、俺はベットに倒れこんだ。
ここは自然体で待ってないとな。

「ドキドキ……」

ピクニック前日の子供のように俺は目を瞑って、ノックを待った。
ここまで焦らすようになるとは、トトリちゃんも成長しおったわ。

「……………ぷに」

……………

「ん？」

瞼の上から光が当たり、俺は目を開けた。

「朝……あさ？……朝！？」

ベッドから跳ね起き、俺は窓に駆け寄った。
完全に日が昇っている。

「ちょ！？えっ！？」

部屋を見渡す、誰かが来た形跡はない。

「あれ？ぷにもいない」

ベッドの横にいたはずのぷにがいなくなっていた。

「……俺は一体どうしたらいいんだ？」

そもそも何で俺眠っちゃったの？バカなの？死にたい。

「はあ、もういいや。誕生日なんてなかったんや」

昨日と言う日を記憶から消去しよう、俺はいつもの間にか二十歳になっ
ていたんだ。

「ご飯は……作る気力がない」

今からアトリエに行って作るのは無理だ。でも今は何か食べて気を紛らわせたい。

「食堂に行くか……」

気乗りはしないものの、それしか選択肢はない。
俺は身だしなみを整えて、宿屋から出て行った。

……

……

「はあ」

今日で総計百回目のため息とともに俺は食堂へと着いた。

「酒だ。うん、酒を飲もう、今なら大人だしセーフだ」

嫌なことがあったら酒に逃げる。ダメなことだと思いつつも、それが一番楽な気がする。

「酒を出せー!」

俺は叩きつけるように扉を開いた。

パーン!

「へ?」

中に入った瞬間、大きな爆発音とともに俺の視界を紙吹雪が覆った。

「アカネさん！お誕生日おめでとうございます！」

「アカネ君！お誕生日おめでとう！」

紙吹雪が晴れると、クラッカーを持ったトトリちゃんと師匠が俺にお祝いの言葉を言っていた。

周りを見渡すと、俺の知り合い達がほとんど勢揃いしていた。

クーデリアさんにフィリーちゃんのギルド組。

ステルクさんと後輩君の師弟コンビ。

店主であるイクセルさんはもちろん。メルヴィアにミミちゃん、マークさん。更にはちむちゃんまで。

「あ、あれ？俺の誕生日は昨日……だよな？」

「えっと、そのごめんなさい。わたしは反対したんですけど……」

途端にトトリちゃんが申し訳なさそうな表情になった。

「ふふん、昨日のあんたは見てて面白かったわー」

「ん？」

メルヴィアがニヤニヤしながら俺に話しかけてきた。

「ずっと街中を捨てられた子犬みたいな顔してウロウロして、いやー珍しいもの見たわよ」

「ま、まさか……」

だんだんと事情が呑み込めてきた。

「もしかしくなくても、今日が二十日？」

「やっと気付いたのね。そうよ、今日があんたの誕生日」

その言葉を聞いて、俺の活力がだんだんと戻って来た。

「でもさ、昨日誰に聞いても二十日だって……」

「はい！わたしわたし！すごい頑張ったんだから！」

「師匠が？」

「うん。今日日付を聞かれたら二十日だって行ってくださいって皆に言って回ったの」

「……はは」

思わず口から乾いた笑いが漏れてきた。

「発案者は？」

「オレオレ！やっぱ先輩を驚かすにはこんぐらいないと思って思っ
さ！」

ターゲットロックオン。後輩君。

「貴様かー！驚くどころか軽く鬱になってたわ！」

「ちょー痛い痛い！」

ベシベシと後輩君の頭にチョップを当てる。

「ああ、もう。何も言えない……」

俺は一通り叩いた後、倒れるように椅子に座った。

「んじゃ、早くパーティーを始めようぜ。折角作ったのが冷めちゃう」

「それも、そうですね」

トトリちゃんがそれに賛同した。

確かにイクセルさんが急かすのも無理はない。テーブルと言うテーブルにご馳走が敷き詰められていた。

「よっしゃ！お前ら！順番に俺にお祝いの言葉と貢物を持ってこい！」

一番奥のテーブルに陣取り、俺は全員に言葉を投げかけた。

「まったく、調子がいいわね」

「エントリナンバーワン、クーデリアさん！昨日のあなたの対応で俺の心は深く傷つきました」

「仕方がないでしょ、ロロナにそうしろって言われたんだから」

「それで？プレゼントは？」

「私が忙しい中ここに来た事、それが一番のプレゼントよ」

「……………」

ぐうの音も出なかった。

「ど、どうもです……」

「フィリーちゃん、まさか君まで俺を騙しにかかってくるとは……」

昨日のフィリーちゃんの対応はいたって普通だった。普通すぎた。

「ち、違うんですよ！わたし今日がアカネさんの誕生日だって知ら

されたばかりなんです!」

「む? ああ、なるほど」

よかった。一部を除いて気の弱いフィリーちゃんは健在のようだ。

「だから、その、すいませんプレゼントもなくて……」

「ああ、うん。いいっていいって、こんな人が多い場所にきてくれただけでも十分だよ」

「いえ! 可愛い子がいっぱいなんで大丈夫です!」

「……そう」

フィリーちゃんはとっても元気でした。

俺の誕生日でこんなに喜んでもらえて嬉しいです。

目つきの悪い黒い人が来た

「おい誰だよ! 俺の誕生パーティーに不審者連れ込んだの!」

「それは失礼した、帰らせてもらおう」

「ま、待ってくださいよ。軽いジョークですって」

本気で帰りそうだったので慌てて引きとめた。

「まったく、君も社会的に成人となったのだからもっと落ち着きと節度を持った行動を心がけるようにだな……」

「待ってください。とりあえずプレゼントを」

「……今の私の言葉が君への贈り物だ」

「今考えた! 絶対今考えた!」

大人ってずるいや。

「ここまでプレゼントなし。期待してるぜ後輩君！」

「あ、悪い。持ってきてねえ」

「……まあ、必殺技がちよっと早めの誕生日プレゼントだと考えればいいか、うん」

別に無理矢理納得してる訳じゃないんだからね！

「んじゃ、先輩これからもよろしくな！」

「ん、よろしくなー」

後輩君は去って行った。

次もプレゼントなかったら、俺は帰るぞ。

「イクセルさん。あなたならあなたならプレゼントを……」

「まあ、一応あるけどさ。そんな目を血走らせなくてもいいだろ。ほれ」

「わーいわーい！」

お酒を手に入れた！

「そーいや、お前さ前に一回二十歳とか言って店に酒飲みに来たことあったよな」

「ああ、まあ今更いいじゃないですか！」

確かちむちゃんが原因で家出する前に酒に逃げてたんだっけか？

「これからは堂々と飲みに行きますよ！」

「家は飲み屋じゃないんだけどな……」

「はい、あたしのプレゼントよ喜んで受け取りなさい」
「……………」

『メルヴィア様が一回だけ負けてあげる券』
ビリビリに引き裂いた。

「ちょっと！？何破いてんのよ！」

「お前は本当にぶれないよな」

「何？褒めてるつもり？」

「大分褒めたな」

結局プレゼントなしだった。

「ミミちゃんか、よく来たな」

「わたしも来るつもりはなかったけど、トトリがしつこかったのよ」
「プレゼント！プレゼント！」

「……………」

「ごめんなさい」

氷の女王が目の前に君臨した。

「マークさんは自転車ですね」

「おや？分かっていたのかい？」

「そりゃ分かりますよ……」

むしろ分からない方がどうかしてるレベルで、分かりやすかった。

「この場に持ってくるのはすぐはないと思ったのでね。後日届けさせてもらうよ」

「改造済みですか？」

「もちろんさ。君も驚くようなすばらしい改造を施しておいたよ」

ジェット機が付いていたら、そんな事すら思いつくような薄ら笑いをマークさんは浮かべた。

バイクに変身してる気がしてならない。

「ちむ！」

「ちむ！」

「うん？何々？」

ちむちゃんとちむおとこくんからメモを渡された。

「えーっと、次のちむちゃんの命名権利を与えます。じっくり一週間ほど考えといてください」

「ちむ！」

ちむおとこくんが大きく手を挙げた。彼が発案者のようだ。

「まあ、俺のネーミングセンスの良さは周知の事実だしな。いいさやってやるよ」

「ちむ……」

何でそこで不安そうな顔するんだよ……。

「ああっと、これで全員終わったか……」

結局まともなプレゼントはお酒だけってどういふことやねん。

「ちょ、ちょっと待ってください!」

「わたしたちまだだよ!」

トトリちゃんと師匠が駆けよって来た。

まあ、忘れる訳ないよね。

「まずはプレゼントを話はそれからだ」

俺がそう言うのと、トトリちゃんが鞆から小さな箱を出してきた。

「わたしとトトリちゃんのコラボだよ。開けて開けて!」

「それじゃあ、遠慮なく」

箱を縦に開けると、そこには指輪が収まっていた。

「指輪？」

「実はそれ錬金術で作った指輪なんですよ」

「効果は何と！つけてるだけで体力が回復していくんだよ！」

「お、おお！」

ここに来てなんてすばらしいプレゼントなんだ。

これは俺の手袋とコンビを組ませれば最強じゃないか。

「アカネさん最近疲れてるみたいだったんで、先生と相談して作っ
たんですよ」

「えへへ、すごいでしょー」

「すごいすごい。さすがは凄腕錬金術士」

疲れてるって言うのは、たぶん借金的な面で疲れが出てたんだろう。
俺が借金七割だもんな……。

「あれ？　そういえばぷにがいない？」

「シロちゃんなら、ずっとカウンターの中にいるよ？」

「え？」

そう言われて俺は立ち上がり、カウンターの下を覗き込んだ。

「ぷに」

「お前そんな所で何してんだよ？」

「ぷ、ぷに……」

何か恥ずかしそうにもじもじしている。気持ち悪いな。

「ぷに！」

「のわ！？」

ぷにが突然飛びあがって、カウンターのの上に乗っかって来た。

「一体なんだよ？」

「ぷにに！」

カウンターの下の方を覗いて鳴いているので、見てみると見慣れない袋が三つあった。

「これを取れと？」

「ぷに！」

「ふむ。よっと！」

身を乗り出して、袋を取った。意外と重い。

「ぷにに！」

「はいはい。開ける開ける——はあ！？」

店が静まり返るほどの大声が出たが仕方がない。中入っていたものがそれほど衝撃的だった。

「これ、一体何万コールあるんだよ？」

「ぷに！ぷに！ぷに！」

「さ、三万コール！？」

つまり一袋一万コール……。

「これを俺に？本当に？」

「ぷに」

男に二言はないそうだ。まさかこんなサプライズがあるとは。

「最近やけに仕事張り切ってると思ったら、このためだったのか？」

「ぶ、ぷに！ぷに！」

「お、おい！」

恥ずかしくなったのか、赤くなって店の外に飛び出して行った。

「元の原因はあいつとは言え……嬉しいじゃないか」

あいつもあいつなりに思うところがあったってことか。

「よーし！皆！今日は俺を存分に讃えるがいい！」

上機嫌になった俺はその後もしめるだけ楽しんだ。

こんだけ良いパーティーは後にも先にもこれだけだろうな。

仲たがい

「今日も今日とてギルドにやって来ましたとさ」

「ぶに」

誕生日から二日経った今日、俺たちは依頼を受けるためにギルドに来ていた。

「昨日は結局一日寝てなもんな……」

「ぶに」

飲みすぎた次の日のダルさを知って、僕はまた一つ大人になった。

「まあ、借金もあと半分程度だし少しゆっくりしててもいいよな」

「ぶに！」

借金を受け持つ割合は変わらないが、三万コールは俺の分として考えていいらしく、実質俺の借金はあと六万コールだけだ。

「今日は軽く調合依頼でも受けると思いますかね」

「ぶに」

まだ体調が完全ではないので討伐依頼とか受けたらぶに頼りになるのは明白だ。

何の依頼があるか考えつつ歩いて行くと、クーデリアさんの受付の前で見慣れた二人が話していた。

「およ？」

「ぶに？」

話をしているのはミミちゃんとトトリちゃんなんだが、何かいつもと違って陰悪な雰囲気の流れている。

「そろそろそろー……」

その様子が気になったので、俺は横から回り込んでカウンターの内側に侵入した。

「わっ！？あ、アカネさん？」

話が聞こえる位置までしゃがんで移動していると、フィリーちゃんの驚く声が降り注いできた。

「しーっ」

「……………」

よく分かっていない様だが、フィリーちゃんは黙ってくれた。

「……なんで、あんたの方が私よりランク高いの？」

フィリーちゃんの傍から少し進んだあたりで、声が鮮明に聞こえてきた。

俺はカウンターに腰を預けて座り込んだ。クーデリアさんが冷めた目で見てくるのが精神的にきつい。

「ミミちゃんより上？へえ、そうなんだ……えへへへ」

「だから……その気持ち悪い顔やめなさいよ！おかしいわよ……こんな……何かの間違いだわ！」

「別におかしくないよ。わたしだってがんばってるんだし」

「私が頑張ってるけどでも言いたいのか？言っとくけどね、私の方があんたの何十倍も何百倍も努力してるんだから！」

「ミミちゃんが頑張ってるなんて言ってるよ……。わたしはただ……」

二人で口喧嘩か？いまいち事情がつかめないな……。

「っ痛！」

「ぷに？」

頭に何か当たったと思えば、足元に丸められた紙が転がっていた。俺はそれを広げると走り書きで何か書かれていた。

「何々？」

トトリがポイントの清算に来る、トトリが赤いのにギルドカードを見せる。

それを見た赤いのが怒りだした。

「……クーデリアさん」

事情を教えてください嬉しんですけど、いくら急いで書いたからって赤いのって……。

「納得いかない！絶対間違ってるわ！シュヴァルツラング家の当主である私が、こんな田舎娘以下だなんて！」

ミミちゃんが次第にヒートアップしていったが、どう考えてもミミちゃんが一方的に悪いよな……。

ランクが自分より上だったからって怒りだすなんて。

「むう……しよ、しょうがないじゃない。わたしの方が上なんかもん」

「あら、珍しく言い返してきたわね。ランクが上だって分かった瞬間、偉くなったつもりかしら」

「そんなこと言ったら。ミニちゃんなんていつつも偉そうじゃない！ シュヴァルツラング家のくとか言っちゃって！」

「実際そうじゃない。その何が悪いの？」

「ぷに？」

唐突にぷにが俺に向かって声を投げかけてきた。

「むう？ いや、今回の喧嘩ばかりは俺が介入する余地はないって。女の子同士の喧嘩に口出しできるかっての」

「ぷに……」

いくら俺だって空気の一つや二つ読むことぐらいはできる。

ここで俺が出て行っても状況が好転するはずもない。

そんなことを言っている間にもトトリちゃんはさらに言葉を返していた。

「クーデリアさんが言ってたもん。貴族の名前なんて大した意味ないって」

「……っ!？」

ミニちゃんが息を呑む音が聞こえてきた。

……トトリちゃん、地雷踏んだっばいな。

「あんた、それ以上言ったら怒るわよ」

「同じ貴族でもクーデリアさんは親切でいい人なのに、ミミちゃんはいっつも偉そうで、意地悪なことばかり言って……」

「黙りなさい！」

「きゃ！？ あ……ご、ごめん。わたし……」

「……そうよね。あんたはすごい冒険者の娘で、すごい錬金術士の弟子でもあるし」

？ すごい冒険者の娘？ トトリちゃんが？

「わたしにみたいに家の名前くらいしかない人間なんて、さぞくだらなく見えるんでしょうね」

「そんなことない！ そんなこと全然思っ……」

「ばか！ あんたなんて大っ嫌い！！」

「あ、ミミちゃん！」

ミミちゃんの走って行く音が聞こえてきた。

今更ながら、隠れて聞いているのを若干後悔するなこれは……。

「随分と派手にやらかしわね。人の職場でやるなって話だけど」

「……あんなこと言うつもりなかったのに……なんでわたし、あんなこと……」

「落ち着きなさい、あんたはただ、褒めてもらいたかっただけでしょ？ 一番のお友達に」

「……う、ミミちゃん、おめでどうって言うってくれるかなって……。なのに……あんな……」

「はいはい、泣かないの。悪いのはあっちなんだから。まあ、確かにあんたも少し言いすぎたけど……」

トトリちゃんの泣きながら発する痛々しい声が聞こえてくる。
本格的にここから出て行きづらくなった。

「どうしよう……。ミミちゃん、わたしのこと大っ嫌いって……」

「あんなの、勢いで言っちゃっただけでしょ」

「でも、でも……」

「はあ、世話がかかるんだから……。あの子の方はあたしが何とかし
とくから。だから泣き止みなさい」

「う……。なんとか、なりますか？」

「なるわよ。わたしが信用できない？」

「いえ……。よろしくお願いします」

「うん。じゃあ、今日はもう帰りなさい。一晩寝ればスッキリする
から」

「はい……」

そう言ってトトリちゃんの去る足音が聞こえてきた。

クーデリアさんの慰め術すごいな。あつという間にトトリちゃんを
宥めてしまった。

「それでは……」

「ふに……」

「待ちなさいよ」

クールに立ち去ろうと思ったが、案の定クーデリアさんに引きとめ
られた。

「お、俺にはアトリエに戻って師匠に事情を話すという使命が……」
「……………」

氷の女王が再び君臨なされた。

「女の子二人の喧嘩を盗み聞きして、勝手にカウンターの中に入って、許されると思ってるのかしら？」

「……てへっ☆」

「……はあ、いろいろ言いたいことはあるけど良いわ。早くアトリエに戻りなさい」

「え？ 良いんですか？」

こんな事がかつて一度でもあっただろうか、いやない。

「優先順位ってもんがあるでしょ、コロナも困ってるだろうから早く帰りなさい」

「は、はい。わ、わかりました」

「それから、あんた達も気を遣ってあげなさいよ」

「それはもちろん」

「ぷに！」

こんな俺でも気遣いの一つはできる。それがトトリちゃんなら尚更のことだ。

「っと、後一つ聞きたいんですけど」

「？ 何よ？」

「さっきミミちゃんがすごい冒険者の娘って言ってましたけどどういうことですか？」

「何？ あんた聞いてないの？」

クーデリアさんが信じられないって顔をしてきた。

「いや、トトリちゃんのお母さんがすごい冒険者って言うのは聞いてましたけど。ミミちゃんが引き合いに出すほどなのかなって……」

「まあ、あんたなら話しても問題無いだろうから言うけど、他人に言ったりするんじゃないわよ」

「はあ？」

「あいつの母親はギゼラって言ってね。一番最初の冒険者でかなりの凄腕だったのよ」

「へえ……………ん？」

ふいにグイードさんの顔が思い浮かんだ。あの穏やかな父親とそんな人が……………。

「しかし何より…………トトリちゃんの肩書きがすごいことになってますね」

初代冒険者の娘にして、稀代の錬金術士の一番弟子って…………。

「そうね。だから知られても良いこと無いだろうから、くれぐれも！ 他言するんじゃないわよ」

「そんなことわかってますよ。信用ないですね…………」

「…………自分の行いを一度省みた方が良いわよ」

「……………」

何がショックって冗談交じりではなく、かなり本気の声色で言われたことだよ。

俺は何も言い返せないままに帰ることしかできなかった。

仲たがい（後書き）

今回は短め、ほぼ原作の会話と同じになってますけど仕方がない。ここにギャグ要素は挟めません。かと言ってこの話を飛ばすのも憚られるので、仕方がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6493v/>

アーランドの冒険者

2011年12月1日21時58分発行